

SD

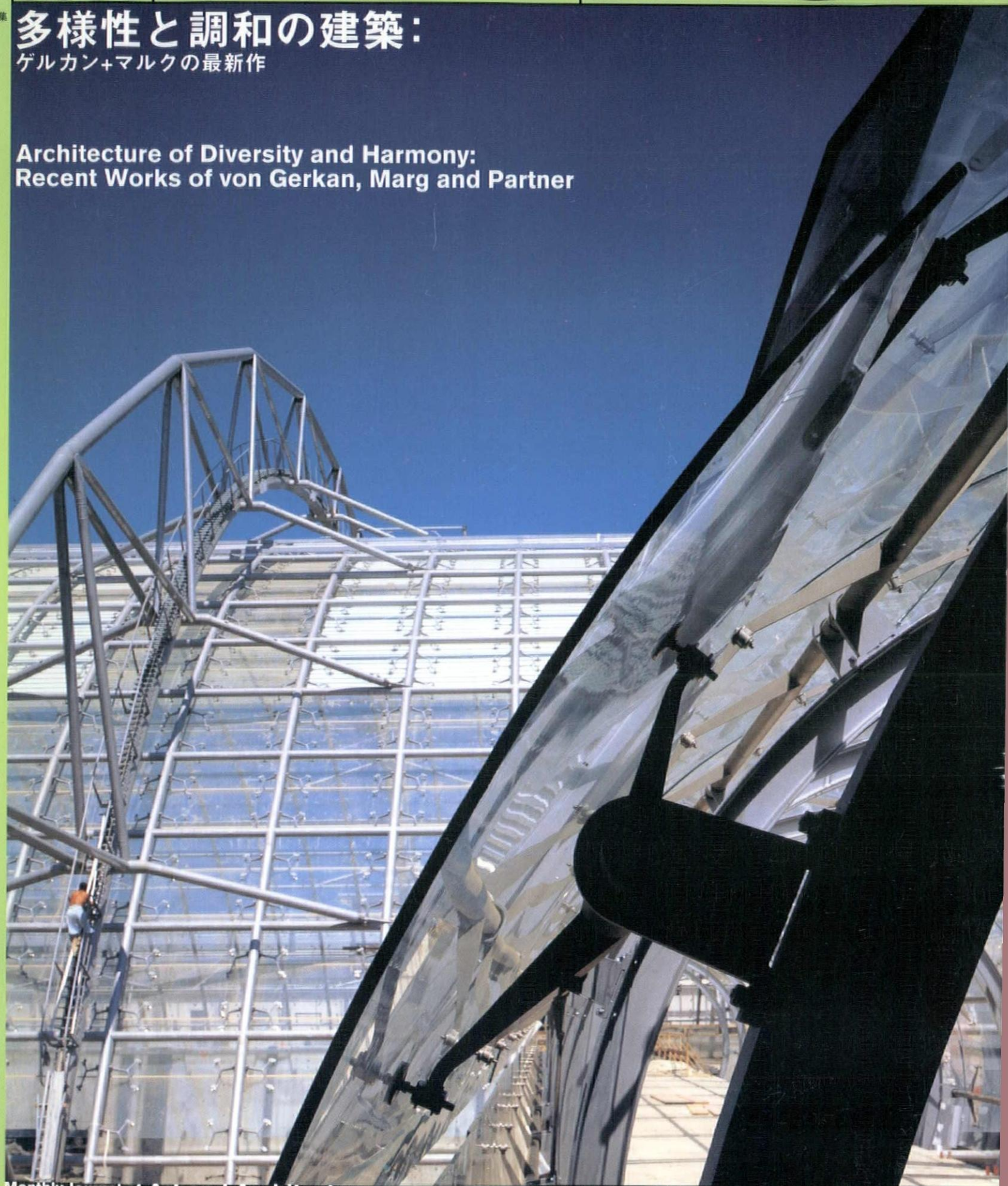
9605 | space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第380号 1996年5月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

特集

多様性と調和の建築： ゲルカン+マルクの最新作

Architecture of Diversity and Harmony:
Recent Works of von Gerkan, Marg and Partner



Monthly Journal of Art and Architecture

それは、透視の開放感。

高強度アルミ型材を使った初のD・P・G構法
「ビューポイント&トラスマリオン」。新日軽から新登場。

1㎡当たり
17万円から

建物の外の景観と内部のデザイン。この内と外からの透視効果を生かして、開放感あふれる大空間を構成する、D・P・G構法。新日軽は、いままですテンレス製しかなかった支持金物に、業界初の高強度アルミ型材を使ったD・P・G構法「ビューポイント&トラスマリオン」を開発しました。

■直線R壁面も可能。

「ビューポイント」は、支持金物と2m×2mのガラスがユニットになったカーテンウォール。そして「トラスマリオン」は、10mの高さに対応するバックマリオン。支持金物に、±7°まで角度をつけられる多面体対応コネクションをご利用いただければ、より造形美に富んだ立体感のある直線R壁面の構成も可能です。外壁全体を1枚の巨大なスクリーンのように表現でき、かつてない透視性の高い大空間を実現します。

■1㎡当たり17万円からの新価格。

さらに、「ビューポイント&トラスマリオン」は、1㎡当たり17万円からという、コストプランニングに貢献する価格を実現しました。設計者の表現力に応える新日軽の「ビューポイント&トラスマリオン」。もう、あなたの自由な発想を妥協させることはありません。

■ビューポイント基本性能〈基本モジュール〉W:2,000mm×H:2,000mm〈基本性能〉耐風圧性能:上限圧力±300kgf/m²(基本モジュールにおける強度)／水密性能:最大+150kgf/m²(48/㎡・min)／耐震性能:層間変位角1/100(ガラス仕様)強化ガラスの飛散防止フィルム貼り仕様を基準とします。

■トラスマリオン設計仕様〈最大製品寸法〉H<10mとします。〈表面仕上げの最大寸法〉アルミ陽極酸化皮膜:H<7.8m／塗装 焼き付け:H<9m 強制乾燥:H<10m



スタンダードタイプ

Rタイプ

新開発

初の高強度アルミ型材のD・P・G構法
ビューポイント&トラスマリオン

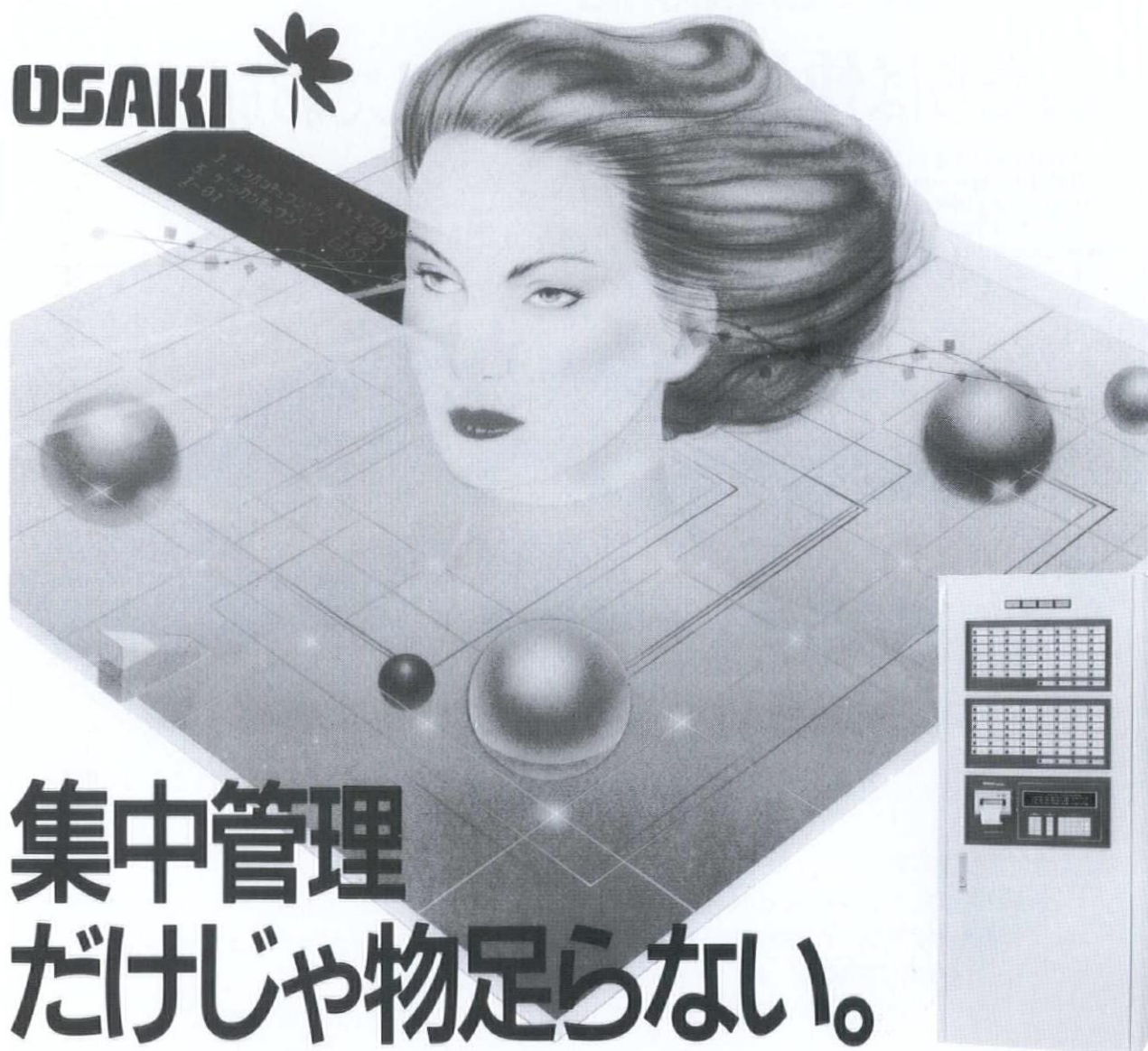
VIEWPOINT & TRUSSMULLION

●特許出願中 ●意匠登録出願中

新日軽

新日軽株式会社 本社／東京都江東区木場2-7-23 〒135 ビル建材事業本部 ☎03(3820)2211

OSAKI



集中管理 だけじゃ物足りない。

かゆいところに手が届く、ビル管理システム **OSMAC-mini** 中央監視装置オスマック・ミニ

いまやビルは集中管理の時代。照明や空調も定時にON、OFF。無駄な手間も経費もかけず、ビルを一括して制御できるようになりました。しかしビルの機能は様々。テナントや企業、そこで働く人の事情も多様化しています。OSAKIは、ビル設備の制御を画一的ではなく、ビルの利用者一人ひとりのニーズに対応できるものであるべきだと考えています。中央監視装置OSMAC-miniは従来の設備機器のスケジュール運転に加え、各テナントからのコントロールで、スケジュール時間外の運転を可能にし、各テナントごとに料金算出のためのデータを集計できるシステム。ビルをもっと生き生きと活動させるための、隅々にまで神経が行き届いた管理を実現します。



特 長	主な仕様
●基本スケジュール運転の他に各テナントから時間外操作が可能。 ●時間外運転時間は各テナント単位に積算され、1ヶ月毎に料金管理データとして印字。 ●登録された機器の運転時間を積算し、表示・記録。 ●全全停点数に対してスケジュールを任意に設定、年間の休日指定も可能。 ●全停点数最大48点、負荷監視点数最大96点と豊富な管理点数。 ●故障および警報信号を外部に取り出せるので、無人管理が可能。 ●設定操作は画面との対話設定メニュー方式で、使い易いシステム。 ●盤内のケーブルレス化により小形・軽量・低価格。	●定格電圧/100V±10% ●定格周波数/50Hz、60Hz共用 ●管理点数/運転監視入力…48点(増設タイプ96点)、故障・警報監視入力…48点(増設タイプ96点)、テナント操作入力…20点、発停制御出力…48点、警報移報出力(電力)…4点、警報移報出力(一般)…8点 ●表示/5×7ドット モノグリーン蛍光表示管 40字×4行、運転時間表示、時間外運転時間表示、カレンダー表示、当日プログラム表示、システムテーブル内容表示 ●設定操作部/シートフラットキー、蛍光表示管との対話方式 ●記録/停電補償、状態変化記録、故障・警報記録、日変わり記録、時間外運転記録(日報、月報)、個別発停操作記録、運転時間記録、カレンダー設定変更記録 ●停電補償/240時間 ●外形寸法/壁掛形48点タイプ…600(W)×1100(H)×230(D)mm、壁掛形96点タイプ…600(W)×1350(H)×230(D)mm、自立形…600(W)×2000(H)×400(D)mm

大崎電気工業株式会社

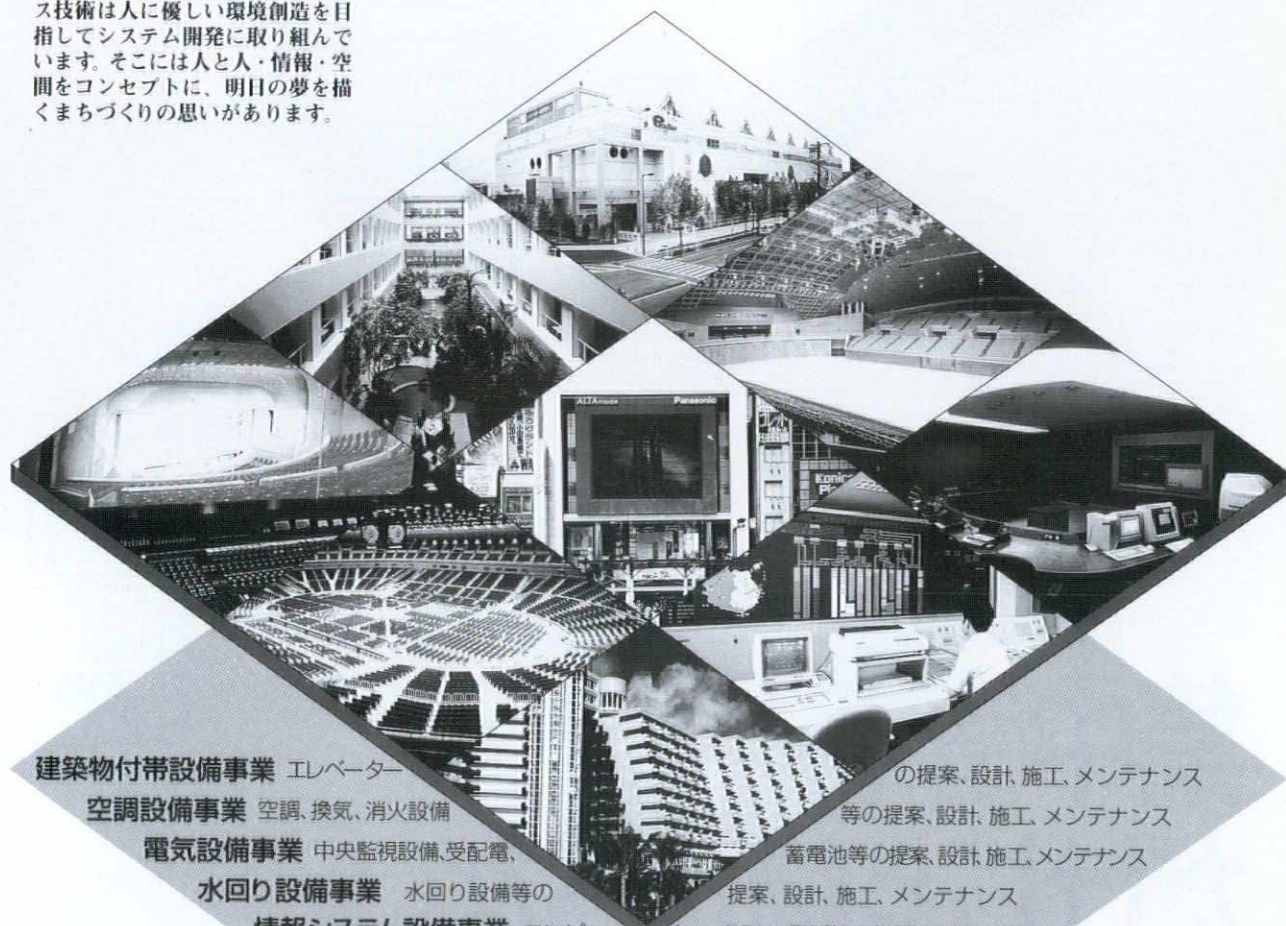
本社/〒141 東京都品川区東五反田2-2-7
システム機器営業部第2課 ☎03(3443)7176

大阪支店 ☎06(373)2556
札幌営業所 ☎011(251)6622 仙台営業所 ☎022(223)3747 千葉営業所 ☎043(221)5714
横浜営業所 ☎045(664)5561 広島営業所 ☎082(243)1611 沖縄営業所 ☎098(832)7406

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター

空調設備事業 空調、換気、消火設備

電気設備事業 中央監視設備、受配電、

水回り設備事業 水回り設備等の

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

の提案、設計、施工、メンテナンス

等の提案、設計、施工、メンテナンス

蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。



松下電器産業株式会社

建設システム営業本部 ☎03-5500-7504

北海道支店 ☎011-207-7722

東北支店 ☎022-711-3551

新潟支店 ☎025-246-1031

関東支店 ☎0286-37-2241

神奈川支店 ☎045-651-5051

建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010

長野支店 ☎0262-26-3990

北陸支店 ☎0762-23-1121

静岡支店 ☎054-247-5155

建設システム営業本部関西支店 ☎06-949-2111

中国支店 ☎082-247-5272

四国支店 ☎0878-26-1711

九州支店 ☎092-431-1100

沖縄支店 ☎098-869-2926

AV & CC FLAPS

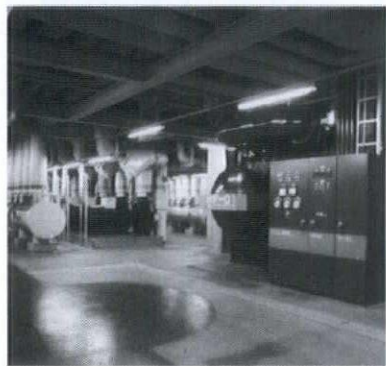
AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

KANDENKO



快適な環境をお届けするのも ——関電工の技術です。

個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場…
…。人々の営みの場で、いま求められているのが、
省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。
その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が
活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河
川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、
発電の際に発生するエネルギーを有効利用する
「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエ
ネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システ
ム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快
適な環境の場をお届けしています。

関電工

お問い合わせは/環境設備部

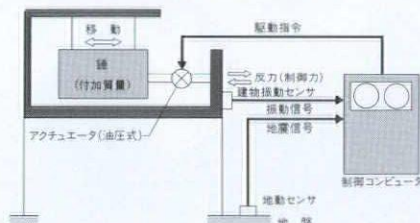
本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号

☎：NTT 03(5476)2111 TTN 4431)2111

世界初のアクティブ制震システム。

AMD【エー・エム・ディ】

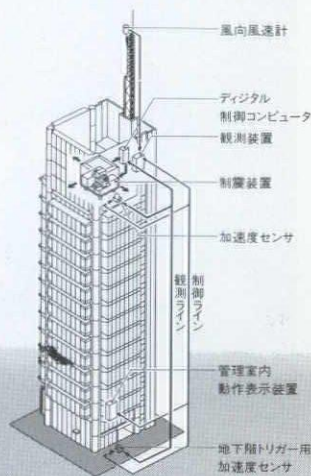
カジマが世界で初めて実用化したアクティブ制震システム。建物荷重の約1%の錘を屋上に設置。コンピュータ制御で錘を駆動して揺れを制御。地震や強風時にビル内では全く揺れを感じさせない優れた制震効果を発揮します。高層、超高層、超々高層ビルなどに。



優れた頭脳とバランス感覚をもった新しい制震システム。

DUOX【デュオックス】

AMDをさらに進化させた複合型アクティブ制震システム。高度な技術力により省エネ化、小型化を図りながら、制震効果は大型装置と同等以上の優れた性能を実現。高層、超々高層ビルはもちろん、リニューアルでの既存のビルへの設置と適用範囲を大きく広げた新しい制震システムです。

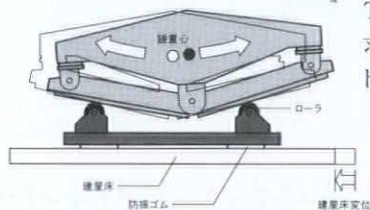


小さな装置で大きな制震効果を発揮。

TRIGON【トリゴン】

振子運動を行う錘をアクティブに駆動するハイブリッド制震システム。コンパクトな装置でイニシャルコスト、ランニングコストともにわずか。地震や強風による揺れも1/2以下に制御。

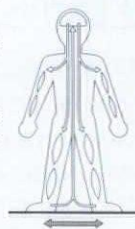
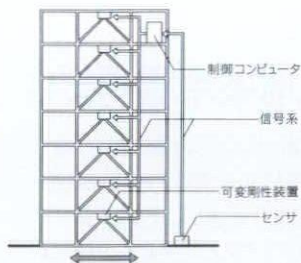
TRIGONは居住性と快適性が求められる超高層インテリジェントビルに採用されています。



建物の剛性を変えて揺れをかわす。

AVS【エー・ブイ・エス】

走る電車の中に立っている人が身体のバランスを保つように、ブレースに接続された可変剛性装置が瞬時にブレースの<有効><無効>を切替え、揺れをかわします。中小地震から大地震まで効率よく対応し、大地震にともなう停電時にも確実に作動。シンプルで確実なアクティブ制震装置です。



地震から交通振動まで、あらゆる振動をカット。

免震防振構法

建物をまるごと積層ゴムで支え、大地震から交通振動まで、あらゆる振動をカットします。交通振動などの細かな振動から建物を守り、静かな室内環境を確保。道路や線路に隣接した建物に優れた効果を発揮します。

安全で快適な環境を創造するカジマの高度な制震技術。

快適をより確かなものに。

ビルを連結して揺れを抑える。

JDS 【ジェー・ディ・エス】

360度あらゆる方向の揺れに対応する制震システム。高さの違う建物(=振動周期の異なる建物)を特殊ダンパで連結し、双方の揺れを相殺します。シンプルな構造のダンパは素材・製造・設置コストも少なく、構造体コストの低減を実現します。

高性能オイルダンパが振動を吸収。

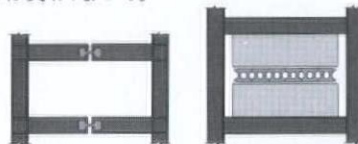
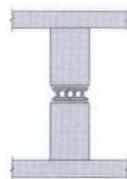
HiDAM 【ハイダム】

建物の骨組みと一体化されたオイルダンパが地震や強風による振動を吸収します。優れた振動減衰性能により建物の軽量化が可能となり、構造体コストを低減。建物耐用年数より長い耐久性が自慢です。

壁や梁が振動を吸収。

HDS 【エイチ・ディ・エス】

壁や梁など構造体そのものにハチの巣型のダンパ等を組込み、振動エネルギーを吸収させます。特に震度5以上の大地震に大きな効果を発揮。中高層から超高層に至るまで幅広く対応。低コストで設置でき、柱や梁などを軽減しても快適さは変わりません。

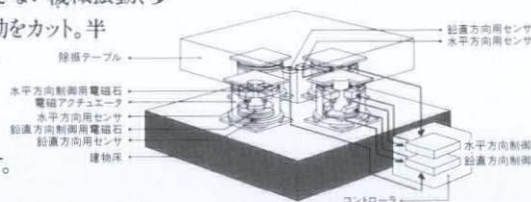


精密機器を磁気で浮上させる
次世代の除振装置。

MLIS 【エムリス】

完全非接触型の理想的な除振を実現した磁気浮上式除振装置です。建物レベルの振動対策ではカバーできない機械振動、歩行振動などの微細な振動をカット。半

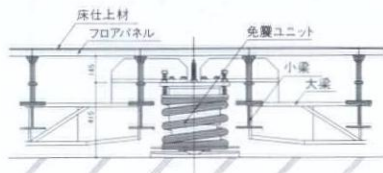
導体をはじめ、先端テクノロジーの分野でこれから、ますます求められる次世代のシステムです。



コンピュータを地震から守る
免震床システム。

KIFS 【ケー・アイ・エフ・エス】

コンピュータなど精密機器を載せた床を建物本体から分離して振動を遮断。必要なフロアだけを免震構造にすることができ、地震の規模を問わず優れた効果を発揮します。コンピュータセンターや医療施設、精密機器生産施設、美術館など振動を嫌う設備機器のある建物に最適です。



in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社: 千107 東京都港区元赤坂1-2-7

お問い合わせは

技術営業部 03(3404)2011

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢
ホテル鹿島森

ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:
ホテル鹿島森予約係
☎03(3478)6220
現地☎0267(42)3535(代)
FAX:0267(42)5335



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロツパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、

あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【ブラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



大宴会場 永代

HOTEL
East
21
TOKYO

地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

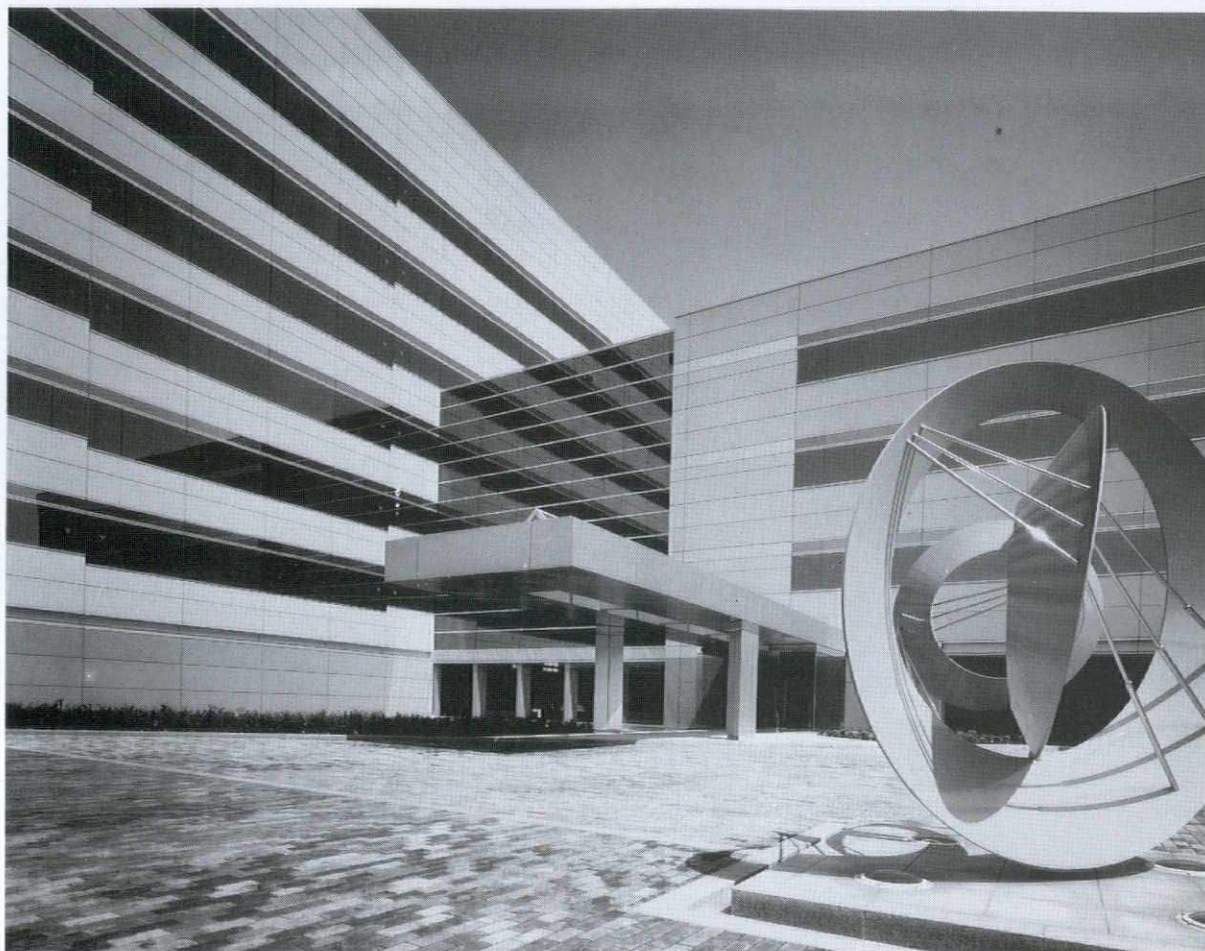
ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775



大興物産の海外建材シリーズ

No.4 ガラス



埼玉・パイオニア鶴ヶ島総合研究所

大興物産では、米国・ガーディアン社の製品をはじめガラスの国際調達を推進しています。

この製品のお問い合わせは、大興物産株式会社・海外建材事業本部へどうぞ
〒107 東京都港区元赤坂1-3-4 TEL.03-3423-2511 FAX.03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

Kinden
CORPORATION



都市の鼓動が、
聴こえますか。



現代社会の知力である「情報」。都市の動脈ともいうべき「エネルギー」。そして人が快適に暮らし、働くための「環境」。都市はいまやそのどれ一つが欠けても機能しないとと言えるでしょう。私たちきんでんが柱として取り組んでいる分野は、まさにこうした都市に生命を吹き込むもの。たとえば、光通信やCATVなど、マルチメディア社会を実現する情報通信ネットワークシステムの構築。住まいやオフィスの快適性を向上し、心を豊かにしてくれる環境づくり…これらは、これからの都市づくりに欠かせないものです。現代の都市をいきいきと息づかせるために。未来の都市がさらに豊かで創造的なものであるために。私たちきんでんは総合設備エンジニアリングをさらに発展させたいと考えています。人・都市・地球のためにできること。きんでんは、あなたのそばで考えます。

都市に生命を吹き込む技術——きんでん

株式会社 **きんでん**

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 〒531
東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号 〒141

広告についてのお問合せの際は<SDを見て>と御明記願います

A9



確かな歩み未来まで……



総合設備の設計施工

電気・水・空気・光・情報の各施設

心のふれあい大切に

株式会社 中電工

本店/広島市西区上天満町1番15号

TEL(082)291-7411

支店/広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.



VALUEとQUALITYを追求するバルカー

鉄骨耐火被覆材

バルカウエット.....湿式吹付けロックウール

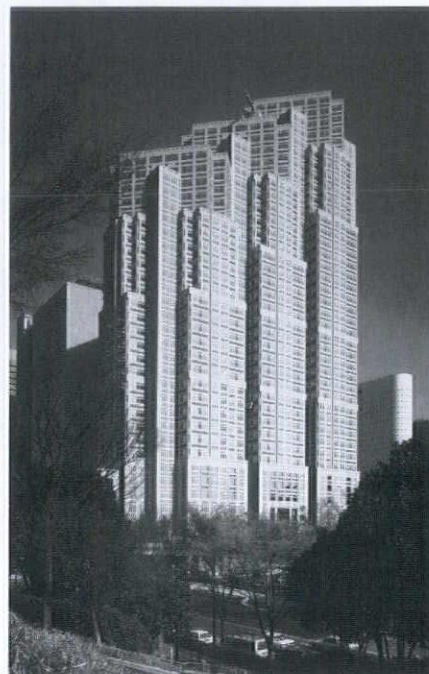
バルカロック.....乾式吹付けロックウール

バルカロック W 乾式吹付けロックウール(スラリー工法)

リコボード.....繊維混入けい酸カルシウム板

耐火遮音間仕切壁

バルカウエットウォール 湿式吹付けロックウール
耐火間仕切壁



日本バルカー工業株式会社

本社 〒100 東京都千代田区丸の内3-3-1(新東京ビル) ☎03(3212)8571

工事業部 〒105 東京都港区芝3-39-8(コンチェルト三田ビル)

☎03(3769)1721

札幌事業所 〒060 札幌市中央区北三条西2-1(カミヤマビル)

☎011(222)7038

建築設備の一役を担う

電気設備工事

最新の技術と信頼される施工



大栄電気株式会社

代表取締役社長 伊藤 赳

本社 東京都中央区銀座3-7-10 TEL 03(3562)0311(大代表)

支店営業所 大阪、名古屋、北海道、東北、北関東、東関東、神奈川、
浜松、神戸、四国、中国、九州、沖縄

図説世界建築史

日本語版・全16巻 監修・桐敷真次郎 (東京家政学院大学教授 東京都立大学名誉教授)

原始建築から近代建築までの
アジアを除く世界建築の様式
を詳細に解説した今世紀最大・
最高の世界建築史シリーズ。
壮大なスケールで世界の建築
をとらえ、「建築」「美術」に魅了
される人々に座右の書。

本
シ
リ
ー
ズ
の
特
色

●世界の建築の流れを、原始1巻、古代3巻(エジプト・メソポタミア、ギリシア、ローマ)、中世3巻(ビザンティン、ロマネスク、ゴシック)、イスラム1巻、中央アメリカ1巻、近世3巻(ルネサンス、バロック、後期バロック、ロココ)、近代4巻(新古典主義・19世紀(1)(2)、近代(1)(2))で構成した、今までにない、最大規模の世界建築史。

●20世紀を代表する欧米の卓越した建築史学者が、各様式の建築を体系的・組織的に分析・解説した高いレベルの建築史書を、日本の建築史学界をになう大御所から若手までの専門家がわかりやすい日本語でヴィジュアルに翻訳。

●全16巻で、5200点を超えるモノクロ写真・図版と390点のカラー写真を多用して、各様式を代表する建築をヴィジュアルに収録。消滅した建物の復元図だけでなく、建築図面についても平面図等を随所に掲げ、読者の理解を助けている。

体裁 AB判変型 (横226ミリ×縦252ミリ) 上製本、4色カバー
定價 第1回配本 9,800円(税込)
以後、予価9,800円

1『原始建築』

エンリーコ・グイドーニ著
阿久井喜孝(東京電機大学教授)訳

2『エジプト・メソポタミア建築』

ハンス・ヴォルフガング・ミュラー、シーモン・ロイ著
堀内清治(熊本工業大学教授・工博)訳

3『ギリシア建築』

ロラン・マルタン著 伊藤重剛(熊本大学助教授・工博)訳

4『ローマ建築』(第1回配本) 1996年4月

ジョン・ウォード・パーキンズ著
桐敷真次郎(東京家政学院大学教授・工博)訳

5『ビザンティン建築』

シリル・マンゴー著
飯田喜四郎(愛知工業大学教授・工博)訳

6『イスラム建築』

ジョン・D・ホーグ著 山田幸正(東京都立大学助手)訳

7『ロマネスク建築』(第2回配本) 1996年7月

ハンス・エリッヒ・クレーンハイン著
飯田喜四郎(愛知工業大学教授・工博)訳

8『ゴシック建築』(第3回配本) 1996年10月

レイ・グロアッキー著
前川道郎(大阪産業大学教授・工博)・黒岩俊介(西南女学院短期大学助教授)訳

9『中央アメリカ建築』

ポール・ジェントロップ、トリス・ハイデン著
八杉佳徳(国立民族学博物館助教授)・佐藤孝裕(別府大学短期大学部講師)訳

10『ルネサンス建築』

ピーター・マレー著
桐敷真次郎(東京家政学院大学教授・工博)訳

11『バロック建築』

クリスティアン・ノルベルク・シュルツ著 加藤邦男(京都大学教授・工博)訳

12『後期バロック・ロココ建築』

クリスティアン・ノルベルク・シュルツ著
加藤邦男(京都大学教授・工博)訳

13『新古典主義・19世紀建築(1)』

ロビン・ミルトン、デイヴィッド・ワキン著
土居義岳(九州芸術工科大学助教授・工博)訳

14『新古典主義・19世紀建築(2)』

ロビン・ミルトン、デイヴィッド・ワキン著 鈴木博之(東京大学教授・工博)訳

15『近代建築(1)』

マンフレッド・タフー、フランチェスコ・ダルー・コー著
片木篤(名古屋大学助教授・工博)訳

16『近代建築(2)』

マンフレッド・タフー、フランチェスコ・ダルー・コー著
片木篤(名古屋大学助教授・工博)訳

本の友社

〒107 東京都港区南青山7-10-3
TEL (03) 3498-7875 (代)
FAX (03) 3498-7808

鹿島出版会

東京都港区赤坂5-5-13
電話:03-5561-2111(代)
傳真:03-60-2-180883

年間定期購読料

25,000円(特別定価号+送料込み)

SDバックナンバー寄場店

[東京]
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
青島ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3483-0511
[大阪]
協成書店本店

06-443-0167
[札幌]
恒屋書店 011-241-3007
[横浜]
有隣堂本店 045-261-1231
[京都]
大蔵堂書店 075-231-3038
[大学生協内書店]
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学
理工学部 関東学院大学

9405 東ドイツの近代建築

1950円

旧東ドイツの近代を象徴した表現主義建築を、35都市にわたる調査をもとに紹介。ワリゲンベルグのダム (H. ベルツィヒ)。アインシュタイン塔 (メンデルゾーン)。他。文+写真:長谷川豊

9406 アートがつくるワークプレイス

2500円

「働く人々のための空間とアート」に着目し、海外の事例を紹介。文:南條史生、D. F. ハンセン。アーティストアンドレア・グラム。他。企業等:IBM、フリティッシュ・カウンスル。他

9407 ビーター・ウォーカーの世界

2200円

アメリカ・ランドスケープ・アーキテクトとしての彼の初期から現在にいたるまでの主要作品を紹介。東京海上東日本研修センター、IBMフレアレイク、バーネット・パーク、ロングエーカー公園。他

9408 マッシミリアーノ・フクサス

1950円

フランスを中心に展開する近作を紹介。ロアンのヨーロッパ建築研究所。他。文:D. マンドレリ。堀池秀人。他。[異界の権威——モルドバのルーマニア正教会堂] 写真:早瀬。文:山崎操史

9409 思考と建築・都市:アメリカ東海岸の新たな動向

1950円

B. シャーデル&ギブニス、マイケル・ソーキン。他。文:松信雄。他。[「手法」から「様式」へ/吉川油断斎(宿舎)TAO ARCHITECTS/野田俊太郎。写真:堀内広治

9410 トロハの遺した構造と空間

3000円

鉄筋コンクリートを表現の素材として追求したエドアルド・トロハの遺作を紹介。[芸術都市への群生/イタリア・シベリアの読み] 地震で全壊した同市の復興プロジェクト

9411 シティ・ターミナルの空港建築

3500円

世界22の空港を挙げ、ターミナル・ビルの特異的、デザイン的可能性を探る。シャルル・ド・ゴール、スキポール、ヒースロー、ソウル・メトロポリタン、関西国際空港。他。文:ディヤン・スジック。他

9412 SDレビュー1994

1950円

第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、J. ビザル+P. ルーゲ、吉松秀樹、石黒由紀+田坂繁、遠藤秀平、城戸峻和、中村勇夫。他。[国際競争プロジェクト/オンヴィエンチム模倣院]

9501 山本理顕

3000円

作品:緑園都市、岩出山町立総合中学校、病室老人デイケアセンター、保田窪第一団地。他。写真:北嶋俊治、大野繁。論文:山本理顕、宇野求、T. ヘネガン。素談:横文彦+植田実+山本理顕

9502 南イタリアのバロック建築

1950円

地中海の島シチリアとプリア地方サレント半島のレッチェを中心に、南部イタリアのバロック建築を紹介。掲載都市:ナポリ、シタリ。他。写真:小野一郎。文:竹山博英、長谷川正光、岡田哲史

9503 集合住宅の現風景

1950円

近年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹介する。文:作品:荒木正彦、遠藤剛生、大野秀敏、富永謙、松永安元、元倉真琴。座談会:植田実+室伏次郎+松隈洋

9504 テクノスケープ

3000円

テクノロジーが作り上げた造形や景観を通して、建築・都市デザインへの新たな視線を提示する。文:宇野求、岡河貴、永瀬唯、A. ロジェ。他。座談会:中村良夫+三谷徹+宇野求。東京湾岸マップ



9505

メガ・アーキテクチャ

巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作を紹介。シャルル・ド・ゴール空港、TGV RER駅。他。対談:安藤忠雄+P. アンドルー。[神戸外国人居住地の形成とその展開] 文+構成:坂本龍比古

9506

デジタル・アーキテクチャの可能性

インタビュー:藤田司、伊東豊雄、N.M. ディオナリ。他。CAD研究室将来の可能性:益田研究室、岡角・佐倉研究室。他。[自然と共存する家具] 写真:遠川敏

9507

柳澤孝彦/美術館の空間とディテール

作品:東京都現代美術館、富岡市立美術館、都山市立美術館。他。文:鈴木博之、内藤廣、青木淳、大野秀敏。座談会:宇佐美圭司+柏木博+柳澤孝彦。写真:村井修

9508

まちのパブリックスペース

人々の日常生活と空着した公共施設である交番・公衆トイレ・駐車場・橋・公園などを、アトリエ作家の近作からみる。作品21点。文:中川理、仙田満。オンライン座談会:青木淳+中川理+花田佳明

9509

丹下健三

最新作シンガポールの超高層ビル[UOBプラザ]、新宿の新たなスカイラインを構成する[新宿パークタワー]を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。

9510

環境に呼応する建築:シーザー・ペリの最新作

近年、海外での活躍が目されるペリの最新作を紹介。[ランドマーク・グラフィティ]、『タワー・アート in 通天閣:ヴァンキュラーな電脳都市展』より。



9511

長谷川透子:1985-95

過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川透子の現在を紹介。作品:山梨県フルーツミュージアム、新潟市民文化会館。全30作品。論文:ピーター・クック。他。対談:多木浩二+長谷川透子

9512

SDレビュー1995

第14回SDレビュー誌上発表。由田南十郎+本美樹、李維男、トム・ヘネガン+アーキテクチャ・ファクトリー [Villa Romana: ローマのヴァラと庭園] [水戸岡鋭治のトランスルーデーション・デザイン]

9601

都市づくりを仕掛ける建築家たちの実践

地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例:くまもとアートポリス、クリエイティブ TOWN岡山、長崎アーバン・リノベーション、白石メディアポリス

9602

建築のメモリア:イタリアの合理主義の流れ

イタリア建築の基調として流れている合理主義の現在を考察。6人の建築家の作品を紹介する。アントニオ・モネステローリ、フランコ・ステラ。他。

9603

アジア同時代シリーズ 2 ベトナム建築大博覧

ベトナムの都市と建築:ハノイ、フエ、ホイアン、チャンパ遺跡、ホーチミン。ベトナムの工業団地。ベトナム現代建築事情。他。文:重枝豊、中沢信一郎、村松伸。他

9604

大地と光の変様 オーストラリア建築1788-

1788年入植以来のオーストラリア建築の変遷を追う。[ネクストジェネレーション in New York: スミスマニオン+ホーキンソン+ジョエル・サンダース]

SDレビュー 1996作品募集

第15回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 1996

The 14th Exhibition of Winning Architectural Models+Drawings

[主催]

鹿島出版会

[審査員]

香山壽夫（建築家）

渡辺邦夫（構造家）

内藤 廣（建築家）

妹島和世（建築家）

●詳細はp.74をご覧ください

多様性と調和の建築： ゲルカン+マルクの最新作

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
山田良 大野由美
飯塚りえ
アドバイザー：伊藤公文

発行人：河相全次郎
編集人：長谷川愛子

6	多様性と調和	マインハルト・フォン・ゲルカン	発行所：鹿島出版会 〒107 東京都港区 赤坂6丁目5番13号 電話： (03) 5561-2561 営業 (03) 5561-2565 編集 FAX： (03) 5561-2561 営業 (03) 5561-2565 編集 TEL X： 02422467 KAJIMA J 振替00160 2-180883番
10	エルブショセー139		印刷・製本： 凸版印刷株式会社 〒174 東京都板橋区 志村1丁目11番1号 電話： (03) 3968-5111 案内
18	ミロ・データシステム・ビル		取次店：トーハン・日販・ 大塚屋・大洋社・ 栗田出版販売・誠光堂・ 鈴木書店・西村書店・中央社
22	サラマンダー・ハウス		定価：1,950円 [本体1,893円]
24	ドイチェ・レヴィジョン		年間直接購読料：25,000円 特別定価号・送料込み
28	チューリッヒ・ハウス		表紙：ライブツィヒ・メッセ 表紙写真：Klaus Frahm 表紙デザイン：小泉均
32	リューベック音楽・会議ホール		
36	独日センター		
40	ライブツィヒ・メッセ		
44	ハノーバー・メッセ		
50	ハンブルグ空港駐車場		
54	ベルリン・レールター駅		
58	ミュンヘン21・プロジェクト		
62	シュトゥットガルト21・プロジェクト		
46	ゲルカン+マルク事務所の30年	山下昌彦	
70	都市に開かれた建築	クラウス・ディーター・ヴァイス	
81	海と建築——鈴木了二の最新作	写真＝安斎重男	
82	物質試行37：佐木島プロジェクト		
98	物質試行32：佐木島の住宅		
102	混在するイメージ	飯島洋一	
74	SDレビュー1996募集要項		
76	照明探偵団： 連続実践講座レポート3	増殖するグレンリン 目版機と仲良くする方法	葛西玲子/LPA
78	連載：apple tomology トムの時空形象学8	MOVE FORM TORUS：不易・変易・簡易	戸村 浩
105	連載：ヤマトホテル巡礼 都市とホテルの空間文化誌	4. 時代の臨界／奉天ヤマトホテル	ホテル文化研究会 竹山 聖
109	ニュース：ドイツ表現主義舞踏の身体表現 「ドイツ・ダンスの100年」		長谷川章
110	展覧会レポート：時代の精神が生み出すもの 「トーネットとウィーンデザイン」展		河合俊和
112	展覧会レポート：ディッシュ・ウォッシャーの中の魯山人 「イサム・ノグチと北大路魯山人」展		川村純一
113	新刊紹介		
114	書評		
116	お知らせ		
119	海外建築情報リミックス：ビルディングタイプ その5 「スポーツ建築」		

Special
Feature:

Architecture of Diversity and Harmony: Recent Works of von Gerkan, Marg and Partner

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Ryo Yamada
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03-5561-2551 (Management)
03-5561-2555 (Editing)
FAX:
03-5561-2561 (Management)
03-5561-2565 (Editing)
TELEX:
02422467 KAJIMA J

Printed in Japan

This Copy: ¥1,950
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 132

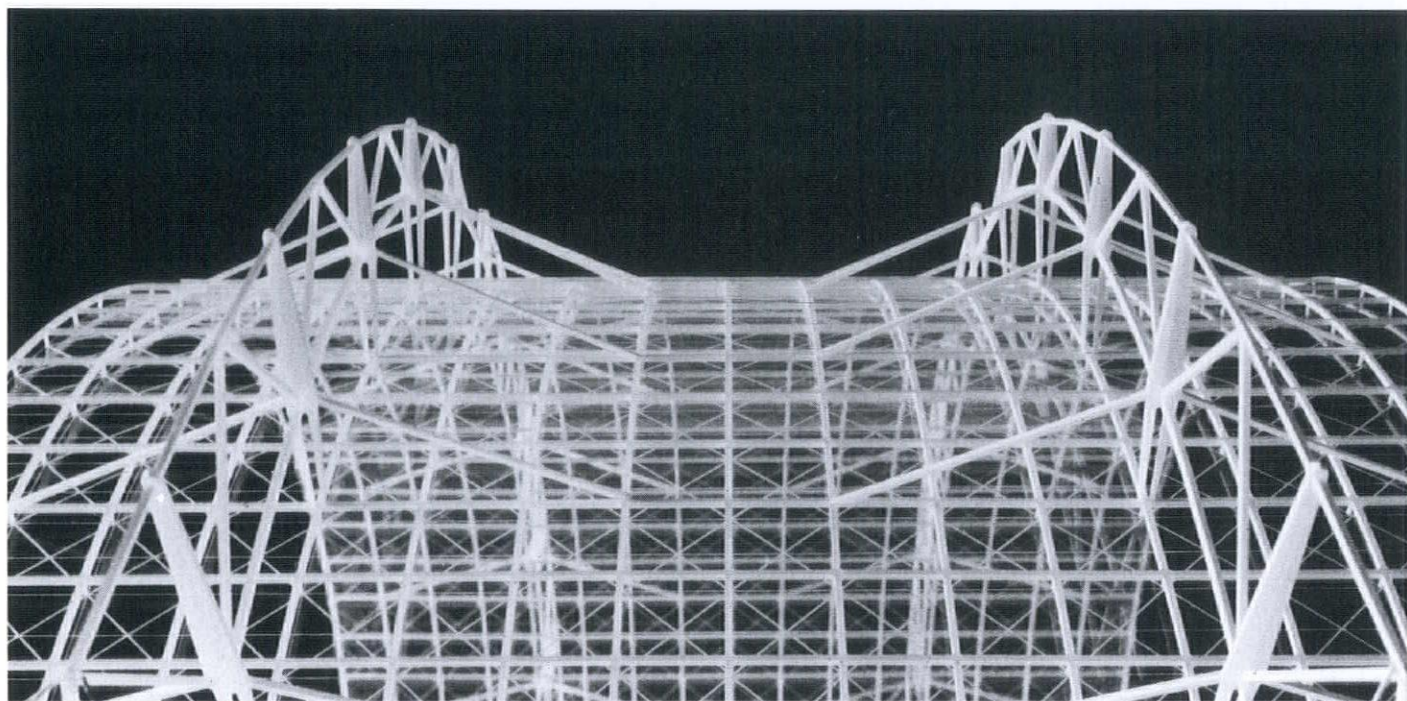
Cover:
The New Trade Fair, Leipzig
Photo:
Klaus Frahm
Cover Design:
Hitoshi Kozumoto/ND

6	Innovation and Change	Meinhard von Gerkan
10	Elbchaussee 139	
18	Miro Data Systems	
22	Salamander House	
24	Deutsche Revision	
28	Zurich House	
32	Music and Convention Hall, Lubeck	
36	German-Japanese Center	
40	The New Trade Fair, Leipzig	
44	Hanover Fair, Hall4	
50	Multi-storey Car Park, Hamburg Airport	
54	Lehrter Station, Berlin	
58	Station and urban planning Munich 21	
62	Station and urban planning Stuttgart 21	
46	Thirty Years of von Gerkan, Marg and Partner	Masahiko Yamashita
70	Recognizable Openness: Symbol of the City	Klaus-Dieter Waiß
81	The Sea and Architecture: Suzuki Ryoji's Latest Work	photographs: Shigeo Anzai
82	Sagishima Project "Ring"	
98	House in Sagishima	
102	Intermingled Images	Yoichi Iijima
74	Guidelines for Entrants: SD Review 1996	
76	Symposia on Illumination: Proliferating Gremlins How to Get Along with Vending	Reiko Kasai /LPA
78	Series: apple tomology 8 MOVE FORM TORUS	Hiroshi Tomura
105	Series: Yamato Hotel Pilgrimage A Cultural Record of Hotel Space in the City 4. The Edge of an Age/Hoten	Hotel Culture Research Society Kiyoshi Sey Takeyama Akira Hasegawa
109	Film Lecture: A Century of German Dance	
110	Exhibition Report: Thonet and Wien Design	Toshikazu Kawai
112	Exhibition Report: Isamu Noguchi and Rosanjin Kitaouji	Junichi Kawamura
113	Book Information	
114	Book Review	
116	Announcements	
119	Eminent Works Abroad: Building Type 5 The Architecture of Sports	

特集

多様性と調和の建築

ゲルカン+マルクの最新作



Architecture of Diversity and Harmony:

Recent Works of
von Gerkan, Marg and Partner

1. 単純さ

我々のデザインの目標は、できるだけ単純化することである。それにより建物は永遠の生命を得る。控え目な形態と統一された素材の選択は必要不可欠である。建築は我々にとってはデザイン・オブジェではなく、生きた日常的な対象である。

これはドグマとしての禁欲主義とは違う。できるだけメンテナンスを簡単にしながら、かつ自然で繊細なデザインを実現しようと考えると、形態は控え目になる。構造などの必然性を無視したアーティストの気まぐれに起因する表現的なデザインは極力避けている。それには絶え間なく自分達の作品を検証し、建築界の流行の潮流に流されないよう気を配っていないといけない。

このように「単純さ」を追求することは建築家にとって伝統的な事だと思うのだが、マスコミの多くはこれを新しいと言っている。ジャーナリズムには、流行のファッションに映るらしい。事実、このトレンドはスイス辺りで最近よく見受けられる。ほとんど我々の考え方と同じだが、しかし、ひとつだけ違いがある。我々がリラックスして気楽にやっているのに対し、スイスではしきりにそれを形態理論に発展させようと肩肘張っていることである。

情報を全部披瀝していないドローイングによって表現されるような空想的ピュアリズムは我々には全く関係ない。単純化は適切な判断に基いていなければならない。

2. 多様性と調和

ヨーロッパにおいては、建築は、都市全体のバランスを保つようなでしゃばり過ぎない控えめさと、調和のあるなかでの個々のエレメントの独自性とが同時に必要とされる。調和が過ぎると画一的でうんざりするし、バラエティ過剰だとカオスとなりかねない。東京のように無制限に互いに異質なものが建ち並ぶのは我々には耐えられない。

バルセロナ、トリノ、リヨン、パリ、ロンドンなどほとんどのヨーロッパ都市は、「多様性と調和」の見事なバランスによってつくられている。そこでは、すべての建築家の同意と抑制が必要である。あらゆる建物が、たとえばそれがどんな大きさであろうが、都市というモザイクを構成するユニットでなければならない。調和のためには、建築の形態、高さ、材料などにシークエンスを考慮したコントロールが行われる必要がある。そうしないと、やりたい放題の商業的利益優先の建築ばかりになるからである。

都市では抑制されない圧倒的な個性より、調和を保つ節度ある建築が選択される。この認識はデザイナーとしての建築家にある慎重な深さを要求する。花火みたいに派手な建築を生産しないと、ジャーナリズムはどうも不満らしい。マスコミは、ただ単に新しいこと好きなのである。しかしながら、我々にとって建築は、社会的存在であり、決してマスコミやカメラマンのためにだけ設計する訳にはいかないのである。

3. 継続性

我々は常に新しくより良いものを目指している。これを私は「革新」と呼んでいる。この革新は科学と芸術の両面から裏付けられなければならない。社会的存在である建築は、常に課題に対しどう答えたか、デザインの因果関係を説明できるものでなければならない。気を付けなくてはならない事は、新しい開発や流行のデザインはとかく短命で終わることである。時代という幻に翻弄されないようにしなくてはならない。

我々のベーシックなスタンスは、迷った場合は常に最もシンプルな解がベストであるという信念を持ち続けることである。我々はすべての課題において重要なこととそうではないことを慎重に分類し、最終的に2、3の最も基本的な要素に還元してしまう。そうしてデザインを発展させていくうちに形態や機能

がシンプルになり、建築は批判され得ない存在となる。そしてこのことを、「継続」してゆくことが大切なのである。

4. 革新

デザインにおいて、最も嬉しいのは発見である。課題に対する答え、コンセプトの開発。それは用途、敷地条件、材料、構造、メンテナンスなどの条件を満たしていなければならないことは当然であるが、何よりもまず全ての構成要素がトータルなひとつの建築にまとめ上げられなければならない。そこに必要なのは建築全体のバランスの感覚を失わない事である。

我々にとって「革新」とは、ただ単に彫刻的に表面を変えることを意味しているのではない。もちろん、奇を衒うことでもない。我々の狙いは飽くまでトータルとしてより優れた建築の追求である。フォルクウィン・マルクの言葉を借りれば、「革新とは、自動車なら車輪、ヨットなら帆の役目を果たすべきである」ということになる。センセーションを巻き起こすためのものなら、投資者や建築家の自己顕示欲を表すだけのものとなろう。

ここ数年、以前にまして大きなスパンが我々の課題になってきている。175mの大スパンのハンブルク空港のジャンボの格納庫や、2000年のベルリンのオリンピック施設、ライブツィヒ、ハノーバーのトレードセンター、シュパンダウ、シュトゥットガルト、ミュンヘン、ヘルシンキの駅舎など枚挙に暇がない。これらは、我々のみならず他の建築家にとっても新しい活動の舞台であると言える。パブリックスペースに新しいアイデンティティとスケールを与え、構造をフィーチャーしたデザインを提案してゆくことが我々の任務だと考えている。

我々にとってはお手のもののオフィス・デザインにおいても、新しい執務空間の提案をしている。チューリッヒ・ハウスのウィンターガーデンは大都市のメインロードの喧噪か

らの隔離だけでなく、オフィスワーカーの労働環境をも考慮している。ミロ・データシステム・ビルでは、デスクワークとミーティングとの共存を図った。

都市計画におけるコンセプト・プランにおいても、我々は革新的な提案を行っている。シュトゥットガルト21計画やミュンヘン21計画で2~3kmの緑の軸を我々は提案した。これはアーバン・リニューアルに対し、新しいディメンションとなるはずである。我々の提案はユートピアを目指すようなものではない。革新的でありながら、実行可能なものである。

5. 実行

我々は「実行」という強迫観念にとらわれすぎてしていると指摘する人もいる。だが、建築家の仕事は実際に建物を作る行為の中にあると私は考えている。不可能なことまでも絶えず射程に入れながら、目的をいかに実現するかということである。

あまりに純粋な建築理論のメッセンジャーは、ドローイングやスピーチばかり行い、傷つくのを恐れるあまり、実際に建物を建てることを出来るだけ忌避する。実物を建設することは、理想からの妥協を受容することである。原理主義者は、オフィスやショッピングアーケードになると途端に批判を繰り返す。投資者から報酬を受け取っていわゆる儲かる建築をつくり出すと、「商業的建築家」と非難される。一方で講演と美術館の設計ばかり行っている「芸術建築家」は誉めそやされるのである。

我々の志向する方向は、組織の規模を考えると判る。200人以上のスタッフがいるということは、芸術としての建築を志向するのに適しているとは言えない。口の悪い輩は、部品をベルトコンベヤーの上で組み立てるのに適している規模だと指摘する。ところが我々の事務所を知る人はほとんど、5人の事務所と同じくらいスピーディ、イレギュラーかつシンプルに我々が働いていることを知っている。

事務所の規模がある程度大きくないと、コンベも簡単には参加できないし、エキサイティングな大プロジェクトにも関与できない。大事務所であっても、ベーシックな意見を一致させる事により、ディテールに至るまで質が保たれるならば、喜ばしいことというべきであろう。

6. 公共性

我々にとって建築は陳列品ではない。建築はすべて都市の部品である。建築は何をおいてもまず人々の生活のためのスペースである。生活がなければ何の意味がある。

従って我々はほとんどの設計時間を、プライベートとパブリックな空間の弁別にあてている。これは所有を頼りどころにせず、機能、用途、都市全体との関係によって行われるべきである。

すべての建物は、限られた地球の一面を占めている。この地球の部品がお金のためだけに利用されるのを正当化できる資本家の理論などない。建築家も当然社会に対して良いデザインをもって貢献する責任がある。

7. 対話

対話というメタファーは、我々のスタンスを説明するのに適している。我々のデザイン手法は常に対話的である。そもそもデザイン・プロセスにおいては、質問と解答は常に互いに依存し合っている。解答が質問を引き出したり、逆に質問が解答のヒントとなったりする。時代精神との対話は行わざるを得ない。個人的には気が進まないのだが、知的免疫をもっていさえすれば時代精神に毒されることもない。ちなみに、我々にとって最も大切なのは環境との対話である。

できるだけ誠実に答えようとするので、ベーシックなコンセプトは変えないにしても当初のデザイン・コンセプトを発展的に変更することも稀にはある。我々が嫌うのは、むしろ独りよがりである。よいディスカッション

は人の言う事をよく聞き、その質問によく答え、しかし同時にしっかりと自分の意見を保持し続けることである。

8. 構造

純粋な構造、純粋なテクノロジーと言うようなものは存在しない。共に存在するためには形態を必要とする。この形態は、発見し、デザインするべきものである。

大雑把に言って構造は、材料の量を多く使ってがっしりとつくるという考え方と、材料を経済的に用いて繊細につくるという考え方とに分れる。

適切に構造を選択することは、経済、エコロジー、美学などと一緒にあったほとんど終わりのないデザイン・プロセスを踏むことになる。デザインのスタイルやロジックによって簡単に決まるものではない。

我々にとって「構造」は、デザインを決める決定的なポイントではない。構造は、音楽におけるリズム、言語における文法のように、より高いレベルの道具として用いるべきだと私は考えている。

シンボリックな形態は、我々にとっては無縁である。純粋に美学的なシンボリズムは短命に終わるだろう。

デコンストラクティヴィズムは構造に関する考え方の根底を問うものである。我々の時代の意味喪失性の黙示的メタファーであろう。我々はこれを認めるわけにはいかない。その致命的なシニシズムはプロフェッショナルの規範から外れていると思う。

建築家の責任は人間のためのスペースを作り出すことであり、マスコミや評論界のための見世物を上演することではないのである。

●Meinhard von Gerkan/建築家、ブラウンシュバイク工科大学教授

Simplicity

Our aim is to design things as simply as possible, so that they have content and durability. Formal modesty and material unity is based on this assumption, because we believe that purposefulness is a categorical imperative. Architecture is not for us an object of design, as it is for short lived daily objects.

There is a clear difference between formal modesty and material unity on the one side and dogmatic ascetics on the other. Ascetics are a self inflicted must and thus an extreme.

We wish to design a building simply naturally and sensibly, to create space and enclosure for the variety of human existence as permanent as possible with low maintenance. Thus it is logical to adopt an architecture of formal modesty. Expressionistic shapes, which are only derived from artist whimsy, without sensible relationship to nature, construction and wear through use we try to avoid by questioning our own work and adopting a critical distance to topical architectural motives.

The press has renamed this traditional simplicity "new" simplicity. In true journalistic manner the search is for a quick and devourable fashion, instead of the real aim. This trend is presently best represented by Swiss examples, which generally agree with our ideas. The main difference is however, that there the trend is towards a formal doctrine, which we are trying to achieve with a relaxed easiness. The total purism, expressed in the drawings by withheld information and the buildings by a real poor sterility is unknown to us. It is our opinion that reduction is based on plausibility and common sense and therefore so-called stylistic failures, which are caused by the objectives and location, must be integrated.

Unity and Variety

Urbanism in the traditional European sense needs a carefully balanced unity of the whole and balanced variety of individual elements. An excess of unity means uniformity, boring monotony. An excess of variety tends to chaos.

We would like neither the simplicity of the industrial residential area nor the unrestrained heterogeneity of Tokyo. The

fine tuning between variety and unity, from which still most parts of European cities such as Barcelona, Turin, Lyons and also metropolitan Paris, London and Madrid are derived, requires agreement and restraint from every architect. Every building, even if it has the size of a congress centre, a railway station or a large office building complex, remains a piece or a mosaic in the total structure of an urban unit. A certain amount of overlapping unity is required controlling building form, height and also dictated by a harmonic sequence of material use.

Thus a prescribed degree of unison is preferred to the credo of a uninhibited despotic individuality. This recognition requires the designing architect to be modest and to avoid the enactment of pieces of architectural acrobatics, whether through theoretical belief or just populist exhibitionism.

The renunciation of the production of architectural fireworks will be defamed perhaps as incapability or the willingness for opportunistic adaptability. The press just have to announce something new. However to us, architecture remains an art of social application, serving the environment of mankind and not primarily as a hunting ground for the press and photographers.

Continuity

In an age in which not just the press, but also juries are hungry for sensation, a path which follows this line of continuity is not just exactly a strategy for success. Much more than other arts, which name themselves free, because they are not linked directly to obligations, architecture, which is subject to a whole host of obligations, has to always show that it has a causality to content, a relationship to purpose. As long and as far as the design of buildings is the main task of the architect following this elementary plausibility, innovation is the scientific or artistic input which we architects owe to society. The extreme short life of ever newer developments and architectural fashions, put into doubt if they can be justified by Heuristic or they turn out to be being different as a self purpose. We try not to be particularly irritated by the apparitions of Zeitgeist, so tempting some side

steps might appear to be.

The continuity of our own basic position is based on an elementary conviction, that the simplest solution is in case of doubt always the best solution. This is why we try to reduce every design task down to a few basics, to divide "important" from "unimportant". In so doing professional know-how appears less critical as the ability to coordinate form and function "simply" in the attempt to develop the design from a contentual purpose.

Innovation and change

The most fascinating in designing is discovery. The production of specific answers to specific problems, the development of concepts, which satisfy the use criteria, the site conditions, the conditions of material and structure and not least the durability, which blend all components into a total building agglomerate. The respect for the whole and the context always plays a very important component. Thus for us innovation which only wants to change architecture only aesthetically, sculptural, only on the surface is not a part of our effort. For us a desirable task is in the search for new, still better a basic requirement to quote Volkwin Marg: "If innovation has an aim as a wheel for a wagon or a sail for a ship, then it possesses a true right "justification". Innovation just for the sake of sensation leads to an inventors exhibitionism, instrumentalising the sensational lust to self display.

Even more than before, the theme of large roofs and wide span structures has been one of our areas of innovation over the past few years. The Hamburg airport, the Jumbo hall with a free span of 175 metres, Olympia 2000 Berlin, the trade fairs of Leipzig and Hanover, the station halls in Spandau, Stuttgart, Munich, Helsinki or the Lehrter Station are a new and rejuvenable field of work, giving public space new scale and new identity, upgrading the structures themselves into design features.

Even the "Schwarzbrot" -the daily bread of our activity -the office buildings remain for us a challenge in creating new types and new forms of office work organisation -being apart from housing-the most important design tasks to offer new architectural

options of improved working conditions. The Zürich-Kontorhaus with winter garden type of building is not just a reaction to balancing out the acceptance level of noise and dirt of large city major roads against comfortable working conditions and energy savings, but also creating through architectural a good address. The Miro building interprets the coexistence between desk and workshop bench through the development of a new building type.

In spite of the revolutionary suggests for each town structure of Stuttgart 21 and Munich 21, these still remain in the range of the possible. It could be possible that the 2.5 and 3 km respectively long green axes as replacement for redundant railway areas caused uninitiated heads to shake by local councillors, it is our opinion that only the new dimension allows an urban planning renewal.

Doing

Many critics and some colleagues handle our work with a three staged restraint. The turned up nose is the first, especially by students related to the fact that it is very important to us to build. The true messenger of pure architectural education is for these sceptics those architects, who try to produce the most drawings, the most speeches and write the most but most possibly avoid building, because in the undergrowth of doing the virgin finger of pure intention is dirtied. Building means accepting compromises and producing compromises from this elevated view point of imagined simplicity. The fundamentalist in the row of critics reacts with an undignified shoulder jerk to such important design tasks as the office building, shopping arcade or even industrial buildings. Accused as "commercial architects" are those who accept money from users and investors in order to supply them with good earning buildings, in contrary to the art architects who only hold themselves available for discourse and museum buildings. A music hall would be accepted, if it was not similarly commercially desecrated by congress use and airports are really only machines of consumption.

The raised finger is pointed in our direction, when considering the size of our office. With more than 200 staff, this cannot still be good for the art of architecture, this is only a location for ready-made articles produced on the conveyor belt. Those who know our office know that we work much quicker, irregular and uncomplicated as most 5-man offices.

The observer himself can judge if the results are standardised yards from the rod. The size of our office tends to make us anxious, at the same time we do not want to

miss the exciting large projects as well as building the competition projects won. It is welcome enough, when in spite of the size and quantity of tasks we succeed in maintaining our aims and the consensus of basic opinion and the standard of quality down to the detailing.

In the public

To us buildings are not exhibits. Each form of architecture is a piece of the town and thus a piece of the public. Architecture is space for living. What would it be without life? This is the reason why we occupy ourselves every time with the question how the barrier can be lifted between privacy and publicness -not in terms of ownership, but concerning function, use, appreciation and urban integration.

This way the creation of architecture is to us linked to an aesthetic obligation for both the architect and even more the client, both public or private. Every building occupies a piece of our limited earthly globe. No even really extreme capitalist social theory can justify that this piece of earth is allowed to be exploited and maimed through money alone. No, every piece of architecture and thus its designer, owner and user owes the public a tribute, the tribute of public participation and good design.

Perhaps our position concerning these points is so pronounced because we are heavily involved with public buildings -airports, stations, exhibition buildings, concert halls, shopping arcades and car-park. But perhaps we receive these tasks, because we have not just developed a theoretical affinity to public building.

Dialogue

The metaphor of dialogue serves as explanation of our position. The way in which I describe our design method as dialogical, is intended to clarify that questions and answers stand in interdependence in the design process. Each special design task induces hints of solutions. The assessment of which reshapes the task, changes the values and relativates quite some demands.

The interaction of the *Zeitgeist* to our own work is also referred to here, although it is cheap to count oneself out. It is possible to counteract *Zeitgeist* with a certain amount of intellectual immunity, if one knows that one is on solid personal foundations. One of these foundations is based on the relationship of architecture to appropriateness.

Architecture is to us a mission of dialogue; in a literal, but above all a transferred sense. Thus we consider ourselves to be partners, who answer questions of environmental design, often in a labori-

ous design process.

For us these answers are not a verdict subjugating every solution an aesthetic "signature". We try with our "answers" to strongly respond to the "questions", even to develop our design path, the design conception from the specific conditions of the questioning, although basic ideas are not disposable.

We do not want to hold an architectural monologue, in which the forever similar and repeating design formulations become a misunderstandable trade mark.

We do not appreciate our role to be that of smooth helpers, who solve every "question" at a wink and thus produce a potpourri of an architectural kaleidoscope.

A good discussion only takes fruit when one can listen, when one can respond to the other partner in the dialogue, but at the same time retains a stable opinion.

Structure

Pure structure and pure technology does not exist. Both need form in order to exist - a form which has to be found and designed.

Every building structure is a conglomerate, linking the sensible principles of supporting loads, the bracing and resistibility against differing pressures welded into material shape. This shape can be plump and using quantities of material can fulfill its purpose. One can clad it and hide it.

However one can devise subtle structures which economically use materials displaying aesthetic charm. These connotations are derived always from a structural reason.

Thus appropriateness, economy and ecology are united with aesthetics into almost endless design repertoire, completely without a dependence on style, only on logics.

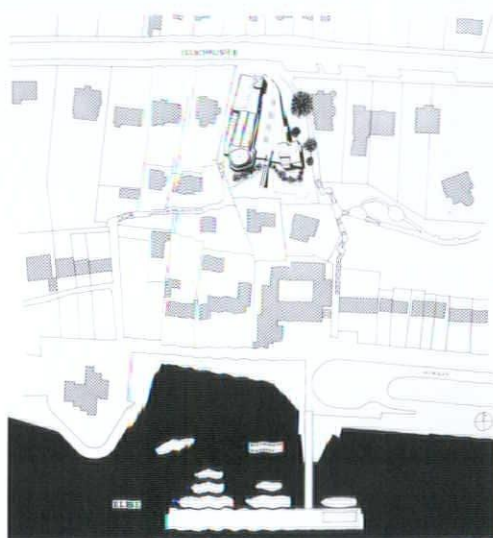
Structure is not to us a totalitarian self determining design element. The point to use structure as a higher level instrument, as best in musical rhythm or grammar in language.

The symbolic dimension of architecture per se is not an acceptable postulate for us. The artificiality of symbolism as a purely aesthetic gesture has subsided through the short life of post-modernism.

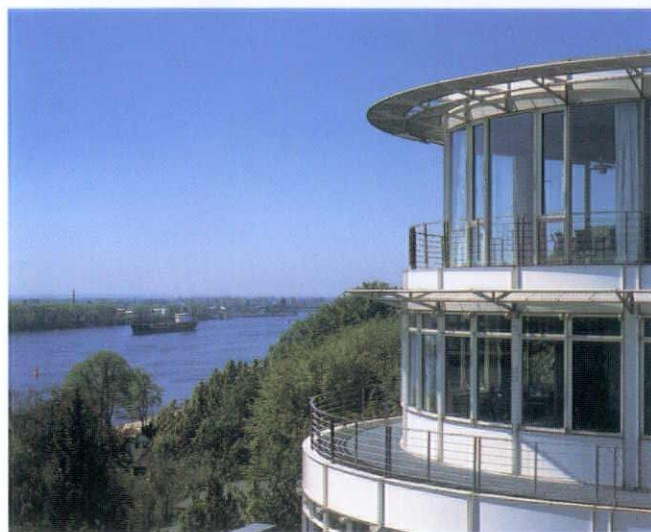
Deconstructivism, which even breaks down purpose into structuralism as a theme has to try to involve for its semantics the *Sinnlehre*, that is the senselessness as apocalyptic metaphor of our age. This is not what we see as our task. This is not just against our feeling, but also aimed against the professional code in its defatal cynicism, whose responsible task is to create living space for mankind and not to stage social criticism designated in concrete.

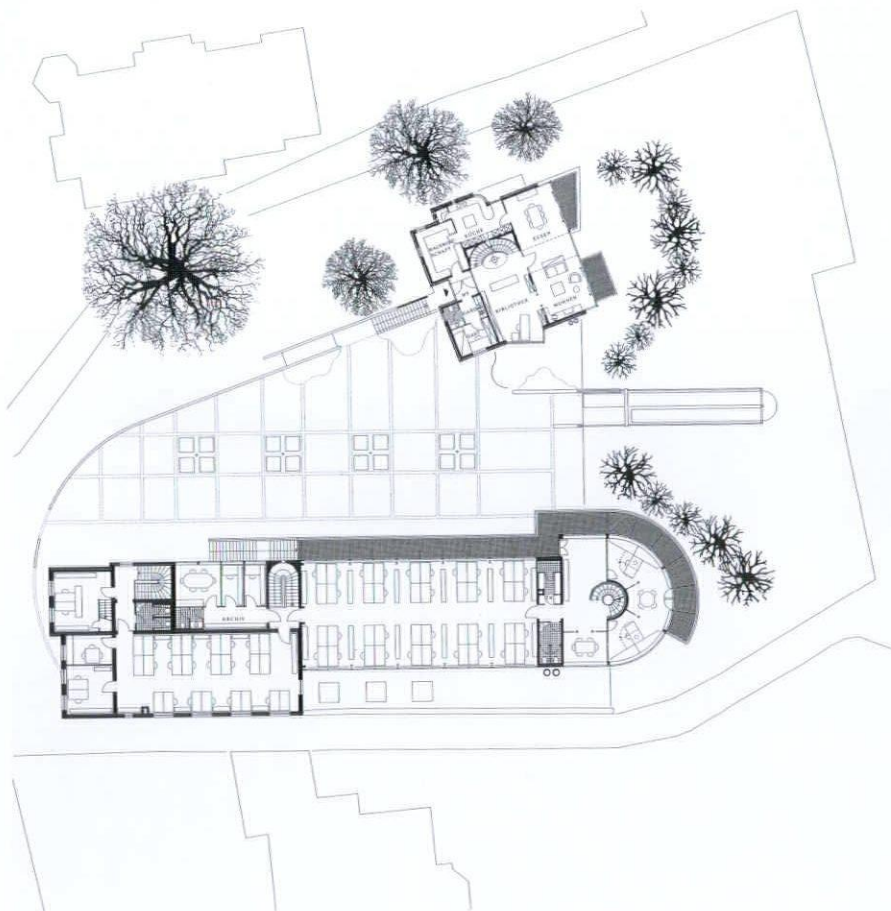
エルプショセー139

Elbchaussee139, Hamburg, 1990

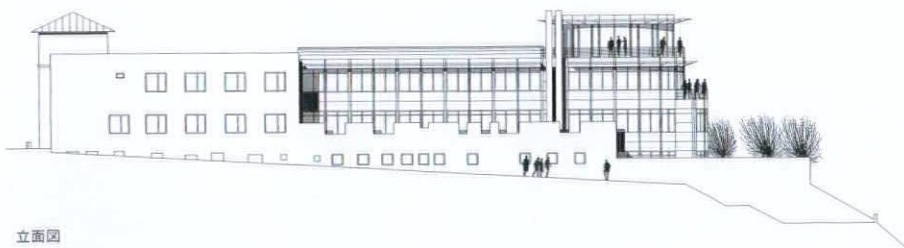


配置図

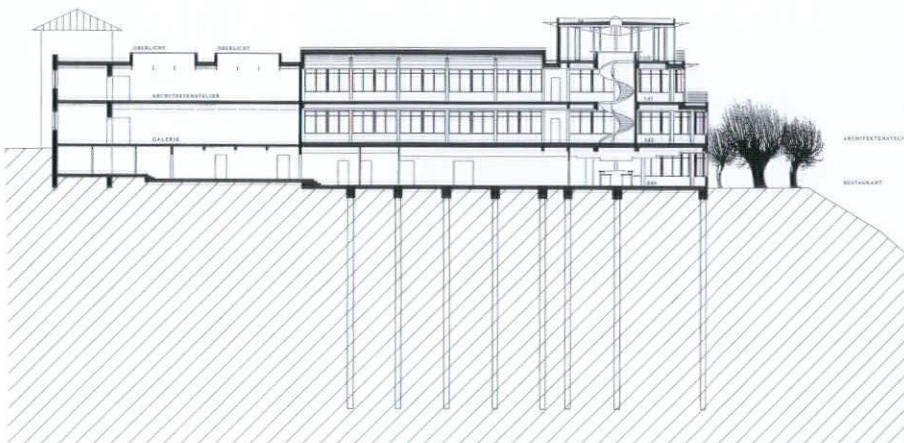




2階平面図



立面図



断面図

この地の「精神」を保つために、もとの建物の象徴的な部分はそのまま保存されることになっていた。すなわち、何十年にもわたってこの地に独特のアイデンティティを与え続けてきたエルプショセーの「古典的」な小砲塔と、ミュールンベルガー通りに沿った長い塙である。

訪問者はまず中庭の突端で、港の景色をくっきりと縁取るスチール・フレームつきのゲートをくぐり、そこから続く斜路へと導かれる。

急斜面に突き出すように設けられたこの斜路は、いったんエルペ川に向かって進み、中ほどで180度転換して建物の方へ戻ってくるようになっている。

建物の上階部分は、我々の事務所のワークルームである。建物が新しくなっても仕事のやり方は以前のままだので、毎晩遅くまで煌々と輝く室内照明が遠くからもよく見え、建築家の仕事は普通のオフィスワークとはかくも違うのだ、ということを主張しているようである。

「古典的」な小砲塔への敬意を表すものとして、円筒を少しずつずらした形の塔が、へさきにそびえ立つ操船ブリッジのように建っている。中央を貫く螺旋階段は最上階の広い会議室に通じており、ここからは広大な眺望を見渡すことができる。

建物全体のシルエットは確かに風変わりなものである。まるで全長50mの蒸気船が、エーヴェルゲナー・ミュールン沿いの長い塙を裾のようにひき、エルペ川めざして直角に置かれたかのようで、古典的な小砲塔はその船をエルプショセーに繋ぎ止める錨のように見える。

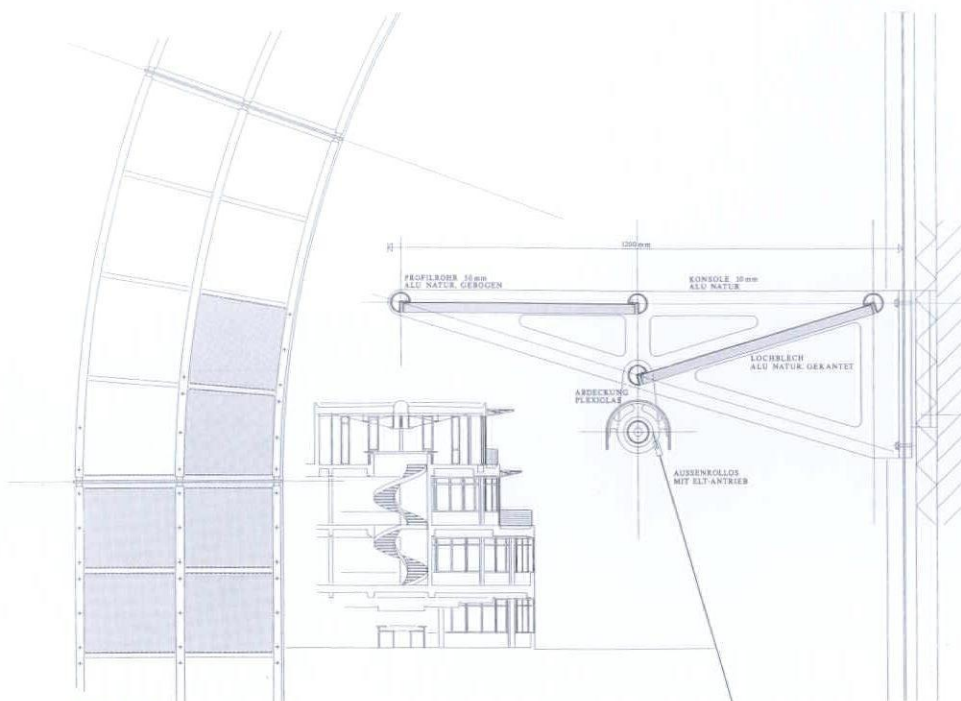
その反対側、中庭のもう一角がエルペ川方向に台形に突き出す部分に、オーナーの自宅であるキュービズム風の邸宅がある。

新築部分のデザイン言語は、それぞれに個性的なエルプショセー沿いのどの建物とも似ることのないように考慮されている。製図台のある所では、窓の軸線は作業室のレイアウトに従って分割されている。上階は広い製図室としてレイアウトされている。スチールの構造材が斜め出しになった檼形の屋根は、室内に一体感とともに、いかにも仕事場らしい雰囲気を与えている。開放的な通路の構造は、船のデッキを想起させる。また、外壁の日除けは建物の部位ごとの形態を縁取り、強調している。下階のガレージへの採光のために中庭に直接はめ込まれたスカイライトは、その上を直に歩き回ることができる一方で、夜はガレージ側から人工照明が照射され、4本の「光の柱」と相まって、中庭を幻想的な雰囲気満たす。

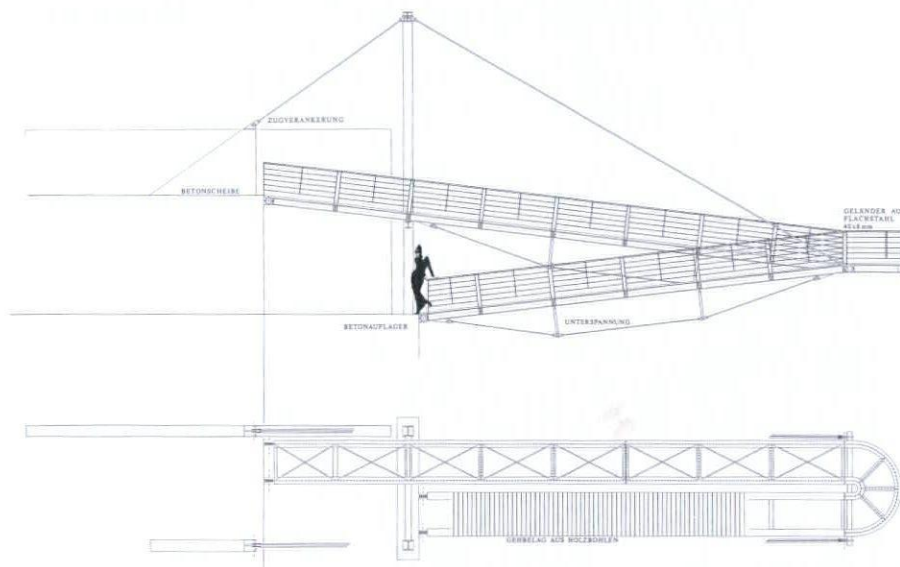
全体の中で唯一色彩的なアクセントがつけられているのは、エントランス・スロープの赤い旗と中庭の赤い柱、そしてガレージの扉の支柱だけである。

敷地内の樹木はそのまま保存され、建物と鮮やかな緑のコントラストを成している。

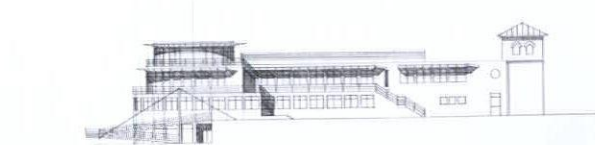
ここでは、仕事と生活、食事、そして展示といった要素が、ひとつの複合体の中で一種の「共生」的な状態を作り上げているのである。



断面詳細図



スロープ詳細図



立面図



スロープ・ゲート

To retain the spirit of the place, the most typical parts of the original structure were to be preserved: the classicist turret on the Elbchaussee, which had lent the property its special identity for decades, and the long wall along the Mühlenberger Weg.

At the front edge of the square, one walks through a steel arched gateway framing the view of the harbor and onto a ramp borne by this gateway.

Projecting far over the steep slope, this ramp leads visitors toward the Elbe and then, at the halfway point, turns 180 degrees back toward the building.

The upper deck houses our firm's work rooms. Since our style of working remains unchanged, the lights from the interior shine far into the evening, showing that architectural work is not standard office work.

As a complement to the classicist turret, the cylindrical staggered story towers over the bow like a navigating brige. The central spiral staircase leads to the large conference room with a panorama view.

The silhouette of the building is a bizarre sight indeed: a 50 meter long steamer heading perpendicularly toward the River Elbe, skirting the length of the wall along the Övelgöner Mühlenweg and anchored with a classicist turret to Elbchaussee.

On the opposite side, at the other corner of the square opening in a trapezoid to the Elbe, is a cubistic villa: the home of the owner.

The design language of the new avoids drawing any analogies to other typical buildings along the Elbchaussee. Where the drafting tables stand, the window axes are divided according to the workplace design. The upper storey is laid out as a large drafting hall. A barrel roof with an exposed steel construction lends the room its unity and its workshop-like atmosphere. Open passageways are constructed in a way reminiscent of a ship's deck. Exterior shades accent and outline the configuration of the building's parts. Walkable skylights laid right into the square allow daylight to penetrate into the garage below. In the evening, artificial light emerges from the garage, combining with the four "light steles" to create an almost otherworldly effect in the square.

The only color accents are the red flags that announce the residents of the house, the red steles, and the garage door supports.

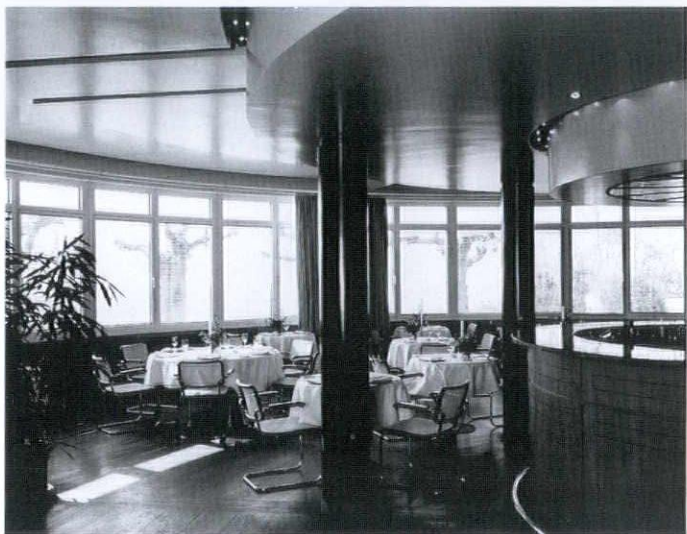
The trees on the site were preserved and provide a green contrast to the rest.

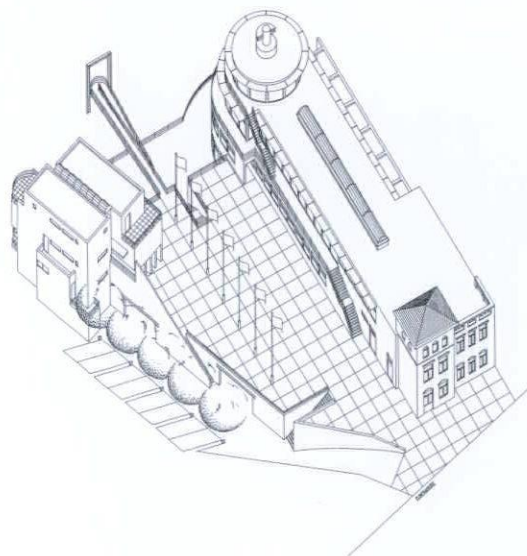
Work and living, dining and exhibition achieve a state of symbiosis here, in a single building complex.

Main Function: office
 Architect: Meinhard von Gerkan
 Collaborators: Jacob Kierig, Peter Sembritzki, Sabine von Gerkan, Volkmar Sievers
 Client: Meinhard von Gerkan
 Period of Construction: 1987-1990



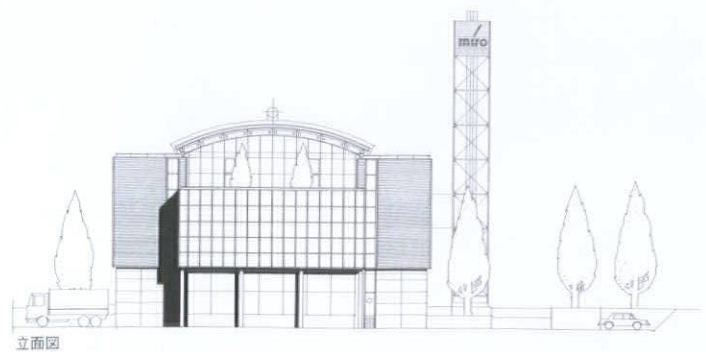
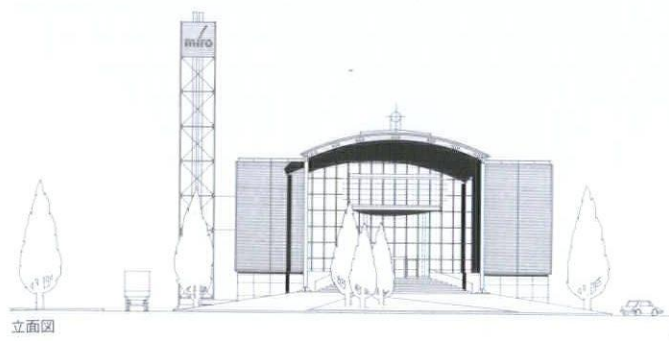


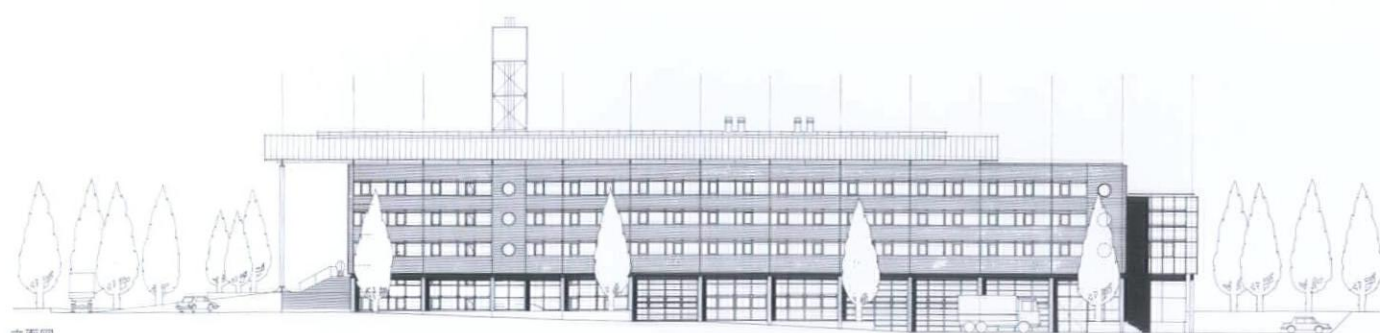




ミロ・データシステム・ビル

Miro Data Systems, Braunschweig, 1991





立面图

ミロ社は、コンピュータ関連の開発・販売およびサービスを取り扱う会社である。工業地域の一角にある敷地は高速道路に接し、近隣は小さなオフィスビルやありふれた事務所建築がほとんどである。近年この地区にも、最近台頭してきたコーポレート・アイデンティティという考え方への受けを狙ってか、大げさなシンボリズムやポストモダニズム、あるいは否構造的な「輪郭」をもった、野心的で変わった建築がいくつか建てられた。しかしそれらの建物は、機能的に正しい構成や将来の変更への対応能力、また材料の選択やディテールの決定等において適切かどうかといった視点からほど遠いものである。しかしここでは、こういった視点こそが目的なのである。

受付、展示、教育、そして時には祝典等の儀式にも用いられる中央ホールを囲むように「思索室」が配され、そこで新しいコンピュータ・チップの開発や製品マーケティング、あるいは組織経営が進められていく。これらの小部屋は、ガラスの仕切りがあるだけで、中央の共同スペースに対してオープンになっている。これは、同社の性格と、若いスタッフを主体とする社員たちのワーク・スタイルを反映したものである。と同時にこのことは、ひとつ屋根の下で製作とサービスを結合させるという建築的なイメージをも与える。

制作部門は建物後方に位置し、搬入が直接できるようにになっている。オフィス用の「思索室」はこの制作エリアを上階でとり囲むように配されており、廊下はオープン・ギャラリーとなっている。タイプとしては、この建物は「3側廊形式のホール」であり、中央の廊下にかかるカマボコ形の天井は、そのまま入口ホワイエの突出部分まで続いて、いかにも来訪者を歓迎するといった雰囲気をつくり出してい

る。

RC、外装の波形鉄板、むきだしの鉄骨といった材料は、技術面から見たこの建物の特徴に対応したものである。設備類を一部露出したままに残したことで、設計に影響なく内部の変更ができるようになっている。

施主側の自信に満ちたビジネス・スタイルのおかげで、我々設計側も同様の自信をもって、しかも時には満足感さえ感じながら設計を進めることができた。彼らの仕事部屋はまるで半円筒形のコントロール・ボックスのように、入口ホールの上に浮いている。そして円形のガラスを通して、内も外もすっきりと見渡すことができるのである。

Miro is concerned with the development, sales and service of the computer industry. The building stands in an industrial area directly next to the motorway. This district is dominated by prefabricated halls with fragments of office buildings. In the past few years ambitious acrobatic pieces of architecture have been added, having dramatic symbolism and post-modernism or deconstructive "aperçus" trying to give the best advertising to the newly discovered idea of corporate identity. A functionally correctly organized, open for future change and suitable solution concerning choice of material and design detailing appears for most afar away. Just this was the design aim for the Miro building. Around a central hall, which also serves as reception, exhibition, teaching and sometimes celebration area, thinking cells were positioned in which the new computer chips are developed, products marketed and the

business organisation managed. The rooms only divided by glass partitions are open towards a common middle. This reflects the character of the company and the work style of the mainly young staff. At the same time this gives the architectural image of combining production and service under the same roof. A workshop is in the rear of the building having direct loading facilities. The office thinking cells surround on the upper level these production areas. The corridors are designed as open galleries. Typologically the building is a threeaisled hall, with the middle aisle having a barrel roof, which at the same time covers the projecting entrance foyer and shows the character of the building as reception feature. The materials—reinforced concrete, corrugated metal cladding, raw steel structure—correspond to the technical nature of the building. The partial visible service installation allows change without alteration to the design. The self-confident business style of both clients allowed the architects to design in the same style with a feeling of inner satisfaction. Their work rooms hover like a cylindrical control box, divided in the middle, over the main entrance hall. The circular glazing allows a complete view internally as well as externally.

Main Function: office

Architect: Meinhard von Gerkan

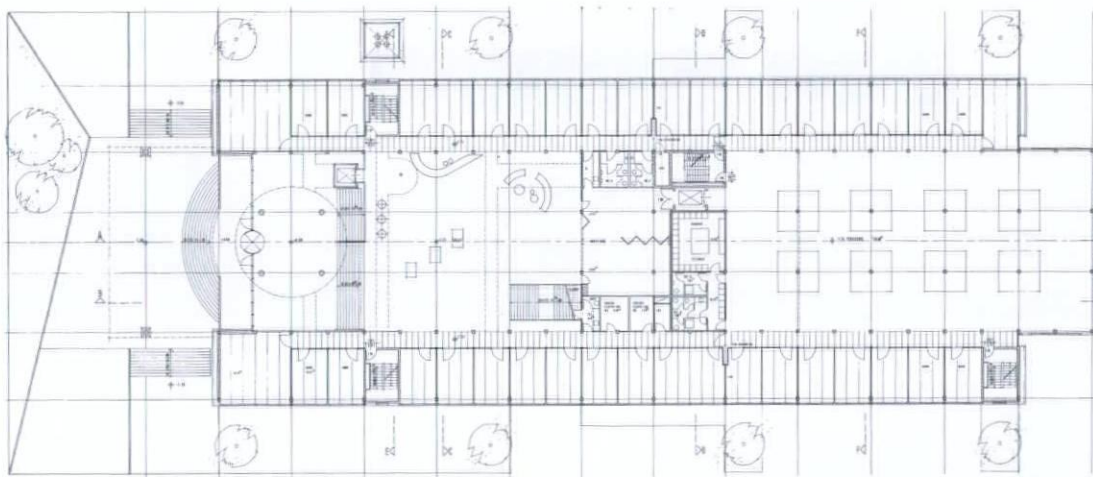
Project Leader: Ulrich Hassels, Joachim Zais

Structural Designer: Harden + Partner

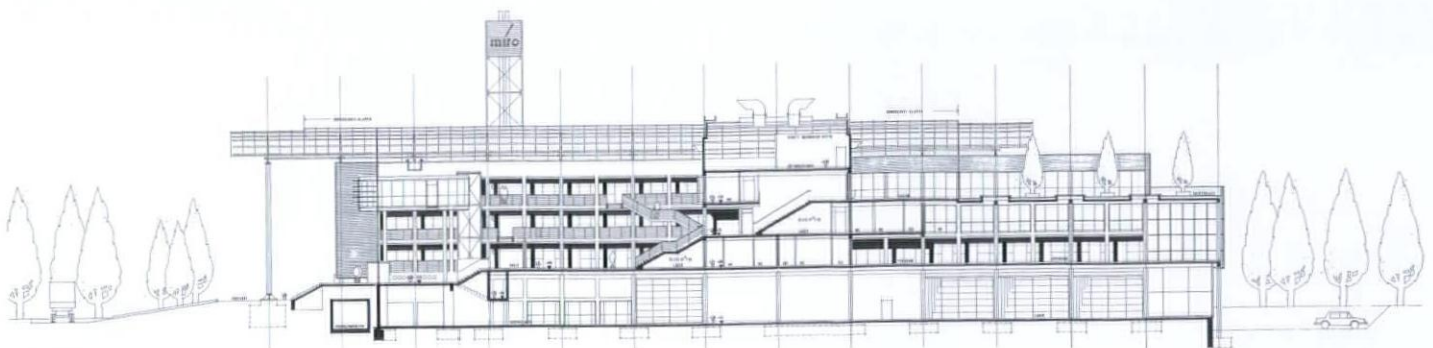
Collaborators: Walter Gebhardt, Uwe Kittel, Hermann Timpe

Client: Miro Datensysteme GmbH

Period of Construction: 1990-1991



1階平面図



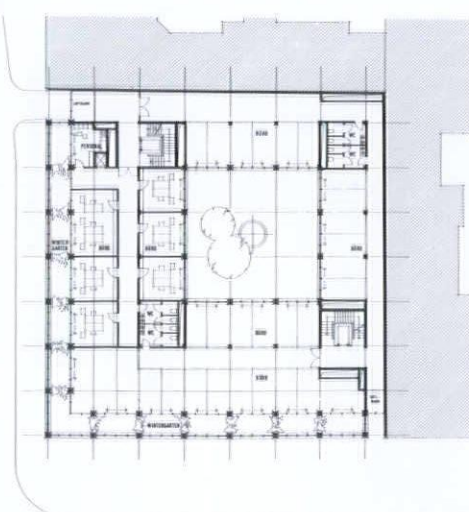
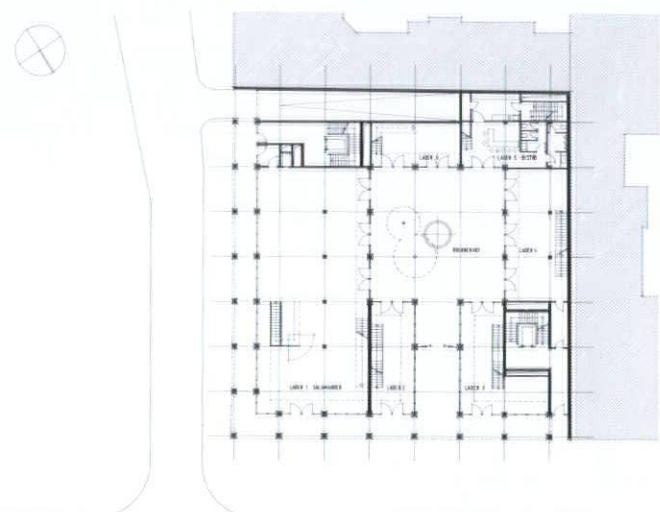
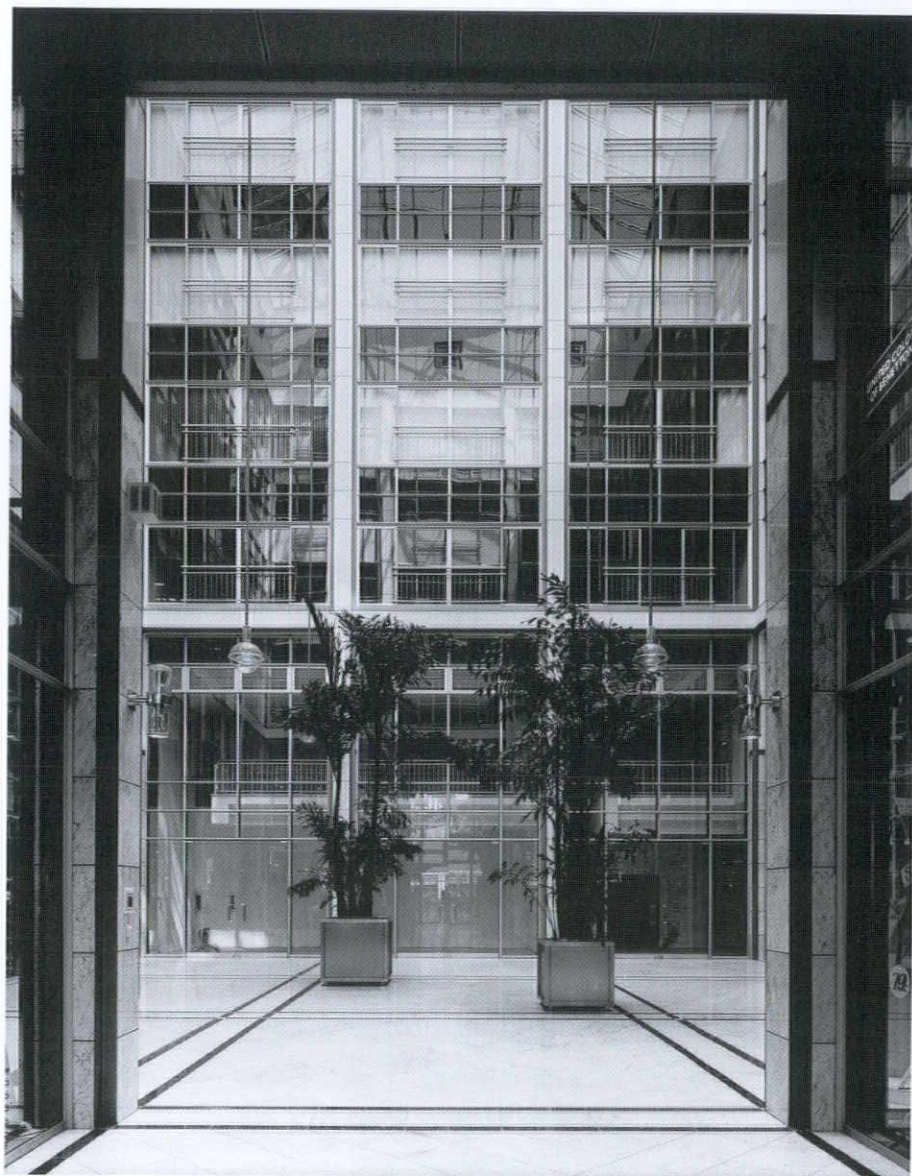
東西断面図

SD9605



サラマンダー・ハウス

Salamander House, Berlin, 1992





設計の主要目的は、建築を通しての広告である。従ってここでは、一般的な箱型オフィスファサードの代わりに、まばゆい光に満ちた「ウィンター・ガーデン」が最大の特徴となった。道路の交差点に接する場所には「サラマンダー」のロゴマークの電光広告塔が立ち、人目を引く。1階に少し引っ込んで配されたギャラリーと、その上2層分の店舗階の外装は透明で、ファサード全体が全天候型の広いアーケードとして設計されている。中には店舗や事務所、住居等が入っており、インナー・シティの需要に対応した多種混合利用を考慮したものとなっている。

The main objective of the design is advertising through architecture.

Instead of the usual office block façade, the Salamander Building's main feature is its brilliantly lit winter garden.

The street corner is accentuated by an advertising tower which displays the illuminated Salamander logo.

The transparent two storey shop fronts with recessed galleries located on the first floor are designed as broad arcades with weather protection.

The building has a combination of shops, offices and apartments, providing mixed use for inner city needs.

Date of Competition: 1988

Main Function: office

Architect: Volkwin Marg

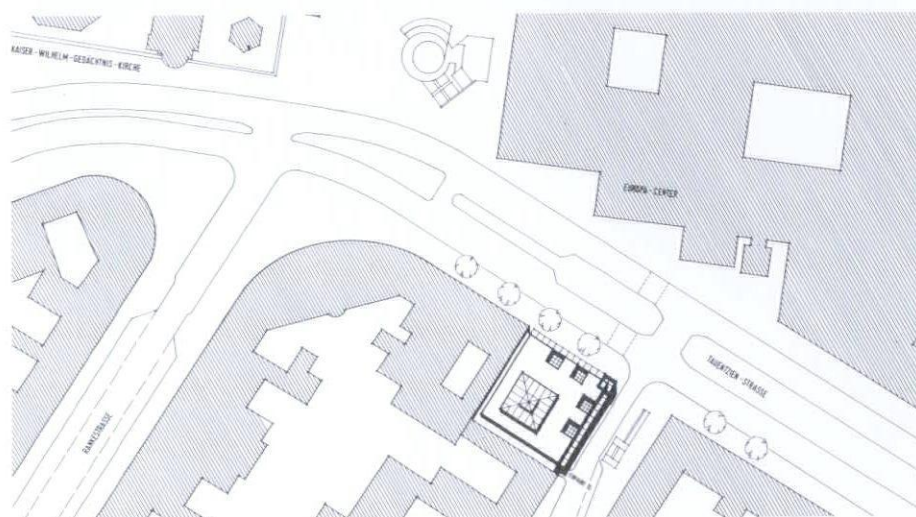
Structural Designer: Nicklisch, Hornfeld, Scheel

Equipment: HL-Technik / GUZÜblin

Collaborators: Joachim Rind, Martin Bleckmann, Annette Kersig, Bettina Lautz, Vera Mostert, Christiana Tibi, Peter Römer, Sybille Zittlau, Kroos, Beate Lucas, Ute Kretschmer, Karl Baumgarten, Benedict Dardin

Client: Salamander AG, Kornwestheim

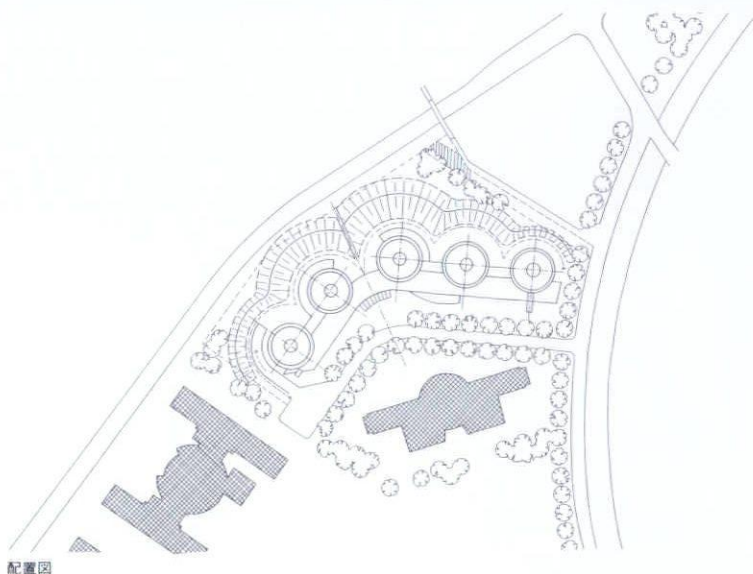
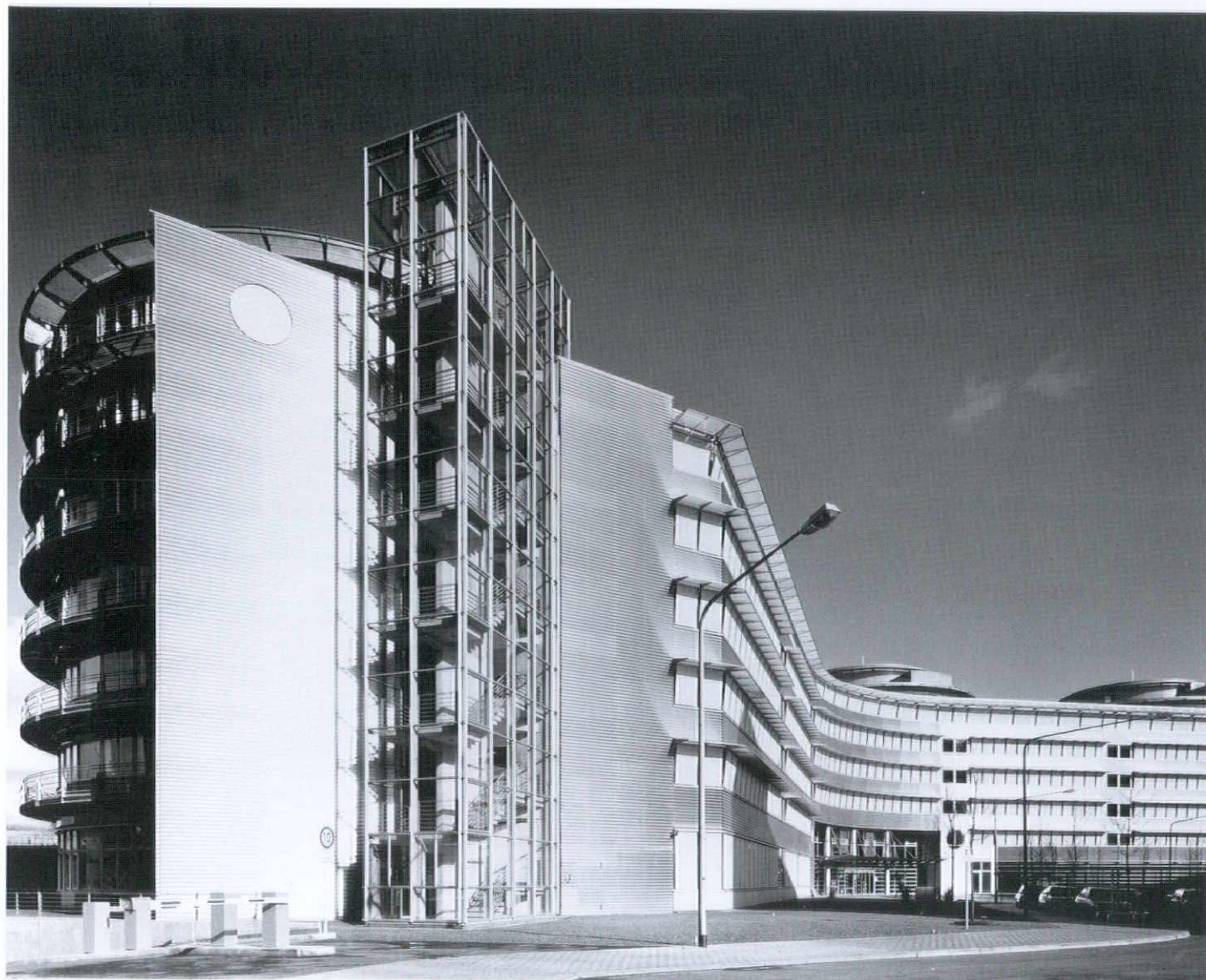
Period of Construction: 1990 1992

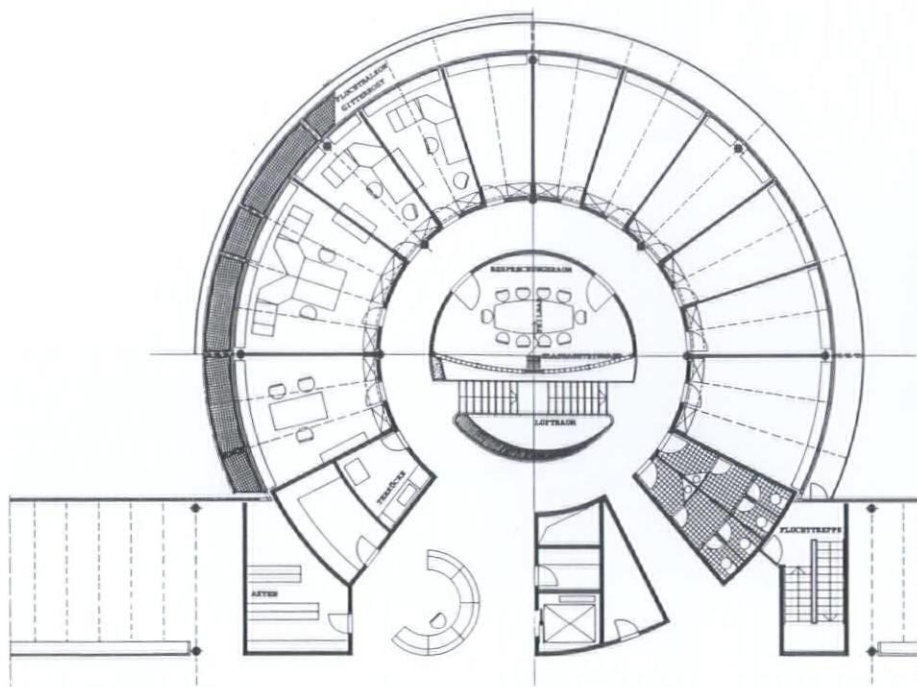


配置図

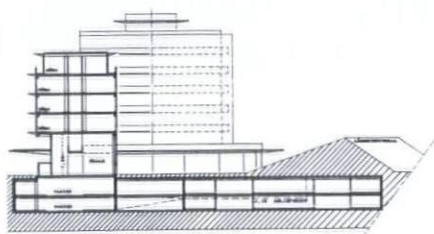
ドイチェ・レヴィジョン

Deutsche Revision, Frankfurt, 1993

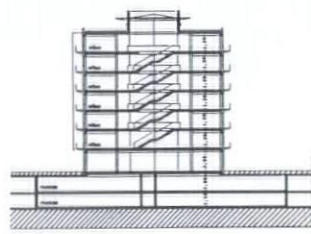




基準階平面図部分



断面図



断面図

建物は、多角形で「カーブした」変則的な土地に合わせて構成されている。そのため強いシンボリズム、いいかえればドラマティックな外観をとらなくとも、曲線を描いて広がる建物全体がすでに十分ダイナミックな表現をしている。また、カーブ状の建物はアクセス道路に沿って配置された5本の円筒状のタワーの背骨の役割も果たしている。平面計画では、機能面から考えて建物をユニットに分割した。中央の「コミュニケーション階段ホール」にはガラス屋根を通して自然光が採り入れられる。また、建物の独特な形によって基本的な導線がはっきりする。敷地の周辺が台形にのびており、円筒状の建物の作業スペースには多くの自然光がもたらされる。また遮音壁を作って防音するかわりに、当初はフレームだけで計画されていた立面を、第2の「外皮」として利用した。骨格部の立面は波形金属板と、固定した日除けに覆われている。

The building fits into the unusual polygonal "curved" site form and gains a dynamic element through the sweeping form without direct and deep symbolism or superficial dramatic architecture. It also forms the spine for the five cylindrical towers located along the access road. The functional concept of the floor plan splits the office building into units. Glass roof lights in the central "communication staircase" provide natural daylight. The shape of the floor plan also creates a clear access framework. The trapez-shaped extension to the periphery of the site improves the work areas in the cylindrical buildings by increasing the natural lighting. An additional noise protection alternative to the embankment is the option of using a second "elevational skin", which is initially erected only as a framework. The elevations of the spine are covered in corrugated metal and fixed shades.

Date of Competition: 1990

Main Function: office

Architect: Meinhard von Gerkan

Project Leader: Klaus Staratzke

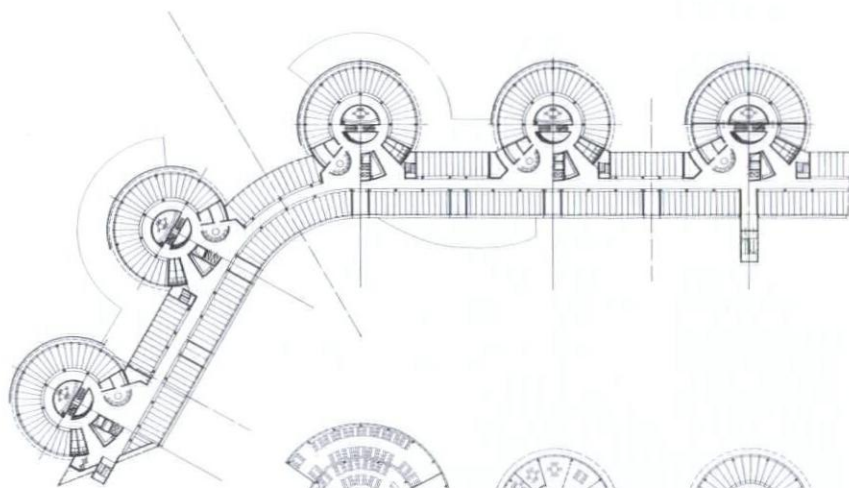
Structural Designer: König + Heunisch

Equipment: H.Reuter + M.Rüthgartner

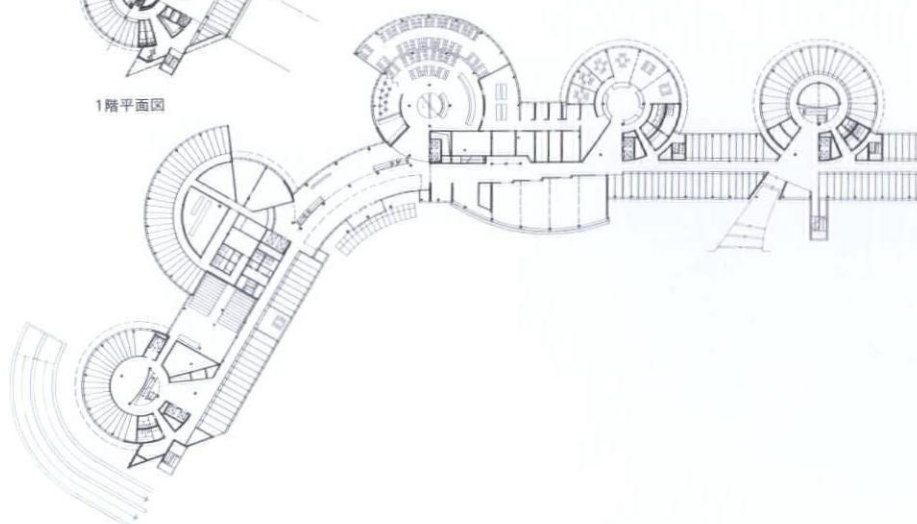
Collaborators: Manfred Stanek, Arturo Buchholz-Berger, Jutta Kaufhold, Michael Engel, Knut Maass, Kerstin Krause, Robert Beyer, Gabriele Hagemeister, Birgit Meyer, Marina Hoffmann, Edeltraut Grimmer, Klaus Dorn, Swantje Wedemann, Lajana Weinmann

Client: C+L Treuhand, Vereinigung AG

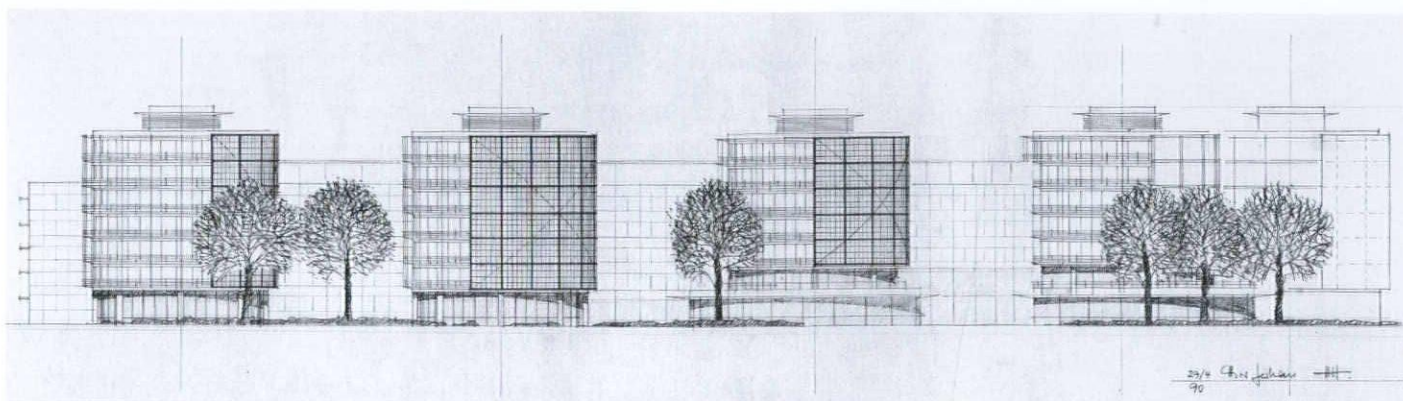
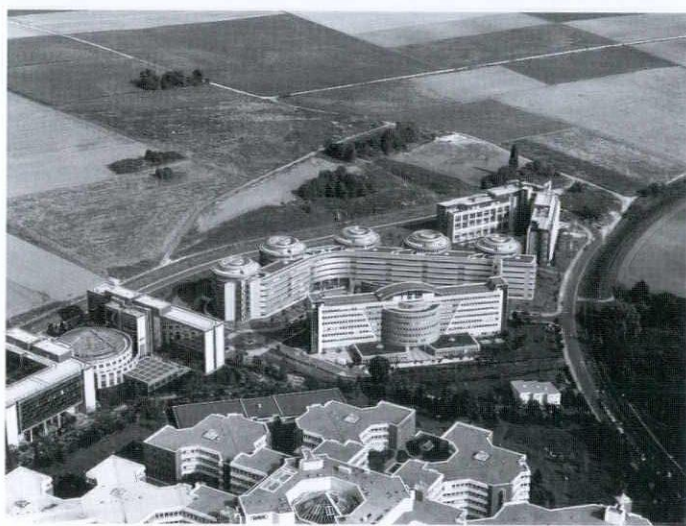
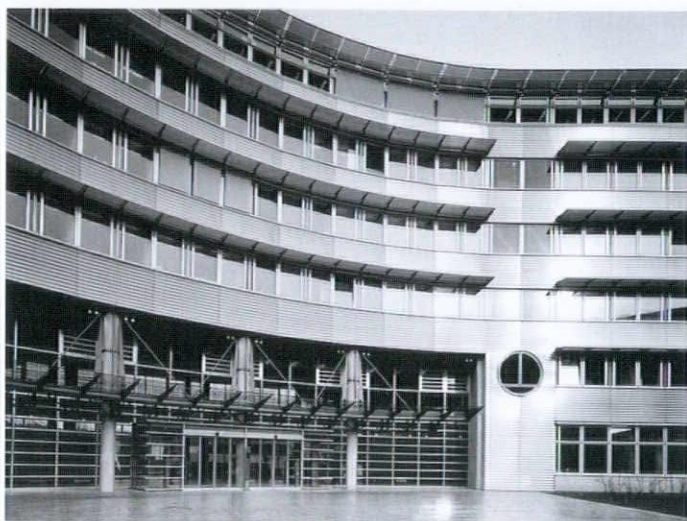
Period of Construction: 1992-1994

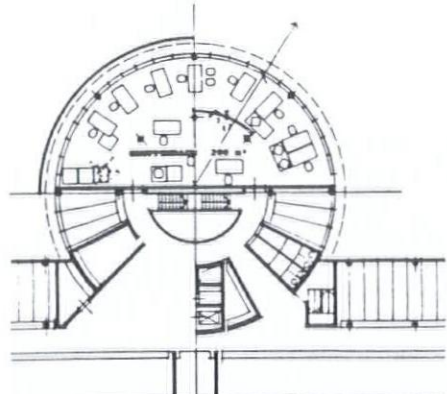
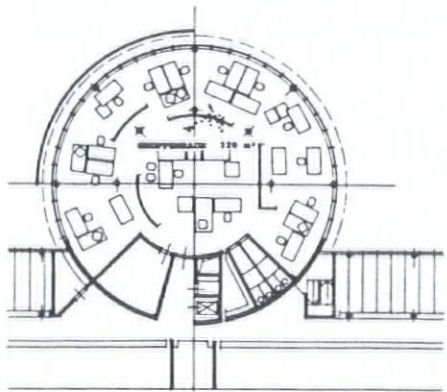
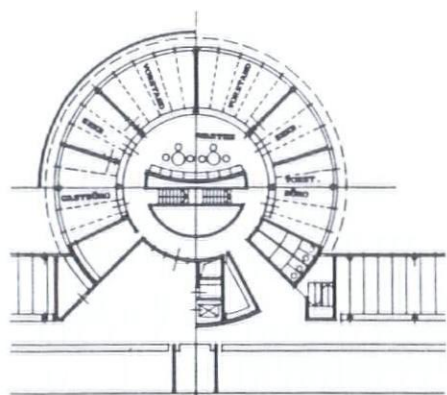


1階平面図



基準階平面図



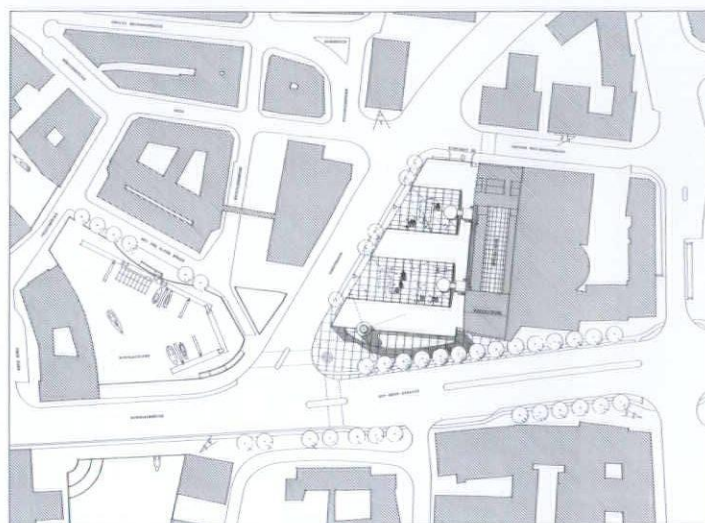


基準階の使用例

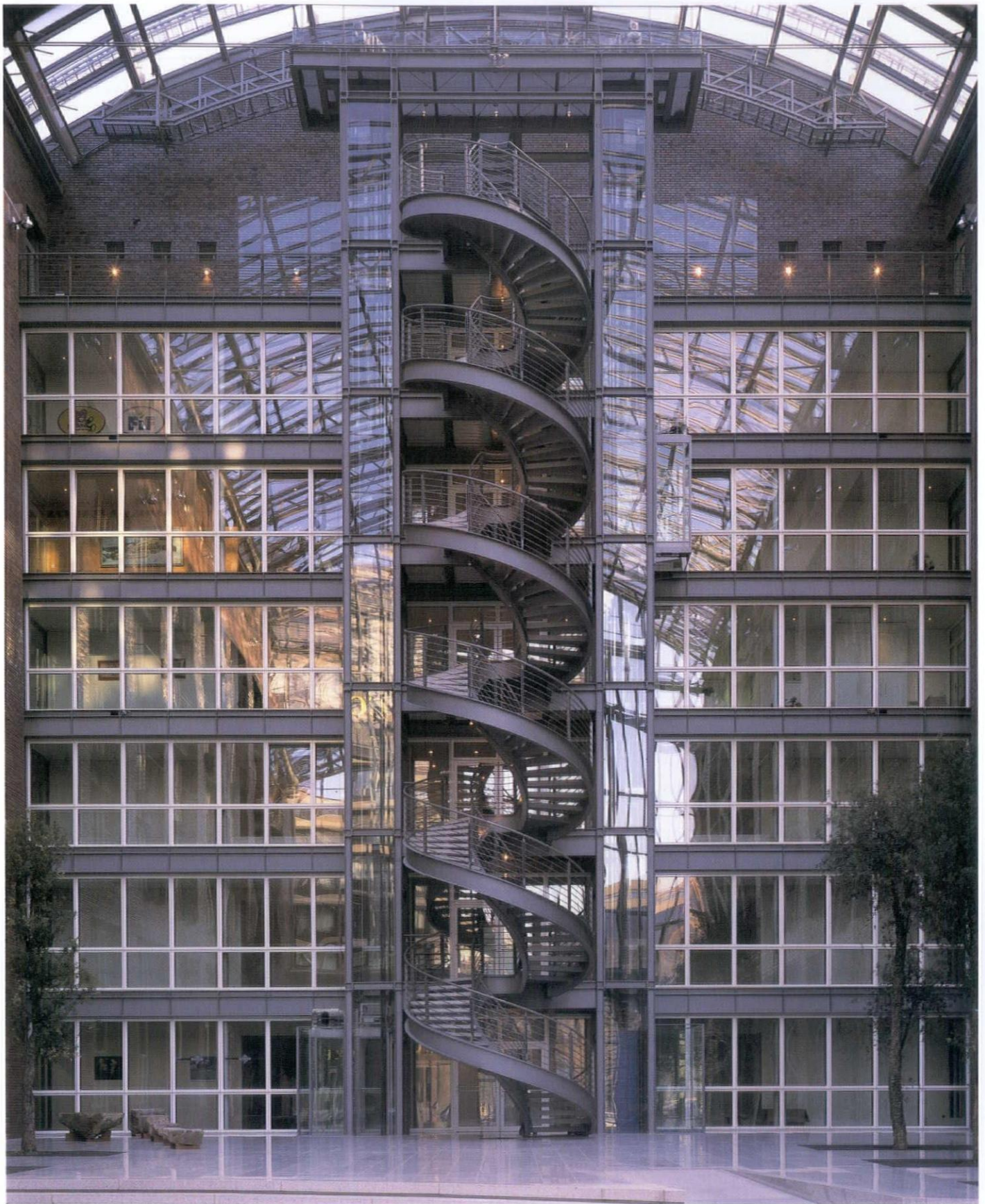


チューリッヒ・ハウス

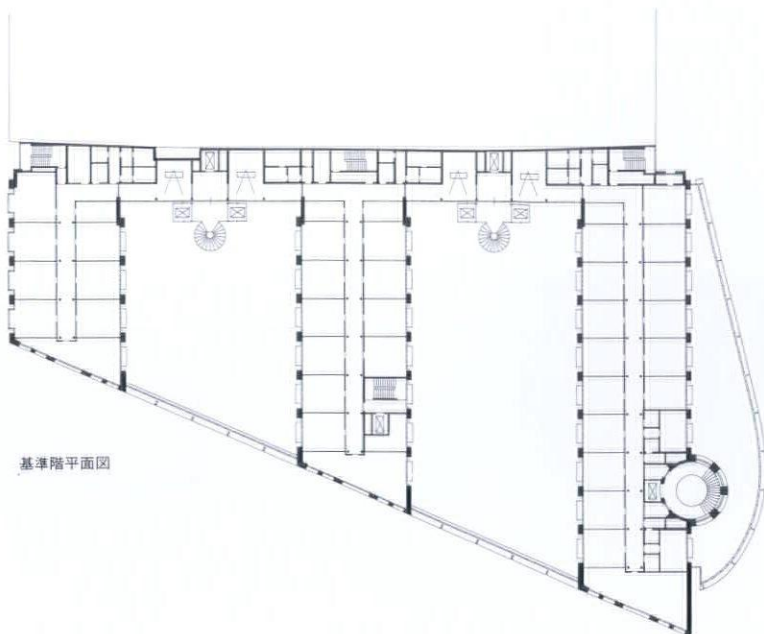
Zurich House, Hamburg, 1993



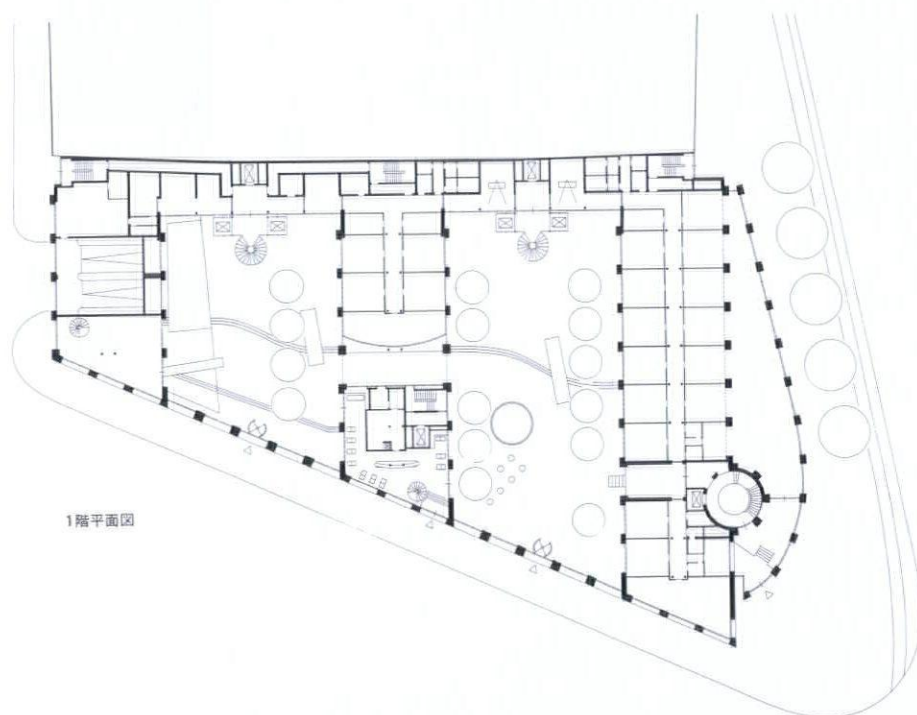
配置図



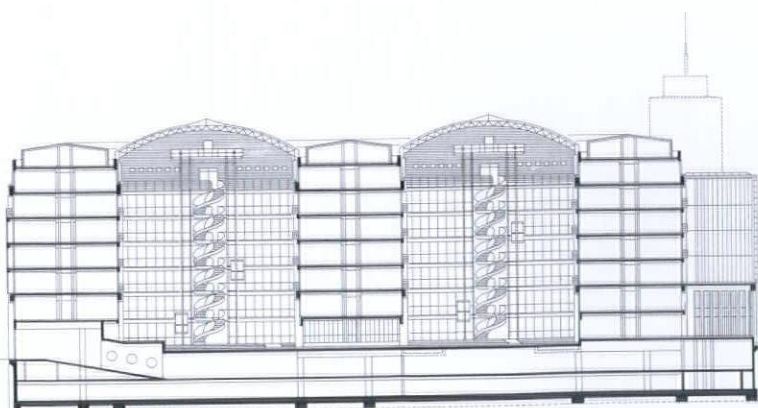




基準階平面図



1階平面図



断面図

ハンブルグの事務所建築の伝統は、ゾーニングと材料の点で継承されている。柱による垂直性の強調、レンガと鉄鋼材を使用し、基部と中間部と屋根による水平面の分割がそれである。内向的な光井戸の導入を避け、すべてのオフィスから都市の景観を楽しむことができるようにした。シースルー・エレベーター、外部階段、ギャラリーを従え、植栽されたガラスの温室がフォーマルな玄関ホールとなっている。第一に、温室はオフィスの自然換気を維持しながら、通りの騒音に対するバリアとして機能する。さらに、パーティやコンサート、大きな会議にも使用できる優れた空間である。階段室からなるタワーはメッセベルクホッフ塔のペンダントと見立てて計画され、オスト・ウエスト通りとドム通りの重要な交差点であることを示している。

The architectural tradition of the former Hamburg Kontorhaus is continued in terms of zoning and materials: stress on the vertical structure by strong pillars, horizontal division using the base, middle structure and roof level, brickwork and steel. Introverted light wells are avoided, all offices have a view of the city. Glazed and planted winter gardens with glass elevators, open stair-cases and gallery corridors form the formal entrance foyer. At first they serve as noise barriers protecting the naturally ventilated offices from the street noise. They also serve as excellent areas parties, concerts and large meetings. In planning terms the staircase towers form a pendant to the tower of the Meißberghof and signalize the important junction Ost-West and Domstraße.

Date of Competition: 1988

Architect: Volkwin Marg with Nikolaus Goetze

Project Leader: Klaus Staratzke, Nikolaus Goetze

Structural Designer: BGS Hannover

Equipment: HL-Technik

Collaborators: Marion Mews, Antje Lucks, Stefan Lohre, Thomas Haupt

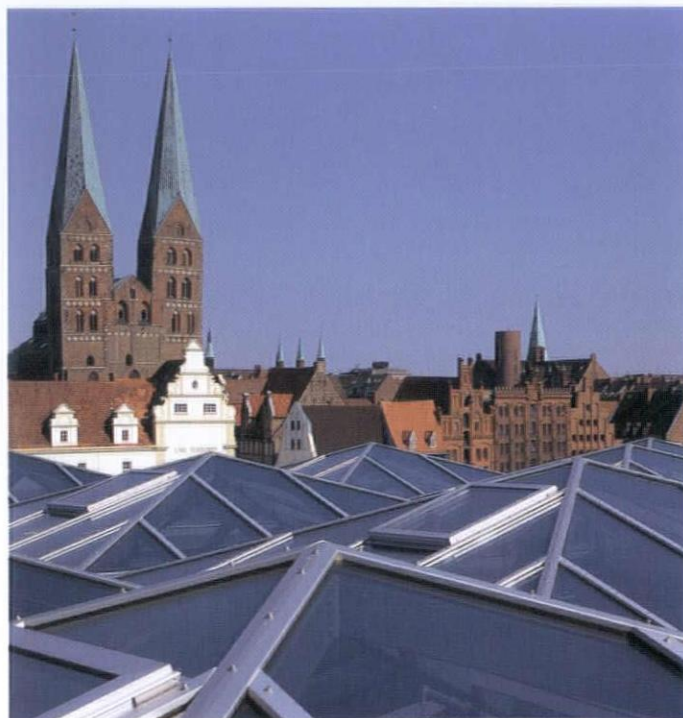
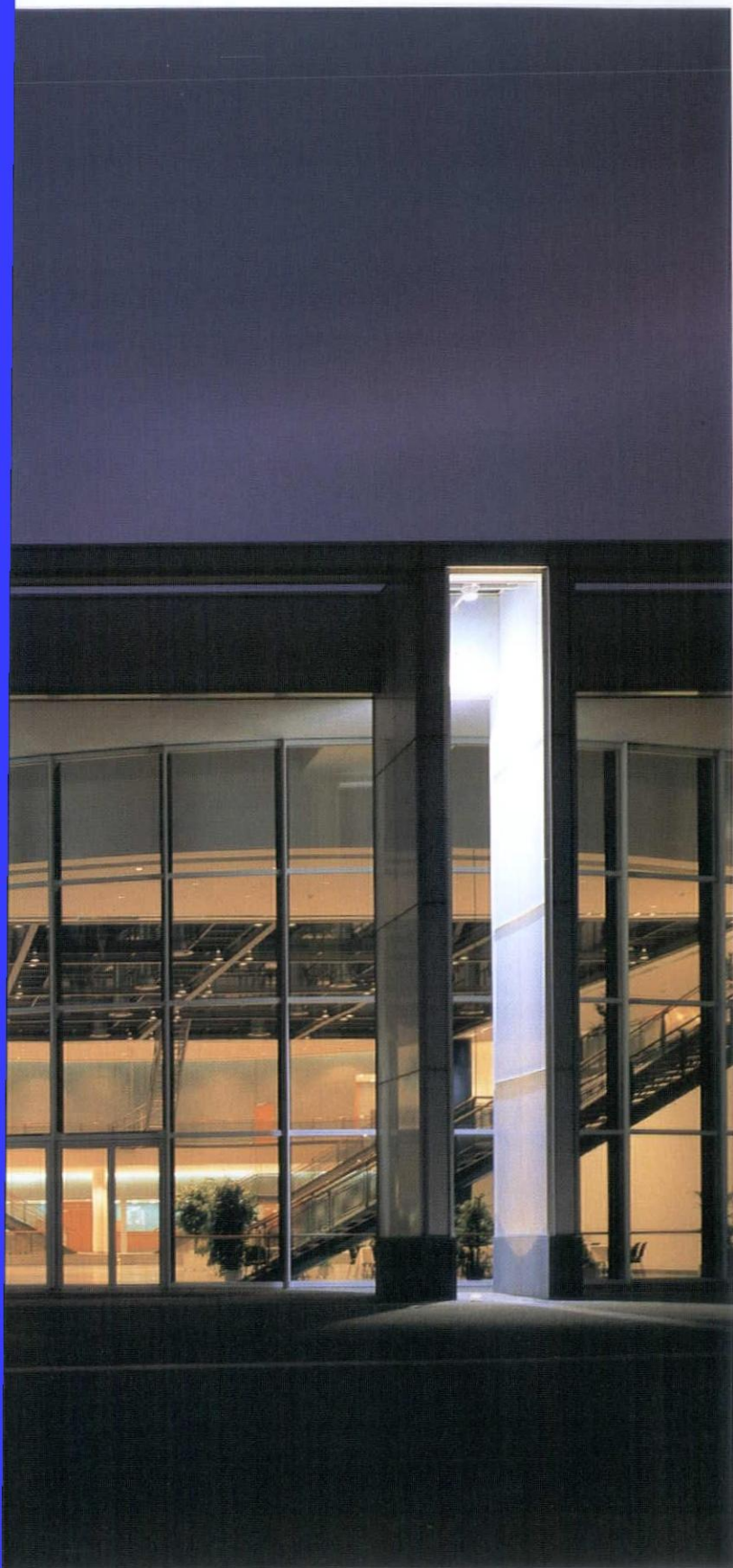
Client: Zürich Versicherungs-Gesellschaft

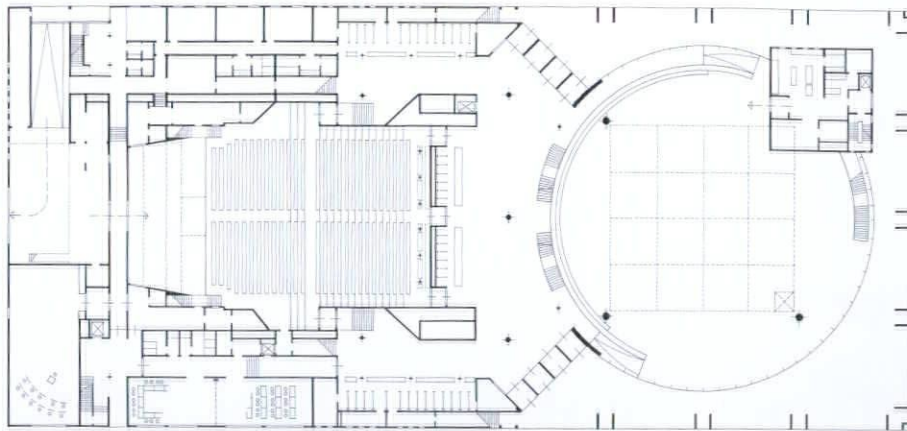
Period of Construction: 1990-1993

リューベック音楽・会議ホール

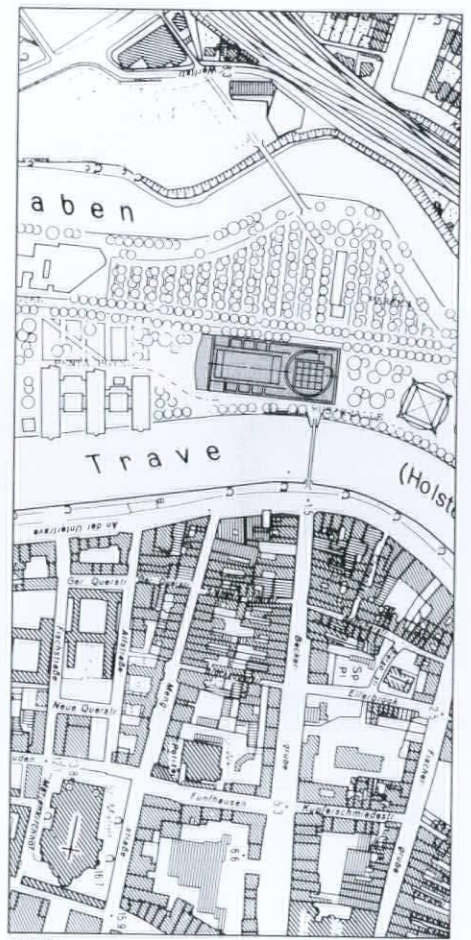
Music and Convention Hall, Lubeck, 1994



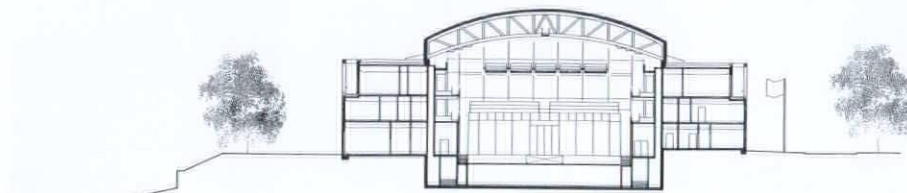




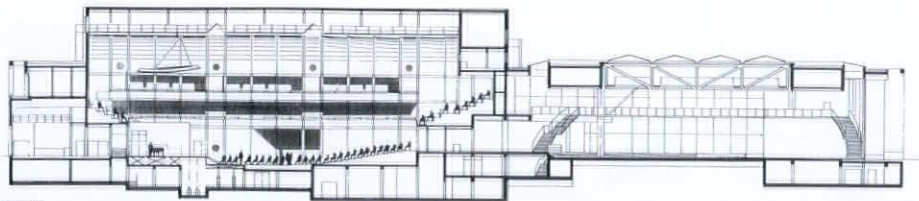
1階平面図



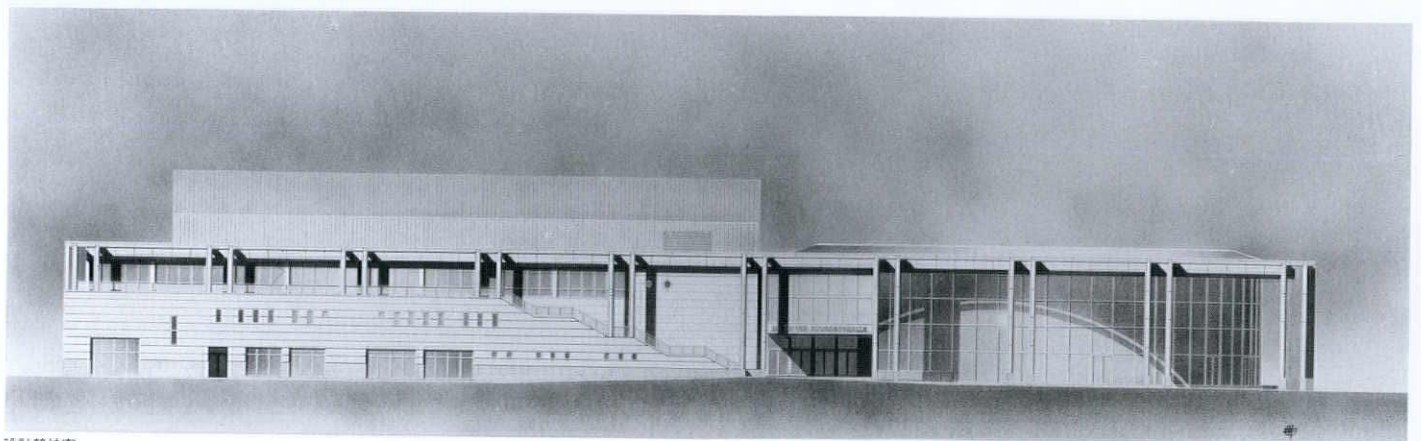
配置図



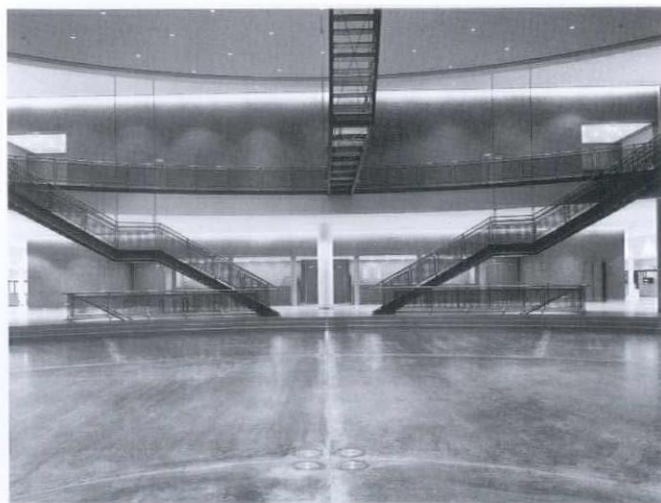
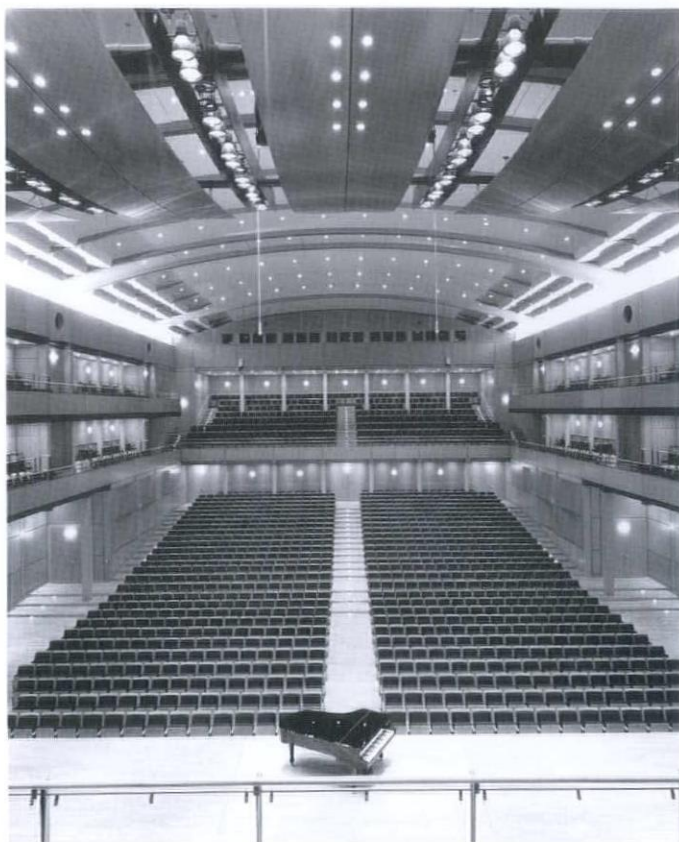
断面図



断面図



設計競技案



Date of Competition: 1990
Main Function: hall
Architect: Meinhard von Gerkan
Project Leader: Thomas Rinne, Wolfgang Haux
Structural Designer: Assmann Ingenieure
Equipment: Heinze, Stockfisch, Grabis + Partner
Collaborators: Volkmar Sievers, Christian Weinmann, Daniela Kruth, Martina Klostermann, Bettina Groß, Christian Kreusler, Karl-Heinz Behrendt, Peter Kropp, Claudia Papanikolaou, Henning Wulf
Client: Hansestadt Lübeck, Hochbauamt
Period of Construction: 1992-1994

デザインの諸要素は、公共建築としての必要条件と、音楽・集会ホールとしての華やかで雰囲気という、ふたつの点から導き出されたものである。長さ120m、高さ19mというボリュームは、古都リュベックの小さなスケールの雰囲気に合わせてと考えられたものではない。むしろ今日の意味論的立場、規模、そして美学的な見地からの表現である。公共機能を伴ったこの建物は、立地は離れているが、その方位によって既存の都市に統合されている。多機能な円筒状のホワイエを内部に従えた建物北端部は、大きなアーケードのように構成され、敷地を横断する歩行者用通路に意図的にはめ込まれている。建築的なエントランス広場をつくらなかったが、建物そのものがアーケードや側面の階段と歩行路を伴うパブリックなものとして存在している。多目的なホワイエは円や四角といった幾何学的形態から構成され、開かれた中庭を形成している。円筒状のガラスのホールは総面積1400m²、高さ10mである。材料はシンプルなものを使用した。焼き付け塗装の白いアルミと固定ガラスとの強いコントラストは建設技術の本質を強調し、同時に海洋建築を思わせるものとなっている。建物全体は中央の軸線に基づき、コンサー

ト・ホールはエントランスの列柱を四方に巡らせた長方形のプランである。特別席、舞台、ピット、あるいは両側の通路へのスペース配分を変え、一部の座席を「省略する」ことによって1000人から2000人まで、収容人数を調整することができる。ホールの壁は木製の積層板で、音響面でもデザイン面でも高い質を保証している。ステージ部分の鉄骨構造材と吸音パネルが据え付けられた屋根のカーブした部分は、すべて音響を考慮して計画されたものである。

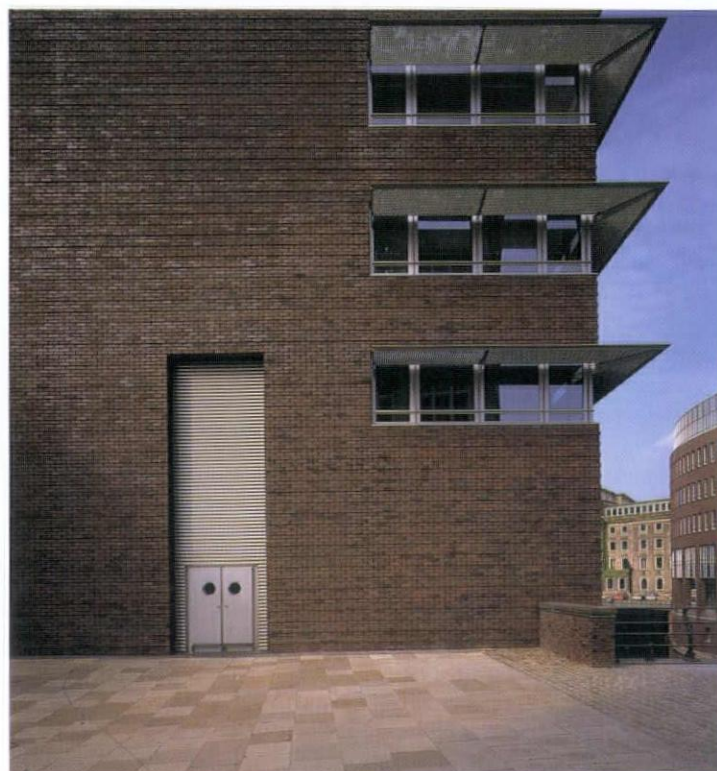
The duality between public demand and festivity dictates the parameters of the design. The 120 metre long, 55 metre wide and 19 metre high building is not conceived to fit into the small scale atmosphere of the old town of Lübeck. It is much more a semantic, scale and aesthetic statement of the present day. The orientation of the building with its public facilities is integrated into the urban structure. The northern building head with the inset cylinder of the multifunction foyer is formed like a large arcade and intentionally pushed into the pedestrian link which traverses the site. In the place

of an architectural entrance square the building itself acts as a public building with its arcades and side staircases and walkways, the multipurpose foyer forming a public accessible court from the geometric shapes of circle and square. The cylindrical glass hall has a total area of 1,400 m² with a height of 10 m. The materials chosen are simple: The polarity contrast between white enameled aluminium and visible fixing stresses the technical nature of the construction and at the same time provides a design link to marine construction. The building is based on a central axis, the concert hall has a similar clear rectangular plan with entrance corridors on all sides. The distribution of seating in stalls, rows, pits and double side aisles gives the ability to accommodate a chamber capacity of between 1,000 and 2,000 spectators by "omitting" various seating areas. The walls of the chamber have a wood cladding fulfilling the high acoustic and design requirements. Areas of curved roofing, bedding of the structural steelwork as well as acoustic panels in the stage area are all parts of the acoustics.

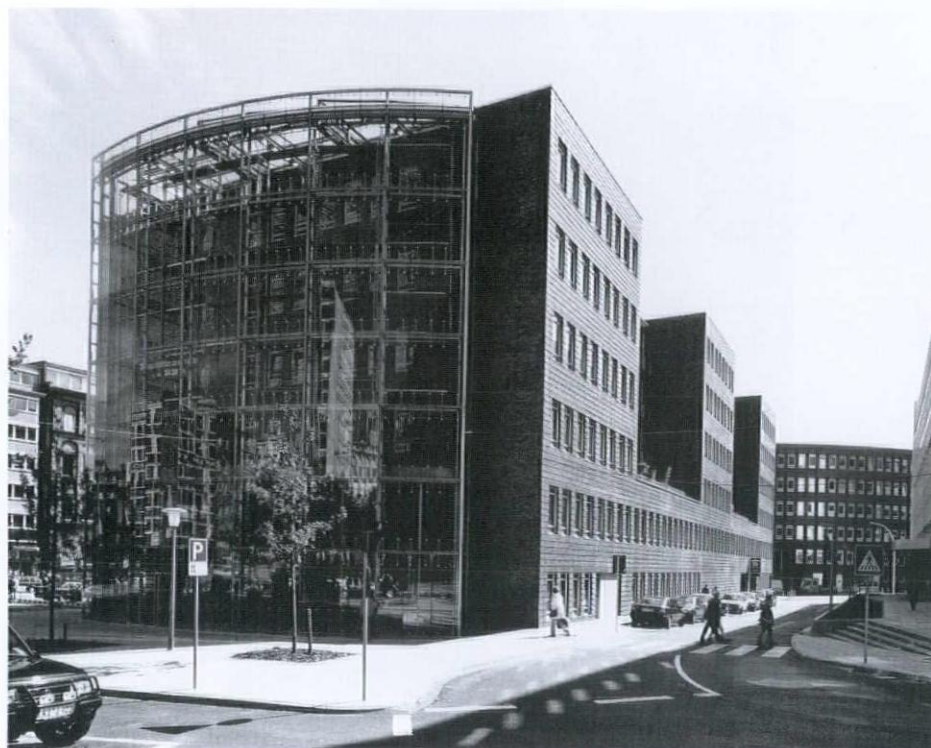
独日センター

German-Japanese Center, Hamburg, 1995

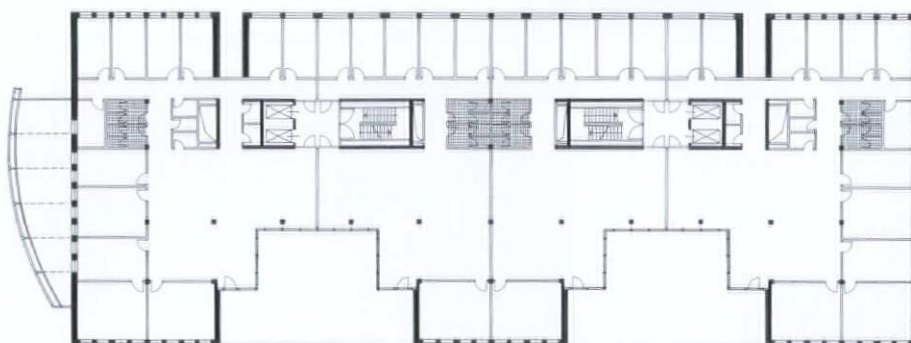




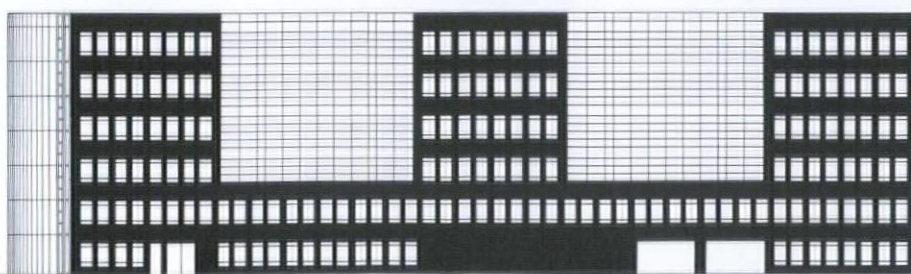
独日センターは、コンプレックス全体で都市的にも建築的にも統一されたものとなっている。一方コンプレックスを構成する各建物は、それぞれの特徴的な敷地条件に呼応している。コンプレックス全体は、中央のメイン・ビルディングとその脇の2つの建物からなり、これらの建物は4階と5階でシースルーの渡り廊下によって連結している。北を向いた建物は「ショーウィンドウ」のようにになっている。日本の工業製品のショールームが数フロアにわたって配置され、それらの窓がすべて街に向かって開かれている。北側の敷地に建つブロックのかたまりのような建物は、くし型プランの変形である。階を追ってのセットバックは、優れた採光とフレキシブルな平面計画を可能にしている。南側の敷地の建物はブライシェン運河の河岸壁が描く曲線に従っている。対照形のビルディングは、中央にコアを擁し、その両面に居室が並ぶ。しかし途中で運河という都市環境の保存のためにここで例外が生じる。保存のためにブライシェン運河の歴史的な階段を避け、周辺の街路スペースになじませるために、建物北東端部についてはアーケード上部にたつシングル・サイドのビルディングとなったのである。残念ながら北端部はオリジナルデザインから若干の変更があり、ガラス張りのバルコニーのついた窓になった。ブリッジの結合部についても同じ運命をたどった。



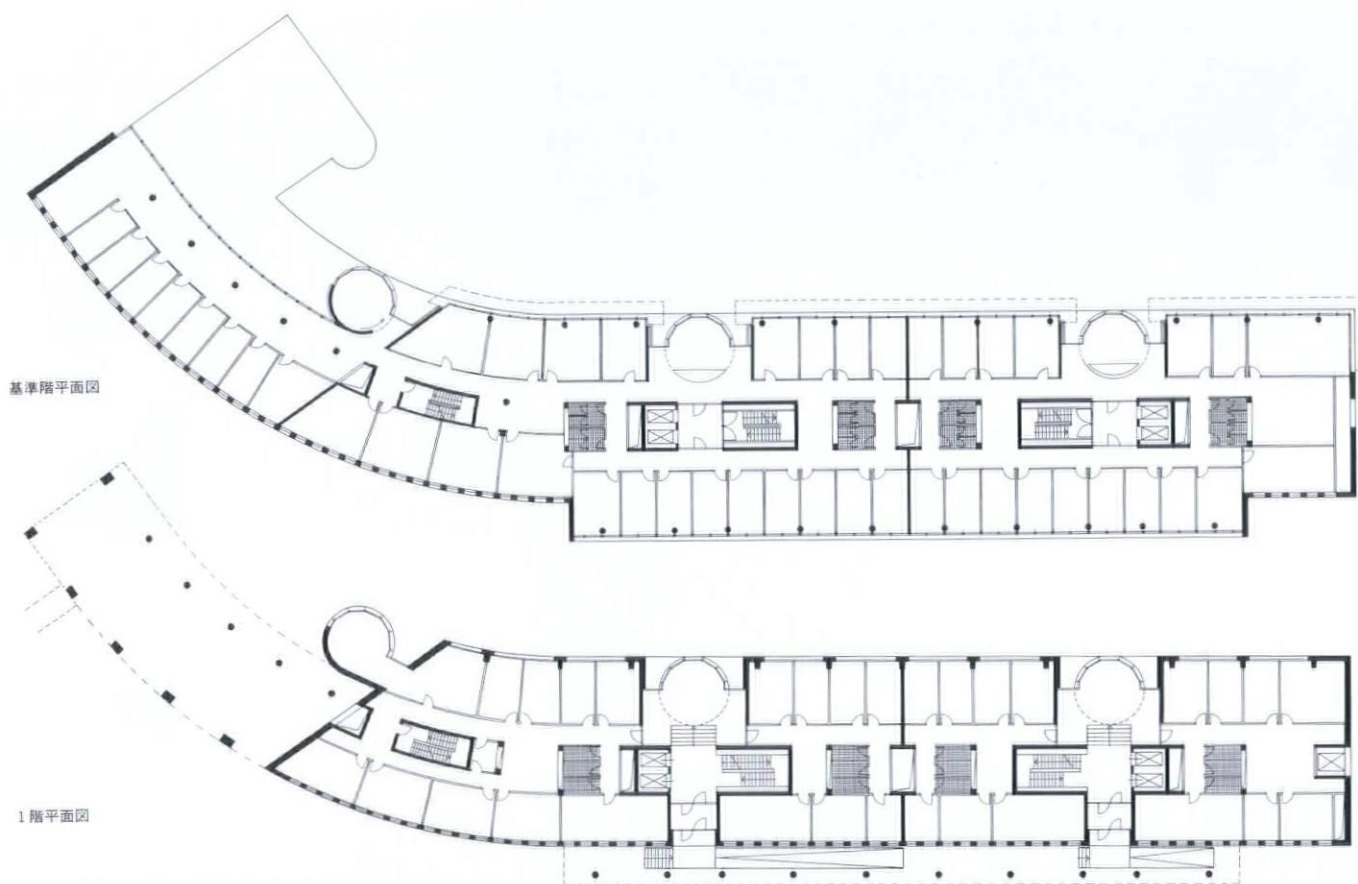
The entire complex provides for an urban and architectural unity of the German-Japanese Centre, where each building responds to each specific site situation. The total complex consists of a central main building, which is flanked by two facing buildings. These are linked by transparent bridges on the 4th and 5th floors. The north facing building becomes the "show window": showrooms of Japanese industry are proposed on several levels, their windows opening out on all sides towards the town. The block-like massive building on the northern site has a plan form in a modified comb structure. The setback of levels gives good lighting and planning flexibility. The building on the southern site follows the curve of the canal wall of the Bleichenfleet. The duplexity is partially disturbed to preserve the urban environment of the canal. The north east head building is only a single sided building, elevated above and arcade, in order to avoid the historic stairway of the Bleichenfleet and to merge into the surrounding street space. Unfortunately the northern head has been dropped and is now replaced by a glazed balcony window-a sensitive change to the original design. The bridge links also followed the same fate.



基準階平面図

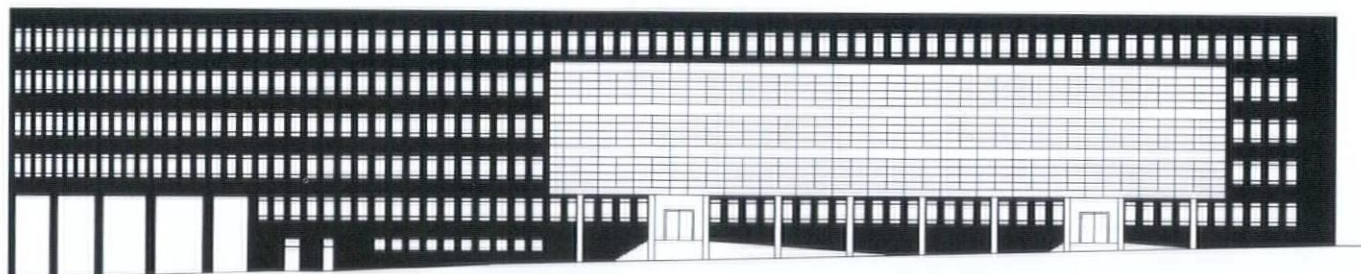


立面図

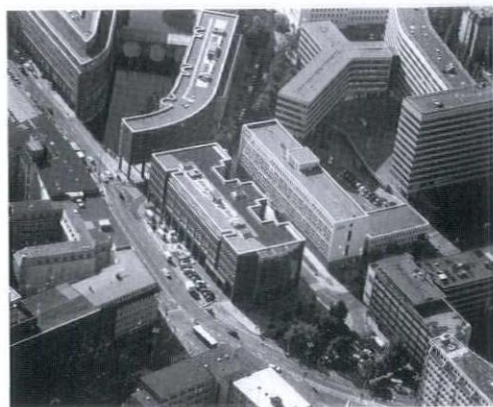


基準階平面図

1階平面図



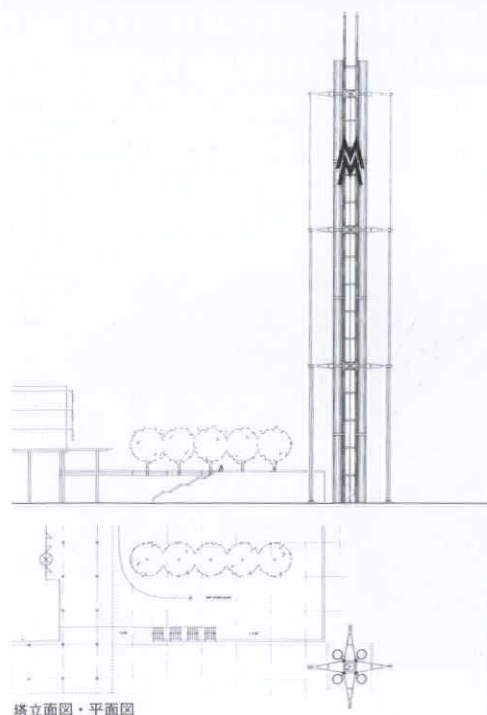
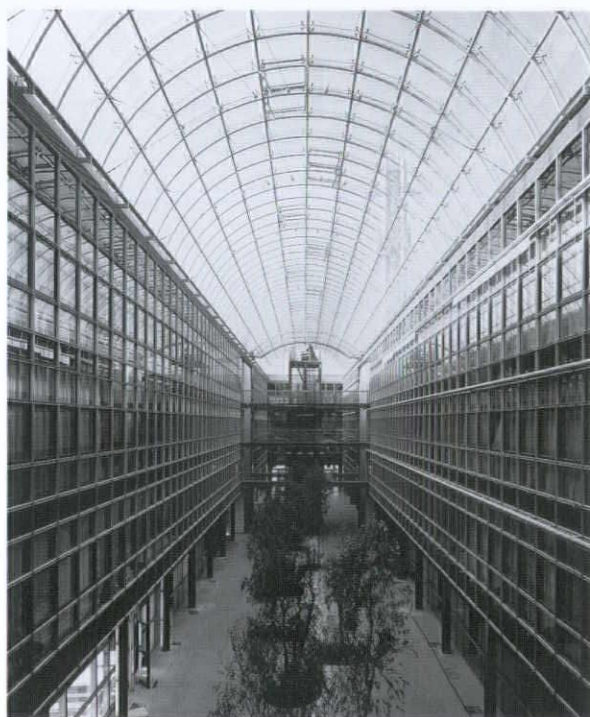
立面図



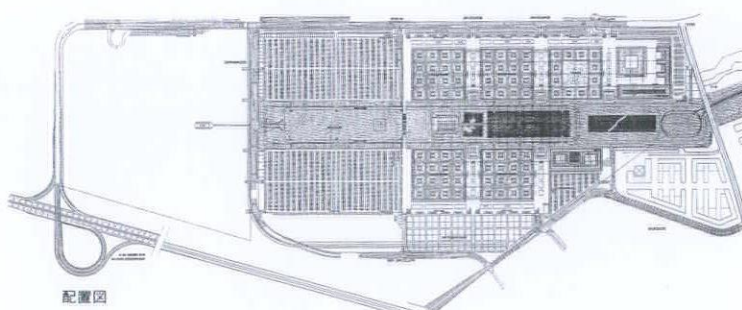
Date of Competition: 1990
 Architect: Meinhard von Gerkan
 Project Leader: Reinhold Niehoff, Kai Voß
 Structural Designer: Büro Dr.Binnewies
 Co-architect: Klaus Staratzke
 Collaborators: Hilke Eustrup, Kai Voß, Antje Lucks, Andreas Perlick, Karin Rohrmann, Klaus Dorn
 Client: Grundstücks-Kommandit, Gesellschaft von Quistorp + Co
 Period of Construction: 1993-1995

ライプツィヒ・メッセ

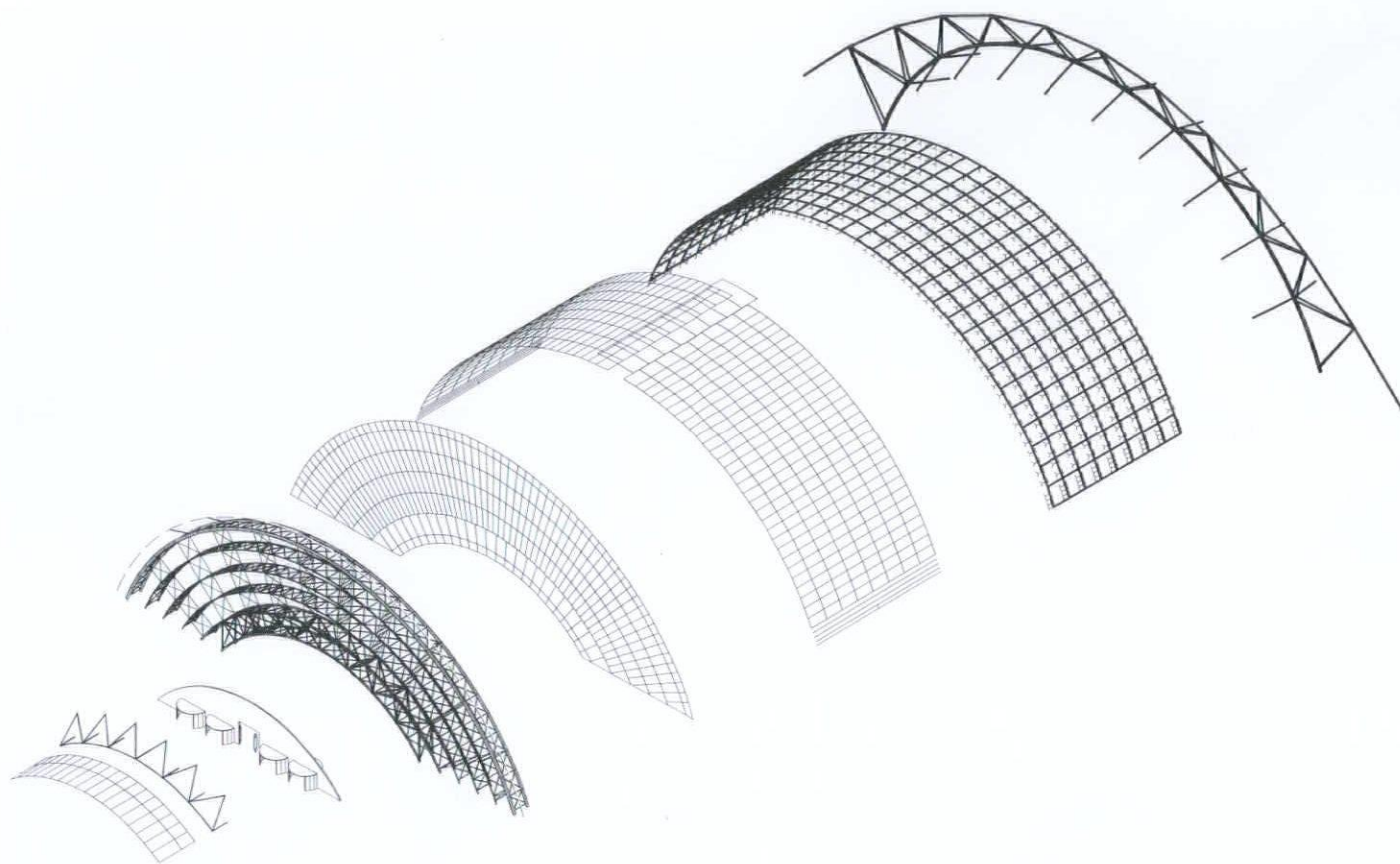
The New Trade Fair, Leipzig, 1996



塔立面図・平面図



配置図

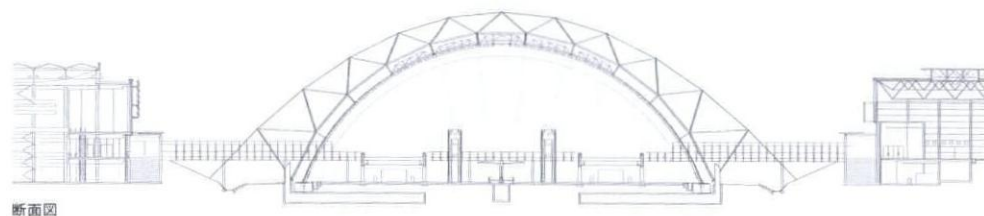
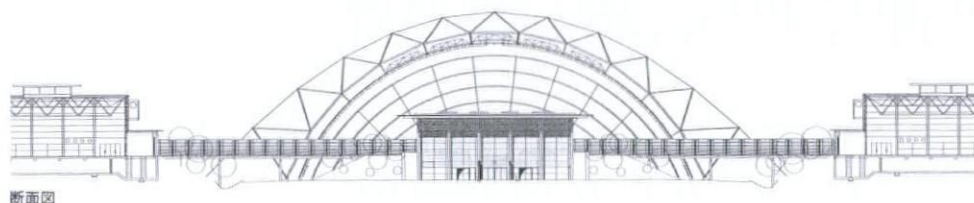
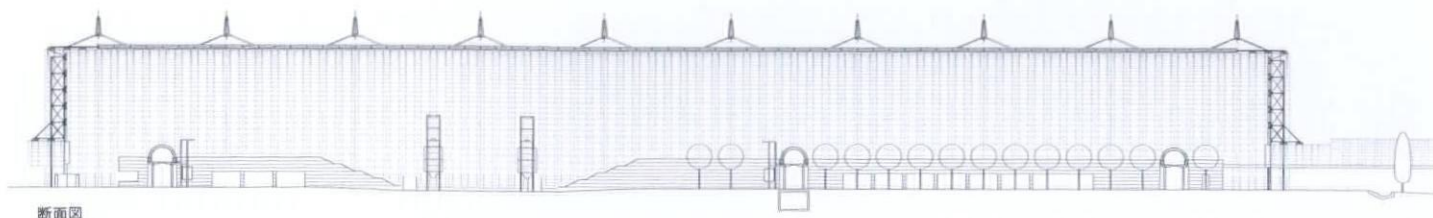


東側の再構成に向けた政策的なパイロット・プロジェクトである。国際設計競技で1等となり、計画(実施)の権限が与えられた。このコンペには18人が招待され、中にはペーニッシュ+パートナー、リチャード・ロジャース・パートナーシップ、OMA-レム・コールハース、ヘントリッヒ・ペシュニグ+パートナー、ストーチ+オイラーズ、ジョーダン+ミューラーらがいた。敷地は飛行場へのルート、鉄道、自動車道、枝道の交差点に位置する。かつて飛行場だった敷地に、現在新しい都市的商業地区が作り出されようとしている。リニア展示公園は長さ約2000m、幅150m、深さ5mの掘削された敷地に建設される。展示エリアを貫き、西方で既存の鉄道駅に、東方で来訪者の駐車場に接続している。建物群と展示公園が全体を構成する。私たちは、かつて見本市都市として隆盛を極めた当時のライブツィヒから、その建築モチーフを導こうとしている。大きな海を反射する建物は「ライブツィヒの戦い」を参照し、大きなヴォールトのガラス屋根は今もなおヨーロッパ最大の規模をもつライブツィヒ駅をモチーフ

としている。ヴォールトのガラスのホールは19世紀の「水晶宮」の直接的な引用であり、公園の中心となっている。長さ約250m、高さ30m、幅80mのヴォールトの原型は、20世紀末のガラス・鉄構造の「最高技術」の質を表している。適所に使われたフレームレスのガラスパネルは、このモニュメンタルな内部空間がもつ物質的な性格を消し去っている。外部のスペースフレームのヴォールトは完全な自家荷重のシェル構造で、風や雪の荷重に対してさらに安定化を図るため、25mごとに引っ張りヴォールトの部材が付加されている。四角形の展示ホールは総面積2万m²で、全館にわたって空調が施され、暗めの展示スタジオとして計画されている。展示ホールへは垂直方向にスライドし、大きく開口するゲートを通してローリーでアクセスする。また展示ホールはスライディングのパーティションにより分割される。コンベンション・センターには会議と発表のためのホールが計画されている。意味ありげな煙突は「鐘塔」に匹敵する高さ80mのランドマークである。その優美な鉄骨フレームは、ガラスのホールに共通す

るもので、曲げモーメントの独創的な構造を視覚化している。その伝統的なエンブレム「MM」は「模範的な展示」を意味する「Muster-Messe」を象徴し、将来「Menschliche Messe」、すなわち「人間的な展示」というデザイン・コンセプトの主題を表すことになるだろう。

The political pilot project for the restructuring in the East. First prize and planning commission (implementation) through international competition, 18 invited participants of whom a few are: Behnisch + Partner, Richard Rogers Partnership, OMA: Rem Koolhaas, Hentrich Petschnigg and Partner, Storch and Ehlers, Jourdan and Müller. The site is located at the intersection of the routes to the airport, railway, motorway and the secondary road system. Here, on the former airfield site, a new urban commercial district has been created. The linear exhibition park is built on an excavated site, of some 2km length, 150m width and 5m



depth, which connects the railway station (existing), to the west, and the visitor's parking, to the east, piercing through the exhibition area. The architecture of the buildings and of the exhibition park form a whole. We have taken up an architectural motif from the heyday of Leipzig, as an exhibition city. The big, reflecting sea refers to the "Völkerschlachtdenkmal", and the large vaulted glass hall construction picks up the motif of the Leipzig railway station, which is still the largest in the whole of Europe. The vaulted glass hall is a direct reference to the "Crystal Palaces" of the 19th century and becomes the heart of the park. The archetypal form of the barrel vault, of some 250m length, by 30m height and some 80m in width, represents the "State of the Art" of glass-steel construction at the end of the 20th century. Frameless glass panels which are held in place at nodal points dematerialize this monumental internal space. The external spaceframe vault is a complete self loading

shell construction, which is further stabilised against wind and snow loadings with additional tie vaults (members), every 25m. The square exhibition halls have a total space of 20,000m² area. They are totally airconditioned and are devised as darker exhibition studios. They can be accessed by lorries through the large vertically sliding gateways, and can be further divided by sliding partition walls. A convention centre provides conference halls for congresses and presentations. The significant chimney tower is an 80m high landmark, comparable to a "campanile". Its elegant steel frame is analogous to the glass hall, which visualises the ingenious structure of sheer and bending moments. Its traditional emblem "MM" stood for "Muster-Messe", which means exemplary exhibition, in the future it is going to represent the Leitmotif of the design concept as "Menschliche Messe" — a humane exhibition.

Date of Competition: 1992

Architect: Volkwin Marg with Hubert Nienhoff

Project Leader: Hubert Nienhoff, Kemal Akay

Structural Designer: Ing.-Büro Polony + Partner, Ing.-Büro Haringer

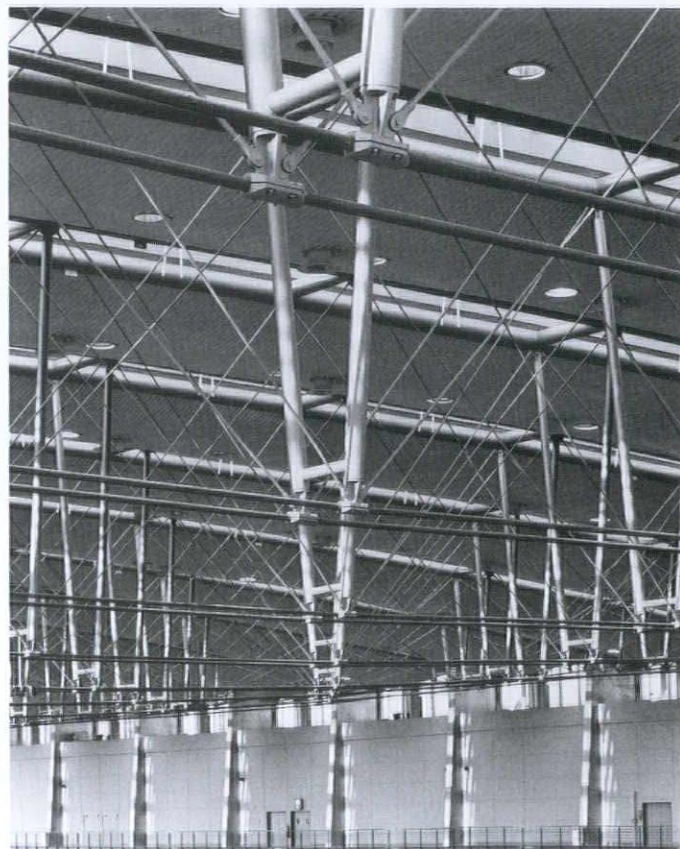
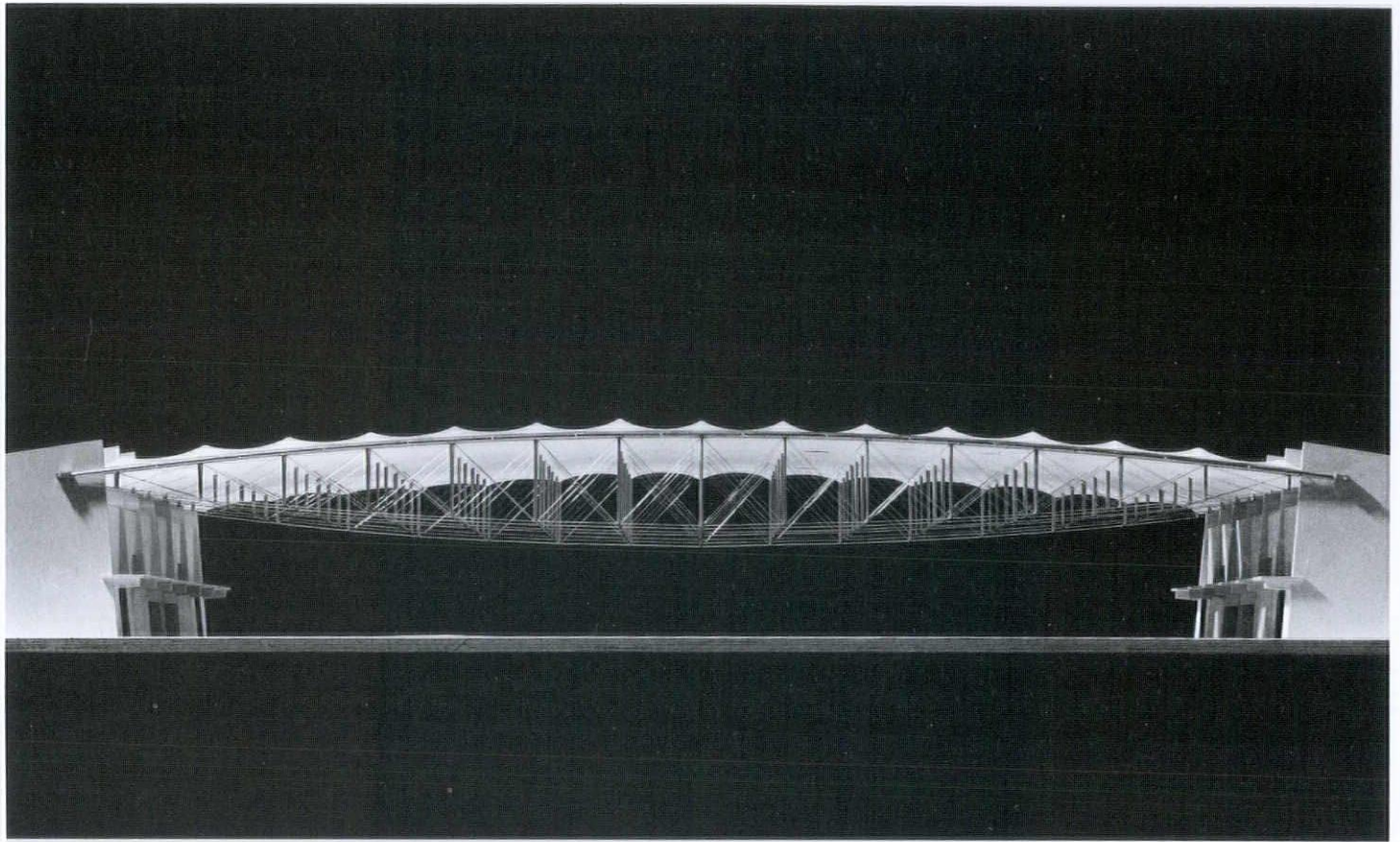
Collaborators: Kemal Akay, Yasmin Balbach, Wolfgang Balbach, Fernanda Barbato, Marco Bartusch, Myrna Bergfeld, Björn Bergfeld, Susane Bern, Heike Breuler, Verena v. d. Brincken, Hubertus v. Dallwitz, Mirjam Danke, Clemens Dost, Wieland Freudiger, Uwe Friedrich, Bernd Gossman, Aristide Hamann, Christian Herenberg, Christina Hasskamp, Hubert Hirsch, Cristian Hoffmann, Angelika Juppieri, Dirk Kahlig, Monika Kaesler, Petra Kauschus, Gabriele Köhn, Jochen Köhn, Ursula Köper, Franz Lensing, Annette Löber, Fulvio Melle, Elisabeth Menne, Michael Pohl, Henning Rambow, Dieter Rösinger, Birgit Roth, Monika Scharrer, Almut Schlüter, Gisbert v. Stülpnagel, Robert Stürer, Beate Sturm, Ulrich Weigel, Reinold Weiten, Armin Wittershagen

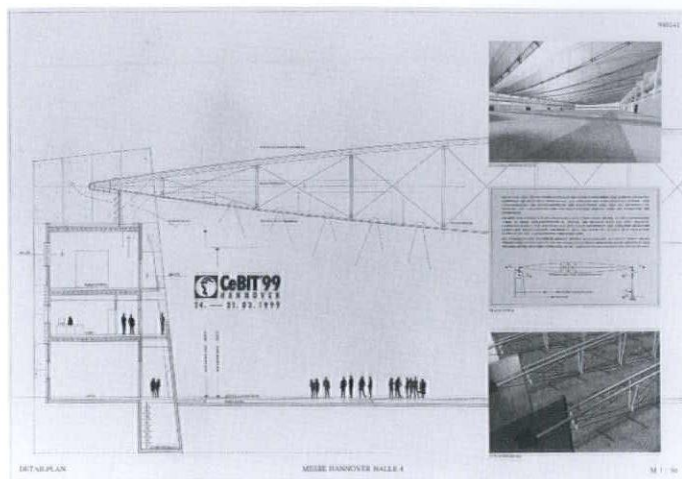
Client: Leipzig Messegesellschaft mbH

Period of Construction: 1993-1995

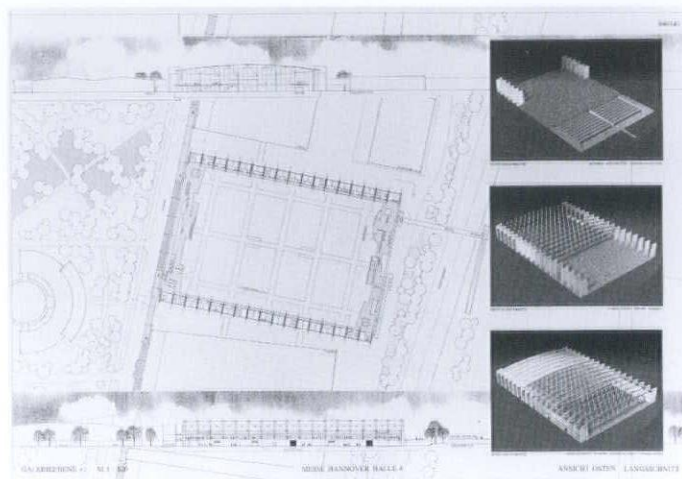
ハノーバー・メッセ

Hanover Fair, Hall4, Hanover, 1996

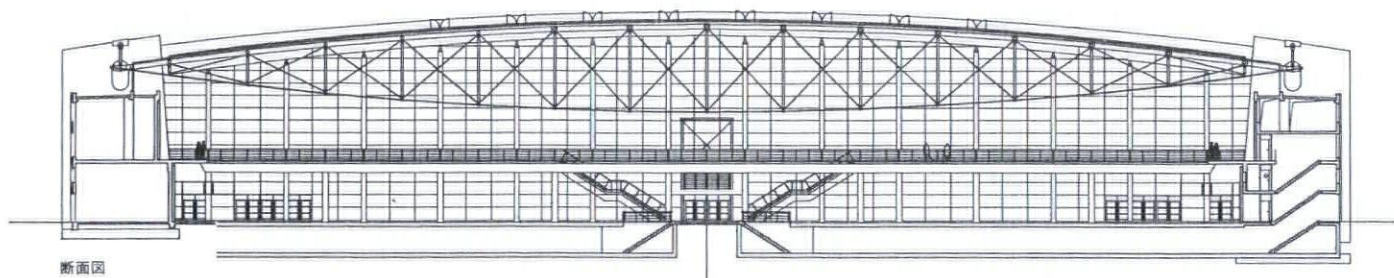




コンペティション・ドローイング：断面詳細図



コンペティション・ドローイング：平面図、断面図



断面図

「全体が無柱、自然光、軽さ」が、平面計画と構造のコンセプトである。185.6m×116mの広さをもつ1層のホールに、波型鉄板の屋根パネルとそれに接合する122mスパンの鉄骨梁18個とを組み合わせた屋根が架けられ、屋根パネルにはトッブライトを支持するため、レンズ形の中空部材が取り付けられている。基礎、支持部材、梁、屋根パネルと段階を追って順次組立られていく。梁の間隔は10.8mである。工場でのプレファブリケーションによって現場での組立時間は最小限に短縮される。ホールの長手方向には開口がなく、短手方向は全面的にガラス張りで視覚的にオープンである。

Totally free of columns, day lighting and lightness characterize the planning and structural conception. The single-storey hall covering an area of 185.6m × 116m is roofed by a combination of eighteen 122m span steel beams linked by corrugated steel roof panels with lens-shaped accessible hollow structural elements supporting roof light sheds. Assembly was completed in stages involving the phased erection of foundations, support elements, girders, roof panels where the axis intervals of the girders were 10.8m. Factory prefabrication allow the site assembly time to be reduced to a minimum. Whilst the longitudinal sides of the hall are without openings, the shorter sides are optically opened and fully glazed.

Date of Competition: 1993

Main Function: hall

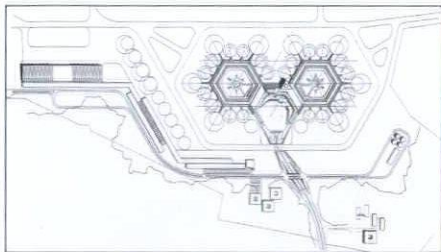
Architect: Volkwin Marg

Project Leader: Klaus Staratzke

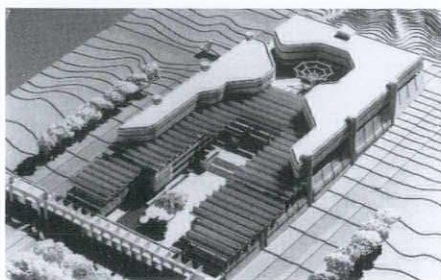
Structural Designer: Schlaich, Bergerman + Partner

Collaborators: Reiner Schröder, Marc Ziemons, Susanne Winter, Ulrich Heiwolt, Dirk Vollrath, Sven Plieninger

山下昌彦



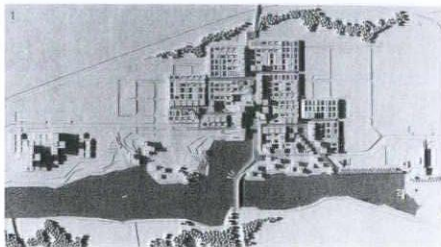
ベルリン・テーゲル空港 (1965年、コンペ1位) マスタープラン



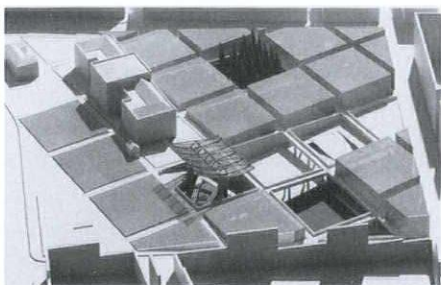
イラン・パビリオン (1978年、コンペ1位)



ハンブルグ・ハンザフィアテル (1980年部分完成、87年竣工)



ブレーメン大学 (1967年)



アテネ・アクロポリス博物館 (1990年、コンペ2位)

1. コンペの帝王

ゲルカン・マルク事務所(GMP)は設立されて30年たった。私が在籍したのは1981~83年、ゲルカンもマルクもまだ40代だったし、所員数も100人足らずだった。今や2人共60歳を越え、GMPはスタッフ200人の大事務所である。

ゲルカンとマルクは共にベルリン工科大とブラウンシュヴァイク工科大で学んだ同級生である。ドイツでは大卒資格はディプロームと呼ばれ、これを得れば一人前の建築家となる。二人は30歳前にこれを取得したが、これはドイツでは極めて普通である。普通でないのは、卒業したと同時にベルリンのテーゲル空港のコンペで1位になったこと(1965年)である。ゲルカンの卒業設計「空港」がそのまま実現化されることになったのだが、さすがに審査員の間からも実施設計の能力を心配する声が出て、異例のバックアップ事務所付きの当選となった。

ドイツでは官民間問わず多くのプロジェクトの設計者がコンペで決められる。そういう中でゲルカンは以後の30年間で、ドイツ国内外のコンペで約250回入賞し、その内100回以上1位になった。「コンペの帝王」と言ってい。今私の前に何と5冊の分厚いGMPの作品集がある。膨大な数のプロジェクトであるが、そのほとんどはコンペによって勝ち取られたものである。

ゲルカンは1974年以来、母校ブラウンシュヴァイク工科大の教授を務めており、コンペは大学の研究室で行うことが多い。マルクは1986年ゴットフリート・ベームの後を継いでアーヘン工科大の教授になった。コンペの多くはゲルカンが担当している。マルクがコンペを担当することもあるが、その割合は恐らく2割位であろう。

2. 場所に力がある

私事で誠に恐縮だが、平成元年に設立した私の事務所の名前はGL建築設計と言う。このGLはラテン語のgenius lociの頭文字をとったものであり、日本ではしばしば地霊と訳されている。「場所に力がある」というような意味に使う。土地についての神様の言葉に注意深く耳を傾けないと建築がすぐに滅びてしまう、という伝承に基づいている。ゲルカンはしば

しばこの言葉を口にしたり、文章に書いたりしていた。そのため耳と眼に焼き付いてしまい、そのまま私のオフィスのニックネームに使用させてもらったのである。

この言葉に彼の建築に関する考え方が如実に表われているように思う。「場所」は人が住んだり使ったりすることにより活かされる。建築は人間のためにあり、それ自体が自立した存在であるなどということは有り得ない。

ゲルト・ケーラー(ブラウンシュヴァイク工科大教授)は次のように書いている。「マリオ・ボッタのようにどこに在っても彼の作品と解るような芸術的作品を創り出す建築家もいるし、エーロ・サーリネンのように、個々の作品がユニークで変化に富んでいるにもかかわらず、それぞれがあまりに異なっているためにとても一人の作家によっているとは思われないような作品群を創り出す建築家もいる。建築家の名前を第一に考えるか、場所や課題の内容を重視するかによって、異なったものが引き出されることになるのであろう。私はサーリネンの道、即ちゲルカンの道こそ都市の目指す目標ではないかと思う」(a+u 8707英文より抄訳)

3. 都市と建築

我が国の近代建築史を振り返ってみると、欧米から建築技術は輸入したものの、都市という仕組みについてはほとんど関心を示して来なかったと言って良いだろう。そんな余裕がなかったし、ヨーロッパ的な都市というものがそもそも日本人の感性に馴染まない所も多少あるだろう。

ところがそうこうしているうちに街には疑似ヨーロッパ建築が溢れてしまった。都市に建築する際のマナーについて学ぶことなく、表層だけを模倣して建て込んでしまったのである。ヨーロッパの見識に従えば、都市はそのほとんど全ての物が「公共の財産」であり、従ってそこでは私権は著しく制限されるべきである、ということになる。自分の敷地ならほとんど何でも許されてしまう今の日本の間違いはここにある。

都市では公共の論理が優先されるべきである。即ち、私的な建物を設計するにあたって、歴史文化等様々な制約や異なったレベル

の上位計画との調整が必要になってくる。日本人に最も分かりにくいのは計画を「重層」させるという考え方であろう。北ヨーロッパでは様々なスケールのコンペも行うし、違う建築家の計画の上に知的な作業を平気で積み重ねて行く。アムステルダムでベルラーへの全体計画の上にデ・クラークが建物を建て込んで行くように。そこでは建築家はマナーとしてある限定された役割をキチンと果たすことが要求される。

ゲルカンはまず、こうした複雑な前提条件を整理し単純化することが天才的に旨い。そして次に、その極めて限定された条件の中で、できるだけ都市に対して建築を開こうとする。市民に開放された玄関ホールや広場、パサージュ等を提案することが好きだ。彼はあまりに熱心にそれをやりすぎるので、時として施主の不興を買い、プロジェクトから降ろされたこともある程である。しかし実はこの「開かれた建築」という考え方こそがGMPの成功神話のポイントなのである。

4. 3つのプロジェクト

GMPは最初の15年において、3つの特に大きな意味を持つプロジェクトに遭遇した。テール空港、パーレビ図書館(1978年)、ハンザ・フィアテル(80年部分完成87年完成)である。

空港プロジェクトから始めたことが、GMPのその後の活動の方向を特徴付けたと言っても良いのではないと思う。いかに複雑な与条件を整理し、システムティックに統合し、使いやすい公共空間を作り上げるかと言うことを徹底的に学ぶ機会となったからである。テールの特徴は、六角形平面の中央がヴォイドになっているターミナルビルの提案である。内側は環状道路に沿って駐車場が設けられている。カーブサイドで車を降りた人がターミナルを通してエアサイドへ出て飛行機に乗るまで、歩く距離はたった40mである。駐車場は、増設可能。無駄がなく、かつ十分余裕があって、将来の拡張や変化に応えられるような計画である。

こういう合理的な考え方により、GMPはその後ドイツ国内のコンペで勝ち続ける。当初は空港を始めとしてスポーツ・センター、郊外オフィス・センター等比較的周辺条件が

緩いものを得意とした。

GMPが世界的に注目されたのは、1978年に行われたイランのパーレビ国立図書館の国際コンペだった。ゲルカンの案は、601の出品作中第1位(実施は中止)になった。

評価されたのは、コンセプトである。ゲルカンは、大都市テヘランの一街区に対し、ほとんどその輪郭線に沿った直方体の箱を用意する。この箱は天然石の基壇部(主に書庫など)とハーフミラーガラスの上部(読書室など)により構成されていた。これは都市の中で目立ちすぎないことを意図したスカイラインへの応答であった。

一方、利用者を含めた人間の動線は、直方体からえぐり取られた不整形な内庭空間に集約されている。この中庭は隣接する公園から建物に向かって段々に上がっていくレベル構成になっており(高低差約9m)ここから図書館のあらゆる部門にダイレクトにアプローチできるようになっている。この中庭を北へ登りつめた最上階は、プラザになっており、ここから西側の街区へブリッジで渡っていけるようになっている。つまり中庭は、図書館を訪れた人だけでなく、ここを通過するだけの人も考慮に入れた公共空間なのである。コンセプトをまとめると、都市のコンテキストを守りながら部分的に新しいエピソードを付け加えたということである。GMPはこの計画案において、空港等とは明らかに別な新しい局面を切り開いた。

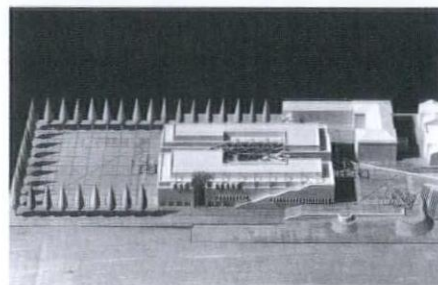
次にGMPが大きな注目を浴びたのは、ハンブルクのハンザ・フィアテルだった。このプロジェクトは、都心の歯抜けになった再開発街区に、店舗、オフィス、住宅、ホテル、駐車場等々の複合建築を建てるという複雑なもので、その上市の都市計画によって敷地内の建築物を保存することが義務付けられていた。

GMPは実にうまく山積した難題をさばいた。街区の外に向かっては都市の修理ということ以上の出過ぎたことは一切行わず、ガラス屋根のアーケードを内側に通し、非常に魅力的な都市の一角を創り出した。歴史的な遺産に囲まれた所でも旨くやれることを実証して見せたのである。

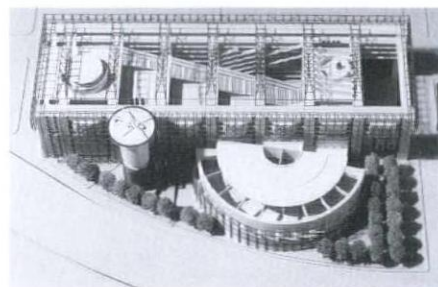
ハンザ・フィアテルにおいてももうひとつ特筆すべき点は、それまでコンセプトのうちは



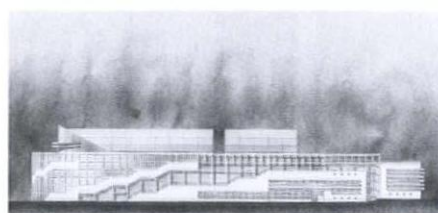
シュトゥットガルト空港 (1980年、コンペ1位、90年竣工)



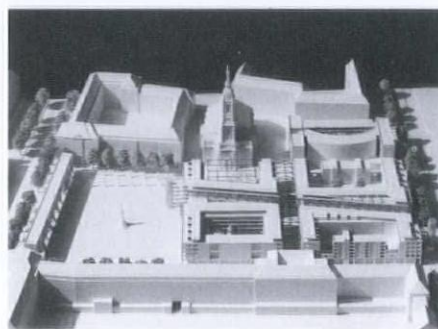
ゲッティンゲン大学図書館 (1985年、コンペ5位)



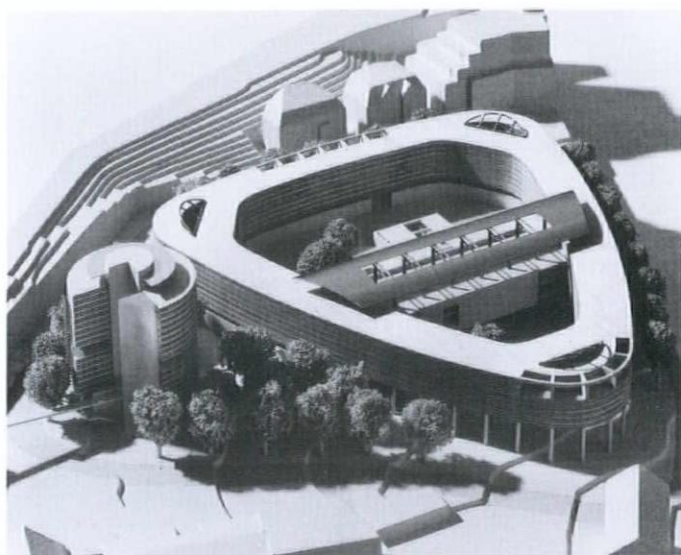
東京国際フォーラム (1989年、コンペ応募案)



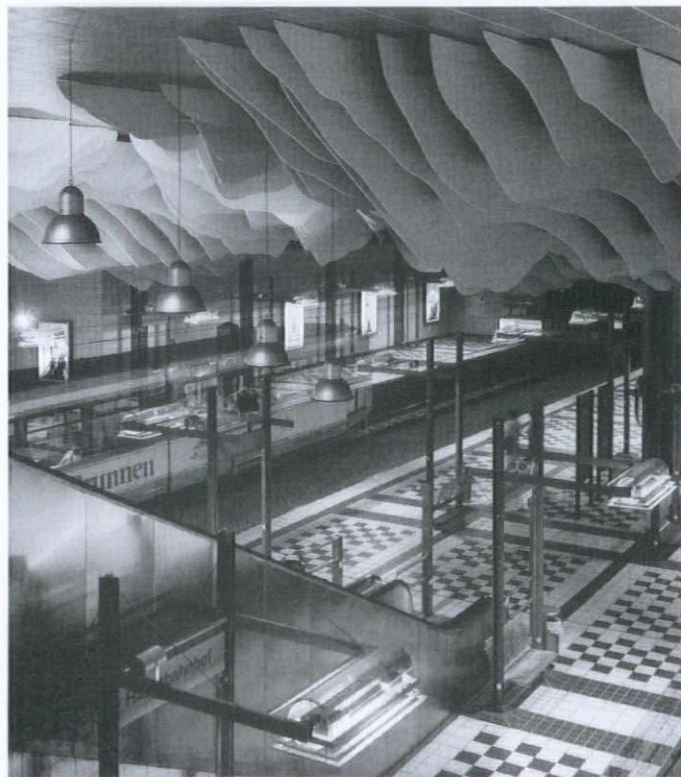
ビーレフェルト市立ホール (1980年、コンペ1位、90年竣工)



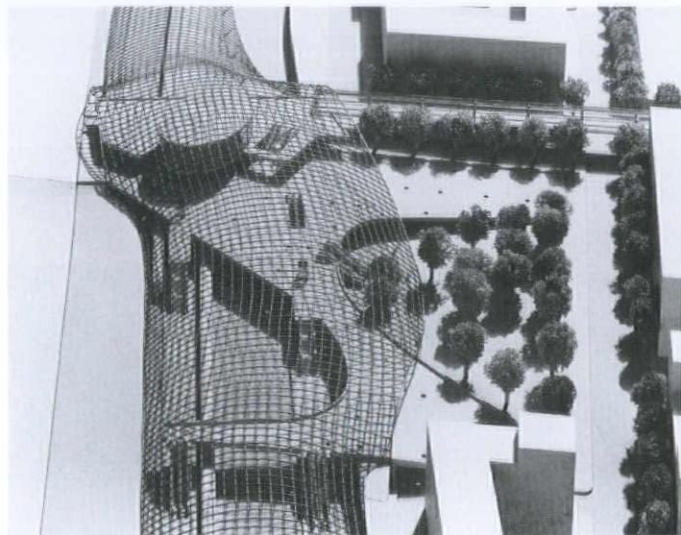
ドレスデン・アルトマルクト (1991年、コンペ1位)



オッセル警察本部 (1993年、コンペ2位)。従来に比べるとかなり自由で、柔らかな表現が現れ始めている



ビーレフェルト中央駅 (1991年竣工)。天井の雲をモチーフにした造形は人の流れを導く。ホーム階の他の駅と比較したときのアイデンティティと、上階との違いを示した



EXPO 2000 + メッセ・ターミナル (1995年、コンペ5位)

良いが、実施になるとどこか甘かったデザイン的なツメが、ここでは飛躍的に向上したことである。ホラインもパウヴェルト誌で「これはGMPのこれまでの建物の中で一番良い出来だ」と述べている (1982年)。建築家として不動の地位を築いた記念すべきプロジェクトと言って良いだろう。

5. 3つのクライテリア

GMPは最初の15年位で、3つの異なるクライテリアで各々のデザイン・メソッドを開発した。その後の15年はその発展ないしは洗練と見る事が可能と思われる。

クライテリア1: テーゲルに象徴される、ほとんど何もないところに新しくシステムが創り出される場合。グリッド・パターンへの偏愛が目立つ。プレーメン大学のコンペ案に既に現れており、最近ではアテネのアクロポリス博物館の2位案にも用いられている。

このクライテリアで多用されるもうひとつの手法は、空中に浮遊する屋根である。これはキール大学スポーツセンターで始まり、シュトゥットガルト空港のツリーストラクチュアに結晶した。ちなみにこのターミナルビルはこのクライテリアの傑作と言って良いだろう。下部に開放された内部空間を実現するために用いられる「浮遊する屋根」はGMPのメイン・テーマの一つとなった。

クライテリア2: パーレビの様に、都市に新しいコンテクストを付け加える場合。GMPが多用するのは、直方体とその内部を挟ったヴォイド空間である。パーレビ図書館の中庭はボン国立美術館でより美しくまとめ上げられた。ゲルカンが愛着を感じているゲッティンゲン大学図書館コンペ5位案では、スリットがキャンパスへのアプローチの上に置かれておりエントランス・ホールを兼ねている。

東京国際フォーラム・コンペでは直方体にインドア・プラザを挟み、そこに上昇して行く階段を取り付けることにより、都市に対して建物を開くことを提案している。リューベックの音楽・会議ホールはこのクライテリアで最も完成度の高い作品である。

立面の格子と側面に張り付く直階段もこのクライテリアで良く使われる手法である。前者は視覚的に、後者は導線的にという違いはあるものの、共に建築の中に都市を導入しようとする意志の表れではないかと私は思う。ビーレフェルト市立ホールでは周辺の公園的な環境との調和を図るために、内部と外部の相互貫入の手法としてこの格子と直階段が用いられている。

クライテリア3: ハンザ・フィアテルの様に、都市のシステムに強く束縛され、都市の修理

という形で課題が現われる場合。しばしば使われるのはパサージュというガラス屋根のかけられた公共街路である。ハンザ・フィアテルに始まりグルーナー・ウント・ヤール出版社社屋に発展し、最近ではドレスデンのアルトマルクトに現れている。

6. 材料とディテール

煉瓦はGMPの作品によく現れてくるが、これは北ドイツの都市では使用が奨励されているからである。GMPは本拠をハンブルクに置いている。この都市の建築に大きな影響を与えた人物としては、市の建築主監だったシューマッハーがいる。1917年に出版された『今日の煉瓦建築のあり方』によれば、煉瓦は正直さ、真面目さ、親密さ、ドイツ気質を示すものである。彼の見解はGMPにおいていまだに有効である。

そうは言ってもGMPは、1985年頃から、材料の使い方とディテールの組み立て方において、明らかに変化して来ている部分がある。ガラスと金属への偏愛、手摺りや底などのディテールなどへののめり込み等である。材料の組み合わせ方にもある洗練が感じられるようになった。

慎重深くではあるが、それが許される場所では出来るだけ「軽く」作ろうという意志を感じる。ゲルカンはヨットが趣味で、本社エルプショセー139では、そのアナロジーを読み取ることができる。浮遊する屋根も最近のプロジェクトになると、極限に近いほど軽い。

7. 幾何学的形態

ゲルカンが一貫してよく使うキー・ワードのひとつに「幾何学的形態」がある。すべてを単純化して幾何学の法則に従うことが建築家の使命である、と彼は繰り返して主張している。「自分勝手に創造力や彫刻的刺激によって建築形態を生み出したことはほとんどない」(SD7904)。彼が常時使用する形態がキャブラリーは驚く程少ない。

直方体、格子、直階段、グリッドパターンなど非常に固い線を駆使する。1986年以降はそれに円筒形が加わる。最初は直方体との組み合わせの中で、補助的なエレメントとして、次第に独立した単体の要素として用いられるようになった。ハンブルク・エアポート・センター、シュトゥットガルト・エアロ・シティなど、未来的な計画にシリンドラーが頻繁に使われている。

8. ドイツ的合理主義の彼方へ

19世紀末のムテジウスの工芸運動以降の100年を概観してみると、ドイツでは常に浪漫主義

的な傾向と合理主義的な傾向とが相反したり入り混じったりしながら現れて来ていることが解る。T. フィッシャーとその弟子B. タウト、D. ペーム、メンデルゾーン等のみならず、ペーレンス、シューマッハー、ベルツィヒ等に至るまで、浪漫的造形感情と新しい材料・技術の実験の共存は1人の建築家の中でも当たり前のことであった。

グロピウスでさえバウハウス設立当時はずいぶんタウトと極めて近い表現主義的傾向を持っていた。1923年に彼は突然方向転換し、著書『国際建築』で、基本形態に還元された要素を機能によって結びつけるという建築の作り方を提案し、即物的な直線による建築表現に移ってゆく。彼によって確立されたバウハウス様式は、ノイエ・ザッハリッヒカイトを経て、ミースの純粹空間的な手法へつながってゆく。

ナチの時代第二次大戦を経てグロピウスとミースはアメリカへ去り、戦前からの泰斗としてはほとんどただ1人ハンス・シャロウンがベルリンに残った。

GMPは、明らかにグロピウス・ミースの延長線上にあり、少なくとも大きな骨格としては表現主義や浪漫主義の影響下にはないように見える。しかし厳然としてこうした傾向と対極にあるかと言えば、部分的なシンパシーの様なものも感じるのである。特に最近の作品で、時としてそうした印象を受ける。ゲルカン自身は否定しているが、ビーレフェルト中央駅やシュトゥットガルト空港のインテリアは、控え目な表現的デザインの発現である、と私は思う。ハンブルク空港駐車場ビルやエルプショセー139のシリンドラーの原型は表現主義者O. バルトニクのアウフエアシュテーウク教会なのかもしれないなどとさえ思ってしまう。単なる合理主義から脱出する意志ありと言うべきであろうか。

9. 終わりに

GMPがひとつだけ課題を抱えているとすれば、ゲルカンを頂点とするピラミッド構造の中で、実施段階での彼へのフィードバックが少なすぎるのではないかと私は思う。出来上がる建物を見てみると、最初の案の美しさと若干印象が異なる場合があることは否めない。彼はブラウンシュヴァイクで教えながら、コンペ案を練り、理論構築を行う。私が在籍していた頃は、忙しいゲルカンはよく所員が帰った後やってきて、各担当者の描きかけの図面の上にトレペを載せて夜遅くまでスケッチしていた。所員はなかなか彼と接する機会が無いというのが実情であった。

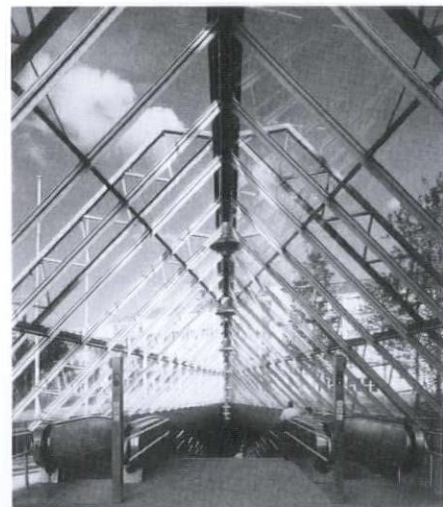
数年前に出来たばかりの本社エルプショセ

ー139を訪ねたが、ゲルカンの本格的に関与したこの建物は彼らしい鋭いディテールに包まれていた。200人はやはり多すぎる様な気がする。ゲルカンの目が行き届かない分だけ、凡庸な作品がどうしても増える。

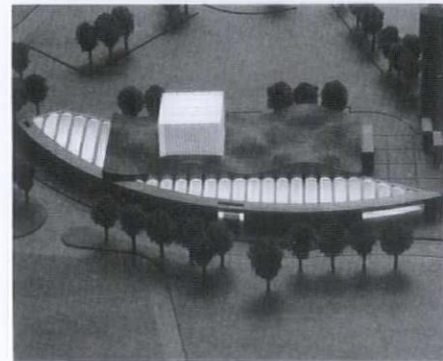
この10年間で実に「旨く」なったGMPに、私としてはもうひとつ上の「空間としての深み」のようなものをつい期待してしまう。そろそろ少々艶っぽい所が出てきても良い様な気がするのである。そういう意味では最近の幾つかのコンペ案には単なる合理的な幾何学的秩序を超えた重みまで射程に入れた空間の提案を読み取ることが出来る様に思う。

戦後のドイツ建築界は活気がないとよく言われている。ゴットフリート・ペームやO. M. ウンガースらの活躍はあるものの、戦前とは比べようもない。ゲルカンもマルクもまだ若い。ドイツ建築界のリーダーとして、是非、更に新しい境地を切り開いて欲しいものだと思う。

●やました・まさひこ／建築家、山下昌彦
GL建築設計代表



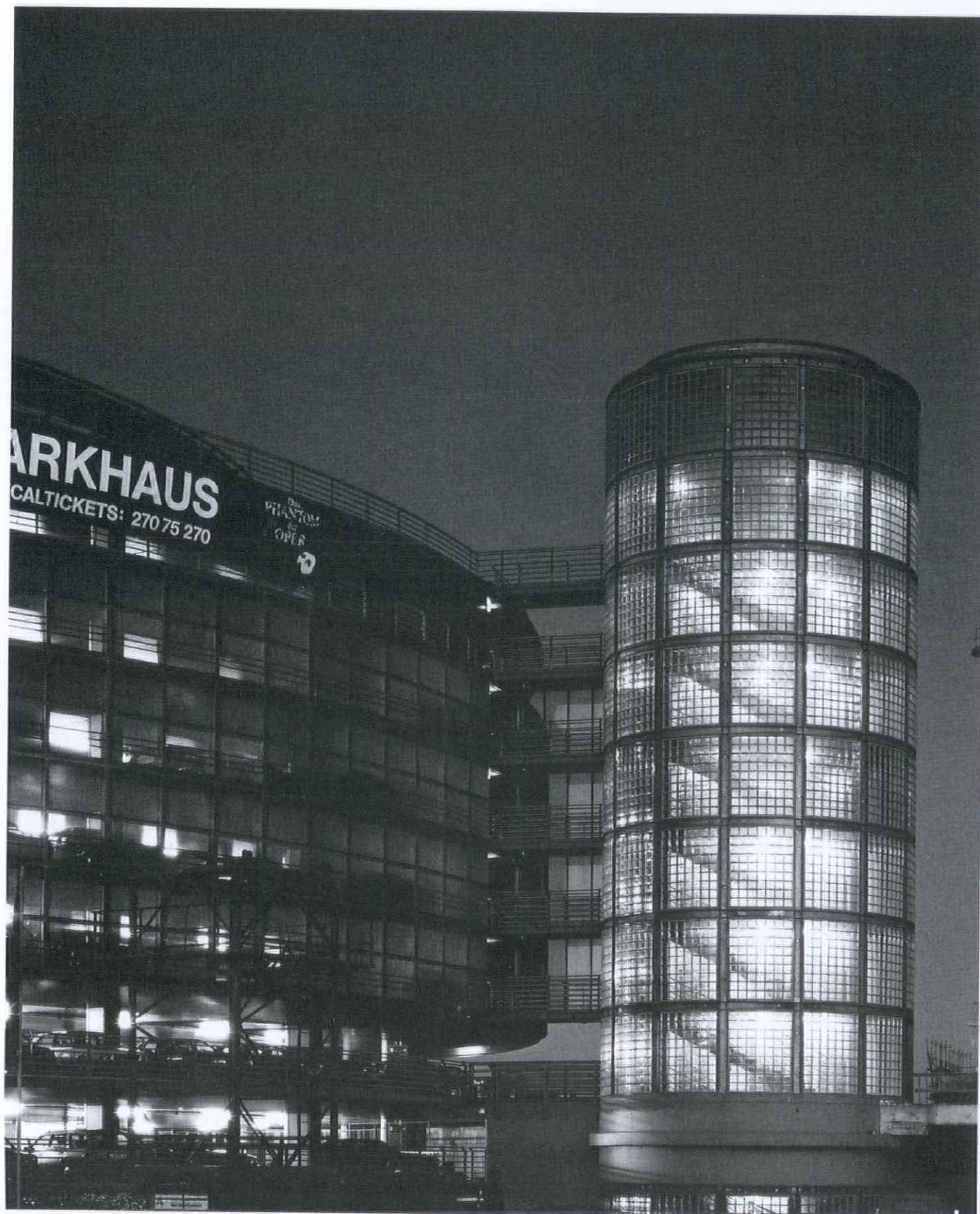
ビーレフェルト中央駅（1991年竣工）。公共空間において非常に開放されたスペースを実現

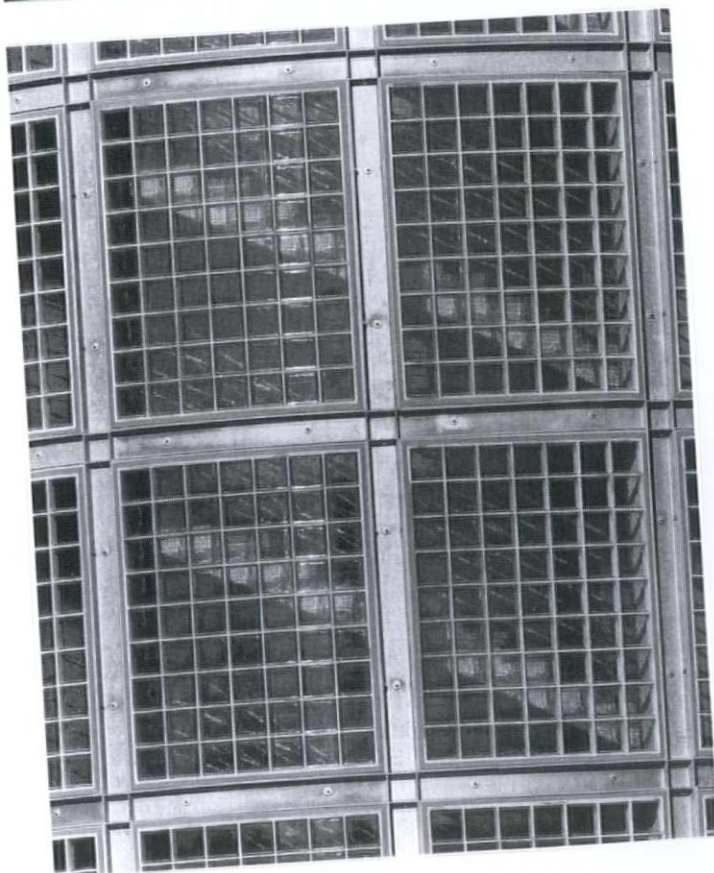
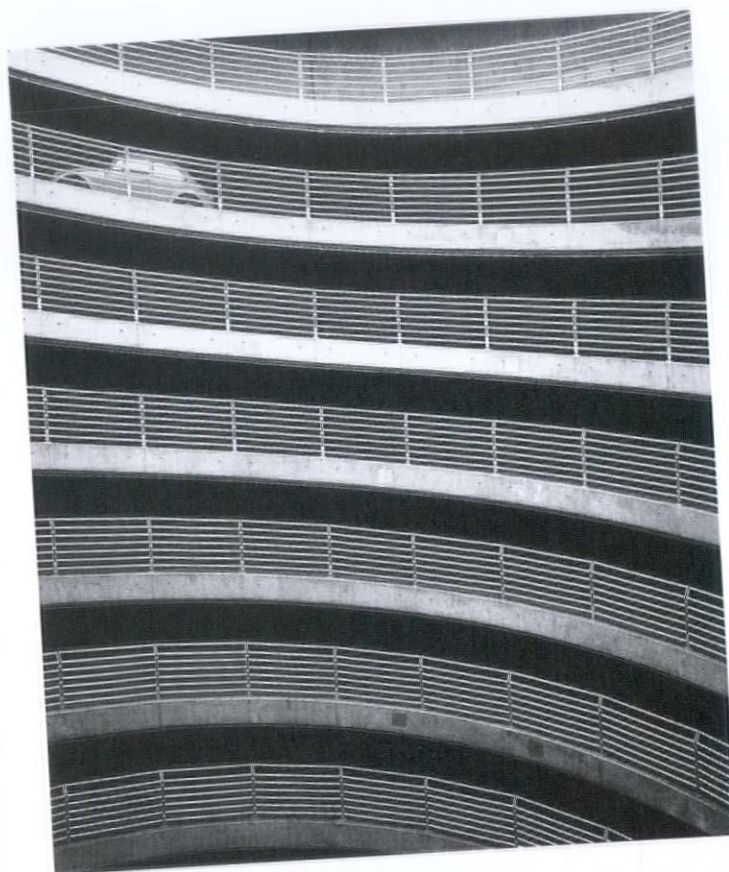
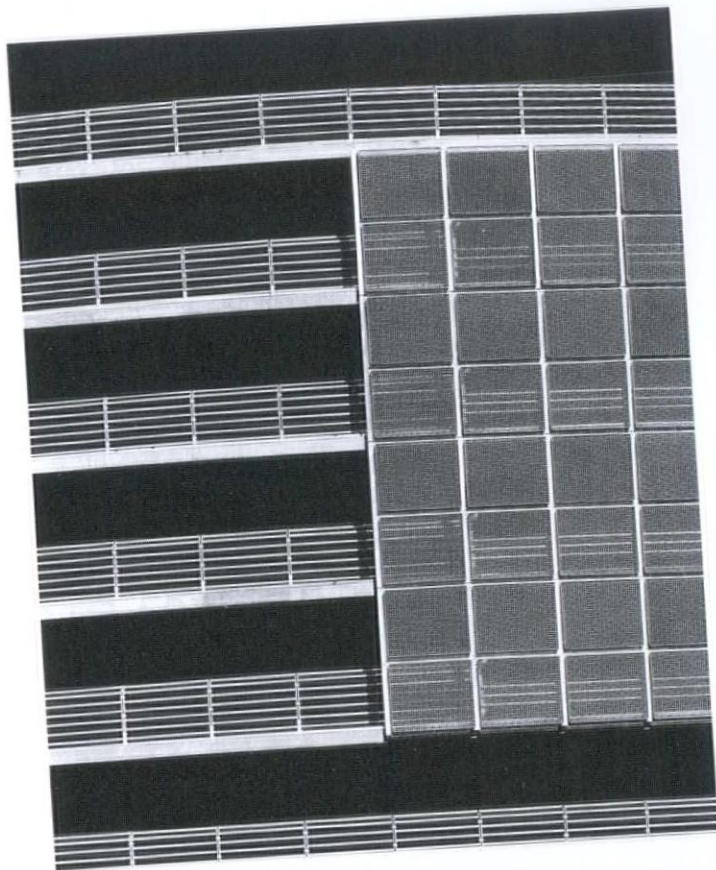


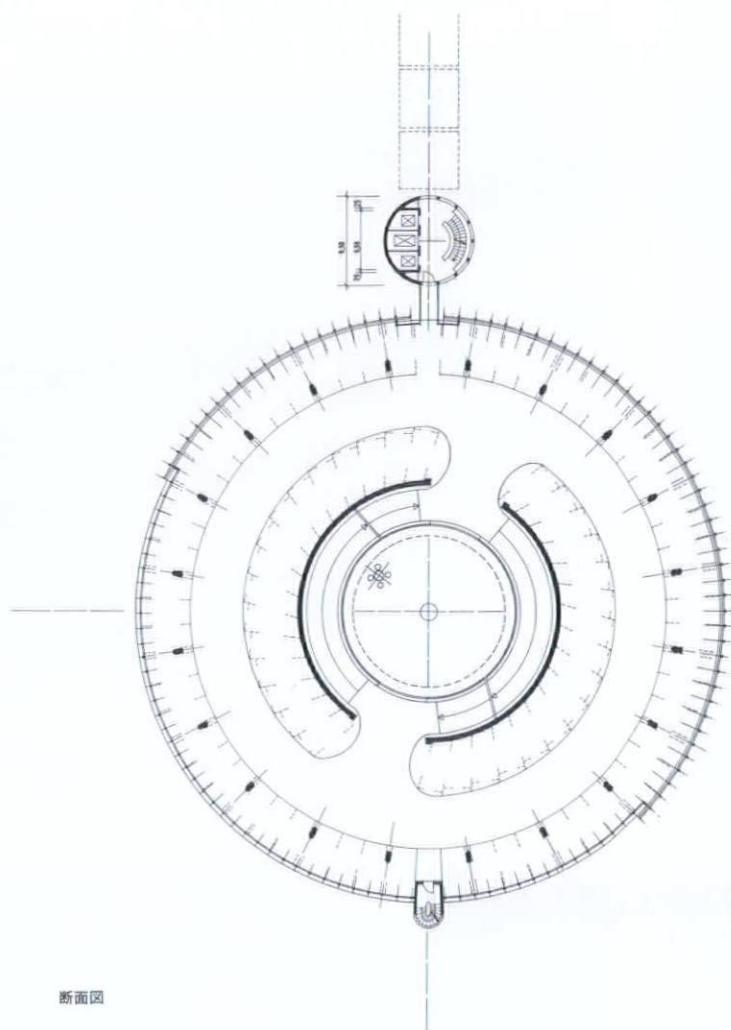
ギュータースロー市立劇場（1994年、コンペ佳作）。単なる幾何学的秩序だけに留まっていない

ハンブルグ空港駐車場

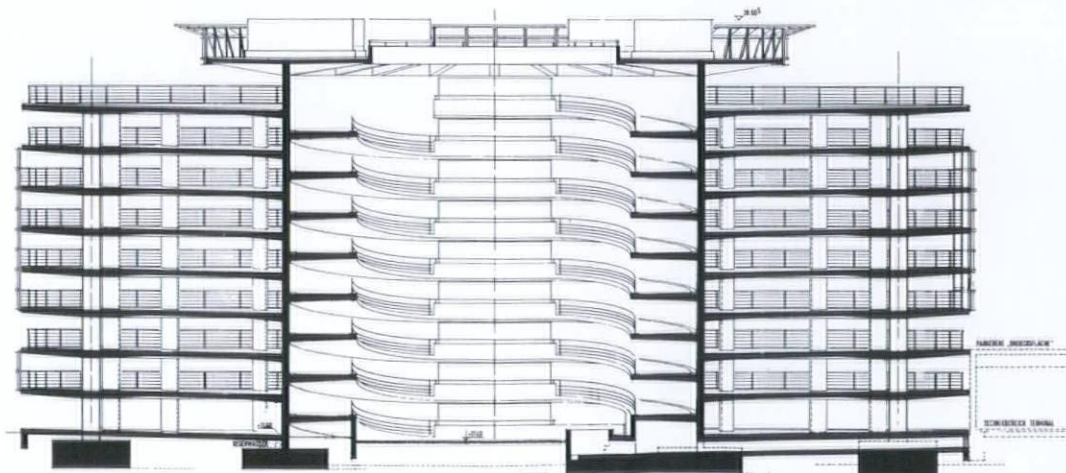
Multi-storey Car Park, Hamburg Airport, 1990







断面図



断面図

空港は用途の異なるさまざまな建物やエリアの集合体であり、その中でこの駐車場ビルの位置や外形のデザインは、全体の要となっている。

駐車場ビルそのものは新しい出発ターミナル用施設の一部で、9層の駐車スペースは円形のアクセス車路の外周に約800台の車両を収容できる。各階は中心部をそれぞれ上行き・下行きに通る2本の螺旋状ランプでつながっており、コントロール・システムによって交通量が規制できるようになっている。内部は出入口での交差を除き、全館一方通行である。

乗客用のアクセス歩道はターミナル予定地とは反対側の北側にあり、エレベータつきの独立した階段塔からガラス張りのブリッジが各階につながっている。反対の南側にも、もうひとつ階段が設けられている。駐車場最上階のさらに上にはひとまわり小さい円形の階があり、ターミナル全体の冷却設備がここに収められている。

一番の特徴である幾何学的な外形以外にも、ここには、デザインにもうひとつ形態的要素が込められている。すなわちスチール製グリッドの「スクリーン」による各階の分割で、これは一部を除いた全面に設けられている。これによって遠くからでも全体の分節が強調されると共に、屋内からは外を眺めることができ、換気も確保される。

ただし全体の軽量化と建物の本質を強調するために、このグリッドは出入口の階と駐車場最上階の2階分については省略されている。冷却設備を収めた機械室階も、設備類を隠すためと全体としての巨大な円筒形の分節を完成させるために、同様のファサードとなっている。

構造はRCで円板状の駐車用デッキは直径約61mである。屋根は平屋根で、厚さ45cmから26cmまで漸減している。下向きの押圧力は、外側にリング状に並ぶ20の支点（直径15cm×120cm）で受けており、内部は円筒状の壁（厚さ45cm）で増強されている。車道用ランプは、RC製の円筒の内側に片持ちに張り出しており、厚さは根元で45cm、端部で26cmとなっている。



Because of its position and form, the car park acts as a key junction and turning point between the various types of building and areas of use at the airport.

It is an integral part of the new departure terminal. It will have nine parking levels with a total of about 800 parking spaces arranged around a ring-shaped access driveway. The levels are reached via two spindle-shaped ramps in the middle of the circle, taking ascending and descending vehicles in opposite directions. Each level can be regulated by the traffic control system. On the ramps and the parking floors traffic is one-way, and the only intersections are at the entrances and exits.

Pedestrian access is on the north side, opposite the future terminal and uses a separate tower stairway with lifts. The tower is linked to the multi-storey car park by light bridges. The second stairway is on the opposite, southern

side of the car park. Above the top parking level is another storey, circular in shape and set back, which contains the cooling equipment for the terminal.

Besides the dominant geometrical shape, another essential formal element in the design of the car park is the splitting up of the various levels by a "screen" consisting of a steel grid placed in front of part of them. This permits an outside view and ensures ventilation while providing accentuated articulation when seen from a distance.

The grid has been omitted on the entrance and exit levels and on the top two parking levels to make the whole building lighter and to emphasise the principle of the structure. The recessed technical storey with the cooling equipment has a similar façade in order to conceal the technical equipment from outside and to provide articulation for its large cylindri-

cal shape.

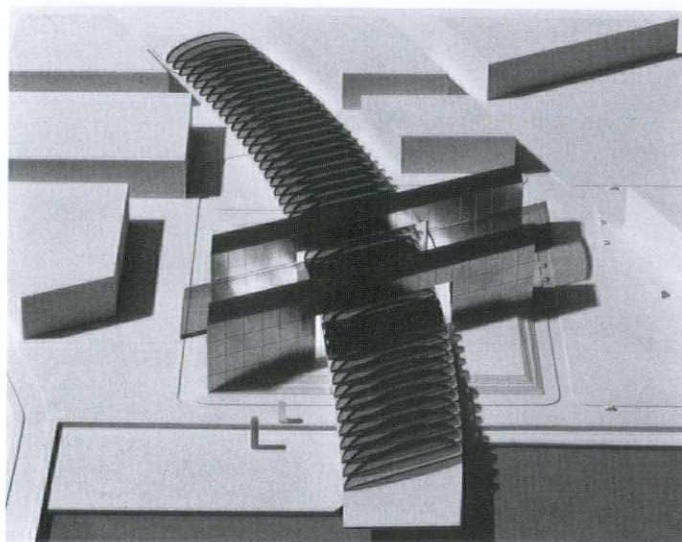
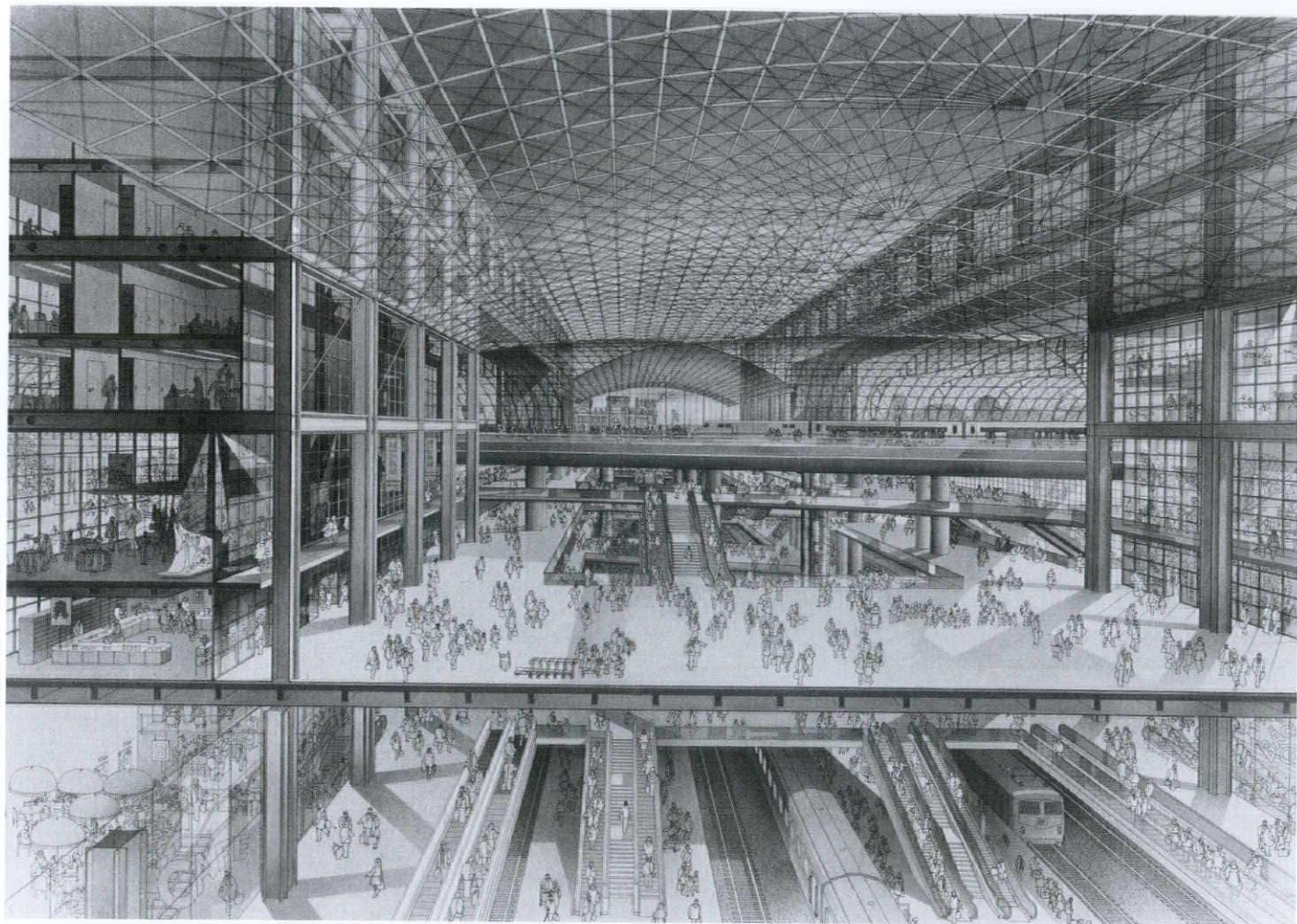
The whole building is in reinforced concrete, with plate-shaped parking decks about 61m in diameter.

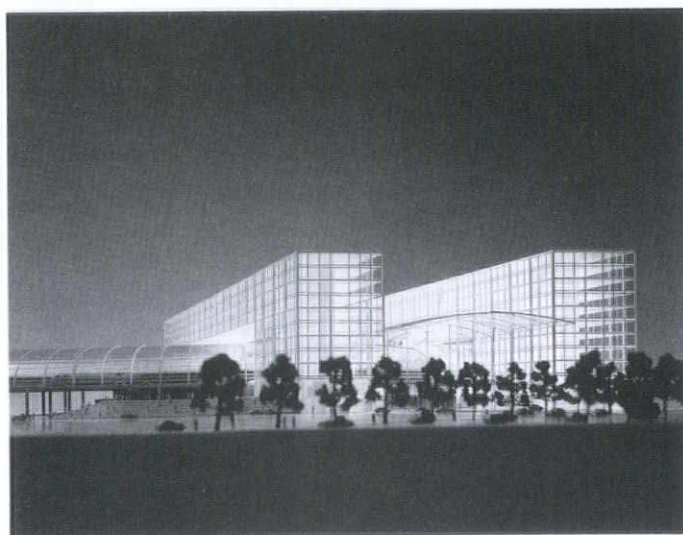
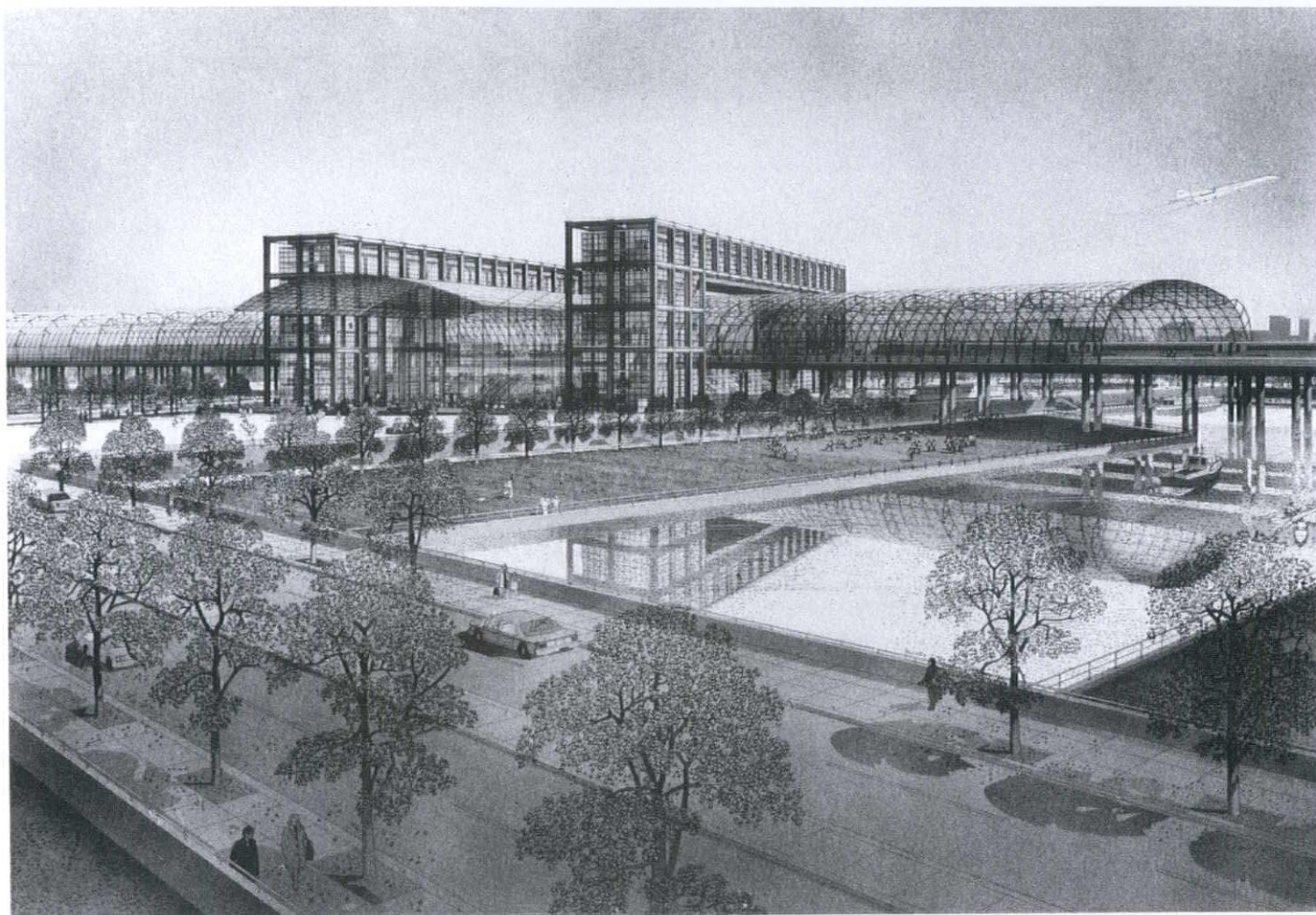
The roof is flat and tapers from 45cm to 26cm. The downward thrust is taken by an external ring of twenty supports 50cm x 120cm in diameter. The building is strengthened inside by a cylindrical wall 45cm thick. The ramps are cantilevered on the inside of the reinforced concrete cylinder and have a thickness of 45cm tapering to 25cm.

Main Function: Car Park
 Architect: Meinhard von Gerkan
 Project Leader: Klaus Staratzke
 Structural designer: Ing.-Büro Schwarz + Dr. Weber
 Collaborators: Klaus Hoyer, Uwe Pörksen
 Period of Construction: 1989-1990

ベルリン・レールター駅

Lehrter Station, Berlin

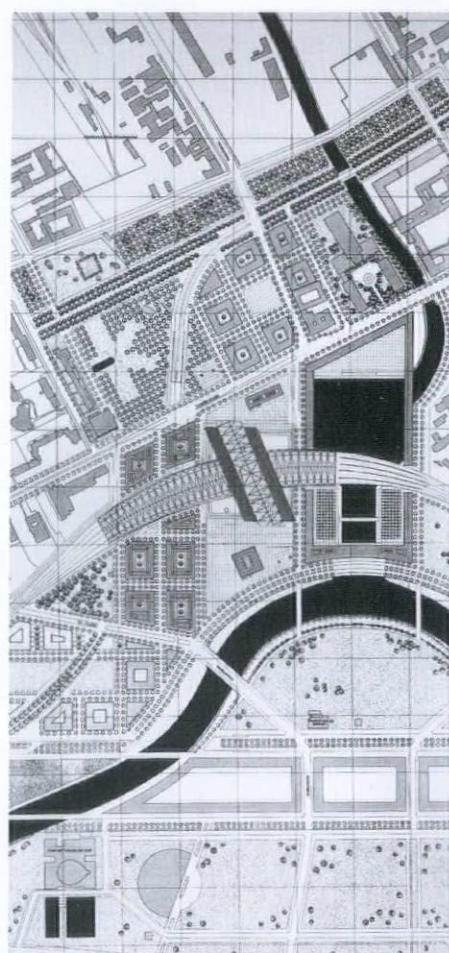
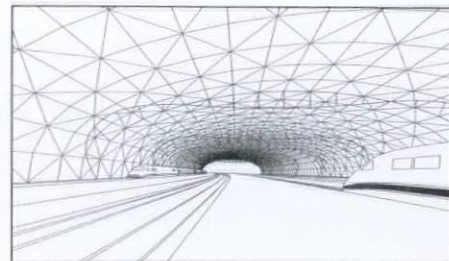




鉄道の要衝のひとつがフンボルト港の西に位置する歴史的なレールター駅の地に計画された。ここはインターシティ急行の東西方向に走る列車と南北方向に走る列車の交差する駅となっており、それに加えて近郊を結ぶ地域鉄道の路線Sバーンと、南北方向に走る地下鉄Uバーンが接続している。南北線は地下15mに位置し、シュプレー川と動物園の下を抜けている。東西線は地上レベル10mにあって、現況の鉄道路線と同じ位置に計画されている。ここには年間3000万人の乗降客が見込まれている。シュプレー・ボーゲン南、官庁街に近接することが駅の重要性を増す要素となっている。同時に北に位置するベルリンモアビット地区からも利用されることになる。この交通にからむ計画は都市計画と交通計画の重要性を十分に考慮に入れたものとなっている。東西方向に430mにわたって延びる列車の発着ホールは、繊細なガラスの屋根がかけられ、ふたつの建物を貫通しており、この建物が南北方向の線路の位置を示している。駅ホールはふたつの建物の下にあって、幅50m長さ170mの同様のガラス屋根を持つ。この駅ホールはモアビット地区、官庁街の双方に対し、歓迎する門のような雰囲気を持ち官庁と市街を結ぶ結節点の役割を果たしている。駅ホールレベルに開けられた大きな開口部が、地下のホームレベルにまで適当な自然光をもたらす、空間把握を容易にするだけでなく、明快な方向性を生みだしている。ホームのある空間はヴォールトによってデザインされる。直角に割り込んであるふたつの建物は、4.4mの高さを持つ角柱で持ち上げられるように合体し、公共空間をつくりだしている。おとなしい表情の建物にサービス面の要素が加わってアクセントをつくりだしている。高さ42mの3本のサービスラインが東西方向の70mの長さのスラブで結ばれ、商業空間、事務所、ホテルなどを収容する。この道路構造のようなスラブはファサードに接し、吊構造のケーブルとともに視覚的に表現されている。鉄とガラスの繊細なガラス屋根の表現を、建物のファサードに現れる網の目のような構造にも反映させることを意図しているのである。ガラス屋根はほぼ1.2m角の正方形グリッドの編目で構成され、それぞれの単位はケーブルのブレースが配される。シェル状の構造は弓状の桁と梁、対角線に渡るケーブルによって構成され、20~30mをわたすフレームがブレースの役割を果たす。この構造はプレ・ストレスをかけられたケーブル梁によって解決されている。延床面積16万4000㎡、そのうち7万5000㎡が商業施設、4300㎡が鉄道施設、1万9500㎡が交通施設および連絡部分の面積である。プラットホームは3万5000㎡を占めるものとなった。

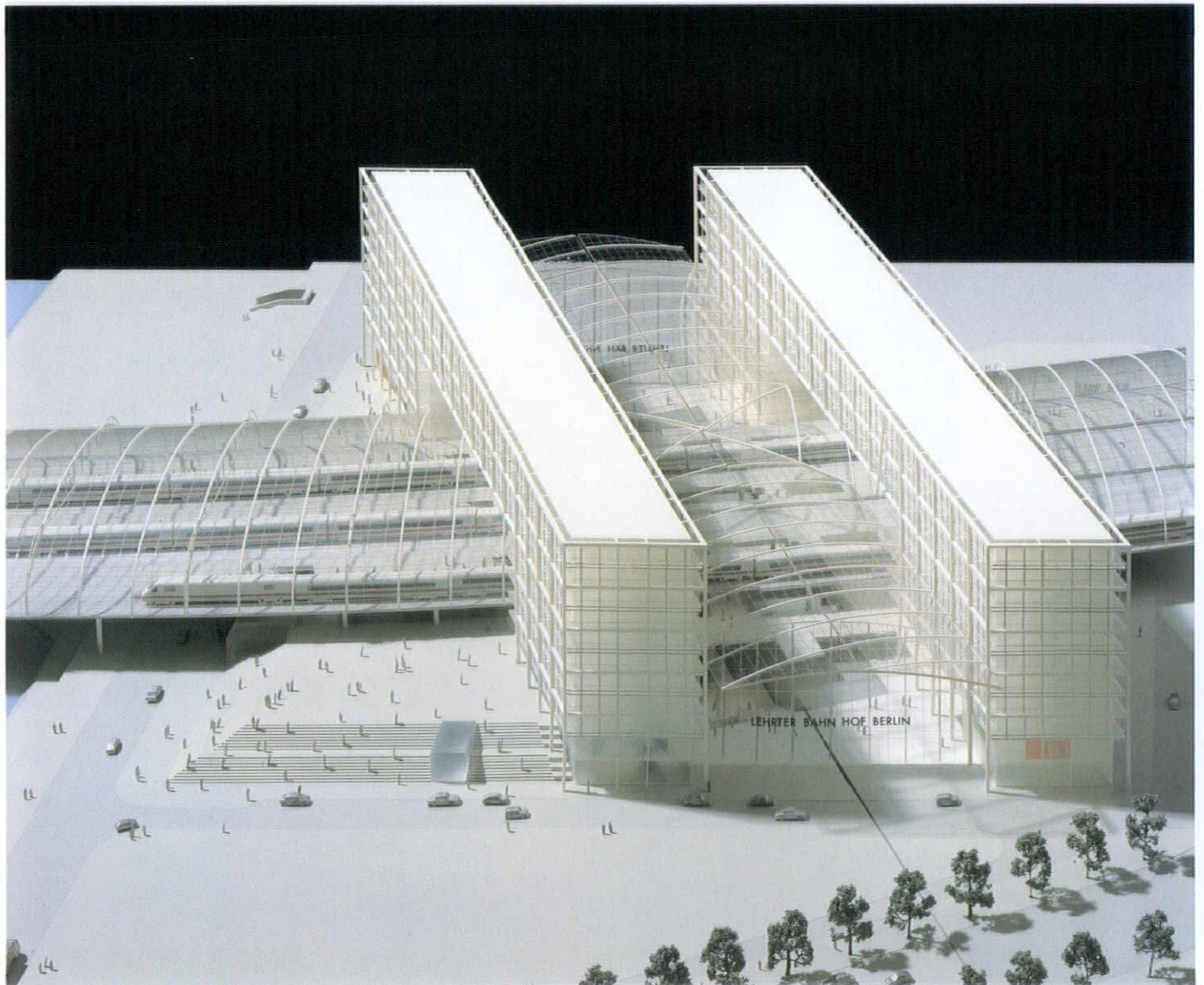
On one of the most important railway intersection stations is being designed on the historic site of the Lehrter Station to the west of the Humboldthafen. This is where the ICE-high speed train line from west to east will cross

another similar line running from north to south. Additionally there are district train lines, S-Bahn, in both directions, together with a north-south underground U-Bahn railway link line. The north-south line runs in a tunnel at a depth of 15m below grade, also crossing under the Spree and the Tiergarten. The east-west line is elevated at 10m above street level, at the same level as the present railway line. An annual passenger traffic volume of about 30 millions is anticipated at this railway interchange. Its proximity to the government district south of the Spreebogen adds to the importance of the station. It equally serves the district of Berlin-Moabit to the north. The design of this traffic building is strongly influenced by its urban and traffic planning importance. The platform hall running in an east-west direction and 430m long, is fully covered by a delicate glass roof. It penetrates two building slabs which signify the north-south underground station. The station hall lies between both building slabs, 50m wide and 170m long and will be covered by a similar glass roof. The station hall has a welcoming gate—like atmosphere both in the direction of Moabit and to the government district to the south. The station building thus combines the function of being a station with the function of forming an urban link between government and town districts. Large Openings in the floor of the station hall provide adequate natural lighting down to the platform level deep underground, guaranteeing good spatial understanding and clear orientation. The design of the platform hall is based on a barrel vault. The dominant shape of the two diagonal building slabs is integrated into the complex by a 4.4m high rectangular plinth above street level, forming an open public area. It stresses the solitary appearance of the station building whilst opening up service areas at an elevated level. The three 42m high band are bridged east-west along a line of 70 metres, allowing a variety of service facilities, offices or also a hotel. The steel like structure of the building slabs is visible in the outer facade zone, also visibly integrating the cabling of the structure of the bridge. The design intends to reflect the steel and glass delicacy of the platform glass halls in the network structure of the facades of the building slabs. The glass roofs represent a meshwork of almost square 1.2 × 1.2m grids. Each grid unit is braced by diagonal cables. A shell-like structural system is achieved using a support mixture of bows, beams and diagonal cables. Supporting frames at a spacing of 20 to 30m provide the necessary bracing. These are dissolved into prestressed cable beams. The total project covers 164,000m² with 75,000m² serving commercial means, 4,300m² railway facilities as well as 19,500m² transport and distribution purposes. The platforms cover an area of 35,000m².



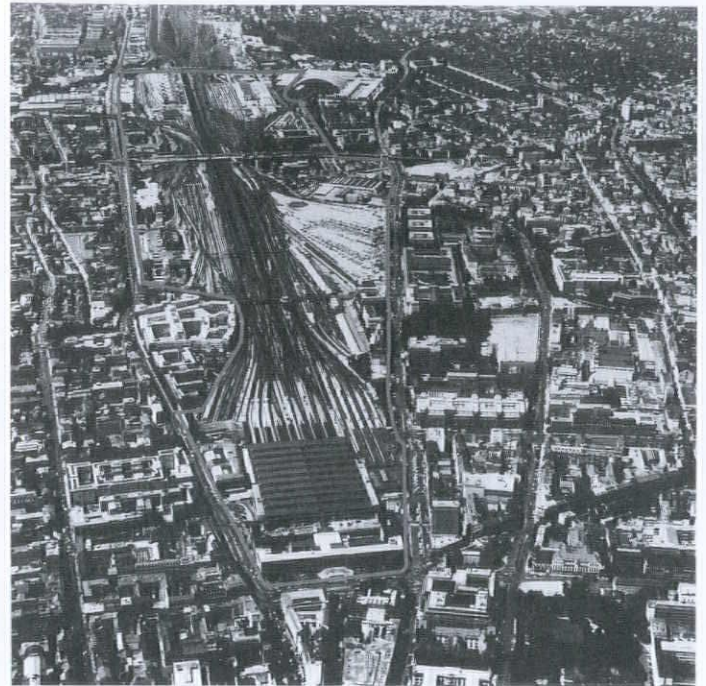
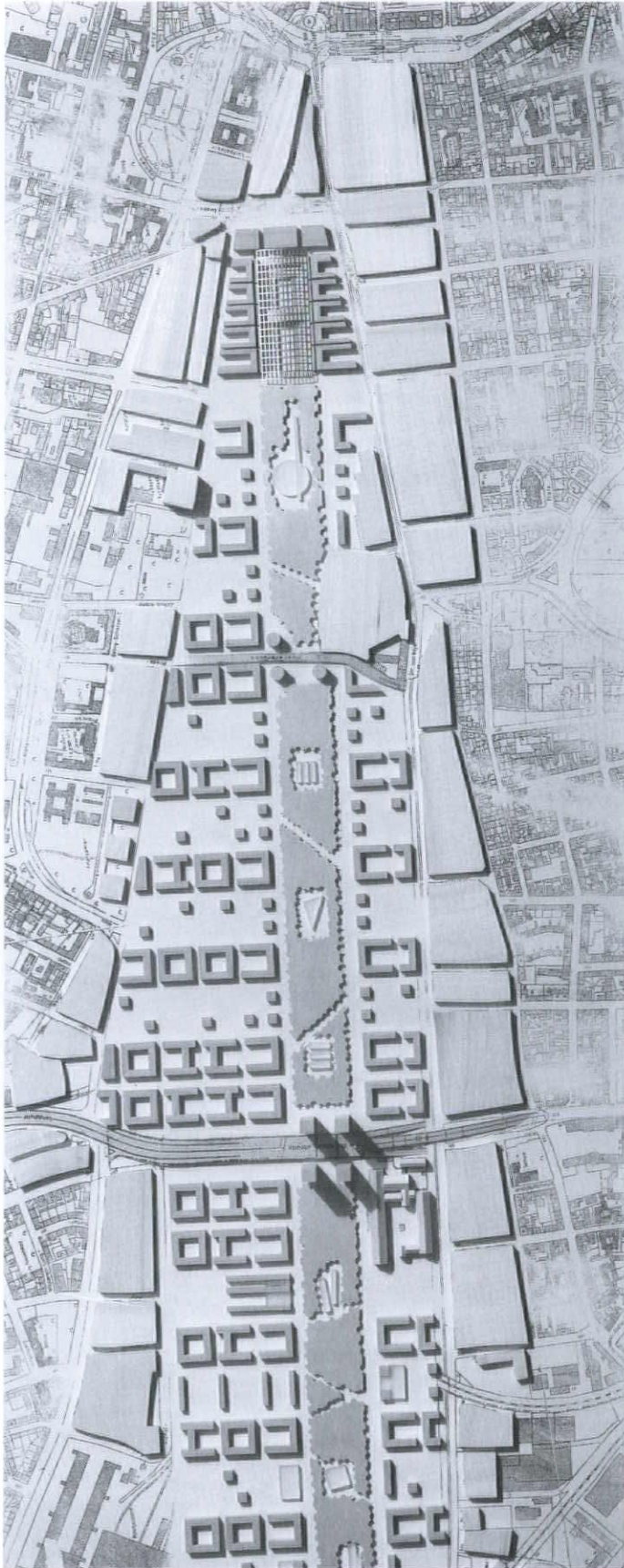
配置図

Date of Competition: 1993
 Architect: Meinhard von Gerkan
 Project Leader: Jürgen Hillmer
 Structural Designer: Schlaich, Bergerman + Partner
 Collaborators: Jens Kalkbrenner, Manfred Stanek, Susanne Winter, Prisca Bucher, Sabine Gressel, Brigitte Queck, Klaus Hoyer, Erkan Özen, Gisbert v. Stülpnagel, Ralf Blume, Sybille Zittlau-Kroos, Imke Quast
 Client: Deutsche Bahn AG
 Period of Construction: 1996-



ミュンヘン21・プロジェクト

Station and urban planning Munich21

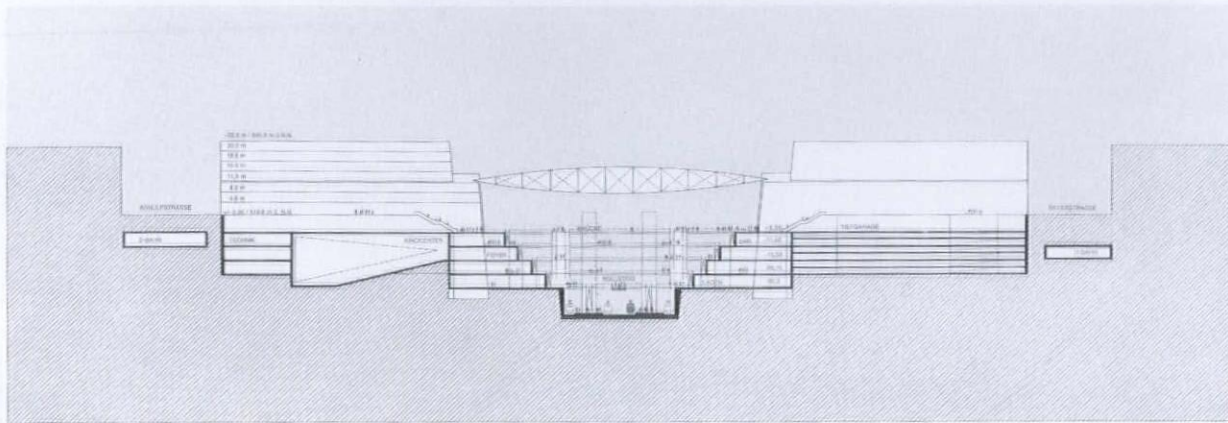


ミュンヘン21計画敷地



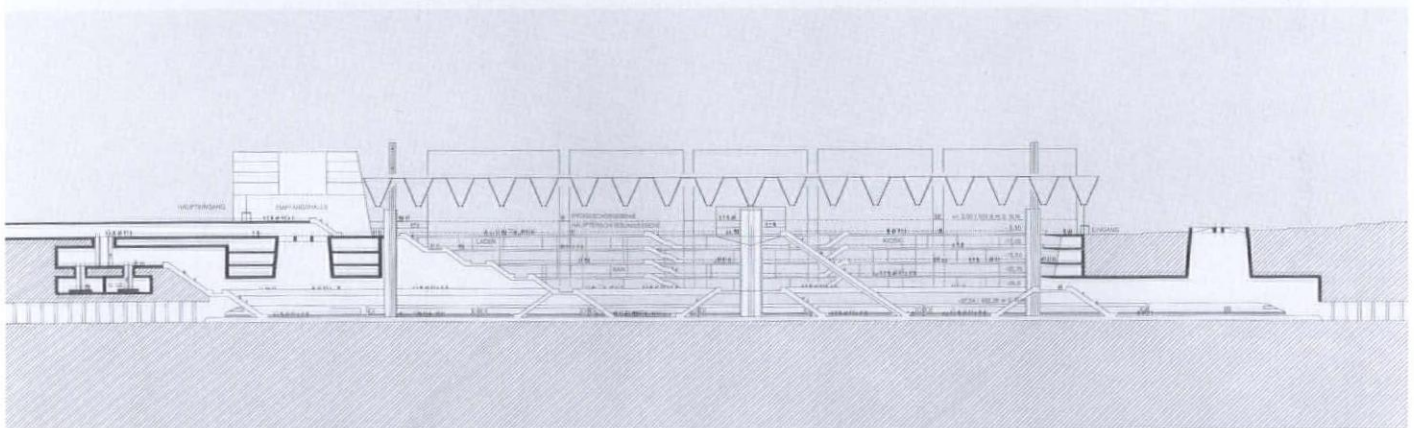
ミュンヘン21全域のコンピュータ・シミュレーション

ARCHITEKTEN VON GERKAN, MARG + PARTNER



断面図

ARCHITEKTEN VON GERKAN, MARG + PARTNER



断面図

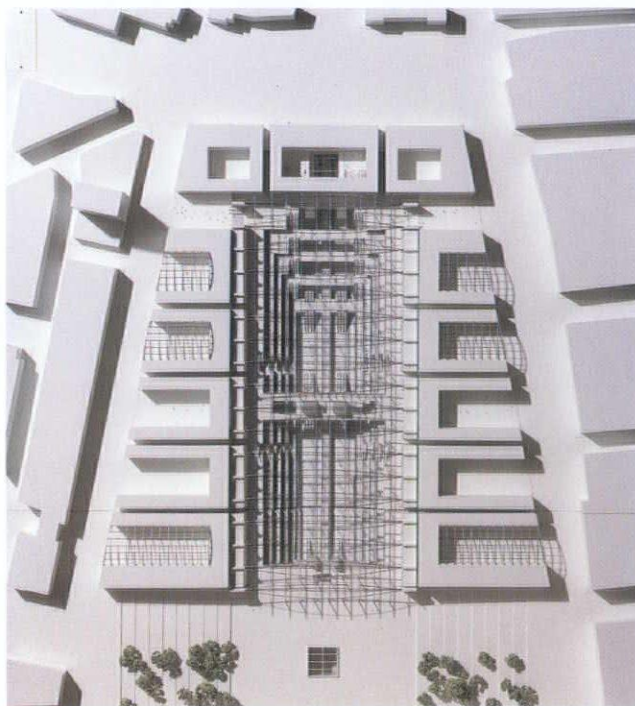
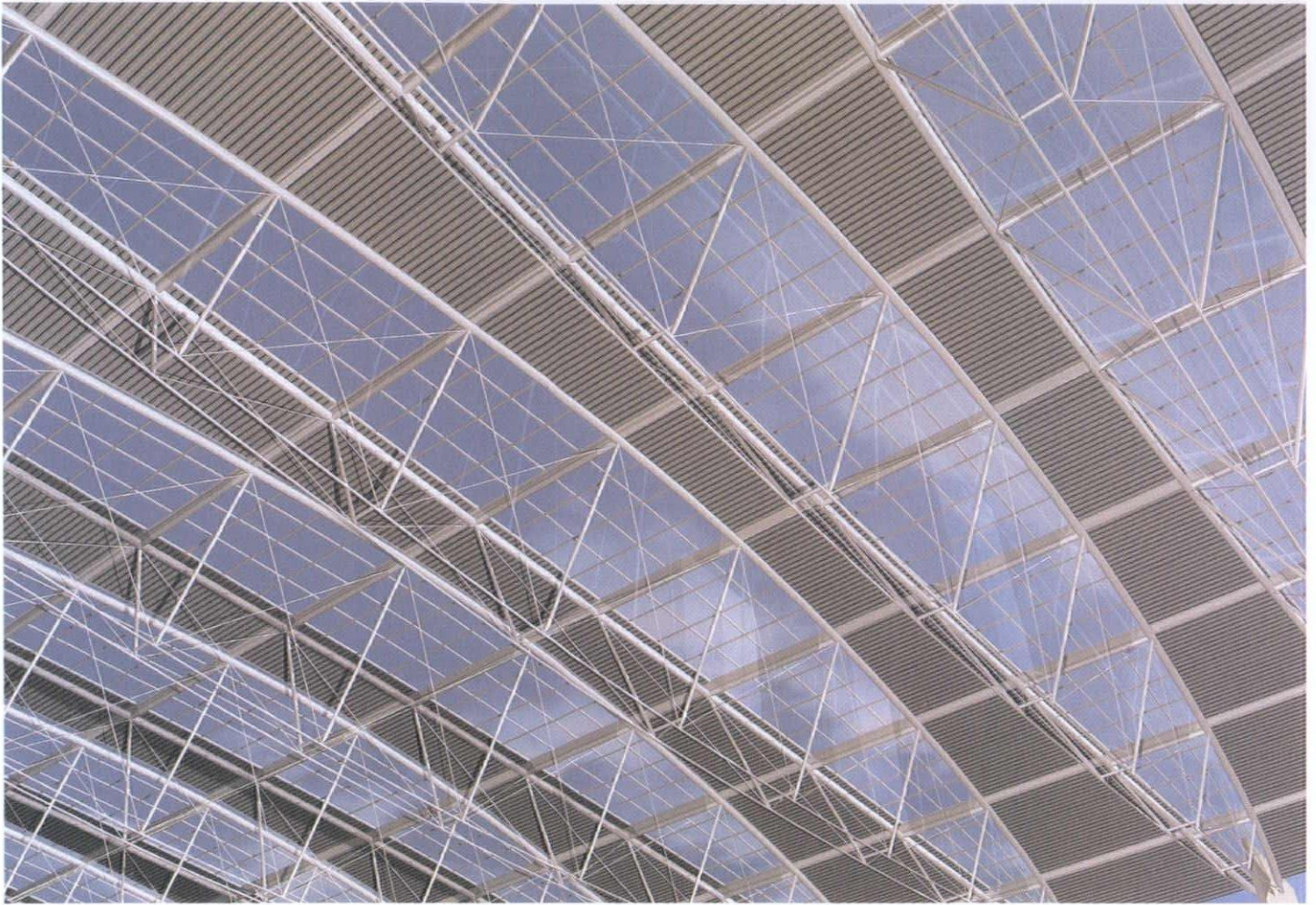
中央駅は終着駅形式をやめ、地下に通過形式の駅を計画している。発着ホームは地下37mの位置にあるが、地下トンネルのようなものではなく、一種の大広間となっている。長手方向には1層全体におよぶギャラリーが巡らされ、ホームから50mのレベルにスパン110mの繊細なガラス屋根がかけられる。両端の開口部はほとんど閉じられていて、空調ができると同時に地上と同程度の明るさをも獲得し、明快な方向性を持つ魅力的な空間体験のできる内部空間となっている。部分的にガラスを収めた屋根や構造面、屋根仕上げ面には素晴らしい明るさが満ちることになる。計画の全体面積は40万㎡を越える規模となった。このヨーロッパでも最も魅力的な公共空間の仲間入りをした街区は、都市の中心において、様々なスチールの技術によってインフラに結び付けられた素晴らしい建築群として誕生するのである。

The main station will be closed as a terminal station. Instead through trains will pass in a lower through transitional station. The platforms situated 37m deep are not in an underground tunnel but in an imposing large hall. It is contained on the longest side by six terraced gallery levels and is closed at a height of 50m above the platforms by a 110m wide span delicate glass roof. Both side ends are also mostly closed so that the internal space is climatically regulated and is as light as day, has clear orientation and offers a fascinating spatial experience. The partially glazed roof area has a supreme lightness, the structural surface and roof skin the same. The new complex has over 400,000m² of space. One of the most attractive public places in Europe is created through the use of varied synergy symptoms, by its

central location in the city, the excellent infrastructure and the terraced building configuration.

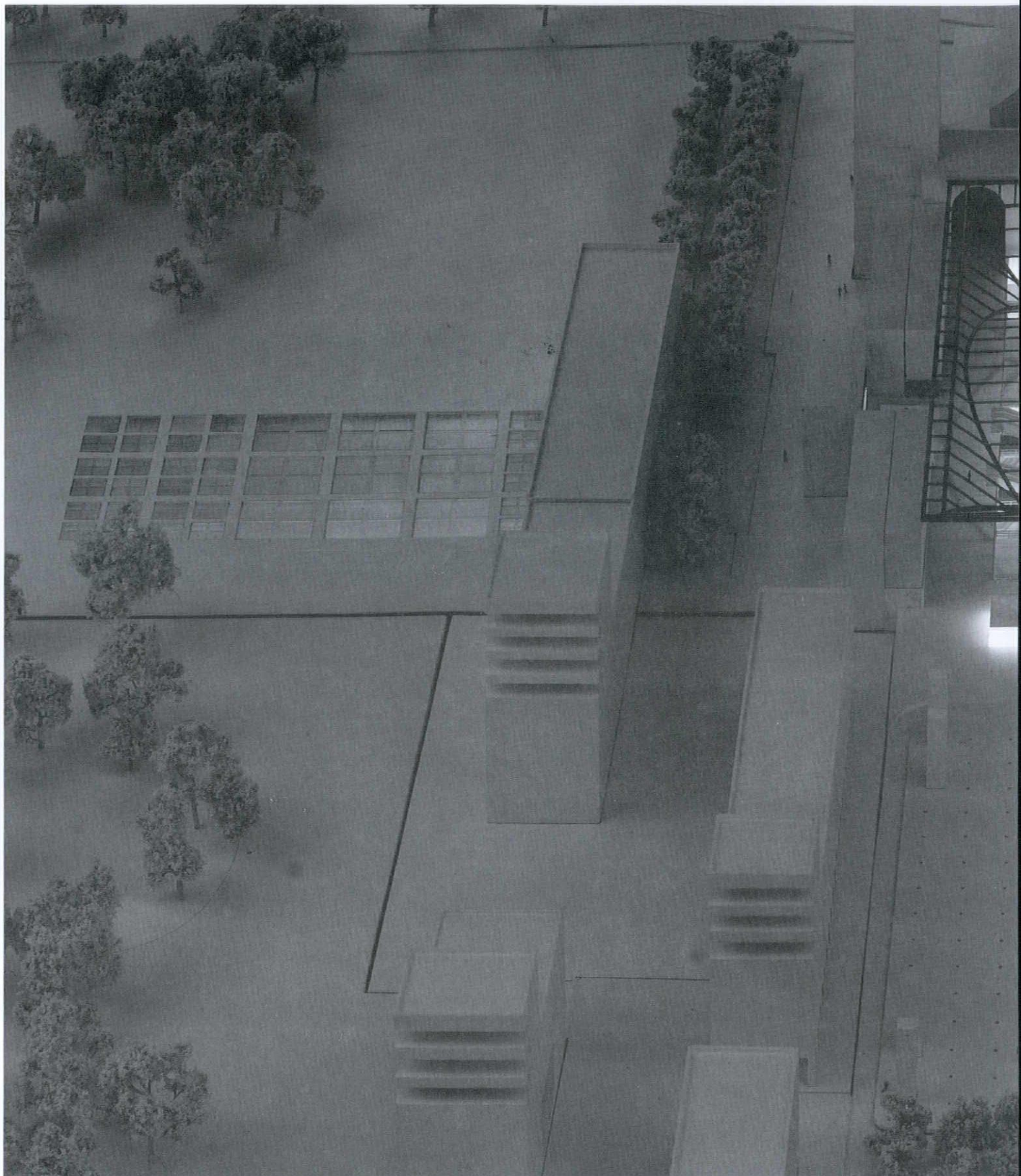
Architect: Meinhard von Gerkan
Collaborator: Charles de Picciotto



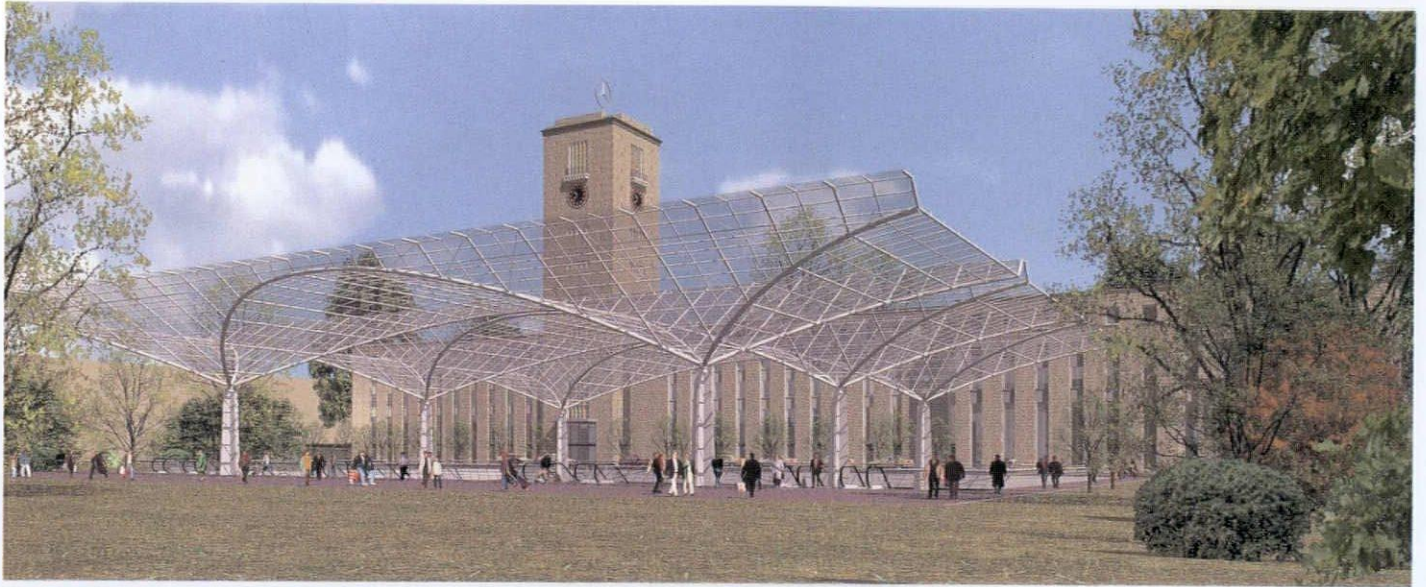


シュトゥットガルト21・プロジェクト

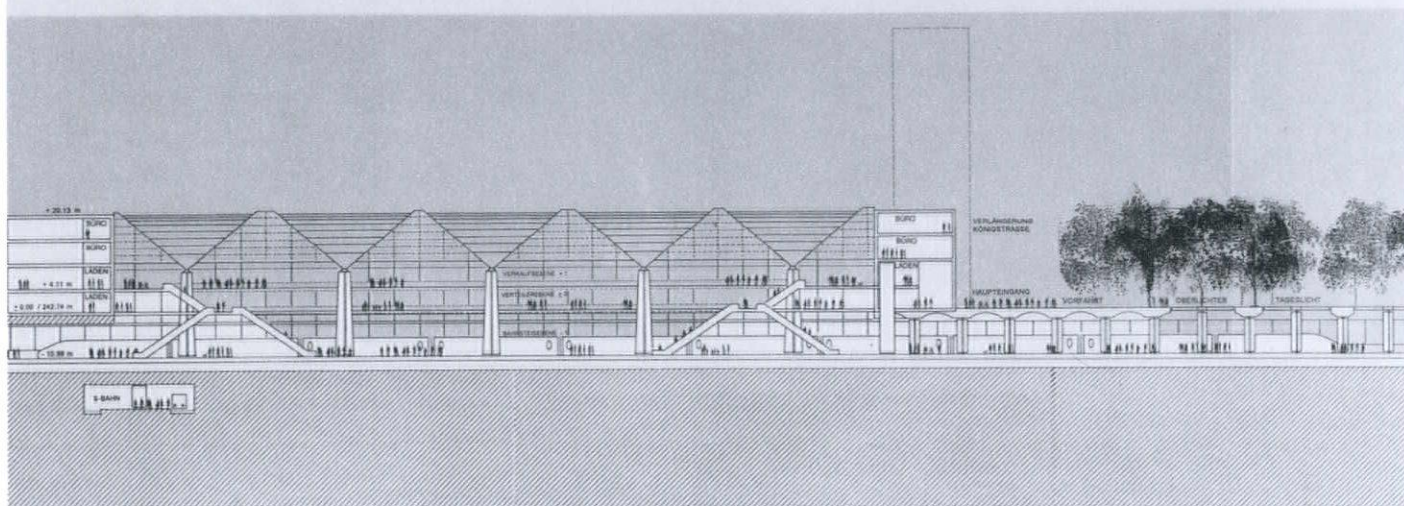
Station and urban planning Stuttgart21







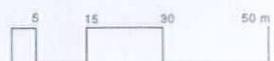
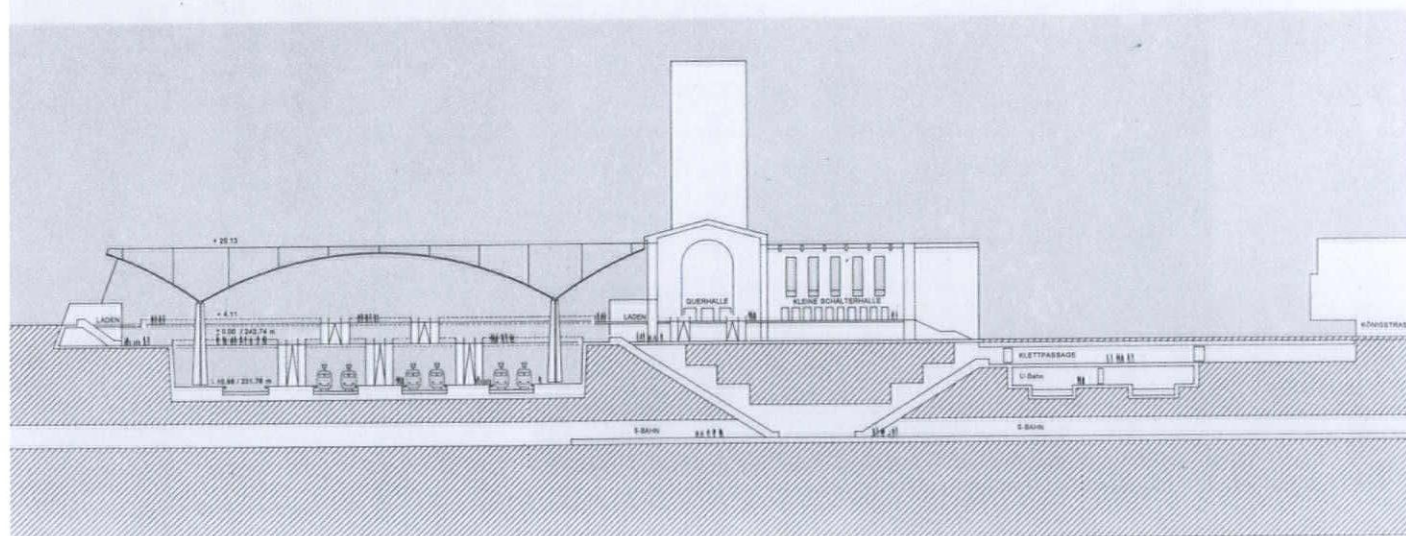
LÄNGSSCHNITT SCHNITT C - C



VORPROJEKT STUTTGART 21
断面図

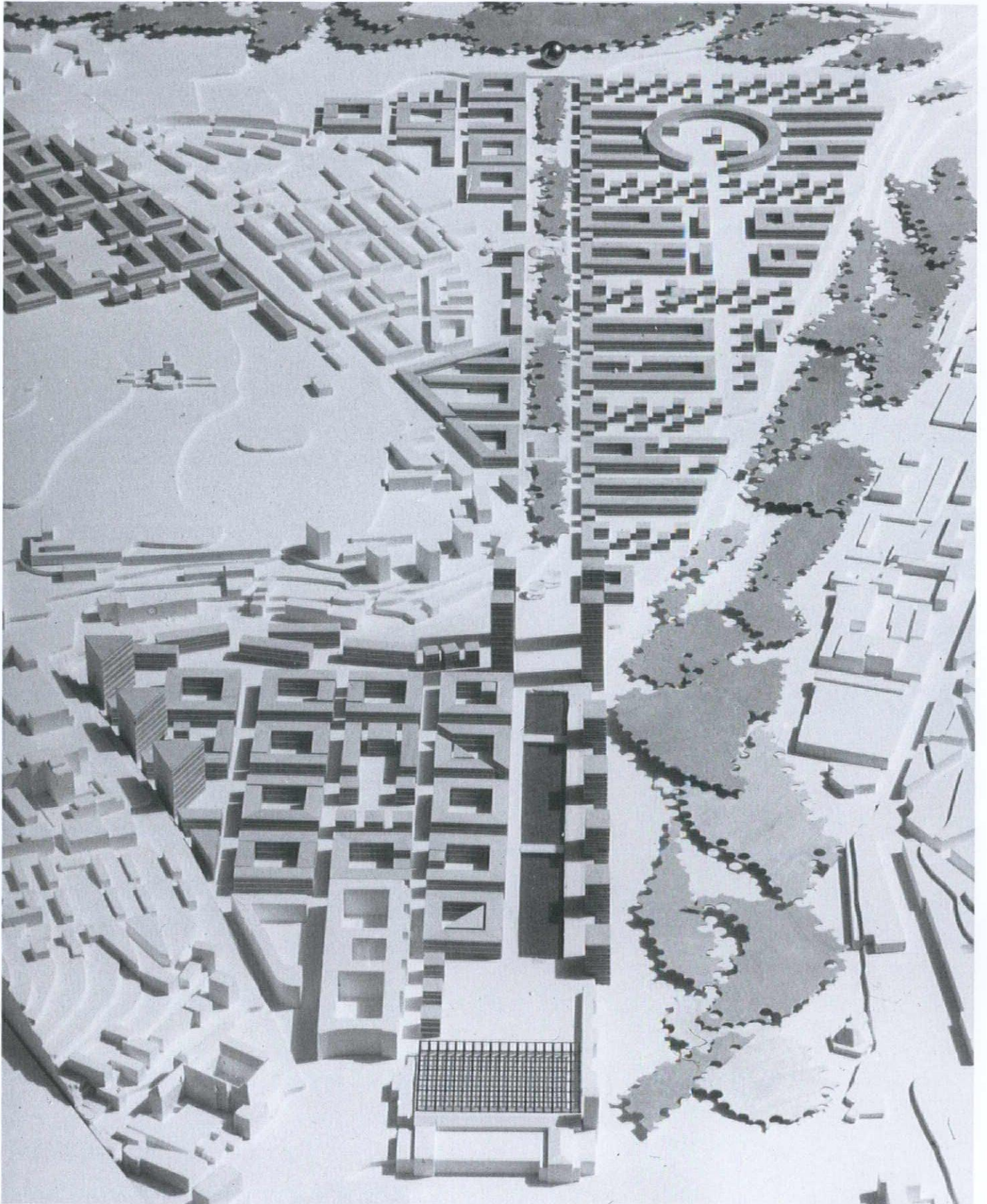
ARCHITEKTEN VON GERKAN · MARG + PARTNER

QUERSCHNITT SCHNITT B - B



VORPROJEKT STUTTGART 21
断面図

ARCHITEKTEN VON GERKAN · MARG + PARTNER



この計画は「アヴェニュー21」と呼ばれ、シュトゥットガルト都市計画に組み込まれている。この2.2kmに及ぶ「背骨」は、70mの幅をもった公共空間として計画され、ローゼンシュタイン公園へと展開する駅周辺計画に連結することとなる。この都市軸はシュトゥットガルトの都市構造として、新しい大都市を構成してゆくための要素であり、これに沿って新しい建築が配されることになる。この構造は周辺の様々な用途や密度の地域を結び付ける一方で、それぞれの独自性を強調して表現させることができる。公共性の高い建物であるため、歴史的な建物である「ボナツ」駅と融合させるように街の中心に「街の顔」として配される。住居施設は「アヴェニュー21」とシュロスガルテンの間に提案する。駅北側に広がる既存の街区はローゼンシュタイン地区と連動し、職住の混合地区となる。

地上の終着駅は廃止され、これに代わって地下14mのレベルに通過形式の駅が同じ軌道の場所に建設される。現存駅舎の屋根も取り払われ、地下へと完全に吹き抜けた大きな広間が建設される。ボナツ駅の石のアーチを鉄骨のアーチに架け代えることによって、巨大なガラス屋根を持つこととなる。この駅の施設は単なる交通の施設を越えて都市の機能における重要な要素をつけ加えることとなる。なぜならば北側の線路軌道を廃止することによって、シュトゥットガルトの新しい都市中心施設を含む大規模な都市計画が可能になったからである。既存の変更及び新しい建物の追加によって3万5000㎡の商業施設が生ま

れた。新旧の街の中心を結ぶ歩行者通路は、駅複合施設に基づいて計画されたために、新駅は第2の「門」としての機能を獲得した。この計画によって中央駅はゲーニヒス通りの突き当り、あるいは都市内の依り所としての地位を失い、むしろ様々な要素を持った新しい都市の中心地となったのである。

The surface terminus is to be closed. Instead an underground transitional station will be constructed 14m below, with the railway lines running at right angles to the present ones. The roofing of the present station will also be removed. A large hall is to be built instead, having a complete opening to the lowest level. A large glass roof, whose arched steel stanchions transform the stone arches of the Banatz building cover it up above. The station complex gains an additional urban and functional importance beyond that of a simple transportation building, because, after the demolition of the railway lines to the north, a very large urban development is created forming a new city centre for Stuttgart. An area of 35,000m² is created for services and retailing through alterations to existing buildings and additional new buildings. The pedestrian link between the old and the new city centre is directed through the station complex so that the new station has a second "gate function". Through this redevelopment the Main Station loses its position as being the end of the

Königsstraße or defining the inner city. It becomes the centre of the new inner city, the form of most different contents.

All existing platforms excepting the line next to the Schloßgarten will be closed. This results in an outstanding urban planning possibility for Stuttgart: the "Avenue 21". This 2.2km long "backbone" is a 70m wide, intensively planted public space, which links the newly developed station centre to the Rosensteinpark. This urban axis gives the town structure of Stuttgart a new metropolitan component: the new building land is situated along it. It spatially links the separate neighbourhoods with various uses and various densities; at the same time it divides in order to strengthen the identities of the individual neighbourhoods. A formal service building is created in the heart of the city integrating the historic station "Bonatz" as a main feature. Residential accommodation is proposed between the "Avenue 21" and the Schloßgarten. The new neighbourhood on the present north goods yard extends the existing block structure of the Rosenstein District having a mixed use of living and working.

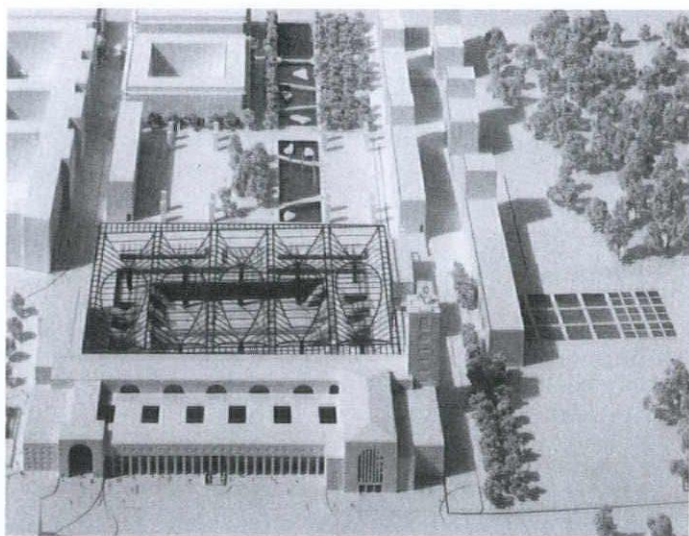
Architect: Meinhard von Gerkan with Charles de Picciotto
Project Leader: Charles de Picciotto
Structural Designer: Schlaich, Bergermann + Partner
Client: Deutsche Bahn AG
Period of Construction: 1996-



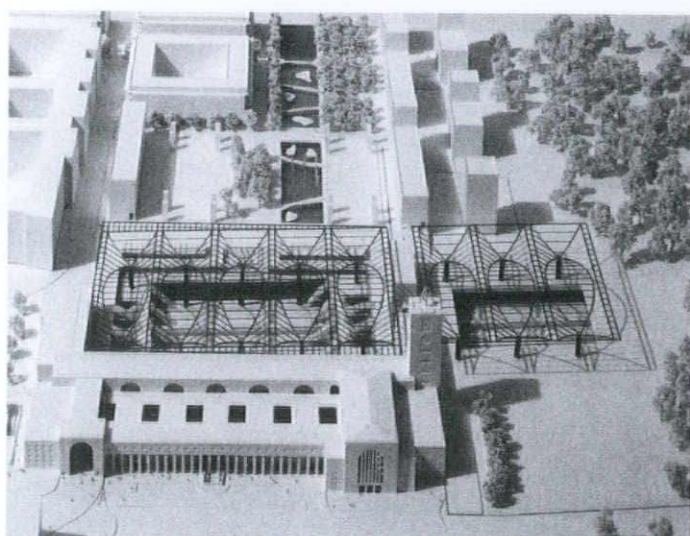
シュトゥットガルト21計画敷地



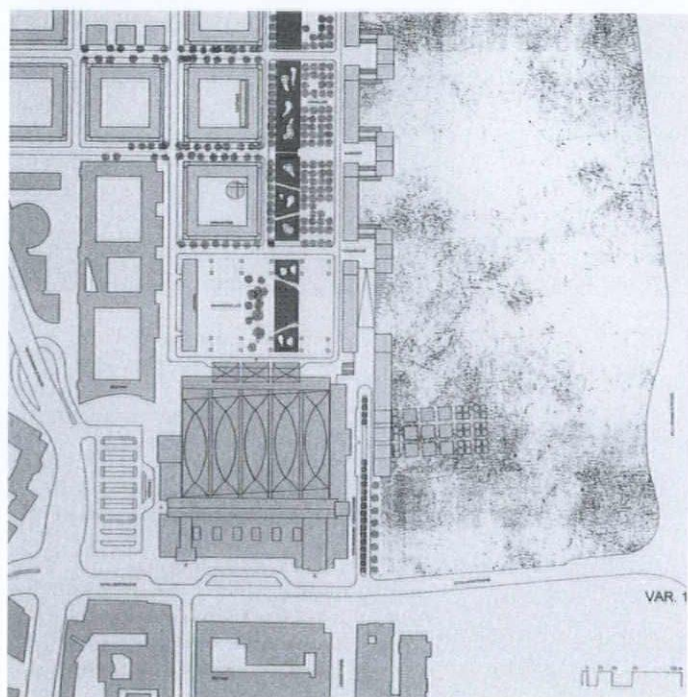
シュトゥットガルト21全体のコンピュータ・シミュレーション



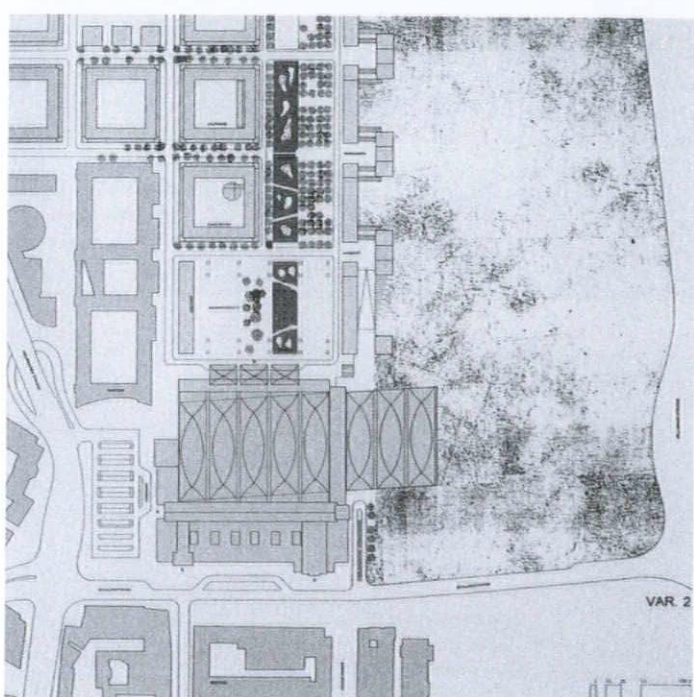
A案模型



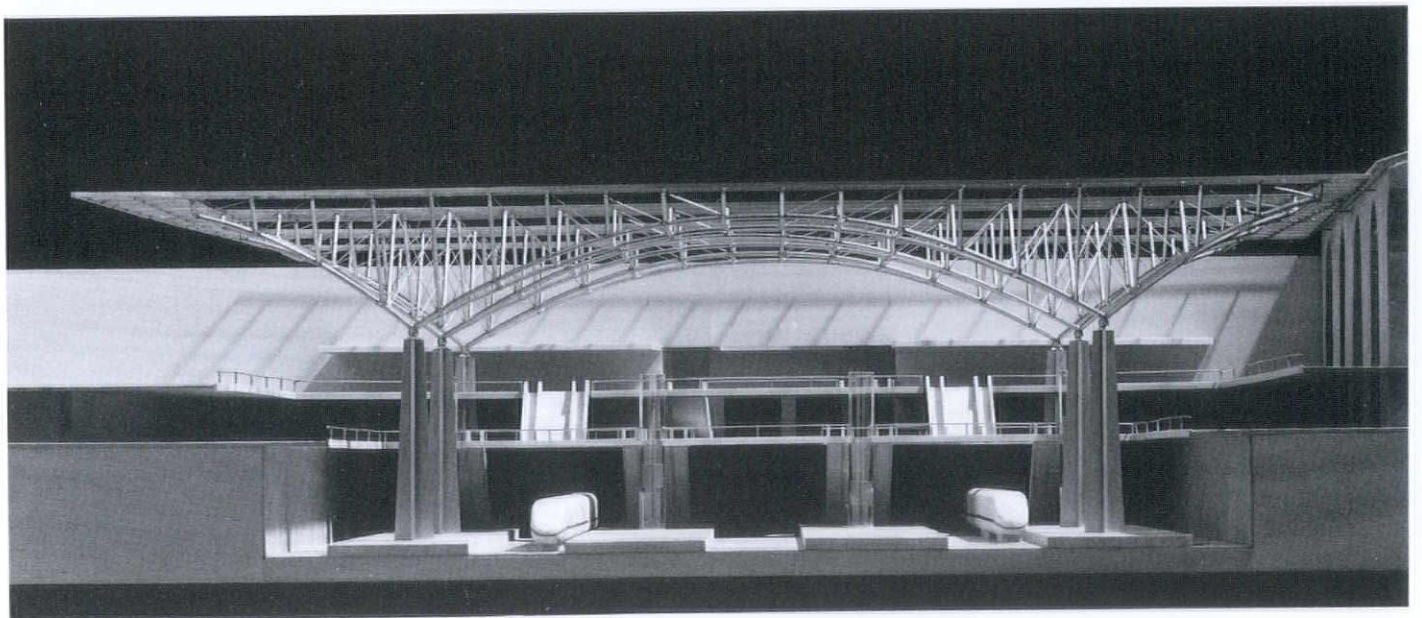
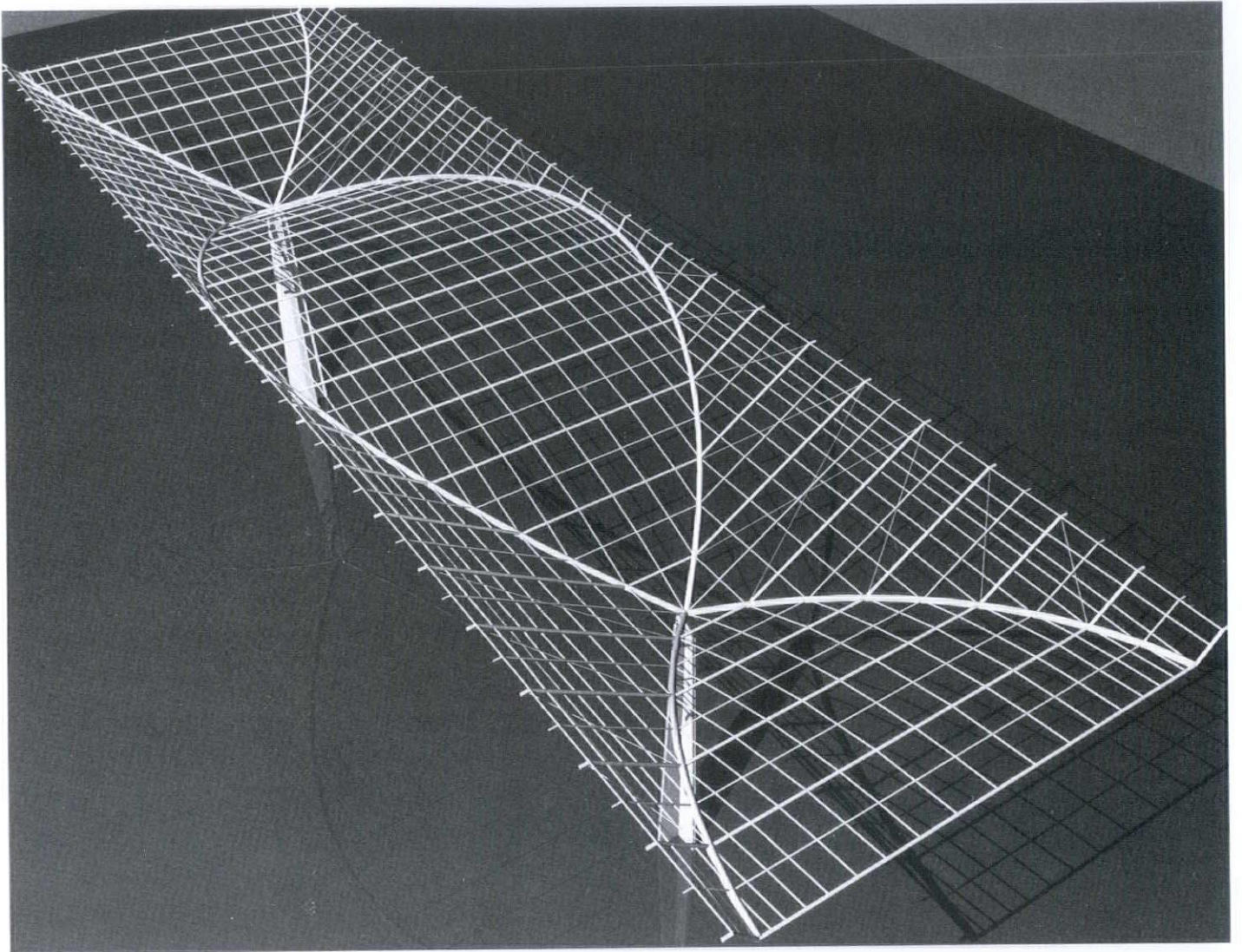
B案模型



A案配置图



B案配置图



クラウド・ディーター・ヴァイス／訳=山下昌彦

ゲルカン・マルク設計事務所(GMP)は1965年の開設以来、多くの大規模なプロジェクトに従事して来た。現在も大きな仕事が目白押しである。中でも最も大掛かりなのはライプツィヒ・メッセであろう。また最近のGMPの仕事の中で目立つのは駅舎である。特にドイツ国内の大都市は今インターシティ・エクスプレスのネットワーク整備に伴って時代遅れの終着駅形式から通過駅形式への改造を急いでおり、GMPは大規模なガラスの屋根の空間をあちこちで提案している。

こうなってみれば、1965年のベルリン・テーゲル空港は、ライプツィヒ・メッセを手掛けるための序章であったのだと思わざるを得ない。ゲルガンが最初から空港のような大規模プロジェクトを手掛けられたことは、希有な幸運であったと言うべきである。普通開設したばかりの事務所が、実施能力の信頼性を獲得するには、大変な苦労と時間を必要とする。実際に建築しながら学ぶなどというチャンスは、そう滅多にあるものではない。今から思えばテーゲルはその美学的明快さと機能的論理性において最高の練習台であった。

30年前のテーゲル当時の成功神話は実際大変なものであったが、印象としては今日もう一度同等のインパクトでそれが繰り返されているように感じる。再び時代の要請に応えて同じ様に「乗客」を対象とするプロジェクトで、機能的には更に高度に複合した建築を、様々な言語と形態を操りながら総合している。建築は幾何学的な原理を示し、成功は再び革新的アイディアによって支えられている。大スパンの屋根と大きな公共空間も健在である。

ヴェニスのビエンナーレ国際建築展覧会(1996年9月8日～11月10日)の第6のテーマ「未来の駅・駅のルネッサンス」には本来ならGMPの案が展示されるべきである。しかしベルリンとシュトゥットガルトのために彼らが心血を注いだ計画案は実現化を勝ち取ることは出来なかった。最終的にはドイツの別な大事務所が設計を行なっている。残念なことにGMPの案は、比較にならない位詰まらない案に落ちてしまった。加えて、GMPはこれまで常に革命的な形態とアイディアによって大きな成功を収めて来た。それが因襲に満ちた建築界のエスタブリッシュメントにはど

うにも面白くないのだろう。反抗的な「青二才の建築家」に対してありがちな仕打ちで、GMPの案は落選の憂き目を見た。

だが、このハンブルグー達はそんなことではめげない。彼らのスタンスは余りに単純明快で、信念は実際の建物において繰り返し鍛えられているので、少々のことではビクともしないのである。彼らの信条は、次のようにまとめることが出来る。

1. 構造的秩序
2. 単純さ
3. アイデンティティ
4. 非互換性
5. 多様性と調和のバランス

この「信条」は経験によってますます研ぎすまされたものとなった。都市では、細分化された各々の部分は匿名的であるべきで、中心や公共の場所はそれとは対照的に簡単に見分けられなくてはならない。それぞれの敷地条件に応じて柔軟に対応しようとする時、彼らの信条は極めて有効である。

建築の公開性

ゲルカンとマルクは問題提起が好きだ。例えば手慣れた構造計画家でも技術的にどう解いたら良いのか途方に暮れてしまうようなアイディアを提示してみたり、あるいは古臭い常識に捕らわれている施主には到底理解できないような提案を平気で行なってみたりする。とりわけ「公開された空間」を追求することに熱心であり、時には課題の要求を越えてでも作り出そうとする程である。実行が難しく、プロジェクト全体が失敗する危険性が高くなっても、可能な限界まで開かれた建築を追求しようとする。

1993年のドイツ国会議事堂改築のコンペはそういう意味で象徴的である。当選したノーマン・フォスター案の純粋なシンボリズムとは対照的に、あくまで「国会と公開性」の共存を追求した。クリストの芸術的覆いを巡って長い政治的対立が起きたように、政治家一般の保守性は目を覆いたくなるものがある。「建築の公開性」もまだ多数派の支持を得られる位置を占めてはいないようである。ベルリンの場合「ボリスとアゴラ」というアイディアは受け入れられ得ないものであった。

1990年に建設されたハンブルグ・エルブシヨセーの本社とゲルカンの自邸のまわりに設けられた(私有地の中の)市民に公開された広場は、GMPの意志を力強く物語っている。実際30年の間に実現された公開性の高い建築は、あらゆる抵抗にもめげず大変な数となった。レパトリーも広く、空港、スポーツ施設、文化施設、ホール空間等ほとんど全てのジャンルにわたっている。ハンブルグ歴史博物館(1989年)、ハンブルグ空港(1993年)、ライプツィヒ・メッセ(1996年)、ベルリン・レールトター駅(1993年以来設計中)などを眺めるとその公開性は年々高度になってゆくばかりである。

GMPにとって構造計画家のイェルク・シュライヒの存在は大きい。彼のようなクリエイティブなエンジニアと活発にやりあうことによって、通常ハイテクと呼ばれているのとは全く対照的なモダンで印象的な構造が実現している。ハンブルグのルフトハンザのジャンボ格納庫(1992年)は170×60mの無柱空間である。このスケールの屋根はほとんど橋と同じであることがわかる。

何故彼等が大スパンの空間に拘るかとのいう疑問があるかもしれない。出来るだけオープンな空間を実現するためであることは言うまでもないが、屋根はまた外観上最も強い表現手段を持つ。印象的な屋根デザインをコンペでフィーチャーしたお陰で、キール・スポーツフォーラム(1976年)からハンブルグのチューリッヒ・ハウス(1993年)までのプロジェクトを獲得出来たこともまた事実である。

GMPの成功の秘訣があるとしたら、既に言及したように最初にテーゲルという「幸運」に恵まれたという事もあるが、それ以上に危険の多い、しかし重要な「課題」を自らに課し、建築家としての高い理想を常に追求して来たところにある。

難問に対する簡潔な応答

振り返ってみると、ゲルカンとマルクの仕事のさらなる特徴は、そうした建築に対する見識も然ることながら、常にその態度が「しぶとい」と言ってもよいくらい一貫していることではないだろうか。ポストモダニズムやデコンストラクティヴィズムなどに毒されること

もなく、知的な遊戯を断念し、建築の本来の社会的な目的のために、誰にでも理解可能なプロセスと明快な解決を維持し続けている。

ゲルカンとマルクとは大きなポイントでは共通認識に立っており、2人の協力体制に揺るぎは無いが、細かいところでは若干対照的な面も見せている。

マルクは19世紀の空間のレパートリーに魅力を感じているようで、今日的な空間構成の中で引用を行なっている。彼は作品を歴史的建築言語や古典的な概念で説明する。そこには列柱廊、鐘楼、寺院、アーチ、台座、プラザ、軸線、オーダー、などと言った言葉がどんどん出て来る。これはしかし歴史的な形態言語を用いるという意味ではなく、言語における文法のように構成原理を説明するのに利用しているだけのことである。

例えばライブツィヒ・メッセである。歴史的な原理を現代的手法に翻訳して用いることにより、ホールのオーバースケールの空間を視覚的に居心地の良いボリュームに引き戻している。そこでは例えば「鐘楼」は、必要不可欠な4本の排気ダクトを束ねたもので、視覚的に重要なアクセントとなっている。

ホールのメインの部分構成する外側からピン支持されたガラスのアーチは、1854年の

ミュンヘンの水晶宮をほとんど「非物質化」したものであると言える。これまでに最大のガラス・シェルであり、文字通り新境地と言って良い。この新しい建築型を原理的に締めくくる言葉をマルクは用意していない。ただ「経済性の美学」と説明するだけである。経済性と美学は普通は互いに相いれないと思われるのであるが、この辺りに彼の考え方がストレートに現れている。即ち建築は、実際に建つ以上現実的でなければならない、芸術性はその中できわどく追求されるべきであるということである。

ゲルカンはマルクに比べるともっとモダンであろうとする。彼はスイスの最近の退嬰的なビュアリズムの動きも、ガチガチの表現主義にも批判的である。彼の場合、幾何学的コンポジションに対する偏愛はいや増すばかりである。それは結果として幾何学的秩序により全てが整理されるということであって、最初に何らかの形態がア・プリオリに存在しているわけではない。彼は絶対に形態的視点からは作品を説明しない。

フランクフルトのドイチェ・レヴィジオン(1995年)の場合でも、彼の念頭にあるのは課題と敷地の条件だけである。明快に幾何学的法則に則り、シンボリズムを否定し、全く内

的な機能から発展して来たアーティキュレートされた建築の配列を目指す。複合体全体を概観したときに、ある程度調和のとれた印象とすることは必要である。バランスを取りながら敷地の歪みに合わせて、内的にエレメントが各々の中心を頼りに集散し、ほとんど自律的に分節化して来るのを辛抱強く待つことが大切だと彼は主張している。

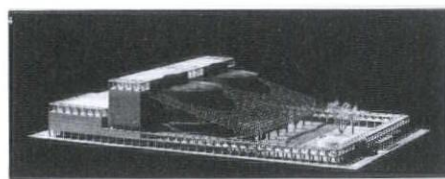
建物の中の動線は月並みな直行パターンでなく、様々なシーンを作り出すように多様であるべきであるが、また逆に迷路になってもいけない。建物の外観は、変化に富んでいることが望ましく、見る角度によって全く異なった印象が得られると楽しい。ドイチェ・レヴィジオンでは、ゆるやかに湾曲する本体片側にシリンダーを規則的に配置することによって、非常にダイナミックな内部動線と建物外観が実現した。

またメタルのディテールはテオ・ホッツとそのチューリッヒ・エルリカンのオフィスビル・マルティ(1985年)を思い起こさせる。またすばらしい出来の塔状の階段室はほとんど表現主義の世界である。

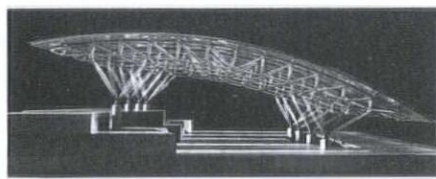
幾何学的コンポジションと建築内部プランの整合性はどうか。ドイツではオフィスは小部屋が主流なので、経済性からすれば星形の増殖可能なタイプが優れているが、これは欠点としてオフィスが常に中庭向きとなり閉鎖的になる。ゲルカンの案の大きな魅力は、多様性と調和の絶妙なバランス、単純明快さと明るい開放性、そして印象的な外観である。それは言及したGMPの信条にピッタリ一致していることが判る。

GMPの形態言語はモダニズムの造形芸術の幾何学に根差しており、シンボリックな表現が出現したとしてもそれは結果であるのに過ぎない。コンポジション、ディテール等から必然的に現れて来るユークリッド的造形を追いかけていると、究極的には新しい形態秩序を作り出すための自立したシステムを創り出すことになるのかも知れない。そこでは「形態」は代数学における記号のように、それ自体が意味を持つのではなく、ある「関係」を意味することになるであろう。

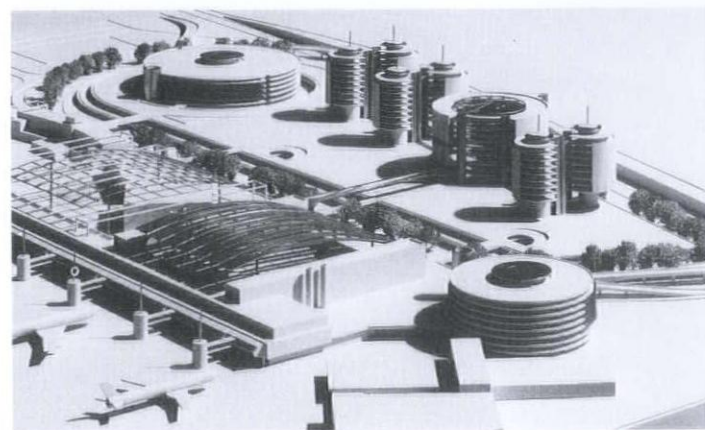
●Klaus-Dieter Weiß / 評論家



第二国立劇場(1986年、佳作)。明快なコンポジション。特にツリー・ストラクチャーのホワイエ空間が特徴。日本風「前庭」と一体となって都市に開放された空間を実現する



ハンブルグ空港(1986年、コンペ1位、93年竣工)。軽やかな大架構の屋根によって実現される、フリーな空間



ハンブルグ空港エアポートセンター(1990年)。シリンダーの配置による変化に富んだ外観

Meinhard von Gerkan

1935年 1月3日リガ(ラトヴィア)に生まれる
1942年 父戦死
1945年 西ドイツ(当時)へ亡命。母死亡
ルドルフ・シュタイナー校に4年間在籍
1956-64年 ベルリン工科大学、ブラウンシュバイク
工科大学で学ぶ
1965年 Volkwin Margとともに事務所開設
ドイツ建築家協会会員
1974年 ブラウンシュバイク工科大学教授に就任

Volkwin Marg

1936年 10月15日ケーニヒスベルク(当時ドイツ、
現ロシア領)に生まれる
1945年 チューリングゲン(当時東ドイツ)に疎開
1958-64年 ベルリン工科大学、ブラウンシュバイ
ク工科大学で学ぶ
1965年 von Gerkanとともに事務所開設
都市・地域・造景計画家協会会員
1979-83年 ドイツ建築家協会会長に就任
1986年 アーヘン工科大学教授に就任

photo

Gerard Aumer P.26中左、P.39下左

Richard Bryant P.16上、P.48中

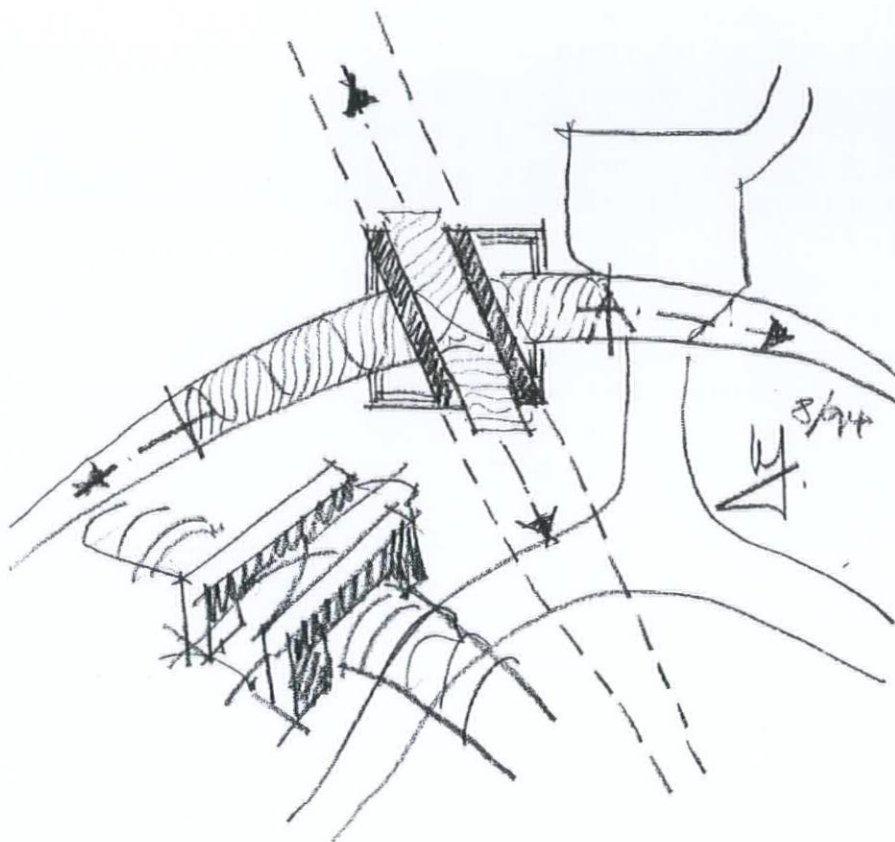
H.G.Esch P.5扉、P.50

Klaus Frahm P.14、P.15、P.22上、P.23上2点、P.
24上、P.26上2点、P.26中左、P.27上下2点、P.28上、
P.30上2点、P.30下、P.32、P.33上下、P.34下、P.35左、
P.35左上下2点、P.36、P.37上下2点、P.38上

Heiner Leiska P.10上、P.11上下2点、P.16下2点、
P.17、P.18、P.19、P.21上下、P.26下、P.29、P.44上、
P.45上2点、P.46下、P.47上から3枚目、5枚目、P.
48上下、P.49下、P.50下、P.51、P.53、P.54上、P.54
下2点、P.55中、P.56上下2点、P.57上下2点、P.58、
P.61下、P.62-63、P.64上下、P.65上下、P.66、P.69上
下2点、P.71下

Hans-Christian Schiuk P.40下

W-D. Gericke P.47上



ベルリン・レールター駅のスケッチ

翻訳協力

尾崎澄子、櫻井義夫、山家京子、山下昌彦

清潔な環境が求められる施設の床材に！

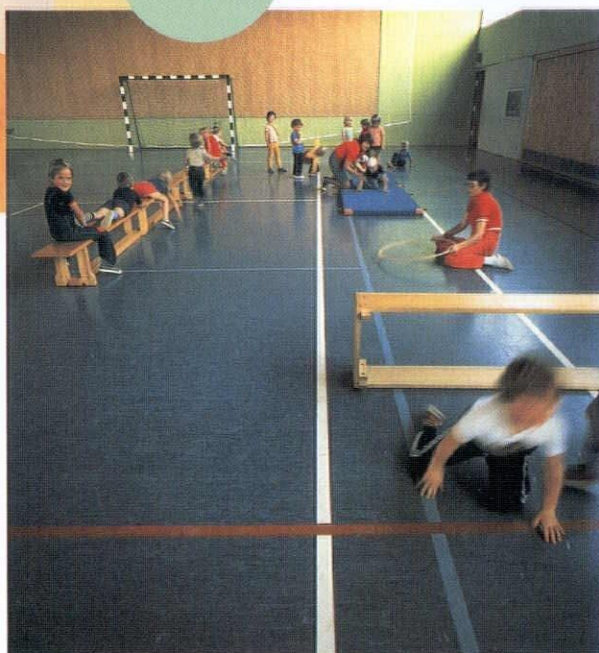
新・製・品



学校・公共施設に

病院・養護施設に

リリウムエースは100%天然素材。原料は亜麻仁油をはじめとする天然素材から作られているため資源環境を害さず、廃棄時も生分解し土にかえります。また、雑菌を寄せつけず、難燃、耐久、帯電防止性にも優れています。リリウムエースは、やさしさと強さをもつ、これからの社会にマッチした床材です。



滅菌性

天然亜麻仁油の強い滅菌性が黄色ブドウ球菌、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)に対し、優れた滅菌作用を及ぼします。また、カビの発生を防ぐ防カビ作用があります。

耐久性

耐摩耗性、耐キャスター性など優れた耐久性があります。

難燃性

難燃性が高く、また燃えても有毒ガスを発生しません。病院・養護施設に向いています。

防音性

防音性にも優れているため、歩行音も低く押えることができます。

帯電防止性

帯電性がないのでコンピュータールーム等にも適しています。静電気が発生しにくいので、汚れが付着しにくく清潔な床環境を保ちメンテナンス性に優れます。

用途

学校・幼稚園等文教施設、病院・養護老人ホーム等医療福祉施設、庁舎等公共施設の一般室や廊下、デパート・ショッピングセンター等の商業施設のコナコース、通路、売り場など。

天然リリウム床シート

リリウムエース

寸法/2.5mm(厚さ)×2,000mm(幅)×30m巻(長さ) ※カットは5m以上1m単位 重量/3kg/m² 色数/常備在庫品22色 受注生産品5色

ときめきの生活空間をサイエンスする

ロシール工業株式会社

●本社/〒130 東京都墨田区緑4-15-3

TEL.03(5600)1821

●大阪支店/〒532 大阪市淀川区西中島3-9-13 大北ビル

TEL.06(304)2700

●営業所
札幌 TEL.011(531)2602 大宮 TEL.048(664)1511 岡山 TEL.086(231)6011
青森 TEL.0177(77)1155 千葉 TEL.043(246)5851 高松 TEL.0878(31)4177
仙台 TEL.022(265)4771 横浜 TEL.045(662)7370 広島 TEL.082(211)2700
新潟 TEL.025(243)3791 静岡 TEL.054(251)3712 福岡 TEL.092(472)5857
金沢 TEL.0762(92)1161 名古屋 TEL.052(935)7063 鹿児島 TEL.0992(58)6571

SDレビュー-1996

第15回 建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

募 集 要 項

〔募集対象〕

実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア、国外に建つものも含める。
但し、応募の時点で既に完成しているもの、雑誌などに発表済みのもの、
実施の見込みが全く無いもの、コンペの応募作品(公開、指名、入選、落選を問わず)は対象外とする。
応募作品点数は原則として一人一点に限る。

〔応募者の資格〕

特に必要なし。

〔提出物〕

プレゼンテーション:

1. 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等、特に制約はなく、各自選択すること。
表現方法は自由であるが、プレゼンテーション
それ自体の技術や密度は、審査に当たっての
主要な評価の対象とはされない。
2. プロジェクト名、建築用途、施主名(事業主体名)、
工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、
建築面積、延床面積。
3. 400字以内の設計趣旨文(省略してもよい)

以上をA3判用紙(420×297mm)4枚以内に
まとめたもの、パネル化は不可(クリアファイル
等に入っている場合は審査時に取り外します)。
設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。
2, 3は添付書類に含めずと共にA3判用紙に
記述することによる。

添付書類:

プロジェクト名、応募者(=設計者)名・フリガナ、
応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所
(以上、組織の場合は、その担当者について明記)、
応募者への連絡先(自宅か勤務先か明記のうえ、
郵便番号、住所、電話番号、FAX番号)、共同設計者名、
以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

〔応募の受付〕

1996年7月11日(月)より7月8日(月)
郵送または持参のこと。(持参の場合は平日の
午前11時から午後5時まで。郵送は当日消印有効)
受付後、受領通知を発送いたします。
提出後10日以内に通知が届かない時は、
SD編集部へお問い合わせください。

〔提出先〕

〒107 東京都港区赤坂6-5-13
鹿島出版会SD編集部 SDレビュー係
TEL:03-5561-2555 FAX:03-5561-2565
(地下鉄千代田線赤坂駅より徒歩5分
鹿島建設赤坂別館4F)

〔主催〕

鹿島出版会SD編集部

〔入選通知〕

前記の審査員により15点前後が選抜された後、
入選者のみに7月下旬までに書類にて通知する。

〔提出物の返却〕

提出物(図面、添付書類等)は、1996年8月23日から
9月17日までの平日午前11時から午後5時までの
間に、鹿島出版会SD編集部まで直接受取りに
来られた場合に限り、返却します。但し、
梱包材、クリアファイルなどはお返しできません。

〔入選者の出展〕

入選者は通知後、指定期間(約40日間)以内に、
展覧会に出展するための図面、模型、その他の
プレゼンテーションを製作し、後日指定の
日時、場所に搬入する。
この作品は、SD1996年12月号に掲載され、
誌上発表される。入選者には製作費用として、
一律5万円が支払われる。

〔審査員〕

香山壽夫 (建築家、東京大学教授)
渡辺邦夫 (構造家)
内藤 廣 (建築家)
妹島和世 (建築家)

〔SDレビュー1996入選展〕

東京展
期間:1996年9月中旬—10月上旬(予定)
会場:東京都渋谷区猿樂町18-8

代官山ヒルサイドテラスF棟

アサクラギャラリー

大阪展

期間:1996年10月(予定)

会場:大阪府南河内郡河南町東山

大阪芸術大学芸術情報センター

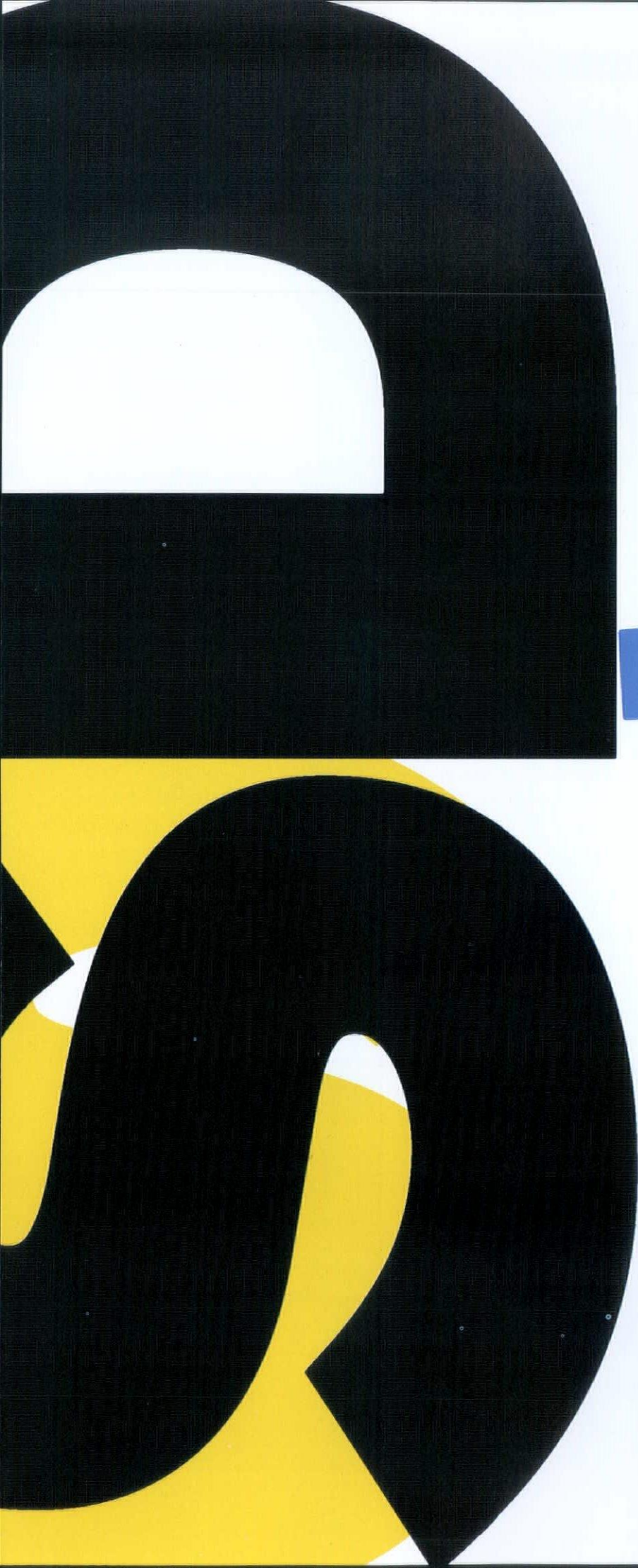
〔誌上発表〕 SD1996年12月号(予定)

〔鹿島賞、朝倉賞、SD賞〕

入選展に展示された作品の中から、3点を選び
鹿島賞、朝倉賞、SD賞として記念品を贈呈します。
発表はSD1996年12月号誌上にて行う予定。

〔お問い合わせ〕

SDレビュー1996についての御質問は、
SD編集部へハガキまたはFAX(03-5561-2565)
にてお問い合わせ下さい。



REVIEWS

The 15th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

増殖するグレムリン——自販機と仲良くする方法

照明探偵団・連続実践講座の第3回目は、2月29日、「世紀末の辻行灯」—日々増殖する自動販売機の光に未来都市を想像しよう—というタイトルで、劇作家・演出家の如月小春さんをお招きして開催された。

今回は、会場である東京デザインセンター・ガレリアホールに150枚の座布団が敷き詰められ、参加者はこれに着席した。これには賛否両論あったが、私たちの意図したことは、参加者がもっと自由に発言でき、親近感を持って臨める芝居小屋風の雰囲気をつくりたい、ということであった。その甲斐あってか、また如月さんという個性に助けられてか、今回の講座は、終始、なごやかで親しみやすいものになった。

照明探偵団が90年にSD誌上に連載を開始した時に、光の犯人さがし探偵調査の筆頭として目を向けられたのが、自動販売機だった。何故、自動販売機だったのか。SD照明探偵団からの引用になるが、今一度紹介する。「私たちは自然に出来上がった夜の街を、まず街路灯以外の街明かりに注意して観察してみた。残業中のオフィスの窓明かり、電飾ネオン看板、流れる自動車のライトや信号機の明かりさえ、かなり影響力のある街明かりを構成している。しかしその中で、特に多くの感動と訳もない苛立ちの両方をともないながら強く眼に入ってきたのが、自動販売機の勇姿だ。」そして、彼らは面出団長によって「世紀末の

辻行灯」と名付けられた。日本の都市の代表的な風景をつくり出している自動販売機にスポットを当てるのが、私たちをとりまく日常生活の光環境を考えるのに最も身近なテーマなのだ。

講座は、如月氏と面出の対談で、このように原風景化している自動販売機にまつわるエピソードから始まった。誰もが日常的に接している、何気ない都市の風景の断片を、耳をすまし目をこらして戯曲やエッセイに書き綴ってきた如月氏は、奇しくも、東京に駐車場や空き地が増え始めたパブル前の80年に、そこに佇む自動販売機をテーマにした戯曲「Another/他者」を完成させている。

「自動販売機はのさばっているくせに受け身。人間が行ってこちらからアクセスしないと自分からは何もできず、どうしていいかわからない、その空白感が都会の日本人を思わせる。群れているのに孤独。自分がその風景にはまっていないということをわかりながらそこにいる辛さ。」(如月氏)

対話の中で、便利で安全という高度成長的な価値観からもう少し押し進めて、快適性を追求すべきだ、としつつも、芝居の公演先などでは、まず自動販売機とコンビニエンス・ストアの在処を確認して安心する。自販機もコンビニも見当たらない街にいくと、どう生きていったらいいか迷ってしまうほど。この

ように取り上げてテーマにしなければ、あまりに身近すぎて都市の光源であるということさえ意識しない、と都市の生活者をまさに代弁する形で如月氏の思いが語られていった。自動販売機は、本当に糾弾されるべきイライラ、ガラガラの光の害をまき散らしているのだろうか？

探偵レポーターの森が、自動販売機が棲息・群生している様々な光景の調査結果を発表した。街路灯の数よりも遥かに多い、ということで5年前に調査した青山通りを追跡調査してみると、自動販売機の台数は更に増えて、殆ど倍近くになっていることがわかった。幹線道路よりも、細街路に増加している。まさに増殖するグレムリンだ。それでも、最近では自動販売機も薄型のものや、控えめのデザインのものが見につくようになっていて、環境庁の開発に基くソーラー自販機の実証実験なども進んでいる。

また、自販機を照明器具と見立てた時の光学特性や、照度分布の紹介、更に明治時代に初めて登場した木製自販機なども紹介された。自販機の年間消費電力は、3524キロワット/時で、一般家庭一世帯分の3153キロワット/時を上回る莫大なものである。また、自販機の明るさを光の量(光束=ルーメン)に換算して、独身の探偵団員のアパートのそれと比較してみると、アパートは5550ルーメン、自



ゲストの如月小春さんは自販機のお友達



ゲストとコーディネーターの対談

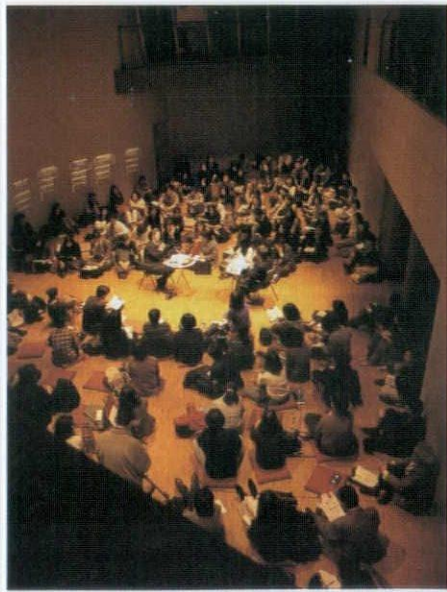


夜景ウォッチングツアーを報告する探偵レポーター

SD9605
76



会場からの積極的な意見も



会場全景

販機ははるかにそれより明るい6570ルーメンという結果が出た。何たる電気エネルギーとその光の量なのだろう。

しかしながら、屋外に並ぶ自販機は治安のよい日本独特の風景であり、飲料の売上げの半分が自販機に負っているともなれば、無責任に自販機に死刑を宣告するわけにもいれない。現に、自販機が暗がりの中の唯一の明かりとなって、歩行人をほっとさせる役割をも果たしている場合も多くある。

日本を訪れる外国人が、夜の街に浮き上がる自販機の群に驚嘆するが、同時に彼らが共通して感心することは、これだけのものが路上に放置しておけるとは何と安全な国なのだろう、ということだ。真夜中でも飲み物や煙草が簡単に手に入る、という利便性を歓迎しない人は少ないだろう。ただ、「パリの友人宅に宿泊したとき、景観上の問題で洗濯物を外に干してはいけない、という決まりがあると知ってびっくりした。(如月氏)」という事実からも察せられるように、果たして自販機の光の乱立が、欧米の都市で歓迎されるかどうか。また、自販機の立ち並ぶ景色が実際に存在しうかどうか。

この疑問に答えるために、海外の各都市の風景に自販機群をコラージュした景色をスライドで紹介した。例えば香港、下町風のカオスの風景の中には、白く輝く自販機は何の違和感もないが、暖かい白熱色の光に包まれた

リヨンの街並みにコラージュされた自販機は、明らかにまわりの心尽くしの景色に調和しない。そこで次には、自販機の真っ白な光をリヨンの街の暖かい光に修正してみると、これがけっこう馴染んでくる。色にあわせてコラージュして景色になじませてみる。風景のコラージュは、街角に群生する日本の自販機の光が景色の大きな要素となつてのさばっているかが理解できた。

「日本の家の中っていうのが 阪神大震災で明らかになったが、箱状のものに何もかもつまこむことが今の日本の豊かさだから、街に自販機があっても変に思わない。(如月氏)」このような現状の中で、その豊かさや便利さが益々求められてくるとすれば、照明探偵団は、自販機と仲良く共存するためにどうすれば良いのか。それを考えるために、参加者を含めたディスカッションの中でいくつかの方向性への提案がなされた。

一つは、つまらない街路灯を喰い殺すくらいの心持ちで、自販機を照明器具として捉え、街の構造的な光として積極的に配置すること。これは、照明探偵団が数年前にアクシス・ギャラリーでの展覧会で紹介している、自販機が電話ボックスなどとも一緒になりながら、広場的な屋外空間を形成してゆける、街の中の環境の道具として積極的に活用するための案である。また、ベルリンのクーダム通りのように、歩道部に設置された商業用独立ショ

ーケースが、夜間には歩行の明りとして寄与している例などは、自販機が公共空間の快適な光に欠かせないものとなり得ることのヒントとなる。「カメレオン自販機」とでも名付けようか、自販機を設置する環境に応じて自由自在に明るさと存在感を調節できるような仕掛けを持ったものである。

更に、自販機を徹底的に機能を超えたアミューズメント・グッズとして、快適で楽しいものに変身させることも大切だ。カメレオン自販機は、時と場合によっては面白い遊び道具に変身する。「自販機の姿がどこも一緒というのは無粋の極地(如月氏)」。大正末や昭和初期の自販機には、箱全体が看板兼用となっていたユニークなキャラクター性を持ったものや、菓子を買うと活動写真が映り、蓄音機が音楽を鳴らすというものが存在したらしいが、そんな遊び心を持った、寄り道をしたくなるような自販機が道行く人を楽しませてくれるのではないのか。

自販機がもっと進化した辻行灯となり、利便性・景観性・快適性の全てを備えた優れた屋外オブジェとなって新たな主張をはじめるとき、日本の街の景色がかなり変化してゆくに違いない。彼等はその可能性を十分に秘めているのである。

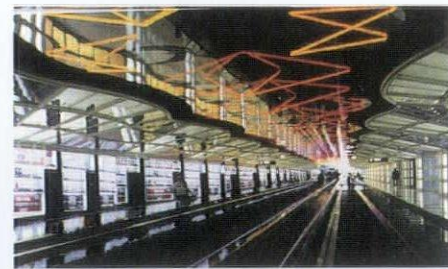
●葛西玲子/LPA



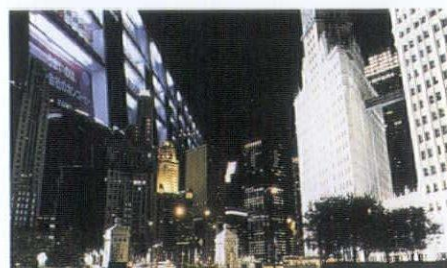
リヨンの街には真っ白な自販機の光はとても違和感がある



こんなふうに自販機の色味を変えると、景色に馴染む



シカゴ、オヘア空港の通路に自販機の壁をコラージュ



シカゴの街並みに急に自販機の拡大ビルが出現



ベルリン、クーダム通りのエレガントな商業用ショーケース

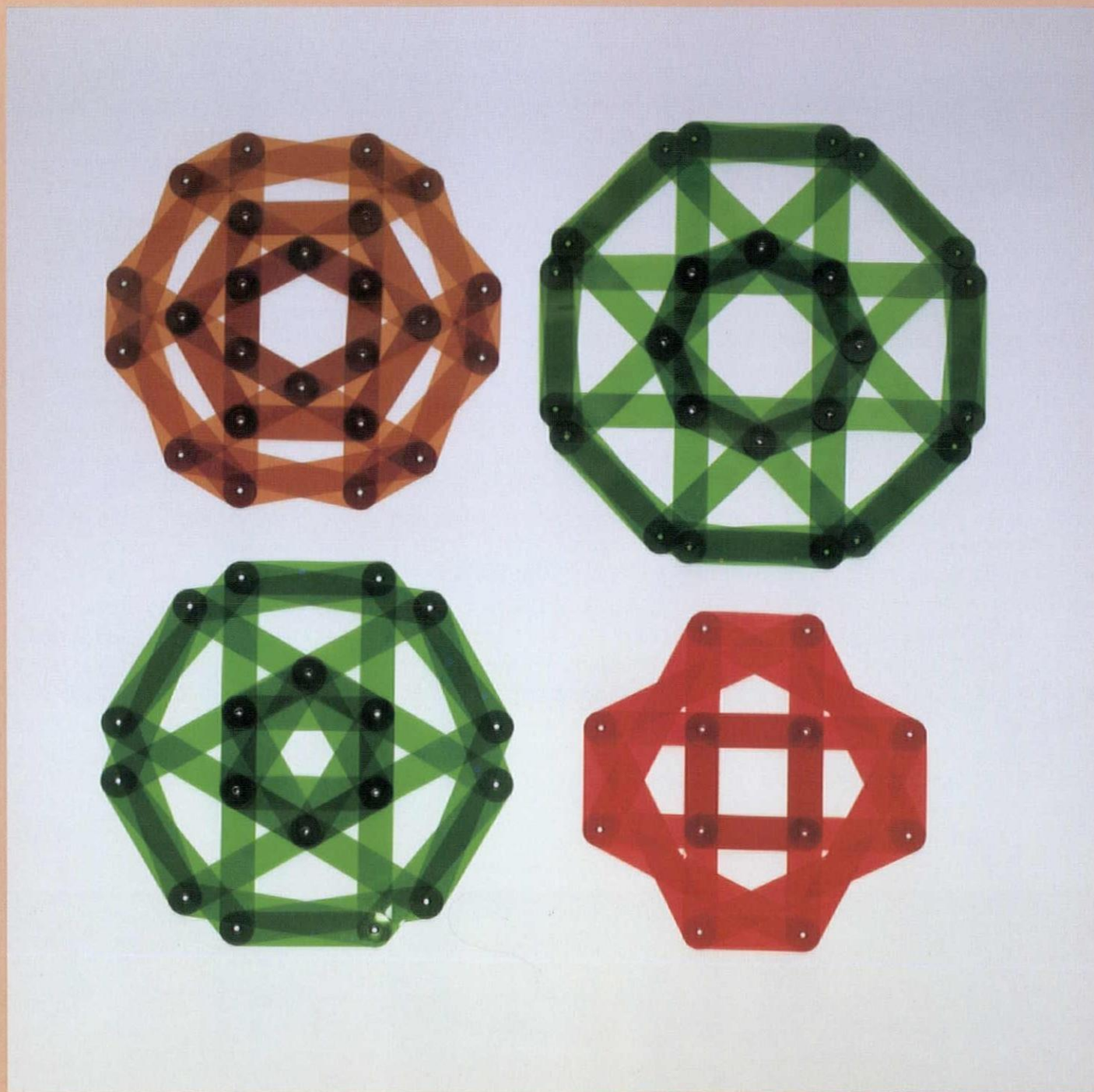


普段お世話になっている見慣れた風景



戸村 浩

MOVE FORM——TORUS：不易・変易・簡易

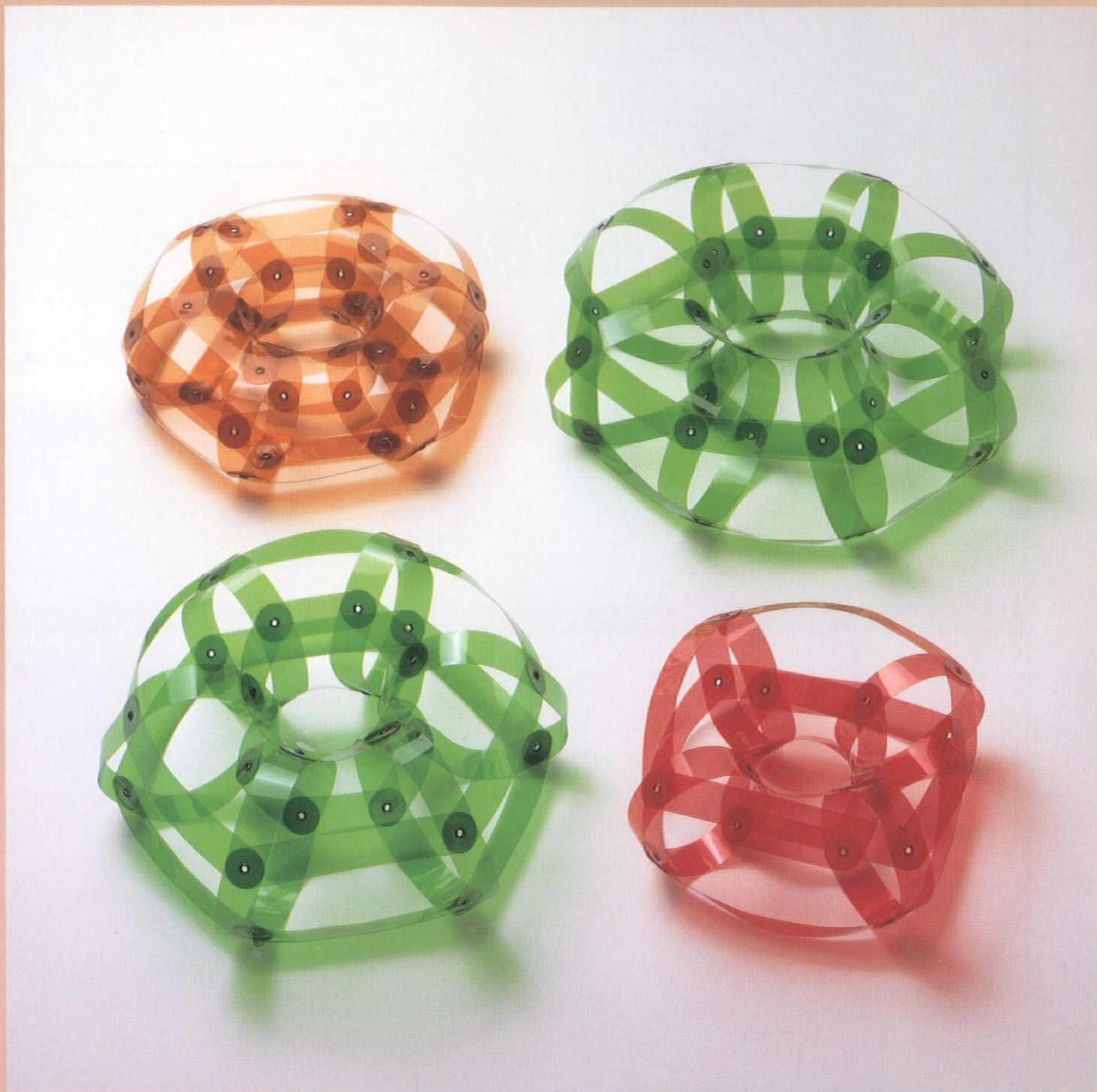


ムーブ・フォルムのドームで始まった「トムの時空形象学」も、ひとつの区切りを付けなくてはならない。この MOVE FORM の機能と形態の変容を追い始めたら限りがないからである。

ドームは球形の表皮であり、まだ、3次元空間の平面的解釈の産物である。貴重な球の玉を得るために、岩石から球形を削り出すように、大空間を得るために球面の皮膜を建造する。それは大変困難なことだったため、空間全体より、表皮である球表面を仕上げ、ドームの皮膜構造体をうまく設計することに、多くの注意と労力が注がれてきた。

それは、多面体のような幾何学図形の数学的定義が、平面的であり、また、我々の空間意識と感覚が、元来、2次元的存在であることに起因する。しかし、図形における、図形あるいは形態の表皮と、その空間には密なる関係があり、今や、我々の興味と空間感覚は、やっと、図形の外皮より奥へ、その空間内部へと移りつつある。

以前、立方体の6面の正方形を引き剥がしたらどうなるか、という素朴な疑問を提起したことがある。同じように、もし、球体から球面を剥ぎ取ったならば、その球体はどうなるのだろうか。風船やシャボン



玉のように、その薄い球面が弾けたら、球体の空間は一瞬の内に無くなってしまうのか。それとも、タマネギの皮をむくように、むいてもむいても、新しい皮が出てきて戸惑う、猿もどきの寸劇を演じてしまうのであろうか。それは、我々の平面的な空間認識を新たにしなければ、なんとも言えないであろう。

凸多面体も凹多面体も、また、ほとんどの形態は位相的に球形へと集約される。球は、円を直径のまわりに1回転しても得られ、その球をX軸の回りに1回転してやると、位相幾何学で有名なトーラスが出現する。今回のムーブ・フォルムは、球よりトポロジカルで複雑なその円環体のたたみと、広げの一例である。だが、その原理は単純だ。

かつて、この MOVE FORM の個展批評を書いてくれた美術評論家の中原祐介氏は、その無限な展開を見せる世界に驚嘆しながらも、こ

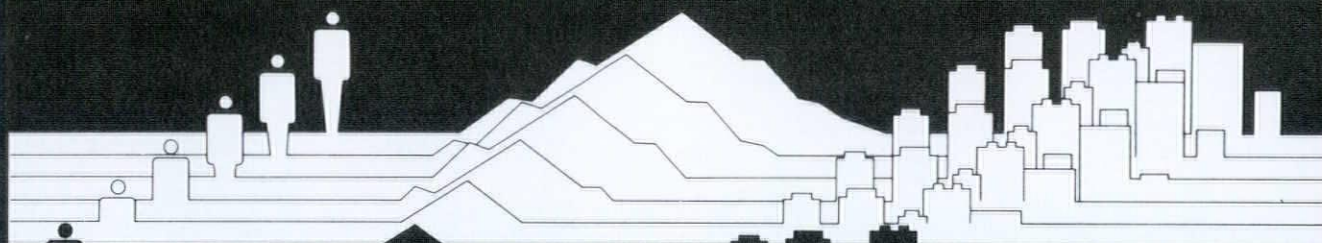
のように簡単な原理のものは、今日では流行らないと評してくれた。確かに、MOVE FORM は、蕉風俳諧で重んじた「不易流行」の不易と変易に加え、まさに、簡易である。

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也」とは、芭蕉の「おくのはそ道」の冒頭の句だ。それは、李白の詩からきているように、蕉風俳諧の「不易流行」も、中国の易の思想の流れを受け継いでいる。めぐりめぐり運行する日月が、字源だともいわれるこの「易」は、不易・変易・簡易の三義を本質としている。森羅万象が変化流転するのは、不変の法則であり、それはまた、簡単明白なことであると説いているのである。今までの MOVE FORM の作品群も、これら不易・変易・簡易の姿であり、三匹の蜥蜴の住家であった。

●とむら・ひろし／造形美術家

SANKI

人を育む。自然を守る。産業を支える。
三機のエンジニアリング技術は多彩。



人間活動のすべてを支える社会環境を一体化させ、
そして調和させようとする三機の総合エンジニアリング技術。

快適で機能的な都市生活、
合理的で先進的な産業活動、そして、それを取りまく自然。

三機は、これらを単独ではなく、
総合技術を通して見つめ、有機的なひとつの流れを実現しようとしています。

多彩な技術を結び、
新たなシステムを展開している三機。



三機工業株式会社

本店 東京・日比谷・三信ビル TEL.(3502)6111

支店 北海道・東北・北関東・東関東・横浜・名古屋・北陸・大阪・
神戸・四国・中国・九州

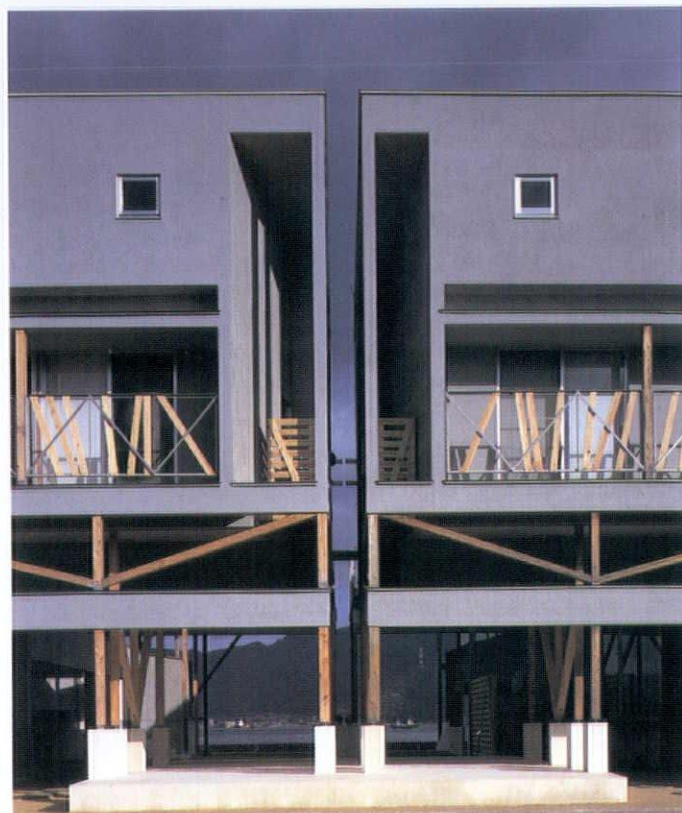
海と建築

鈴木了二の最新作

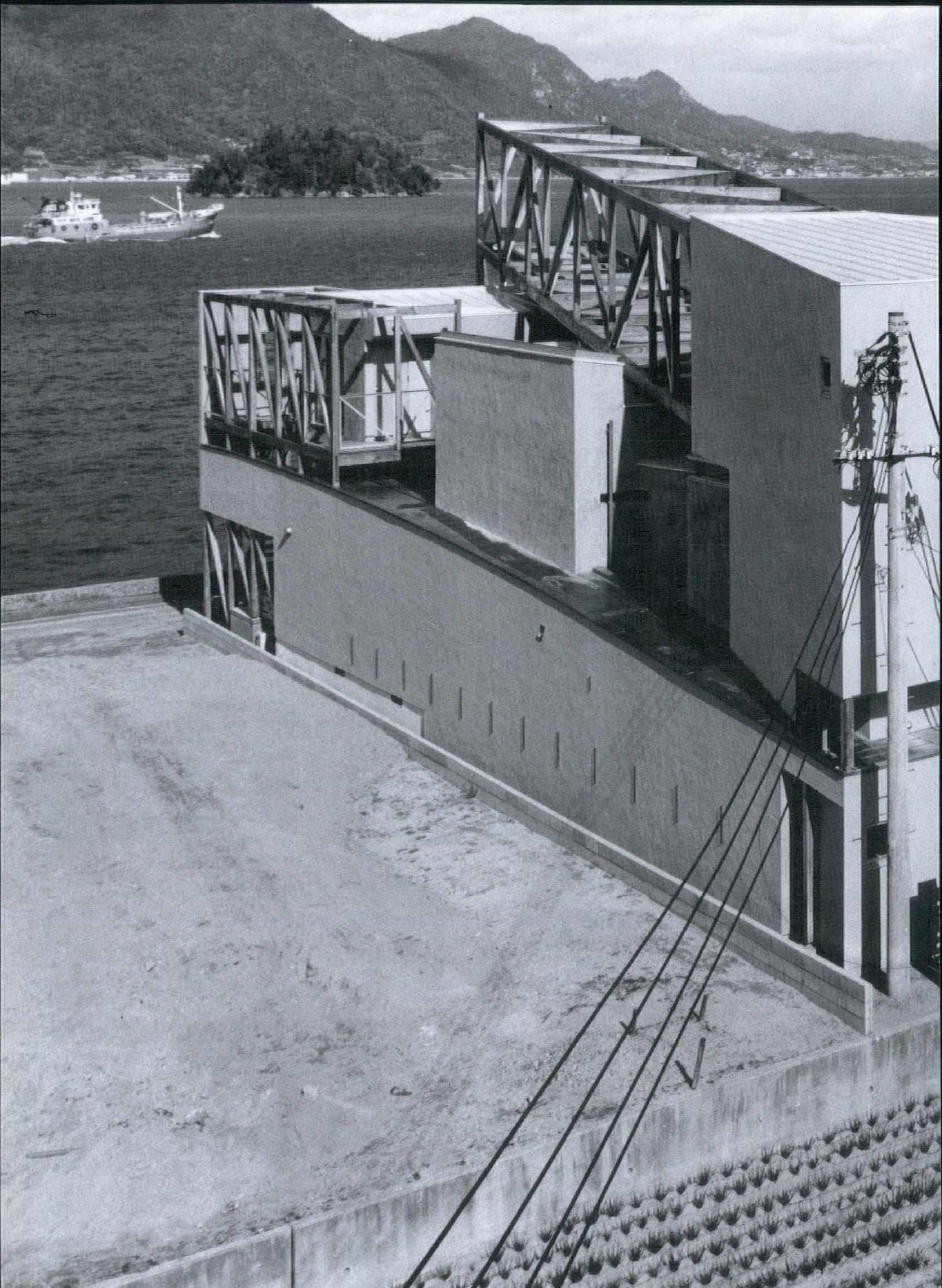
物質試行37：佐木島プロジェクト (p.82～p.97)

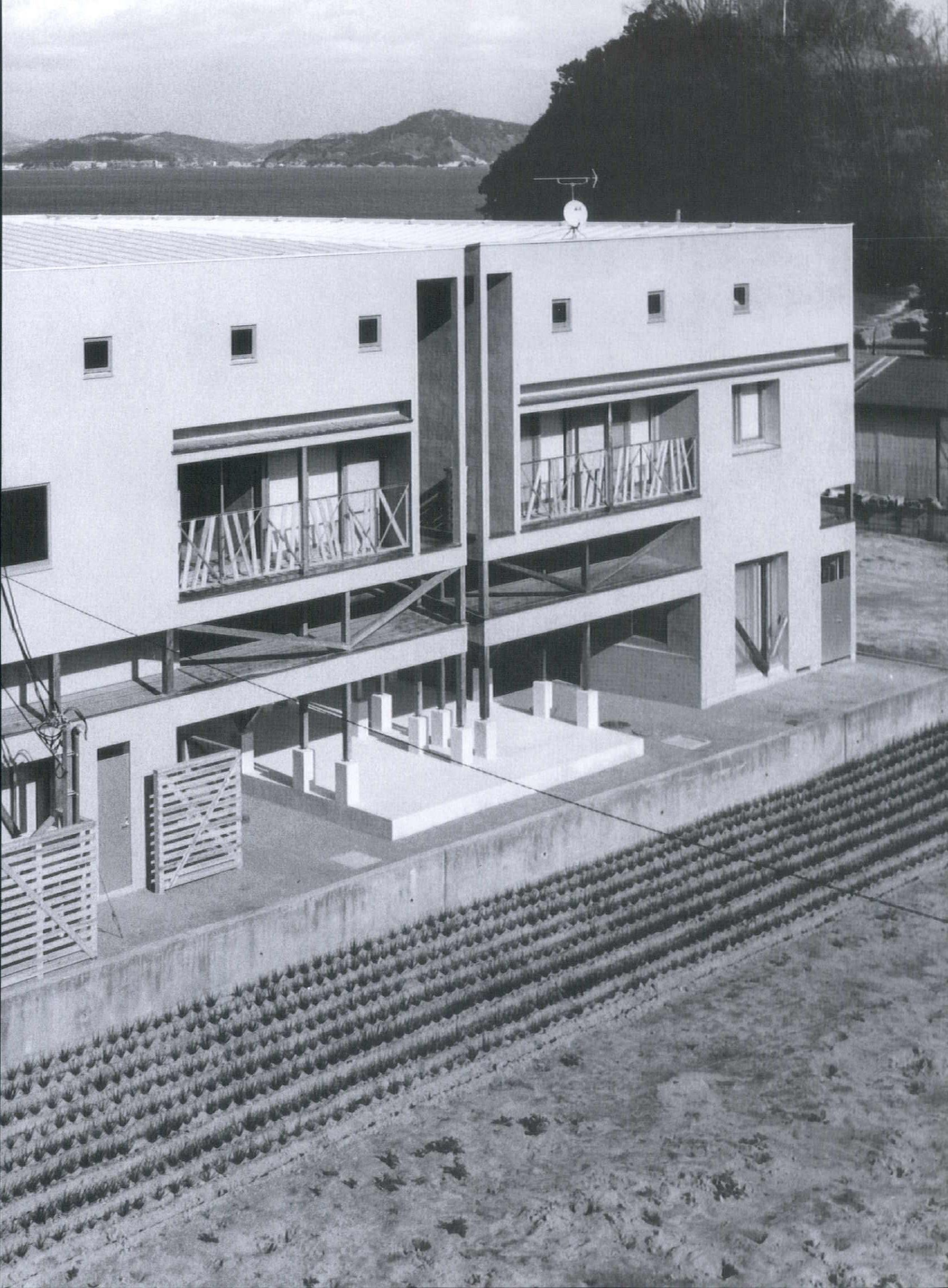
+

物質試行32：佐木島の住宅 (p.98～p.104)



写真＝安斎重男

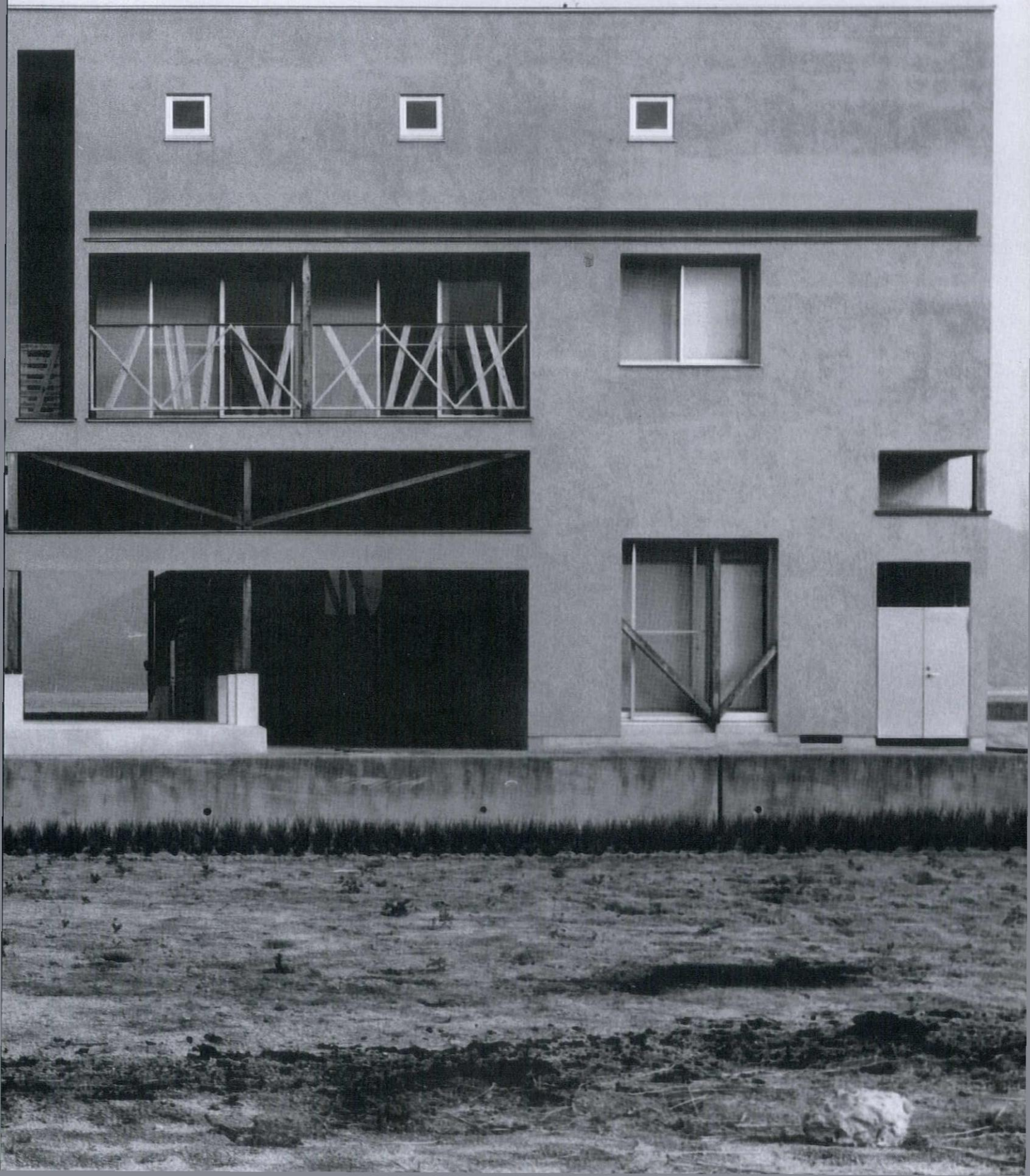


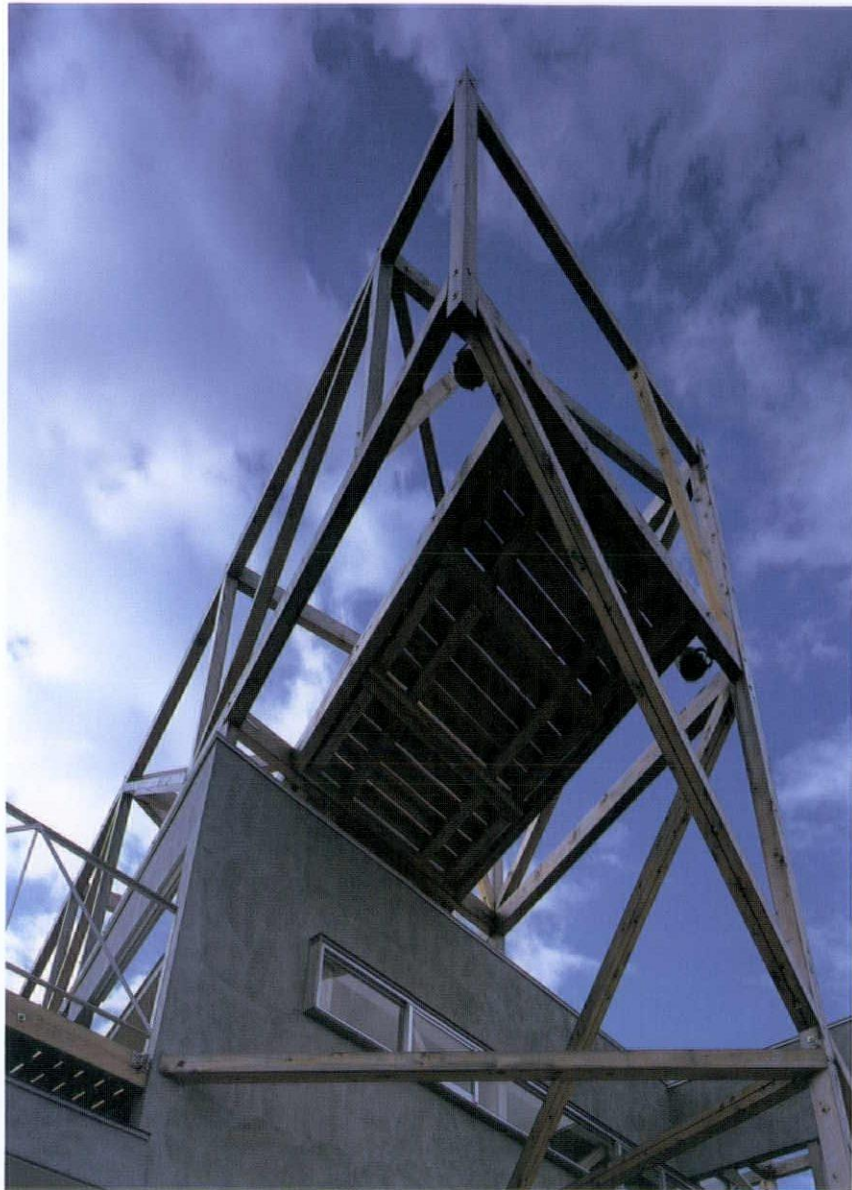




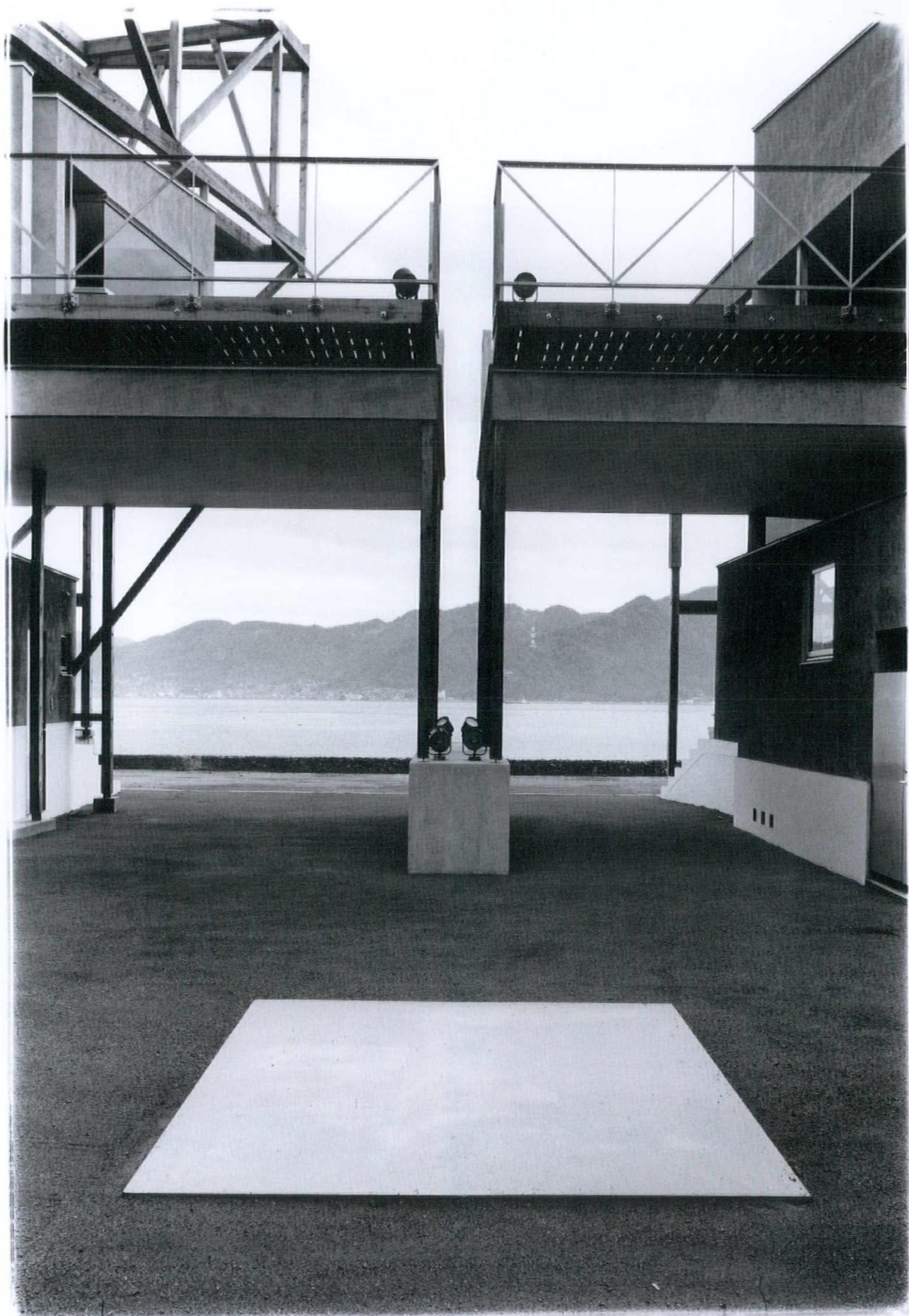












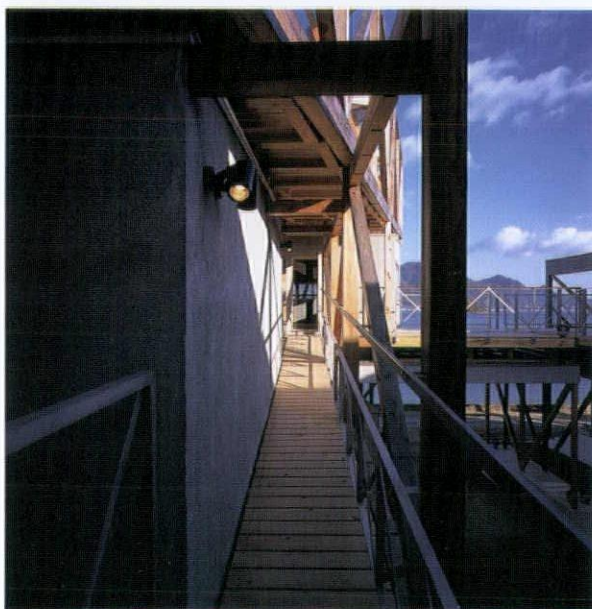
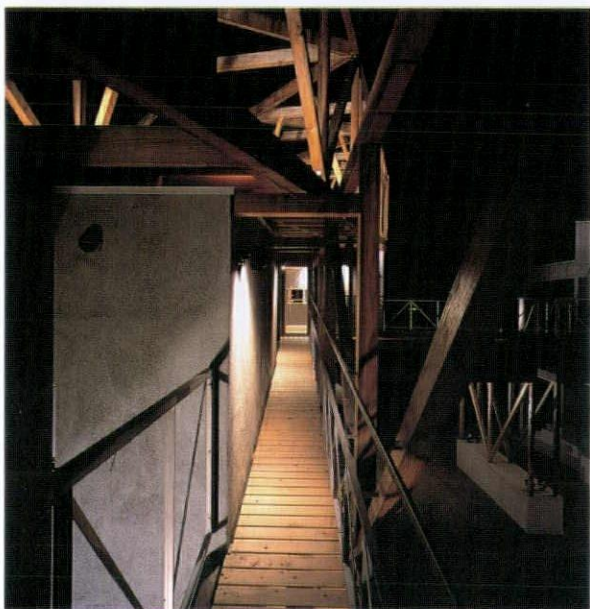
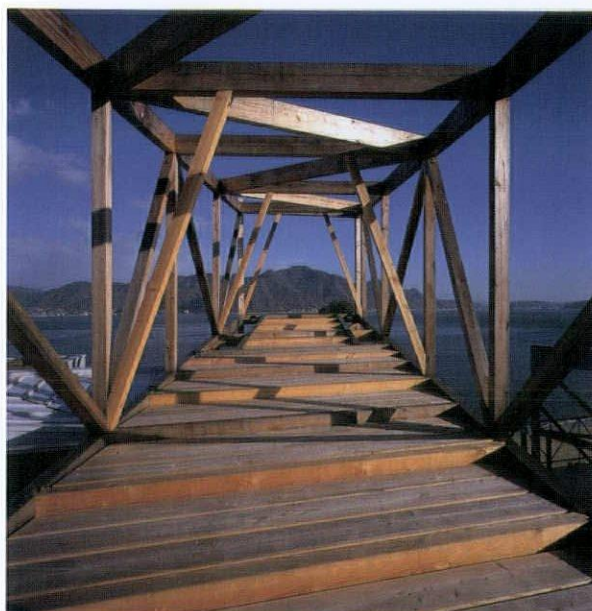




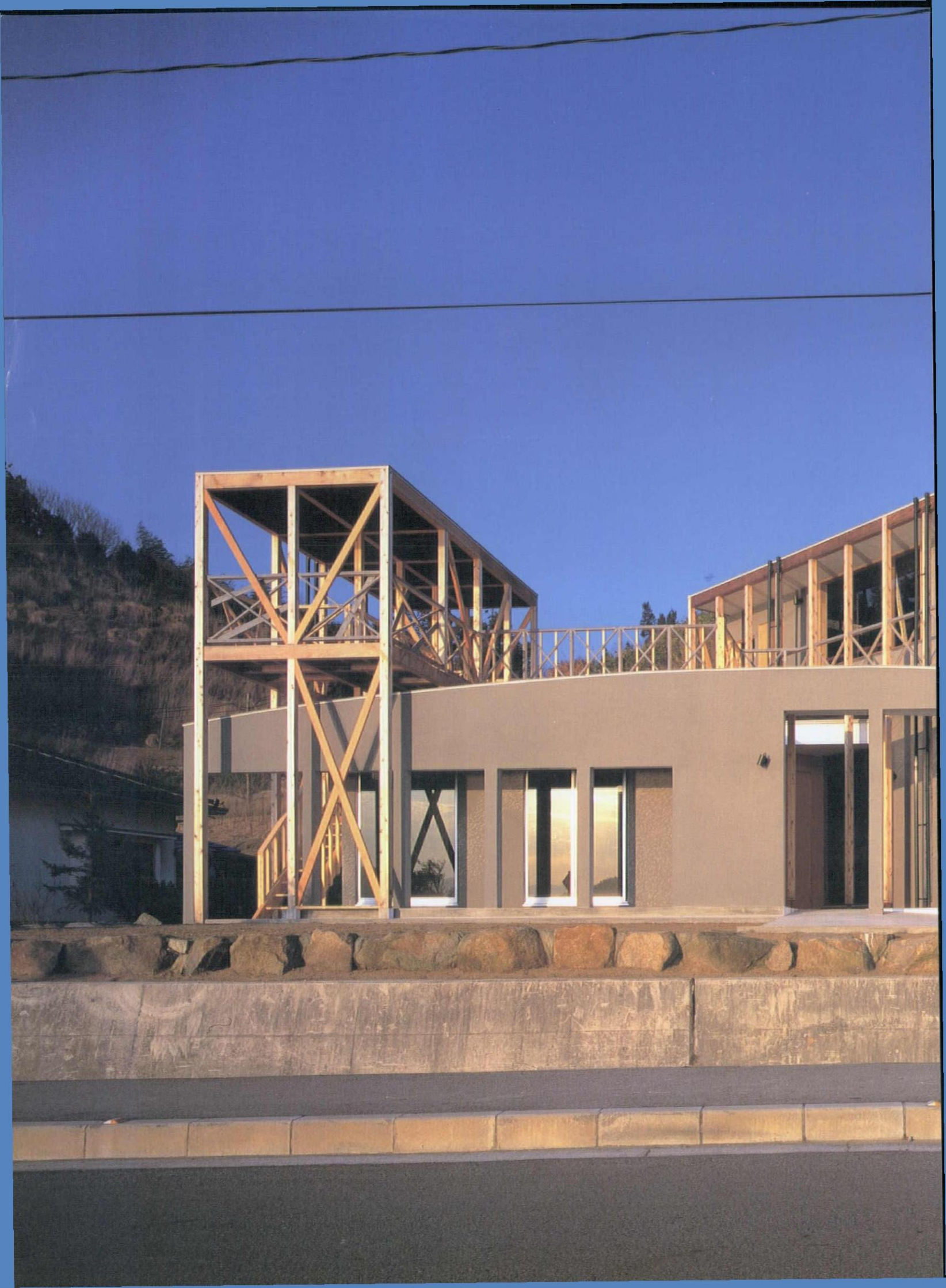




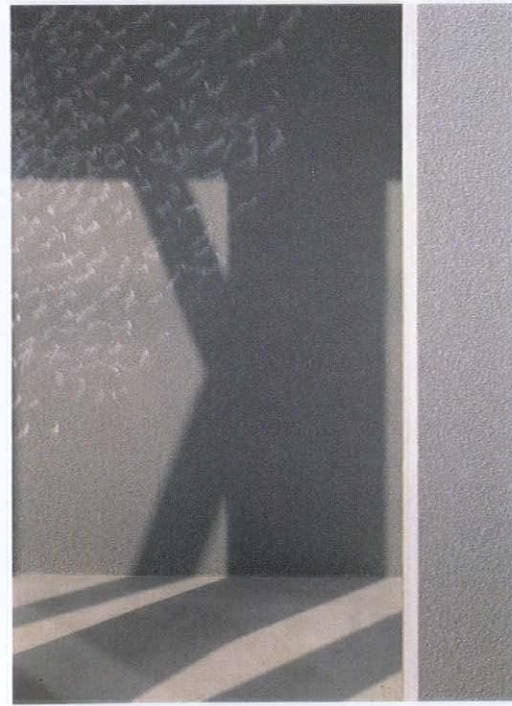
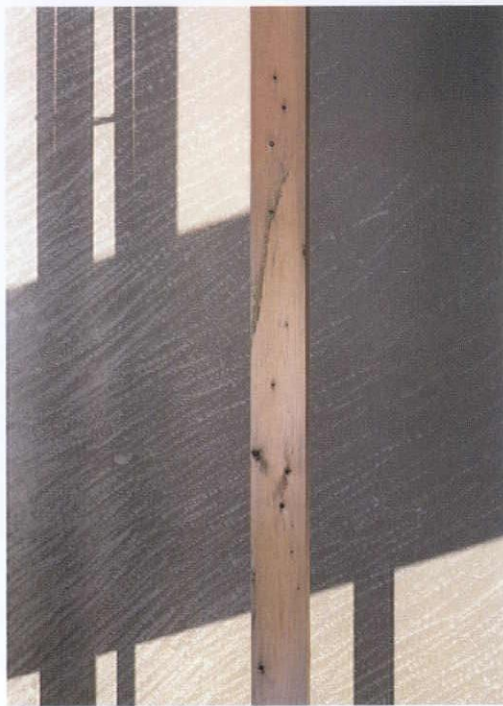
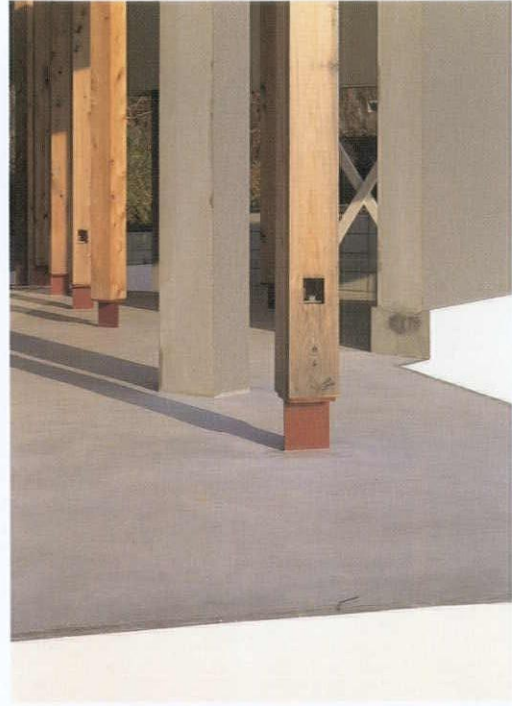


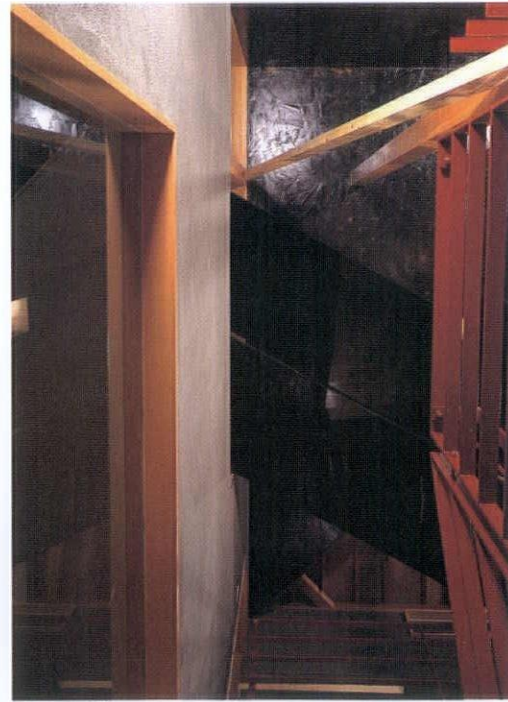
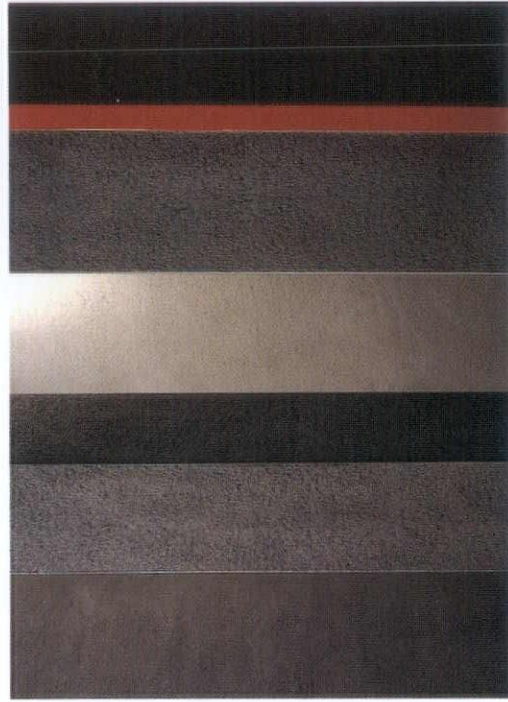












飯島洋一

2月の末、鈴木了二の〈佐木島プロジェクト〉を見るために、瀬戸内海の小島、佐木島を訪れた。この島には以前にも来たことがある。〈佐木島プロジェクト〉の第1期と〈佐木島の住宅〉(1991年)を見に来たのだ。今度は約2年ぶりの再訪になるわけである。

〈佐木島プロジェクト〉は第1期と第2期に分かれていて、それぞれの段階でも個別に批評することが可能なのだが、今回再訪してあらためて実感したことは、やはりこの建築は現段階のように、全貌が現われてはじめて、鈴木意図なり、この建築の重要な意味なりが理解できるものだという点であった。第1期を見た時は正直なところ、ただ難解にしか感じられなかったこの計画も、今度の再訪で全貌を眺めて、はじめてその意図に触れ得ることができたように思う。

海沿いに建つこの作品は、木造の建築で、外観はモルタルで仕上げられ、グレー色の静かなデザインとなっている。中庭を中心とする外観の印象は、あえて強い自己主張を見せるものではない。むしろ、周囲に溶け込むようなおとなしいものだといえよう。唯一とっていい特徴的なデザインは、海に向かっ

て跳ね出したブリッジだろう。もちろん、随所に形態の相互貫入や噛み込み、ズレ、入れ子など、さまざまな要素は見出せるが、やはり最も特徴的なのはブリッジが海に向けて突き出ているさまである。

外観を眺めるだけでも、この建築には、鈴木了二という建築家の、作風の主要なエッセンスが数多く盛り込まれていることに気づかされる。たとえば、中庭を介して全体が流れてゆく手法は、〈大津町第二庁舎+タウンホール〉(1992年)や〈耕雲寺〉(1992年)、〈横浜国際客船ターミナル国際コンペ案〉(1995年)などの作品に見られ、鈴木最近の得意とする手法である。さらに、これは偶然なのだろうが、横浜のターミナルコンペ案は、海に向けて展開されている点も今回と似ている。第1期と第2期の2階の接合部分は、窓のサッシュが外へとズレ込んでいるが、この扱いは〈麻布EDGE〉(1989年)での手法のまぎれもない反復である。

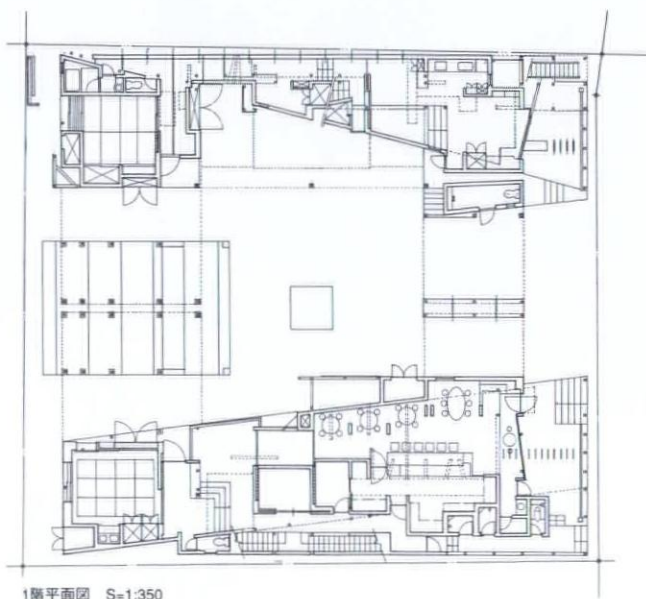
この傾向は内部空間でも少なからず引き継がれてゆくが、ただ私がこの建築において最も興味を引かれたのは、いま述べたような、鈴木意図としての建築だという点

にあるのではない。面白いと感じたのは、この建築の持つ不思議な「曖昧さ」なのである。しかし、それは文字通りに曖昧であるというものでない。むしろ、かつてロバート・ヴェンチュリが〈母の家〉でやって見せたような、「曖昧さ」に近いかもしれない。ヴェンチュリの〈母の家〉がそうであったのとまた別のあり方で、ここではモダンと古典が強く意識されている。それと同時に来訪者は、多分この建築に、ル・コルビュジエの〈サヴォア邸〉と通じるものを感じ取るだろう。平面図を見るとわかるのだが、この作品は〈サヴォア邸〉と同じく、正方形のかたちをしているし、規模的に見てもよく似たところがあるからだ。また、ここには1階にピロティがあつて、最上階には屋上庭園の代わりなのか、ブリッジが展開している点もよく似ている。

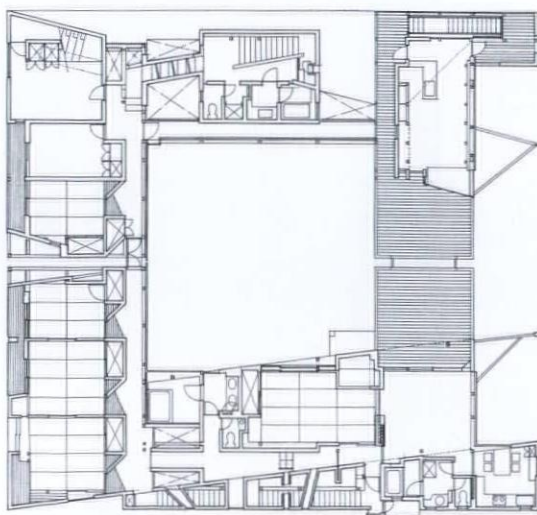
〈佐木島プロジェクト〉がモダンであり同時に古典的だというのは、そのように、〈サヴォア邸〉と同じく、基壇部、柱身部、頂部というような、古典の3段構成の系譜を備えていることに由来する。

とはいえ、ピロティ部分が歪んだような変形を施されていることからわかるように、

佐木島プロジェクト



1階平面図 S=1:350



2階平面図 S=1:350

鈴木の古典、あるいはモダンの踏襲はあらわなものとはいえない。古典を意識しているものの、それは巧妙にズラされたり、軋んでいたりするからだ。この建築は、さりげない方法で、しかし知的に過去の建築との応答を楽しんでいるかのようなのだ。

外観のこうしたありように比べると、室内の印象は一変したものとなっている。この室内に入った者は、そこに錯綜する複雑な迷路のような磁場を感じ、それに戸惑うはずだからである。外部で見たような曖昧なズレとは全く異なる喧騒と過剰さが、室内には満ちている。

室内の上方には、ところどころに割り貫いたような「窪み」状の「穴」が開けられ、そこから光が侵入してきて空間内部を膨らませているし、内壁にも横長のスリットのような「亀裂」が生じていたり、また内部に「門」を思わせる通路が入れ子式につくってあったりして、それらによって遠近法的な距離感が麻痺させられている。柱や梁も部分的に剥き出しになっており、途中で梁が切断されているところすらある。さらに外壁のある窓は奥行があまりにも深いため、窓というよりも、これもまた割り貫かれた「窪み」のように感じられる。

壁の厚み、採光としての窓という概念が、ここでは攪乱されている。つまり、この建築の室内では、窓が「窓」として、また壁が「壁」として成立していないのである。壁や窓といった各部位は、いわば輪郭や境界を失い、相互に溶け合ってしまうとしている。

い。この辺りの混融は、これも鈴木の過去の作品、例えば〈東久留米の住宅〉(1986年)や〈小金井の住宅〉(1989年)とも通じるものがあるが、ここではそれがより鮮明である。そのことは通路を歩いていても感じられることで、何かそれは通路というよりも、隙間や空洞を移動するような気分に近いのだ。

この定常感覚の麻痺は、一言でいえばある種の「空虚さ」、もっとわかりやすくいえば「場所的な拠り所のなさ」を人に与えるだろう。身体感覚や経験を否定してかかるようなやり方だ。だから、そこに長くいると、人々はある不安感さえ知覚するかもしれない。

ただ、室内の過剰さがより明らかになるのは、内部にいる時よりも、そこから開放された瞬間だ。幾何学的迷路を抜け出て、最上階の海に向けて一直線のブリッジに至った時に、それは最高潮に達する。目の前にあるのは海であり、ただ空間の限りない広がりなのである。

しかし、ことはそれで終わりというわけではない。注意深い人ならば、その開放された空間に、またしても別種の記憶を喚起されるはずだからである。というのも、その緩やかな段を持つブリッジを水平線に向かって進みながら(彼が以前雑誌の表紙で協同制作した「マンハッタン・トラス」を思い出す以上に)、人々はあのリベラの有名な〈マラバルテ邸〉を思い浮べるはずだからだ。

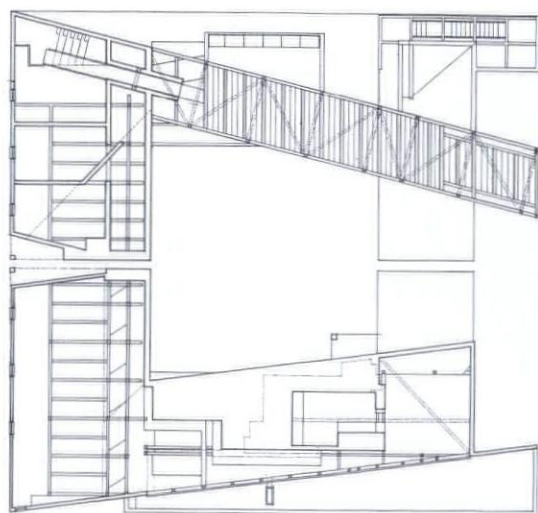
しかしそれは、リベラの〈マラバルテ邸〉ではなく、ゴダールの映画『軽蔑』の中の、あの「マラバルテ」のワンシーンという方が

より正確である。映画の中では、古代の神殿のような階段のある屋上は海に向けて消えていた。そのシーンがこの最上階で反復されていたのだ。この建築と映画に関しては、鈴木も著書の『非建築的考察』の中で触れているから、ブリッジの部分は間違いなくゴダールの映画への恣意的なオマージュである。

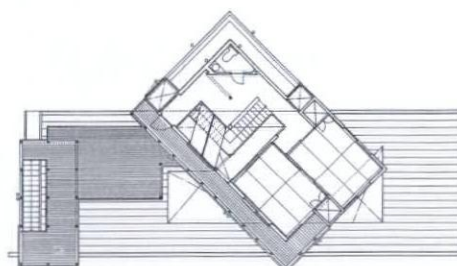
映画へのオマージュは、室内の空洞のような連続体とも異なる、鈴木の内面のノスタルジーを感じさせるところである。〈佐木島プロジェクト〉には、古典の布石があったり、そうかと思えば空洞のような乾いた室内が展開したり、映画へのオマージュやノスタルジーが登場したりと、さまざまなイメージが混在している。しかし、こうしたさまざまなエピソードの多様さは、単なるごった煮的なものともいえない。そこには時としてアイロニーやユーモアが見え隠れしているからだ。私はこの作品に触れることによって、鈴木了二の建築の面白さは、実はそうしたイメージの混在にこそ潜んでいるのではないかとあらためて思ったのである。

●いいじま・よういち／多摩美術大学助教授

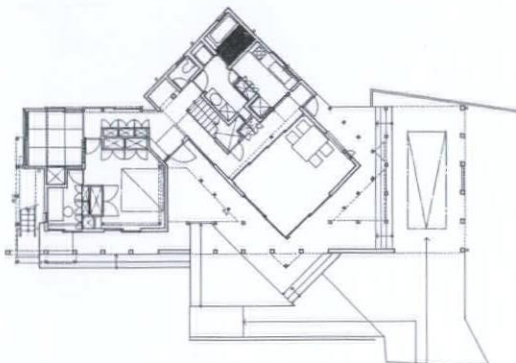
佐木島の住宅



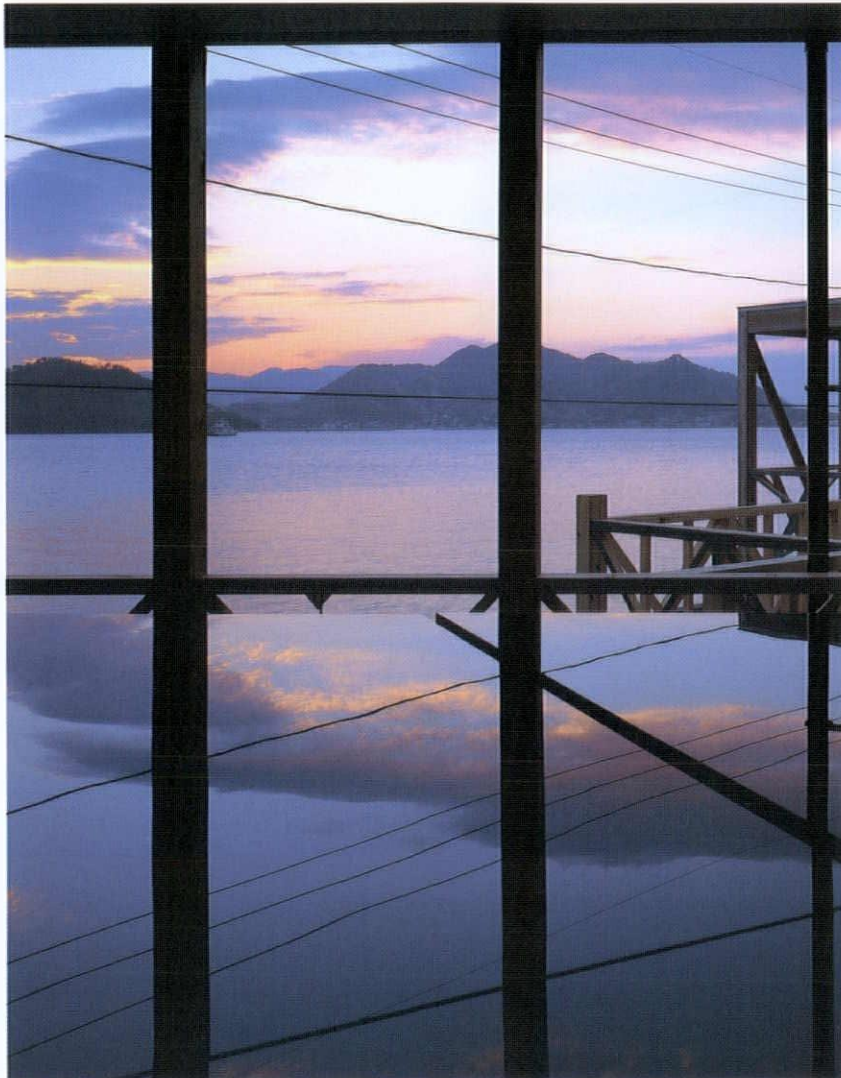
デッキ階平面図 S=1:350



2階平面図 S=1:350



1階平面図 S=1:350



第4回
時代の臨界／奉天ヤマトホテル
竹山 聖

ホテル文化研究会メンバー（執筆順）
角野幸博（武庫川女子大学教授）
永井良和（関西大学助教授）
橋爪紳也（京都精華大学助教授）
竹山 聖（京都大学助教授）
毛谷村英治（京都大学助手）
横川公子（武庫川女子大学教授）

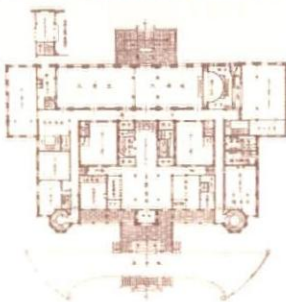
新天地にかけた夢／満州の皮肉と逆説

ラストエンペラーや文献を通してしか知らなかった満州という存在が、かつてそれがそこにあった場所を訪れることによって、不思議な臨場感をもって立ち上ってきた。それは大東亜共栄圏という、理想化されたイデオロギーに糊塗されてであったが、ひとつの可能性に満ちた大地としても確かにそこに存在したのであって、軍部はともかく、この新天地にわたり、その空気を呼吸した人々は、狭苦しい日本を離れて、さながらアメリカ大陸に新世界を見たヨーロッパの人々のように、ごく素朴な感覚として、そこに新世界の可能性を見たのだったろう、ということを感じとることができた。それは現代史における悪夢であったが、思えば世界の歴史は民族移動の歴史であって、アレクサンダーもフビライもナポレオンも悪夢をふりまいてきた。たとえ悪夢であったにしても、そこに素朴な夢をかけた人々もまた、どのような時代であれ、存在したのであるということも。

いけどもいけども大草原である。その中を悠々と流れる川では、洗濯をしている女性や水浴びをしている子供、のんびり車を洗っている男たち。堤防も何もない裸の川である。地平線にゆっくりと太陽が沈む。日本では決してみられない豊かな大地の風景。歴史的な判断はとりあえず括弧にいれるとして、この地に雄飛した人々の気持ちもわかる気が、理屈抜きで、した。おそらく今の時代に海外に活躍の場を求めるくらいの人々であるなら、その多くは、この時代であれば、旧満州にわたっていたのではあるまいか。有能な建築家もまたそうであったろう。いくつかの建物を訪れてみるだけで、いかに当時の若い日本の建築家が西洋の建築を受けとめ、あるいは日本的な感覚を加味しつつ、新天地に新様式を築こうとしていたかが偲ばれる。とりわけ、安井武雄を始め、旧満鉄に集った建築家たちの意気込みはいかばかりであったろうか。町のそこそこに残る当時の建物からは、その完成度はともかくとして、ヨーロッパでの新しい建築のムーヴメント、国会議事堂の建設と



竣工当時の外観「満州建築協会雑誌」（昭和6年）より



1階平面図「満州建築協会雑誌」（昭和6年）より

も絡んで議論が噴出した「日本的様式」をめぐる論争¹⁾、1920年（大正9年）の分離派建築会展覧会に始まり、1922年（大正11年）に東京で開かれた平和博覧会では一世を風靡した「分離派」という名に導かれたムーヴメント（これは、殆ど時代の気分とでも呼びうるものを掬い取った感すらある）²⁾、そうした時代の胎動をそのままに写しださんとする、若い息吹のようなものをひしと感じることができた。その後の近代建築の展開における歴史的意義と国際的な影響という点においては、とても比較にはならないが、ル・コルビュジエもまたアルジェやブラジルやインドに夢を見たのであって、そこに新たな試みを展開する場を得た喜びは共通するのではない。

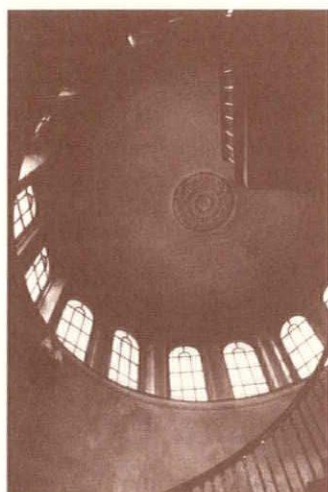
日本は、内地にほとんどころな都市計画の実現をなしえなかったが、旧満州にあっては、とても考えられぬような計画の実現が果たされている。基本的にロシアの計画を引き継いだとはいいいながらも、である。残念なことに、ある種の強権の発動なくして美しい町並みが作られたためしが無いのは、多くの都市の歴史が証明している。果たして民主的な手続きで美しい町を作ることは可能か。これが現在



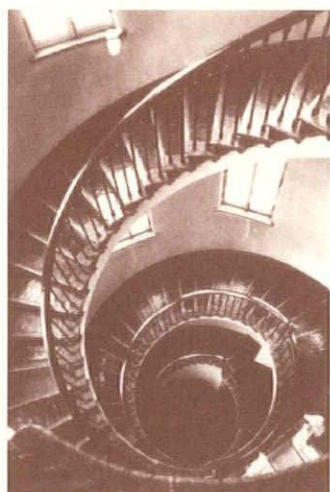
エントランスまわりの現況

のわれわれに問われている。旧満州の都市計画とその実現を目の当たりにすると、つくづくこうしたことどもが痛感されるのである。民主と強権、人間と環境、計画と実現。それは皮肉でもあり、逆説でもある。日本人には都市計画ができないのではないかと、というあきらめに近い現状と自嘲気味の常識が、少なくともここで事例によって、明らかに否定されているからである。

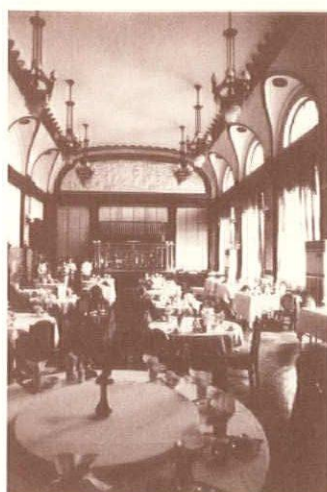
19世紀のネイション・ステイツ（国民国家）の成立によって、世界中に国境線が引かれ出した。いわゆる列強による植民地化である。ヘーゲルの国家至上論も、イギリス、フランスに出遅れたドイツの焦りの反映であった³⁾。この遅れの意識が転倒されたインターナショナルイズムがマルクス・エンゲルスのコミュニズムを生み、焦燥のナショナルイズムがヒトラーのナチズムを生んだ。列強は皆ルールを決めてゲームを始めていたからである。たとえば椅子取りゲームでもハンカチ落としでもいい。ゲームが始まったことをなにも知らない子供はただ後れをとるのみ。ロシアと日本は途中で参加し、中国はずっとゲームに気づかなかった。のんびりしていた中国の椅子を、まずはロシアが、そして日本が、取っ



円形の階段室



螺旋階段



当時の写真そのままの大食堂



当時の大食堂「満州建築協会雑誌」(昭和6年)より

てしまった。ニコライ広場は中山広場に、モスクワ通りは山形通りになった。後になってそれはとてもいけないゲームだったんだということになっても、そのときは世界中が巻き込まれて、みんな必死で競っていたのだ。そして実のところは、いまだにわれわれはこの19世紀の枠組みの中で生きている。国境や民族やら国家やらという枠組みの中で。たとえば今日の旧ソ連やユーゴスラヴィアの運命が、20世紀のねじれにねじれたナショナリズムとインターナショナリズムの関係を象徴している。

生身の国際関係とホテルのプレゼンテーション
新天地満州を得たときに日本人が出会ったものは、ロシアを介してではあるが実物としての西洋建築であり、都市計画であった。そしてはるかに広がる大平原であり、その先に存在する国境であった。こうした場においてこそ、壮大なロマンやらイデオロギーというものが鍛えられざるをえないのである。当時の出版物を繙けば、そんな勇ましい言説がいくつも乱れ飛んでいる。

たとえば1940年(昭和15年)発行の『支那及満州国現勢地理(上)』(白揚社)から。

「これらの地域は、過去に於て或は武力国家の発祥地として、或は東西文化交流の温床として、或は特殊なる宗教国家の根源地として、その歴史的役割を果たしたのであるが、近世泰西列国の支那攻勢の開始と共にいよいよ萎縮沈滞に赴いたのである。しかしやがて光はまず東方よりさしそめ、満州事変の勃発するや、満州の地には王道楽土の誕生を見るに至ったのである。ついで支那事変を契機として

その西方に接壤する蒙疆の地は、皇軍の庇護化に治安は確保せられ、資源は開発せられ、人文もまた日々に進展しつつあり、満州国と共に東亜共栄圏の協力なる一員となったのである。

(中略)

「皇軍の一将校は『俺の目は常に西方に向かっている。新疆はおろか、更に西へ西へ、ベルリン・ローマに結付いている。』と語られた。之また決して放言ではない。この大いなる抱負、この高き目標の下に於てこそ東亜諸民族の覚醒も促され、強力なる新秩序の建設も全うされるのである。』

大いなる抱負、高き目標の底に倫理が捏造される。当時の奉天図書館長衛藤利夫氏だと、たとえばこういうふうな書きぶりである。

「諸君は奉天に来て何を見たのか? 塵埃にまみれた薄汚い街路、枯れ々々の路傍の柳、傾きかけた土塀、満目蕭条、何等見るべきものはないと云うのか? だが、その一木一草、古びた軒も塀も、一塊の土でも、かつて康熙の属目したもの、その思いを託したもの、その足で踏んだものであることを思う時、自分はその地に霊あつて輝き、躍如動きだそうとする何物かを感じる。

(中略)

「大体に於いて、今日の所謂東亜の新秩序なるものは、満州、北支、中支を拠点にしてこれを樹立することにあるらしい。その行き方は、康熙帝が250年前に、同じこの土地に、似たようなことをやって見せて、しかも殆ど完全に——と云っていい程度に、これに成功している。その康熙帝こそ、北京で生まれ、北京で育ったと云い條、その血において、郷貫原

籍から見れば、正しくわれらの満州国人だ。

(中略)

「今日の言葉で云えば、満州人の東洋経営、東方における『新秩序樹立』の、もっとも困難なる関節に立たされて、帝は進んでその中心人物となり、常人なら、眼を回して気が遠くなりそうな難局を、急がず、慌てず次々に押切って、遂に初一念を貫いてこれを完成した。しかもその完成の仕方が六千年の東洋史を、前古未曾有、その最高のところまで推上げたと言口にそれだけのことを云いたい。

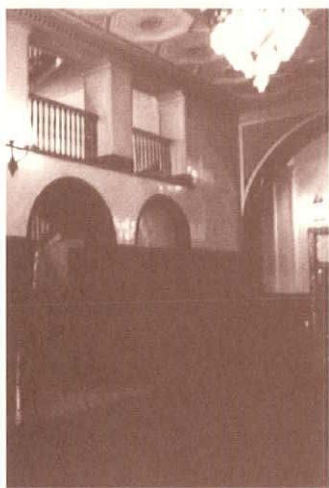
(中略)

「だが、吾々が特に康熙帝を讃仰して已まないのは、単にその国土が大であったとか云った形の上のことではない。征服した土地の広大さを云ったら、古代においてはマセドンのアレキサンダー大帝、近くは仏蘭西のナポレオンも居る、蒙古の忽必烈(クビライ)も居る。こんな人々の仕事は唯その形の大きさから云ったら一時的にしる、康熙帝のそれと比肩するに足るものがある。併しアレキサンダーやナポレオンの畢竟の事業は、カーライルが喝破したように、その動機となったものは彼等の野心である、私を営むの野望である。これに反し、康熙の大清帝国建造の偉業は、その道義哲学の具現化であった。そこに根本的な質の相違がある。

(中略)

「今日において——特に今日のような東亜の大潮なればこそ、康熙を地下に起こしてこれを再検討しなきゃならぬと云うのは、吾等も亦康熙と同じ悲願に直面して居るからである」。

これらは衛藤利夫氏の『満州夜話』(吐風書房、康德7年/1940年)からの引用である。



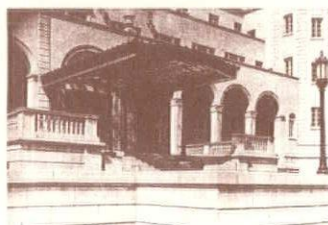
当時の写真そのままの中央階段



当時の中央階段「満州建築協会雑誌」(昭和6年)より



当時の写真そのままの正面玄関



当時の正面玄関「満州建築協会雑誌」(昭和6年)より



絵稿「神戸の海」スケッチ



旧奉天駅とスターリン戦車のモニュメント

いかに高邁な理念が満州国に込められていたかが伺い知れる。清朝第4代聖祖康熙帝の足跡を次ぐという大義名分のために、ラストエンペラーが要請されたのである。アレキサンダーやナポレオンは私利私欲の徒であり、康熙帝こそが救世済民の悲願を果たさんとしたのである。とすると、満州国は康熙帝の大清帝国のエイリアスである、という論法になって、つじつまが合う。

ところで『満州夜話』では、こうした熱弁をふるった下りの後に、奉天のヤマトホテルでの座談会に触れている。そこで衛藤氏は、東京から来た小説家に、「満州土産に、作品の題材として康熙帝を持ってお帰りになったら」と言うのである。満州国の理念が康熙帝に体现されているとの寓意を喧伝するためだ。東京に帰った小説家は、早速岩波新書から『大帝康熙』を出し、「日本評論」「改造」などに矢継ぎ早にこのテーマで文章を発表したという。しかもそれが、「作家というものは、徒に不動常なき時局の現象に追従するより、その良心と良知を持って、現象の奥に厳存する久遠の姿を取り扱うべき」と賞賛されたと言うから、めでたいことだ。

つまり、奉天ヤマトホテルは、内地からの客人をもてなし、いかに満州経営が高邁な理念に基づき、うまく運ばれているかをプレゼンテーションする格好のプレスルームであったと言ってもいいだろう。これはおそらく奉天に限らない。大連も新京(長春)も哈爾濱も、ホテルが外に対しての都市の顔であって見れば、そうであったろうことは容易に想像がつく。言葉のわからぬ、しかも地理不案内の外からの客は、駅と大通りとホテルとその土地のインテリゲンチヤを都市の顔として、おおかたの印象を胸に刻むのである。ただ奉天は

当時満州最大の人口を擁する都市であり、商工業の中心であったから、この地のヤマトホテルでこのような出来事が繰り返されたことは、少なくなかったと推察される。

図書館長が小説家に満州経営の理念を吹き込んだヤマトホテルが、かつての奉天大広場に面した奉天ヤマトホテルであり、われわれが訪れた瀋陽の遼寧賓館である。

瀋陽そして奉天という名

奉天とは清による命名であり、もともと瀋陽と言った。陰陽思想では、川の北岸を陽、南岸を陰と呼ぶ。瀋陽とはしたがつて「瀋水の北岸」の意である。町の近郊に新樂人と呼ばれる人々が住んでいた7200年前と称される石器時代の遺跡があり、古くから人間の住み着いた土地であったようである。明の末期、後の清の太祖ヌルハチが勢力を伸ばし、即位後1925年、瀋陽を落として都とし、盛京と名づけた。孫の世祖順治帝の時代、1644年に明を滅ぼし北京に遷都。先祖の廟と故宮のあるかつての都を奉天と名づけたのである。1911年の辛亥革命で清が倒れ、奉天もまた瀋陽に戻ったが、1931年の満州事変で再び奉天とされる。これは満州王朝の復権という大義名分に合致しているわけである。そして第二次世界大戦が終わった1945年、奉天は改めて瀋陽に戻されたのである。

現在の瀋陽は、大連、長春、哈爾濱など、今回訪れた他の都市に比べると、少しずさんだ感じがする。とはいえ雑然さはヴァイタリティーの裏返しなのかも知れない。そういえば夜の露店の並ぶストリートの人混みはすさまじいものであった。ただ高層のホテルの窓から眺める故宮周辺は、スラムや空き地が広がって、風景が荒れているのである。粉塵の

中にだっ広く市街地が広がっているのだが、密度が見られない。いったいどこに、全市で500万だの市域で270万だのと言った人々の暮らしを支える都市があるのか、と疑うばかりだ。聞くとところによると、国営大企業は皆、年金支払いに汲々としているそうで、どこもなく雰囲気ですさんだ感じを抱かせるのも、潜在した不安が露呈しているせいかもしれない。中国での瀋陽の一般的な印象は、今回のガイドを務めてくれた方さんによれば、人は明るい、町はやや危ない、そして歌手を多く排出する、とのこと。そういえば昨今日本に紹介される機会の多くなった中国の歌手も、注意してみれば多くが瀋陽出身であることに気づく。

奉天ヤマトホテルの現在

いまでも立派にホテルとして運営されているかつての奉天ヤマトホテルについて概要を述べよう。『満州建築協会雑誌(昭和6年)』によれば、設計は当時満州建築協会会長の小野木孝治の主宰する小野木横井共同建築事務所。施工は清水組。1927年4月1日起工1929年4月20日竣工。本館合計8871坪。様式は復興式、となっている。外装は玄関回りや窓台が花崗岩、腰回りが人造石小叩き、その他が擬石タイル張りである。

ホテルのバーでマネージャーの李氏から話を聞いた。もともと奉天駅にあったヤマトホテルがこの場所に新築されて開業したのは1929年。戦後も東北人民政府を代表するホテルであり、1950年のソ連訪問途中に毛沢東も宿泊したことがある。周恩来も3回宿泊したのだ、と誇らしげに語ってくれた。前77室、レストランは当初5、現在6、会議室は当初3、現在7、従業員は160人、増築は

ないが、1982年に改修を施したという。バーの壁には巨大な鏡絵が掛かっている。芸妓が舞を舞う姿が描かれて、「神戸の海」と銘打たれている。奇妙な装飾性がある、決して日本の感覚ではないから、おそらくは中国でつくられた「日本風」の絵なのだろう。日本からの客が多いのであろうことがうかがいられる。貴乃花の手形も飾ってあるくらいだ。1984年に共産党から独立、会社組織となり、独立採算性で運営されている。同年、建築保留建物に指定された。社会が変わり、建築は残る。現在、遼寧省政府下、国賓グループに所属、かつてのヤマトホテルなどとの姉妹提携等の関係はないという。従業員の平均年齢は35歳くらいで、3分の2が男性。ただし副社長は女性である。従業員教育にはずいぶん熱をいれている様子で、二言目には「金儲ければ質上がる」と繰り返す李氏であった。

ホテルを見てまわった印象を、現地で記したノートから書き抜いてみよう。

「インテリアはなかなか工夫が凝らされている。特にファサード両端に張り出した円形の階段室は秀逸。ただし外観に品性の欠けるところが惜しまれる。エレベーター回りの濃い渋いグリーンは落ちついてよい。客室前廊下は殺風景でまるで病院のように真っ白だが、無装飾で、天井にぼつんと張り付いた丸い照明などとも相俟って、シンプルでクリーンな印象。(950613, 4:50pm, 瀋陽→長春)」。

前掲の『満洲建築協会雑誌(昭和6年)』には「編輯子曰ふ」と題された一言批評があり、「総じてホテル建築は内面的には、どこまでも清新の気分を尚びますが、それと同時にある程度の落ちつきが必要であります。…(中略)…此のホテルの内部的の出来ばへは外部のそれに比べて遥かに成功していると称すべきであります」。

とあるから、おおよその印象は当時の編輯子も同様であったようである。さらに彼は、「奉天に立つ国際ホテルといふ気分の発露に努力された跡を見ることが出来ます」。

と述べていることから、このホテルに期待された役割が、「国際的であって社交倶楽部の意味が多量に含まれている」(同文章より)ものであったことがわかる。

奉天駅の風景／建築のしがらみと自由

奉天ヤマトホテルは1910年に奉天駅の上で産

声を上げた。奉天で唯一の洋風ホテルであり、駅構内にも兼営のレストランがあって、洋食を供していた。つまり、満鉄が、すなわち満洲における日本が、西洋諸国にそのプレゼンスをアピールする場であったと言ってもいいだろう。ホテルは常に他者のまなざしに射抜かれている。日露戦争のあと、第一次世界大戦は未だし。日本がようよう世界の列強ゲームに乗り出していった時代である。

奉天駅は東京駅に4年先んじて作られた。よくその相似が噂されるが、僕はあまり似ていないと感じた。ちなみに上野駅との相似がささやかれる哈爾濱駅の方は、これはもうそっくりである。奉天駅の向かいには、ちょうど銀座の一丁ロンドンもかくやと思わせる赤煉瓦の建物が並んでいて、時がそのまま凍結されている。赤煉瓦の建物と駅との間には広い駅前広場があって、中央にロシア語の銘の入った塔状のモニュメントが建っている。そのてっぺんにはなんと懐かしのスターリン戦車(昔よくプラモデルで作ったものだ)がのっかっているのではないか。今回旅した地方には、ソ連と中国の蜜月時代の建築物やモニュメントが多く見られた。そうおいそれと壊すわけにもいけないから、さまざまなイデオロギーが共存しているままに、いかにも不思議な景観を形作っている。

過去の記憶やしがらみを引きずりながら、建築物は時間に耐えていく。逆にそうしたしがらみこそが、建築物を生み出すのだともいえるだろう。ただ建築は、しがらみから自由でありえぬものだろうか。建築物が幾重にもまとっている記憶やしがらみのスクリーンをくぐり抜けて、建築そのものに向き合うことは出来ないものだろうか。僕らがその中にあるって決して逃れることの出来ない社会や時代の制約の、そのぎりぎりの臨界点に立ち、建築物の因襲的な意味作用を突き抜けるまなざしを持つことは出来ないだろうか。そこに立ち現れるものをこそ建築と呼びえぬものだろうか。たとえばテラーニのカサ・デル・ファッショの前で、僕は意味の纏わりついた建築物を突き抜けて建築に出会わなかっただろうか。

ほんのつかの間、通り過ぎたにすぎない歴史の襞に包まれた建物たちではあったが、過去の記憶やしがらみから抜け出して凛と立ち尽くす建築の気配のいくつかは、僕は出会った気がするのだ。ニコライ2世や溥儀や関東軍やスターリンや毛沢東から離れて立つ建築のいくつかは。建築はその本性上、イデオロ

ギーを裏切る契機を内蔵している。ある時代、ある社会において、建築物はイデオロギーと相関関係を持つことが可能だが、いつまでも単純なレッテルに閉じこめておけるほど建築は柔ではない。時代や社会が移り変わるにつれて、建築とイデオロギーの関係は独立事象となる。そのときが実は建築にとっての正念場なのである。ハギア・ソフィアのように、時代を、社会を、宗教を越境しうるかどうかが問われるからだ。空間そのものが普遍的な価値を有するかどうかが問われるからだ。普遍という概念自体、具体から逃れ去る形でしか規定し得ず、建築はひたすらに具体へと投錨されつつ成立する行為であるとしても。

●たけやま・せい／建築家、京都大学助教授

註:

*1 1910年(明治43年)の『建築雑誌第282号、第284号』に連続して掲載された、「我が将来の建築様式を如何にすべきや」の熱のこもった議論を想起のこと。『同誌第288号』には「議院建築夢譚」と銘打たれた言い合い放題傑作必読の一文が載ったりもしている。

*2 たとえば『満洲セッション——若き建築家の為』(『満洲建築第2巻第6号、8号、9号』)と題された小野武雄の文章などに典型的に見られる新様式への期待感が時代と場所の気分をよく表現している。東京の河西青五の「分離派を論ず」(1922年)も、満洲の建築家たちを鼓舞するかのようになり、『満洲建築』に連載された。分離派にとって、満洲はまさしく新天地だったのであろう。ちなみに、「分離派」という言葉は佐野利器の「洋風建築の新風味」(『建築雑誌第285号』1910年)あたりですでに用いられている。ただし佐野の文脈では、この言葉は、たとえばセッションといった様式をとらえるというより、むしろモダニズムの無装飾性、平面性、直線性、構造との一致、等を譲る、といった戦略的目的にシフトされてしまっている。もとより佐野の関心は様式などにないし、そのようなものを見る目もまた持ち合わせなかったのではあるが。

*3 ルイ・アルチュセール『マルクスのために』参照。『マルクス』は、この驚くべきイデオロギーの地層がドイツに固有のものであり、フランスやイギリスのものではないのはなぜかということの後年の著作でははっきりと説明している。つまりそれは、ドイツの歴史的な後進性(経済的、政治的な遅れ)と、この後進性に対応する社会諸階級の状態というふたつの理由によるものである。フランス大革命とナポレオン戦争の巨大な混乱から抜け出した19世紀初頭のドイツは、その国民的統一と同時にブルジョア革命を実現する上での歴史的な無力さによって深く特色づけられる。(平凡社ライブラリー、p116)

ドイツ表現主義舞踏の身体世界

「ドイツ・ダンスの100年」フィルム・レクチャー

昨今は何やらダンスブームである。特にドイツからはピナ・バウシュやウィリアム・フォーサイスが毎年のように来日し、昨年春には慶応大学でガブリエレ・ブランドシュテター女史の教授資格論文に基づいたドイツ・ダンスに関する特別講演も行われた。そして今回の5日間に渡るフィルム・レクチャーである。実はこのレクチャーの2ヶ月前には同じ会場でブレーメン・タンツテアターを率いるウルス・ディートリヒのソロダンスが行われたのだが、関心の度合いはやはり高かった。彼の禁欲的な演技は静寂な空間の中で繰り返され、あらゆる現代世界のしがらみを唾棄して身体を自由を勝ち取らばかりの熟演をふるった。しかし興味深かったのは彼のプロフィールである。即ち、フォルクヴァング大学を経てピナバウシュと踊り、その振付をしたザンネ・リンケとはマリ・ヴィグマンというドイツ表現主義舞踏の創始者を師と仰いだ人物である。つまり現在注目されているドイツを中心とする身体表現としてのダンスの出自は、直接20世紀初頭の表現主義に求められるのであり、この自由演劇運動が途切れることなく現代にまで継承されていることを認識させられた次第である。そして現代では大学教育機関において舞踏学が講義されるに至っているのである。

こうした一連の華やかなプログラムに隠れるように1月には「ドイツにおける現代舞踏と公的支援」という地味なパネルディスカッションがドイツ文化センターで開催された。実はこうしたモダンダンスを含めてドイツではオペラや現代芸術全般に対し文化支援政策が地方自治体によって行われている。ドイツでは、日本の10分の1の料金でオペラや演劇が鑑賞できるのはこの制度のおかげである。逆

にこれは日本とドイツの文化に対する行政あるいは市民意識の格差を浮き彫りにしている。

さてこうした経緯を経て今回の12のレクチャーを軸に構成された「ドイツ・ダンスの100年」の企画は、もとはといえば1993年にドイツのミュンヘンで開催された展覧会をベースにしている。しかし担当された松澤氏の本来の狙いはレクチャー自体というよりは、当時の映像資料を調達して実際にこのレクチャーで上映することにあった。そして驚くべきは、ドイツでは捜せばオリジナルの映像資料が次々と出てくることである。こうして我々はブレーメンにあるドイツ・ダンスフィルム研究所所蔵の近代ダンスの貴重な映像資料を観ることが出来たのである。即ちラバンが舞踏を「動く建築」と表現したように、動く映像がなければ、それはまさに机上の身体論に終わってしまったことだろう。

しかしながら私にはこうした充実したダンスのレクチャーが日本で行われ、さらに人々が注目する時代になったのかと感慨深いものがある。そのレクチャーの内容も「ラバンの舞踏理論」、「表現主義舞踏とタンツテアター」、「フリー・カンパニーの台頭」といった微発的なもので、特に「第二次大戦前のダンス芸術文化」では表現主義の時代のルドルフ・フォン・ラバンやオスカー・シュレンマーについて言及し、マリ・ヴィグマンやグレート・バルッカやグロテスク・ダンスのヴァレスカ・ゲルトなどの映像を紹介しながら、ドイツ近代における身体概念の基本概念の生成が詳述されて興味深い。それに続いた「美と力への道」(1925年)という啓蒙映画はギリシャの肉体美やドイツ民族の精神論を背景として身体美を追求したものであり、なかなか興味深いものであった。また、「ファシズム

「ドイツ・ダンスの100年」映像で見る身体イメージと表現主義
会期：1996年3月20日(水)～3月24日(日)
会場：ギャラリー・1 (新宿パークタワー)
主催：パークタワー・アートプログラム
東京ドイツ文化センター

とダンス」のレクチャーでは、ダンス文化がナチズムへと取り込まれていく経緯が詳述された。

以上のように充実したレクチャーであり期待も大きかっただけに敢えてここに苦言を呈したいと思う。例えば日本語カタログでは「表現主義」という言葉が何百回と踊っている。しかしその原著書をあたっても、あるいは今回の講師であるドイツ人の口からも、一度も「Expressionismus (表現主義)」という言葉は無く、「Ausdruck (表現)」というドイツ語を全て通訳が「表現主義」と翻訳しているのである。またそのカタログの中では松澤氏が「表現主義」を「歴史性を越えた類型的存在は理念的表現の問題」と定義してダンスを取り扱っているが、こうした根本的な歴史観や語彙の用法の軽率さが目立ち、正面からの解釈を放棄しているのが残念である。その一方で、まさに表現主義と言われた舞台美術家アドルフ・アビアやゴードン・クレイグに関する言及はほとんどされていない。確かに彼等はドイツ人ではないから、今回の企画の対象外ということなのだろうか。しかし彼等の舞台空間芸術を扱うこと無しに、どうして近代ドイツの自由演劇運動が理解できるであろうか。この一連のレクチャーは残念ながら「ダンス・オタク」の趣味的な自己満足の企画に陥っている嫌いがある。更に言えば女性の身体論に終始し、当時のドイツの男性の身体論に関する言及もほとんど無く、扁平な奥行きのない企画におわってしまったのは残念である。ドイツにおける近代のダンス文化とは多岐に渡る空間芸術と切り離せないことは百も承知の上での事なのだろうが、そこまで望む方が贅沢というものなのかもしれない。

しかし今年正月に名古屋で開催されたバルッハの表現主義的彫刻を見た人は、彼の作品がこの「Ausdruck」ダンスのフィルムの中のダンサーの姿と酷似していることに目を見張ったことだろう。そして建築史家は、このレクチャーを聞いて、ドイツの初期の田園都市であるヘレラウの「都市の冠」として、ダルクローズのリズム学校がテッセノウの設計により敷地の中央部の丘の上に何故計画されたか理解できたのではないだろうか。

●長谷川 章／東京造形大学助教授



世紀末の裸体文化は自然の中での自由な身体を享受を望んだ
Über Körper und Seele der Frau. 1927, Hedwig Hagemann-Bose



ルドルフ・ラバンによるコーラス・ダンス (Gleichstrebend)
jeder Mensch ist ein Tänzer, 1927, H.M.Tier/ P. Stockemann

時代の精神が生み出すもの

「トーネットとウィーンデザイン——すべては曲木椅子からはじまった」展より

3月16日より4月7日まで新宿パークタワーホールにおいて、「トーネットとウィーンデザイン」展が開催された。1996年は「ウィーン千年祭」の年であり、トーネット社の創設者、ミハエル・トーネットの生誕200年にもあたる年である。展示内容は、「ウィーンの樹」と称される19世紀から20世紀初頭にかけてのウィーンデザインの変遷を記した大パネルをはじめとして、大変貴重な曲木椅子のオリジナルコレクション30脚（トーネットの「1880年製椅子」「ロッキングチェア」「子供用アームチェア」、ヨゼフ・ホフマンによる「アームチェア」「リクライニングチェア」、そしてアドルフ・ロースによる「ミュージアムチェア」等）、そして世界中で今も使用され続けているトーネットを中心とする曲木椅子約40脚が展示され、それらの椅子には実際に座ることができるようにになっている。他に、曲木椅子の制作のための工具（曲木の治具）と象嵌技術の展示、そしてヨゼフ・ホ

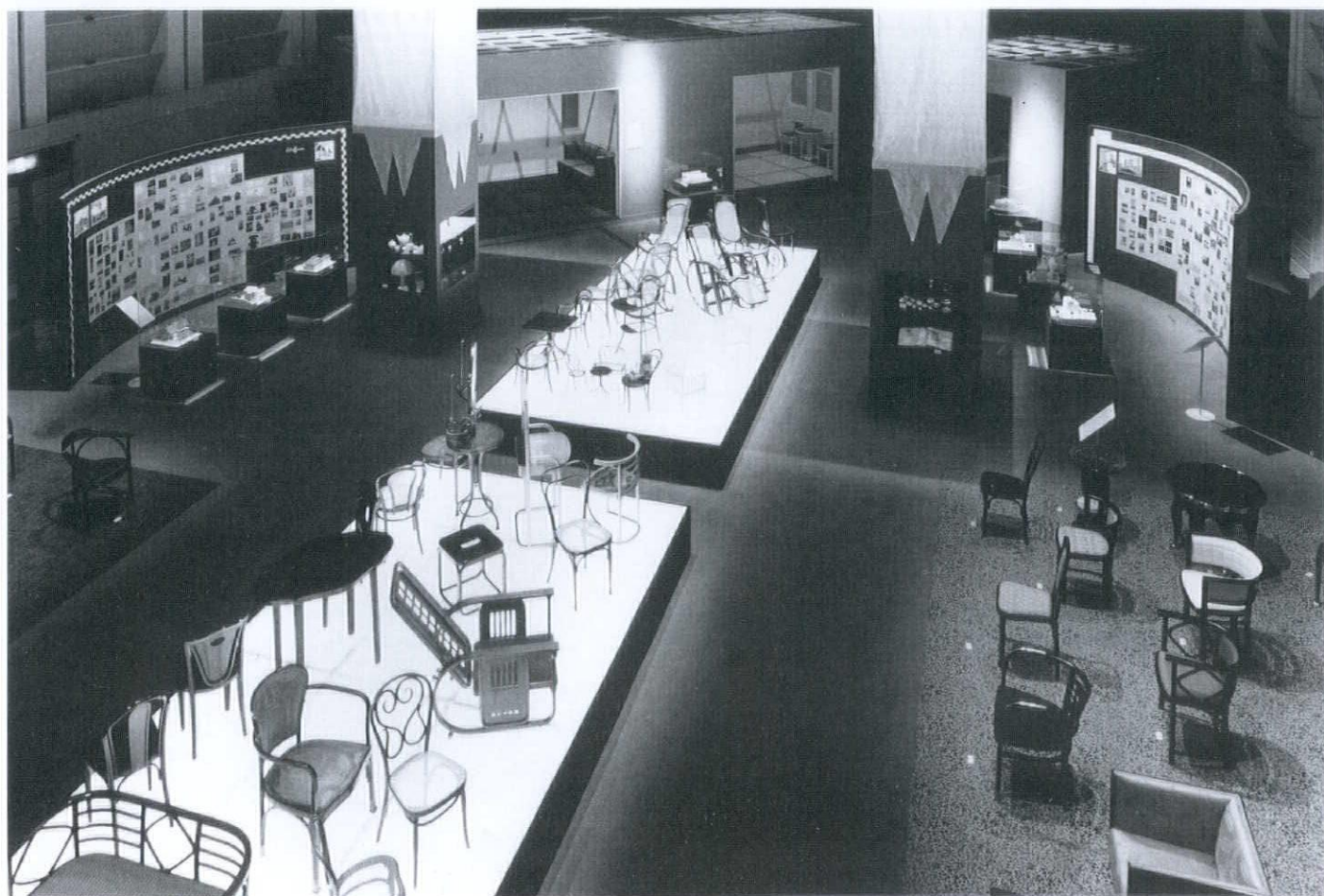
フマンによるブラウナー邸と、アドルフ・ロースによるミュラー邸のインテリアの一部が実寸大で再現されており、その空間を実体験できることは特筆される。そして椅子の張地や、ガラス、陶器のオリジナルコレクションも含め、会場は大変興味深い構成となっていた。

19世紀のウィーンに社会の共通意識として、「合理性」「実用性」「装飾性（感性）」という3つの共通美意識が生まれた。貴族社会においてのデザインとは異なる人々の共通意識の下に創り出されたものであり、後にこの理念は、ウィーンという時代をより色濃く位置づけるものとなった。同時にそれはその時代に生きた建築家に「もの」を創る姿勢を問いかけるものであった。

そういう背景の中、ミハエル・トーネットの曲木椅子が登場する。建具職人のギルド（職能組合）で修行したトーネットは、曲木の開発によって技術的、経済的な革新をとげ

ることとなった。今までの様式家具とは異なる、軽くて強く、美しくそしてより安価なるものを追求し、曲木治具の開発、ノックダウン方式にみる制作上の合理化そして、輸送システムを考案し、量産のシステムを確立していくこととなる。時代の精神のもと、量産化をめざしたトーネットの椅子は大衆文化の中へと浸透してゆくこととなる。展示されている曲木の治具と1㎡に36脚分の椅子が収納されるノックダウン方式による輸送システムは、その歴史的裏付けのみならず、その時代の精神をより理解できるものとして大変興味深いものと言える。

また時代は、相反する理論を持ちながらもトーネットの曲木椅子を重用した2人の重要な建築家を生み出した。一人はオットー・ワーグナーの流れを組み、後にその流れはウィーン工房を経て、インターナショナルスタイルへと移行したヨゼフ・ホフマン（1870～1956）と、そしてもう一人は、ワーグナーをアンチ



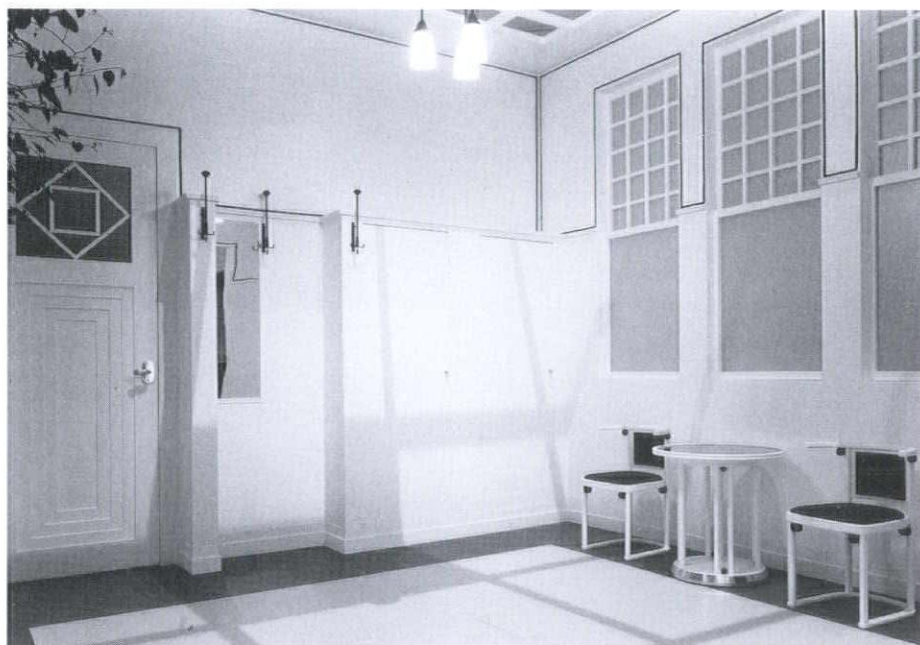
テーゼとしたアドルフ・ロース (1870~1933) である。後にロースの流れは、エスプリ・ヌーボーへと移行した。彼らは、住宅建築に対する考え方を大衆の生活美学のもと、作品を通して時代の理念をより具体的なものと展開していったものであることは特筆すべきことであろう。彼らは、対立する空間論を持ちながらも、生活空間に関わるファクターすなわち住居、そのインテリア、家具、テキスタイル、そしてグラス、ティーカップに至るまで、実際の空間の中で一体化して表現している。実体化した「もの」は増々大衆の理念を確かなものへと導いていく結果となったのだ。

人々が時代を創造する。ある意味でその時代が建築家あるいはミハエル・トーネットのような人を生み出す。彼らは、人々の生活美学を現実の空間の中に創り上げ、その時代の理念をより具体的に、より詳細に展開させることとなった。その意味において、19世紀から20世紀初頭のウィーンは、大変まれな時

代ということが言えるだろう。

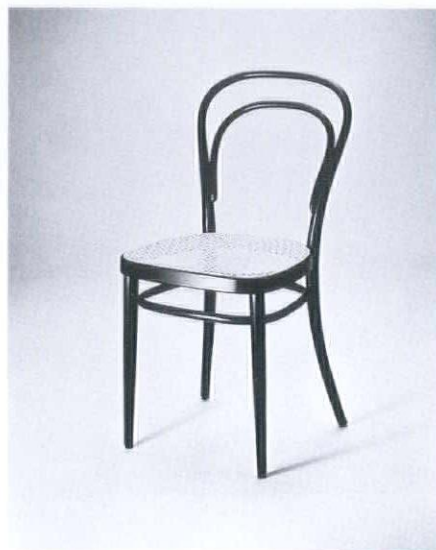
この特別展は、時代と建築、すなわち人間と建築の重要な関係あるいは接点と呼ぶべきものかも知れないが、これを展示品のみならず体験を通して感じとることができる興味深いものである。現代の建築思想に大きな影響を与えたその源流、すなわちウィーンデザインが求めた美学と独創的な空間を一同にたどりながら、「すべては曲木椅子からはじまった」その曲木の感触を手で味わい実感として、ウィーンの時代の精神を再認識することは、すなわち現代を再考することに他ならないことなのである。

●河合俊和／建築家



再現されたブラウナー邸インテリア

トーネットとウィーンデザイン
会期：1996年3月16日(土)~4月7日(日)
会場：新宿パークタワーホール
主催：リビングデザインセンターOZONE



サイドチェアNo.14/M.トーネット



フレイダーマウス/J.ホフマン



ムゼウムチェア/A.ロース

展覧会レポート

ディッシュ・ウォッシャーの中の魯山人

「イサム・ノグチと北大路魯山人」展

若い記者からイサム・ノグチに質問があった。「この公園には、どこに先生の彫刻が置かれるのですか？」札幌市が彼に依頼したモエレ沼公園のマスタープランが出来上がり、その新聞発表記者会見でのことである。イサムはそれに答えて次のように語った。

「この公園全体がはくしの彫刻です。あなたが、今履いているスニーカーを考えて下さい。もしあなたがそれから何かを感じることができたとしたら、そのスニーカーはあなたにとっての彫刻ですよ」

彫刻に対する、彼の考え方の一端が示されていると思われる。

イサム・ノグチは、彫刻の枠を広げ、あまりにも限定された定義を打ち破るための努力を絶えず続けた人である。石、金属、木の彫刻から、陶芸、モニュメント、庭や公園といったランドスケープ、家具や照明、インテリアやインダストリアル・デザイン、舞台美術など、彫刻とそれを取りまく空間、環境に関わる様々な分野において彫刻家としての具体的な表現を試み続けた。

「額縁という虚構とか台座の水平線にとらわれている限り、すべての芸術は錯覚に基づいていると言ってもよい」

と述べ、芸術が美術館に恭しく飾られたり、コレクターの富の収蔵品となって売り買いされることを極端に嫌っていた。庭や公園はその心配がないし、「あかり」は手軽に人々が幸せを手に入れられる光の彫刻である。また、彼は芸術を、人間に対する魂の呼びかけであり、人間と自然の関わりを感じ、心を豊かにそして自由にさせるものとしてとらえ、本来は「暗示された制約のすべてをもつ孤独な彫刻家の仕事」*ではあるが、その社会的意味に高貴でより本質的な目的があることをも信じていた。

この展覧会にスライドマントラの石膏模型が出されている。ヴェネツィア・ビエンナーレのために大理石で作られたもので、これに変更を加え一回り大きく黒御影石で作られたブラックスライドマントラが札幌大通公園に設置されている。

この設置は、当初9丁目の公園内に予定されていたが、イサム・ノグチは現地を確認し

て、そこがこの彫刻にとってふさわしくないと判断した。既に樹木が育ち良好な子供の遊び場として活用されており、彫刻を必要としていないというのだ。道路を挟んだ8丁目は、雪祭りに大雪像が作られる集会広場で、ここに置いても邪魔になる。大通公園以外には考えていないので設置は取りやめにすべきだと結論しかけたが、8丁目と9丁目の間の道路をはずす可能性もゼロではないと感じるや、イサムは積極的にブラックスライドマントラの設置の意味を見出した。大通公園は、横断道路によって細分化され過ぎており、道路が廃止されれば、広場と子供の遊び場が連続され広がり、双方にとって良好な環境となる。「都市にとって、その中心にいかにか安全に自由に子供の遊べる空間があるかが重要なこと。その目的のために役立つのなら、はくしの彫刻を使って下さい」

イサムは、環境に対する驚くべき感受性と空間スケールの正確な把握によって、彫刻の設置位置を決定した。

イサム・ノグチは晩年、日本で過ごす時間が長くなっていた。その東京での常宿が紀尾井町福田家で、ここを紹介したのは北大路魯山人であった。二人の出会いは、1951年頃からで、ともに備前伊部に金重陶陽を尋ね、備前を焼き、イサムは北鎌倉の魯山人の古い農家を借りて住み、隣にアトリエを築いて陶器を彫刻とした作品を生み出す。

「粘土の仕事は、日毎に新しい目覚めの世界を発見させた13歳までの歳月に私が知り得た、土と田園生活の喜びを反映したものであった」*とイサムは書き残している。イサムは、その後毎年日本に帰ってくることになる。

魯山人は、イサム・ノグチの進言から1954年日米協会会長のロックフェラーの招きを受け、約500点の作品を選び、アメリカ、ヨーロッパ各地で展覧会を催し称賛を受けるが、翌年、人間国宝の認定承諾を辞退する。1959年、横浜で死去。享年76歳。その時イサムは55歳であった。

今回はほとんどイサム・ノグチに関して述べたが、展覧会を見て二人に共通すると思われる

イサム・ノグチと北大路魯山人
会期：1996年3月7日(木)～4月14日(日)
会場：セゾン美術館
主催：セゾン美術館、美術館連絡協議会、読売新聞社、日本テレビ放送網

巡回：高知県立美術館 4月26日～6月2日
神奈川県立近代美術館 6月22日～8月25日
ふくやま美術館(広島県福山市) 9月13日～10月20日

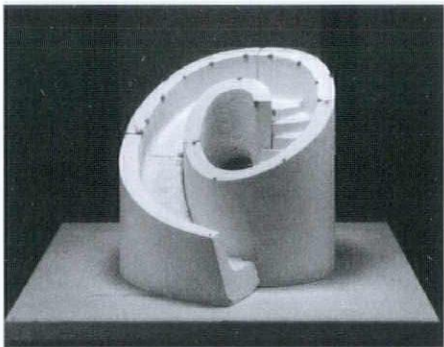
のは、慣習や様式にとらわれない自由人であり続けたことである。芸術とは、残され展示されている作品そのものではなく、作品によって交わされる魂のふれあい、相手のあるいは子供達を思いやる気持ちである。二人は、自然と人間との関わりを学習し自覚することで、芸術は目に見えない無重量のものであることを知っていたと思えてならない。

イサムは、マンハッタンにひとり住まいのペンthouseでも魯山人の湯飲み茶碗を愛用していたが、それを他の食器同様に皿洗い機で洗っていた。

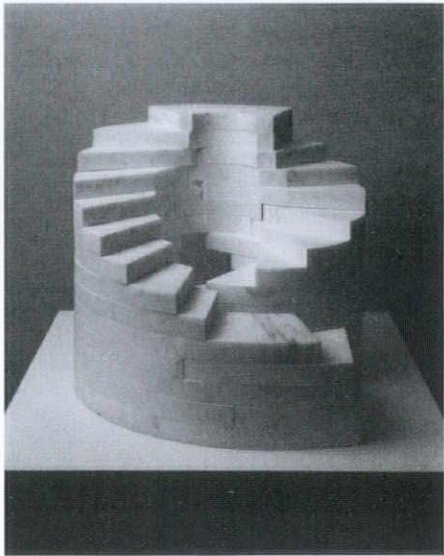
二人の作品は美術館の展覧会の決められた側面で伝えるにはやはり難しい芸術といえる。

●川村純一／建築家、アーキテクト・ファイブ

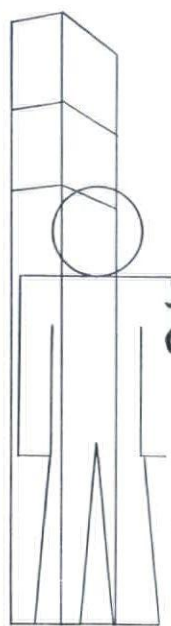
*：南画廊「イサム・ノグチ展カタログ、1973年」より



スライドマントラ石膏模型、1986



滑り台のための大理石模型、1966-85



「からだのしくみは
骨格と筋肉」だけでは
ありません。

神経もあれば、血管もあり、あらゆるものが総合的に働いてこそ、一個の生体としての機能が発揮できるのではないのでしょうか。

ビルや建造物の場合も、これと全く同じことで、鉄骨やセメント、石材、の組合せだけでは、外見上如何に立派でも、それは単なる物体の集合です。やはり神経や血管と同じく、電気、水道、ガス、空調などなどがその機能を充分発揮できてこそ、素晴らしい居住性が生れると思います。

しかし……

それだけで終わったのでは、まだ多くの欠かが残っております。ところがこれ等の機能を更に無駄や損失のないよう活用できたとしたら、もっと素晴らしいことではありませんか。

集中管理或は集中制御によって……省力、省エネルギー、省経費をはかることこそ、最も完ぺきな、からだのしくみ、つまりビル全体の機能をフルに発揮できるのではないのでしょうか。

集中管理装置
NESCA

川崎電気株式会社
KAWASAKI ELECTRIC CORP.

東京本社 千108 東京都港区芝浦3丁目7番4号
電話03(3454)5271(代)
本社 千999-23 山形県南陽市小岩沢225番地
電話0238(49)2011(大代)

新刊紹介

『木のデザイン図鑑』

建築知識=編

A4判 420頁

建築知識 3800円

副題には「設計の基本とディテール」。世界の木材163種のテクスチャやその性質を紹介した世界の木材マップ、木の流通、コストから始まり、木造構法の基礎やつくるためのノウハウなど、素材としての木を網羅する。図鑑としての実用性が高く、特に設計者には必携の書。



『広がるデザイン2——商品とデザイン』

榮久庵憲司=監修

伊坂正人+(株)GK=著

A5判 180頁

鹿島出版会 2678円

現代の消費社会では、モノをつくり、売るという行為は経済行為というだけに留まらず、文化のひとつの断面と捉えられる。筆者は、その歴史などにも触れながら、構造的な変化を見せるインダストリアルデザインの現状と今後の展望を解く。



『五重塔はなぜ倒れないか』

上田篤=編

A5判 280頁

新潮社 1200円

地震で倒れた五重塔はないというが、これまでそれは「木造の柔構造ゆえ」としか説明されていない。本書では、中空、キャップを重ねたような免震構造、軒の出を深くしてつくる柔構造など、「木塔不倒神話」に関する編者の研究成果を踏まえ、8人の研究者がさらに論理を展開、五重塔の不思議を解明する。



自然を征服しようとは思いません・自然と調和させるだけです

空気調和の
三建設備工業株式会社

本社 東京都中央区日本橋蛸町1丁目35番8号
☎(03)3667-3431(大代)
支店 北海道・東北・横浜・名古屋・大阪・中国・九州

『提言・都市創造』

伊藤 滋＝著

A5判 182頁

晶文社 1800円



評者＝

渡辺定夫

都市計画は話し言葉で

通用しなけりゃ意味がない

スーッと読める本だ。都市ケイカマンただ今参上、という感が強く残った。

著者は御存知のように都市計画に関しては第1人者である。にもかかわらず、表紙に並ぶ肩書きの数々を見ると、都市計画の学界、業界がともに世間ではごく小さな存在でしかないということを改めて感じた。

表紙のカバーに並ぶ今日の話題や著者の提案はもちろんだが、読み進むうちにそれ以上に大事な主張が判明してくる。

まず、まちづくりを進める上で、その基礎となるべきザ・都市計画のパラダイムを変えようというのだ。従来は産業社会を発達させるために、地方から出てきた産業戦士のオジサンと銚後を支えるオカーサンが懸命に子育てする地域社会を輝く太陽のもとにつくり出すこと、それが都市計画の使命だった。

ところが、オジサンは年老いて草臥れ、子供は、必ずしも企業社会に忠誠を尽くす人材にはならず、ひとりオバサンだけが元気だ。地域社会に軸足を置いた女性が地域の価値をつくり出していると著者は言う。まちづくりの価値観ががらりと変わった背景には、街で暮らし、人々のつきあひがあり、愉しみをくりだし、生涯を無事終える人生の流れの場、当たり前が今まで余りにも軽視されてきたことにある。著者は、足腰が弱った人の歩く速さと目線の位置でまちづくりを考えようと主張する。

著者は、都市のなかに多様な姿を見せる地域社会の複合体、これをアジア型と呼んでいるが、地域空間の意味と価値を再構築することの重要性を解いている。

地域社会の「私」はハッピーな関係で成立するものではなく、むしろ利害関係の対立する厳しい社会空間である。これまで、その調

整は「公」としての行政が担当していた。

だが、利害対立が深化すれば、「公」は際限なくその担当の幅を広げることになるが、それに見合う税負担などできるはずもない。「私」の自己責任による解決の必要性を指摘し、「私」の部分に「公」を加えることが、今後つくるべき成熟社会の前提であるとしている。

最後は臨海副都心と首都移転に対する大提案である。ご承知のように臨海副都心は悪評噴々である。ゴミと緑をベースにして新しい機能施設を設けるのは大賛成だ。他の所でも触れられているが、緑化は、それをつなげて自然の優れた大緑地へ結びつける所に意義があるのだから、大いに結構なことだ。

このことからみると、首都移転先に興味はないが、憲法に定める国家機能がなくなれば、緑は13号地から始まって、日比谷、霞ヶ関、永田町、赤坂、青山、代々木の杜と続く。21世紀への遺産被相続人として、多少は胸を張れる目録になるのではなかろうか。首都移転と地方分権はセットと考えているので、著者も触れているように、地方分権の後になされるべきだと思っている。

この本は、13～15の話題で構成されている。これはちょうど学部1学期のコマ数に相当する。これに資料データを添えれば、都市計画概要の講義になる。著者は経験豊かなプロ中のプロであるから間違いはない。そのつもりで試してみると良いだろう。業界に参加する資格が得られる。

●わたなべ・さだお／工学院大学教授

Metropolitan Library

5月の評者＝

高島直之

F.ガタリ『闘走機械』は、原題が「冬の時代、1980-1985」であり、80年代前半の5年間に書き下ろされた論文や、対談・講演録を集めたもの。この、冬の時代とは、81年にミッテラン社会党政権が誕生し、それへの当初の革新的期待が、すぐさま絶望に陥ったことを指している。筆者はその誕生直後、著者に取材をした経験があり、そのときの「全く信じられないことです、本当に！」という発言を記憶している。かつて、仏社会党の政策審議に協力をしたこともあるガタリとしては正直な感想だろう。が、核開発など軍事大国としての路線を歩み始めた、その後の社会党の動きは、民衆の存在を忘却した「冬」（新ドゴール主義）の時代、というわけである。

80年代初頭といえば、日本国内では、ガタリの著作はほとんど訳されておらず、ドゥルーズとの共著『カフカ』と『リゾーム』ぐらいではなかったか。

紹介され始めた頃難解だったガタリ独特の「横断性」、「特異化」、「新たな結合」などといったキーワードが、本書に収められた発言の中で、伸びやかに使用されている。また、ドゥルーズとの出会いが吐露されているが、彼との対比で、ガタリの本領とは「書く」ことにはなく、しゃべり、議論をし、そこで引っぱりだされた言葉を、別の適用領域に移し変える、そういった遂行性にある。それをあらためて確信させるものとしても、本書はある。このガタリの態度に、いささかの、いかがわしさを感じる人もいるだろうが、旧来からの思想的参照基準が死滅したかにみえる現代において、「それでけっこうじゃないか。別のものを発明しなくちゃならないんだ」（本書、114頁）と、飽くなき変革への発案を繰り返した、故ガタリ独特の心意気が伝わってくる。

生活者の集合的欲望を基礎において、芸術行為も

『哲学的建築 理想都市と記憶劇場』

ライナルド・ベルギーニ＝著

伊藤博明＋伊藤和行＝訳

A5判 152頁

ありな書房 3090円



評者＝

松浦寿夫

記憶の建築

とりあえず哲学という名のもとに組織される思考の運動が、自らの展開の支えとして、あるいはまた、その合理化の口実として、暗喩的にであれ、きわめて直接的な例証としてであれ、建築を要請する少なからぬ例を列挙してみることもできるかもしれない。そして、ライナルド・ベルギーニの『哲学的建築』と題された著作もまた、いくつかのある特殊な思考が自らの運動の際に必要なものとして要請した建築のフィギュールを、邦訳の副題が示すように、「理想都市と記憶劇場」といった視点から組織的に検討する試みであったといえよう。

それは、ヘルメス・トリスメギストスを始祖とする思考の伝説に顕在化する、建築家＝哲学者の著作の分析であるわけだが、この著者の題名となった『哲学的建築』とは、著者が簡潔に定義しているように、「建築の概念自体が根本的に認識の概念と相互的で分離不可能である」という理念のもとで記述された、擬＝建築的な対象をさしており、しばしば、理想都市ないし、記憶の場所という相貌をそなえることになる。ともあれ、ここでは、トシマツ・カンパネッラ、ヨーハン・ヴァレンティン・アンドレーエ、ジョルダノ・ブルーノ、ジュリオ・カミッロ・デルミーニオ、ロバート・フラッド、アタナシウス・キルヒャーらの思考に露出する建築のフィギュール、すなわち「哲学的建築」——とはいえ、著者によれば、この6人の人物のうち、実質的に「哲学的建築家」とみなされうるのは、カンパネッラとアンドレーエとを除く後の4人である——の、きわめて要領のよい整理が提出されている。また、挿入された多くの図版が、この『哲学的建築』の視覚的な例証として、テキストの理解にとって格好のものであるこ

ともつけ加えておかねばなるまい。

とはいえ、何か教科書的ともいえる整理機能のゆえに圧倒的な刺激を感じしがたいこの著作の余白に、いったい何を書き込むことができるのかということがたしかにひとつの問題となるだろう。著者がエピローグで暗示するように——それが暗示にとどまったことは残念なのだが——たとえば、近代建築においてもまた、この「哲学的建築」が潜勢的な駆動力として作動していること、しかもまた、現代の、そしてお望みならば日本の、きわめて凡庸な建築家たちの低次元の妄想においてさえ、「哲学的建築」がその悲喜劇的な様相で反響しているかもしれないではないか。そして、モダニズム／ポスト・モダニズムという偽の議論の余白で、原註で示された、「『哲学的建築家』すべてにとつてのモデルである、古典的タイプの博識な人文主義者においては、(中略)むしろ、進歩の概念は過去への回帰、古代の〈再生〉の概念と同一視される」という一節と読みかえていくこともできるかもしれない。たとえば、ル・コルビュジエとアルド・ロッシの間で、あるいは、ヴァルター・ベンヤミンに則して。

●まつうら・ひさお／東京外国語大学助教授

精神分析・治療行為も、同じ創造的な関係とみなしたF.ガタリ。大部な書『芸術の規則I・II』の翻訳になった、著者のビエール・ブルデューが最終的に行き着くところもまた、言葉は違え、同様の次元ではないのか。ブルデューの書の序文には、一般に批評家たちは、芸術作品の経験は超越的で、いわく言い難いものであり、それは定義からして理性による認識を逃れるものである、というが、なぜ彼らは戦いもせず、知の敗北を宣言するのか、との挑発的な問いがなされている。その1点に魅かれ、この本を手にとった。訳の第1巻は、昨年刊行され、第2巻は今年1月に出され完結した。

この書は、芸術作品がつくれ、読み手がいるという、予定調和の世界に対し、その外在的な流通システムのみならず、芸術経験もまた、大きな文化生産のシステムの一部と捉えている。前者は広告、新

聞書評、世間の評判、学校で学んだ文学的知識、著名作家のあらかじめのイメージなどであり、それらは知性によって理解可能な関係システムである。が、後者、芸術経験は、感性によって感受されるもの、という二律背反図式がある。ブルデューはその図式を打ち破り、同時に、科学的な分析を施す必要があるというのだ。その近代主義的なネックを、フローベールの時代である19世紀半ばに置き、国家、アカデミー、ジャーナリズムの制度一般から、社会・権力・文化生産・文学の各闘争の「場」において、芸術の価値が生産され、独占的に押しつけられていることを解析している。いわば、科学的分析と美的快楽の融合する仮想焦点を措定する。個人的には、19世紀の写真の発明が、いかにそこに差し込まれるのか。またカントとデュシャン、ふたつの問題系をどう洗い直すか、など刺激的な問題提起として読んだ。

「闘走機械」

フェリックス・ガタリ＝著 杉村昌昭＝監訳

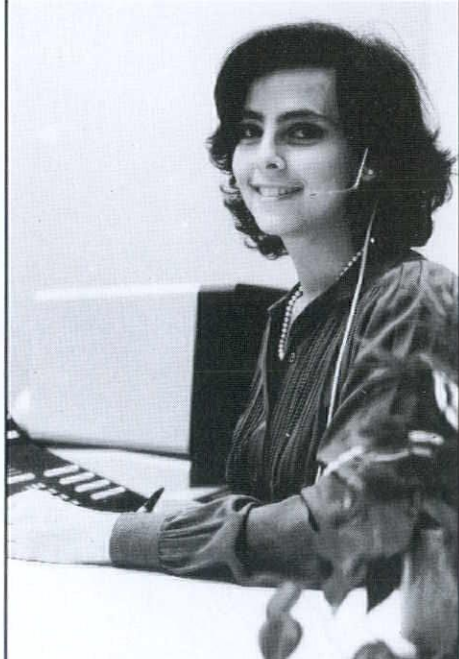
松籟社 2472円

『芸術の規則I』『芸術の規則II』

ビエール・ブルデュー＝著 石井洋二郎＝訳

藤原書店 各4200円

情報とエネルギーの ネットワークをつくる 日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、「私達の住む地球をまあるくつむぐ」。日立電線は、いま、快適で豊かな暮らしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界でひとつの大きな役割を担っているもの——それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 東京(03)3216-1616

お知らせ

「ベルギーの構造デザインと ルネグレイシュ」展

会場：ベルギー大使館(有楽町線麴町駅5番出口2分)
5月23日(木)～24日(金) 10:00～18:00入場無料NTT
アーバンネット(丸の内線/東西線大手町駅A5出口
1分)6月5日(水)～7月3日(水)9:00～20:00入場無料/
土日休館
問い合わせ：ベルギー大使館文化部 03-3262-0191
シンポジウム
テーマ：構造デザインと美学——ルネ・グレイシュ
と橋のデザイン
日時：5月23日(木)18:00～20:00
会場：芝浦工業大学本館大講義室
パネラー：ルネ・グレイシュ(建築家、構造デザイ
ナー)、岡部憲明(建築家、神戸芸術工科大学客員教
授) 韓亜由美(デザイナー)
司会：三宅理一(芝浦工業大学教授)

村野藤吾作品集出版記念講演会

テーマ：村野藤吾の遺産
講師：ボトンド・ボグナー(シカゴ大学教授)
日時：5月20日(月)14:00～16:00
会場：国際文化会館講堂 入場無料
問い合わせ：建築情報システム研究所内 村野藤吾
生誕百年記念実行委員会 tel:03-3561-4644

伊島薫写真展「Colored Beauty—— 極彩色に彩られた人間の内なる輝き」

会期：5月23日(木)～6月23日(日) 11:00～19:00
会場：ギャラリー・1(新宿パークタワー1階)
入場無料

1996年度 通産省選定 グッドデザインマーク施設部門申請受付

対象分野：工場、農業、林業、水産加工業等生産施設、エネルギー供給施設、研究所等、開発施設、研修施設、倉庫等流通施設、生産、流通、販売等の複合施設など、産業活動に使用される施設で、申請時までに国内において設置・活用されるもの。
申請資格：施設の所有者、またはその施設を使用し、産業活動を営む者(原則として施主)。設計者等が申請する場合は施主との連名で行うこと。
審査委員：芦原太郎、窪田陽一、黒木靖夫、中西元男、西澤健
受付締め切り：6月5日(水)
問い合わせ：住所、氏名、電話、FAX番号を記入の上、「施設部門資料請求」と明記して下記まで請求
事務局：財団法人 日本産業デザイン振興会 Gマーク事業部
東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル別館4階 tel:03-3435-5626 fax:03-3432-7346

牛田英作+キャサリン・フィンドレイ展 ——PARALLEL LANDSCAPES——

彫塑的な形態と壁天井などの境を曖昧にした有機的な空間が印象的な2人の作品展
会期：5月17日(金)～6月22日(土) 11:00～19:00
日祭日休館
会場：ギャラリー・間(地下鉄千代田線乃木坂駅3番)
入場料無料
講演会
日時：5月17日(金) 18:00開場18:30開演
会場：建築会館ホール JR田町駅徒歩3分
当日会場先着順 入場無料
大阪講演
日時：5月30日(木) 18:00開場18:30開演
会場：朝日生命ホール8階
当日会場先着順 入場無料

1996年度JID賞応募要項

募集部門
インテリアスペース部門：1995年4月より1996年3月までに日本国内において実施された空間
インテリアプロダクト部門：1995年4月より1996年3月までに、日本の企業が生産している製品
インテリア研究・著作・業績部門：1996年4月より1996年3月までに、日本国内において日本語で発表された研究・著作または業績
応募資格：日本人および日本に在住する外国人
募集期間：5月20日(月)～6月10日(月)
当日消印有効
問い合わせ：(社)日本インテリアデザイナー協会
事務局 tel:03-5322-6560

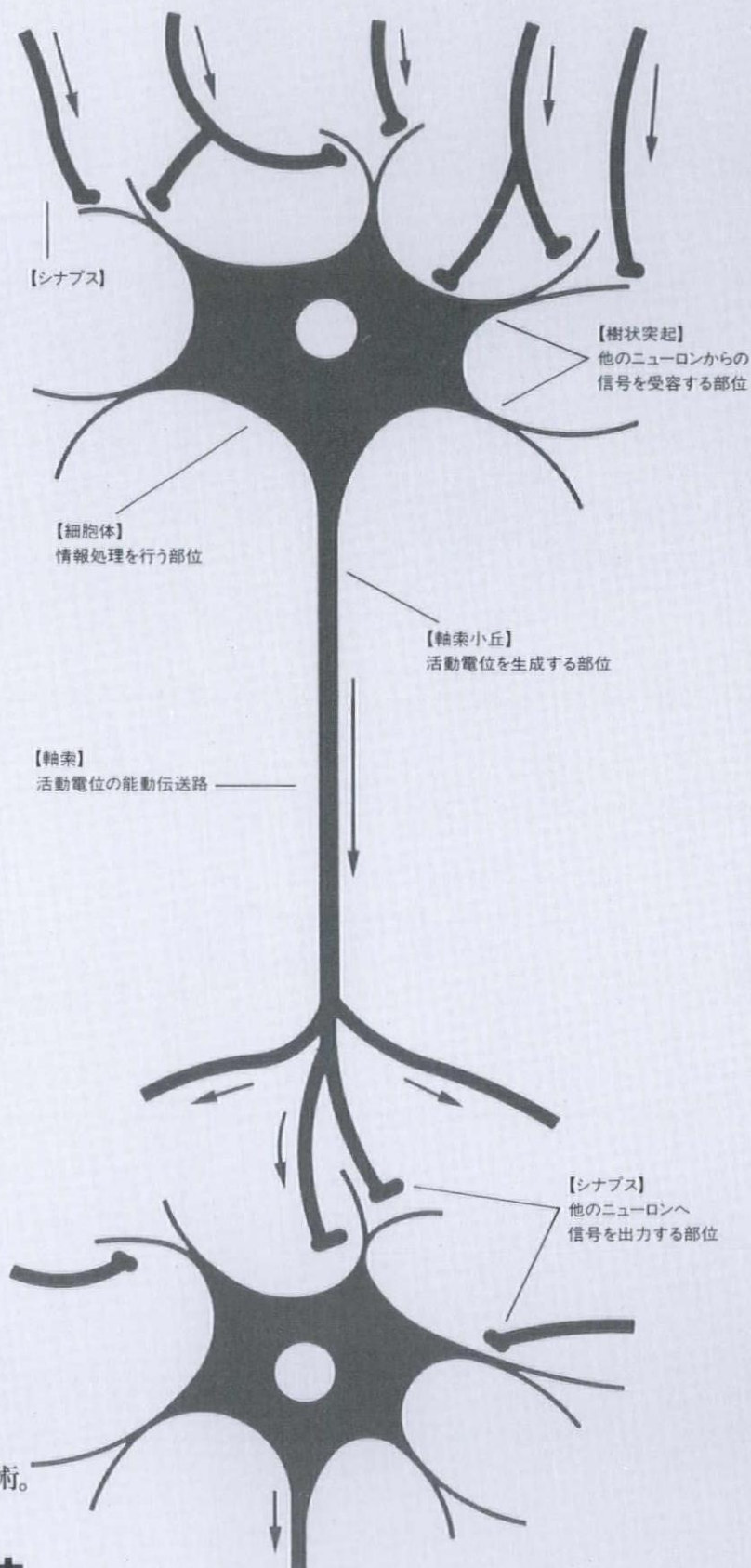
第9回村野藤吾賞

内井昭蔵、谷口吉生、内藤徹男、三宅理一、森田重人を審査員に迎えた第9回村野藤吾賞が3月30日に決定した。受賞者等は以下の通り。
受賞者：竹原義二(無有建築工房)
受賞対象作品：鴻ノ巣の家(とんのすのいえ)

第3回省エネルギー住宅賞 「これからの省エネルギー住宅を お建てになった方、是非ご応募ください」

対象：建築基準法に適合し、環境保全、省エネルギー等に関し、効果的な対策がとられているもの。1994年4月1日以降に建築され、原則として床面積80m以上で、応募日現在居住している住宅。戸建て、連続建て、重ね建ては問わない。
応募締め切り：8月30日(金) 必着
問い合わせ：(財)住宅・建築 省エネルギー機構
省エネルギー住宅賞係
tel:03-3222-6692 fax:03-3222-6696

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もっと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマに込めるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL 03-3562-1351

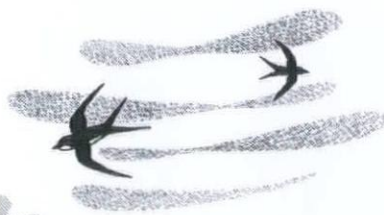
時代の呼吸に応える技術。



東 熱

空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元気である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ビューイ、ビューイ。
澄みわたった空気に、
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。
額に汗をにじませながら、
一歩一歩標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと

梢で声を

張り上げているのは

クロツグミだろうか。

樹齢は数百年に

及ぶだろう、

ブナの巨木を見上げると、



夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで
季節の深まりを知る。

山の秋は短い。

頂から麓へ向かって

早くも赤や黄に色づきはじめた

林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



秋

例えば、エゾビタキ。
ヒラリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちょっと早起きして
近くの山に足を運んでみた。

枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサッガサッという音が

林全体に響き渡る。

見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆ 新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151(代) 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

Jリーグの発足、そしてサッカーの2002年ワールドカップ招致を目指して、日本は今、スタジアム計画ラッシュだ。それはまた、ドームブームと言えるほど、ドーム形式が目につく。ドーム形式が好まれる理由は、そのシンボル性（一昔前のタワーに変わって）マルチユース性である。

マルチユース性は、単にそこで開かれるイベントへの対応能力の問題にすぎない。スタジアム建築が、こうしたレベルでのみ論じられているとすれば、社会的な枠組みの中での可能性は、極端に縮小化されている。

日本に、プロ野球が発足した時はどうであったか。現在の西武、近鉄、阪神、オリックスの前身である阪急というように、プロ野球チームを持っているのは鉄道社会が多い。それらの会社は、都心のターミナル駅から郊外へ向けて鉄道を敷き、その沿線に住宅地を開発し、ターミナルにデパートを、郊外に野球場や遊園地をつくった。自社の開発した住宅地に住み、電車に乗り、デパートで買い物をして、たまの休日は、遊園地や野球場に出掛ける。明快な地域開発の手法の中に、野球場が、デパートや住宅地とともに組み込まれている。

野球場自体は、建築的には、全く面白いモノではない。ここで面白いのは、野球場が、鉄道やその他のモノとともに、都市性を語っていることである（もちろんこれはビジネスコンセプトであるが）。

レム・コールハースの建築が面白いのも、それが都市性を語っているからである。今年の夏、これこ

そコールハースが設計したのではないかと思うようなスタジアムが、偶然にもオランダにオープンする。先のトヨタカップで、サッカークラブチーム世界の座に輝いた「アヤックス」の本拠地となるニュー・アムステルダムである。

開発と建築を手掛けたバラストネダム社が、挙げたコンセプトがふたつある。ひとつは「トラディアム」Trade(商業)+Stadium」。スタンドの下にレストラン、ディスコ、映画館、託児所などを併設し、日常的にスタジアムを人の集まる場所とするとともに、それによって収益性を高め、建設費の負担の削減と、交通至便場所にスタジアムを建設することを可能にしている。また、イベント時に、その前後の時間にわたって人が楽しめる施設にすることによって、急激な人、車の出入りを緩和することを意図している。

そして、もうひとつのコンセプトが「トランスファリウム」Transfer(乗換え)+Stadium」。このスタジアムは、1階に5000台分の駐車場、そして、2階に高速道路のインターチェンジ(!)がある(3階にサッカーのフィールド)。

これもアムステルダムでは渋滞がひどいため、市の南東部に位置するスタジアムを、平日の通勤時の市内へのアクセスとして利用できるように考えられている。郊外から車で来る通勤客は、高速道路から直接ここに進入し、車を置き、隣接する駅で地下鉄や列車に乗り換える。つまり、スタジアムがターミナルとしての社会的機能を担っている。

日本のプロ野球のスタジアムとこのアムステルダムスタジアムを比較して気付くのは、「都市」という概念が、全体的に個を包み込むものから個の内部へと移行していることである。その結果、建築が、建築計画学的な秩序の中で完全に宙に浮いたモノになっている。

磯崎新は、「都市」は消滅すると言っている。しかし僕は、「都市」は消滅するのではなく、都市(全体)建築(個)という関係が、建築(個)都市(全体)という関係へ移行するものであり、「都市」あるいは「都市性」は、依然として、有効性を持っているように思う。なぜなら、都市性を語る眼差しは、建築の拡張されたビルディングタイプを構成する文脈を浮かび上がらせ、そこでドラスティックな記述は、既存のビルディングタイプを相対化し、建築に自由度を与えてくれる。

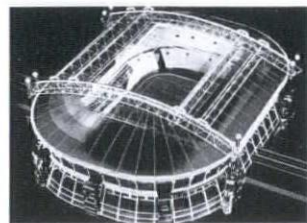
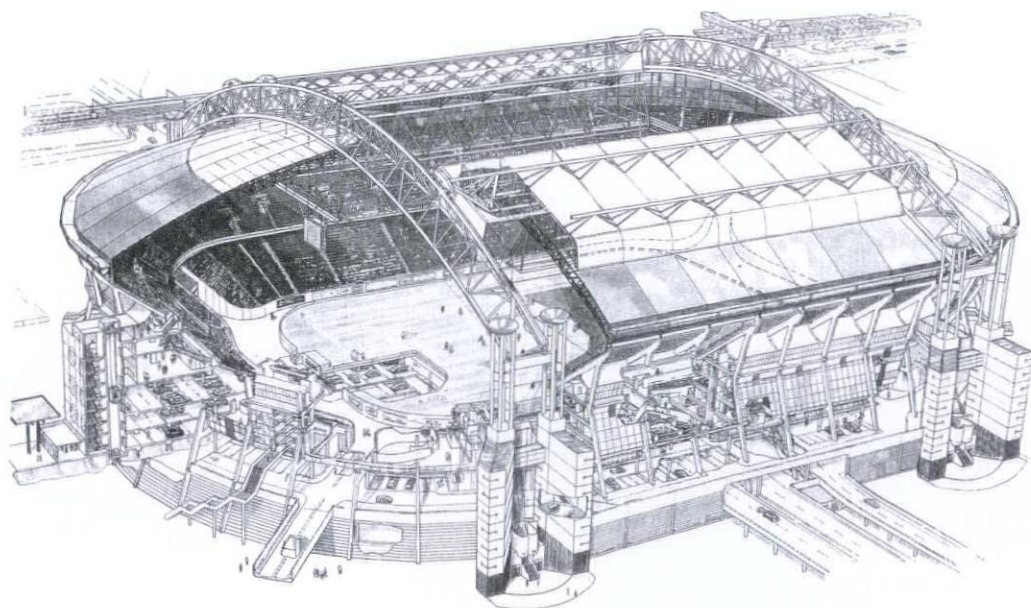
ここにきて、一貫してビルディングタイプをテーマとしている巻頭の塚本氏が、「サブカルチャー、サブカルチャー」と言うのが分かるような気がする。建築に限らず、「都市」という全体の中において自分を位置づけることをやめた「個」の中に、かえって「都市(性)」を感じることもある。それは、アラキーの写真であったり、辻仁成の小説であったり、ネットサーファーたちであったりする。

自らを秩序づける全体が失われた今を、ここぞとばかり疾走する彼等と同じように、建築も時代を軽やかに駆け抜けることができるのであろうか。

ニュー・アムステルダムのスタジアム Stadium, Tradium, Transferium

永山明男

New Amsterdam Stadium
design: Ballast Nedam Utiliteitsbouw B.V. in conjunction
with Grabowski & Poort
写真・資料提供: Ballast Nedam社、千代田化工建設株式会社





昨年は世界体操選手権が鯖江で開催され、2年後には長野で冬季五輪が、熊本で男子ハンドボール世界選手権(マイナーだけど)が開催される。また現在、サッカーのワールドカップ招致をめぐる、

日本と韓国が招致合戦を繰り広げている。Jリーグも発足して4年たった。そして何よりも、今夏にアメリカのアトランタでオリンピックが開かれる。今まさに、これらのための施設が建設され、コンペが行われている。だから今回は、タイムリーなビルディングタイプとして、スポーツに関わる建築(スポーツ建築)について論じよう。

スポーツに対する現代人の関心は本当に大きく、競技毎に愛好者や素人評論家が数多くいる。でも、そのための施設に対する関心は、スポーツそのものに対する関心に比べて当り前のように低い。地方自治体がこぞってドーム型の多目的アリーナをつくっているようでもあるが、それは80年代に多くの文化ホールや美術館、博物館、郷土資料館が地方自治体によって建設されたことと同じく流行のひとつという気もする。建設されるスポーツ施設の在り方も、市民が気軽にサッカーしたり寝転がったりできる芝生のグラウンドを整備するという日常的なもの

ルディングタイプの議論は、あくまでも方法に対する関心に裏打ちされたものであって、必ずしも「新しいビルディングタイプができれば社会も建築も変わるはずだ」という内容の更新に直接結び付くものではない。

それではスポーツ建築を成立させている環境とはいかなるものであるか。それはスポーツそのものが被っている環境の変化と密接に結び付いているが(ドーピング、プロ化、性差などスポーツをめぐる環境の変化については多木浩二氏が、筑摩新書『スポーツを考える―身体・資本・ナショナリズム』で論じている)、ここでは施設の問題に限って簡単なシミュレーションを試みよう。スポーツに対する人々の関心が高いということは、スポーツ建築が公共施設としてのコンセンサスを得やすく、しかも資本が集中するビルディングタイプのひとつであるということだ。したがって、スポーツ建築は公共的な性格を持つとともに必然的に大型化する。小規模な単なるエクササイズの場であれば純粋に競技のしやすさを考えれば良いが、現代の大型化するスポーツ建築はそれだけではすまない。それは競技するための施設であるだけでなく、スポーツを観戦するための劇場であり、テレビ中継するためのスタジオであり、場合によっては賭博場である。規模が大きなスタジアムであれば、数万人が2、3

海外建築情報 リミックス

なら大歓迎なのだが、地域のシンボルだかなんだか知らないが変な形をした気軽に利用できないものになってしまう。この国では市民が余暇を過ごすための施設にあまりお金を使ってこなかった結果、消費を究めた今になってそのようなスポーツ施設のようなものをつくらうとすると、複雑な事情がからんでシンプルなものにできないのかもしれない。楽しみで競技する立場と、興行者の立場とは矛盾する部分も多く、スポーツ施設への関心といってもどんな評価基準を持てば良いのかという肝心なところは本当に曖昧で捉えにくい。この曖昧さは、そのままスポーツ建築が成立する環境の曖昧さにつながるのである。

建築はその時代、地域、文化といった環境から様々な情報を引き付け、それを送り返すことで成立すると考えるならば、建築はその出現によって常に環境を定義しているのである。この「情報を引き付け、送り返す」やり方に、経験的な方法によらない意識的な方法を組み立てることができれば、自らが成立する環境を批評的に定義することができるはずだ。ビルディングタイプ毎の特殊事情やそれに付随する文化的連続性に注目することは、建築が成立する環境の曖昧さや不透明な部分を浮上させることだろう。そうすることによって、単独の透明な表象体系(例えば「機能」)によって建築を定義することや、それを否定して曖昧にすることではなく、曖昧や不透明とはどういうことかを定義することが、現代建築の表現の可能性として視野に入ってくる。だから、ここでのビ

Theme: ビルディングタイプ その5「スポーツ建築」

時間の中に集合し、大騒ぎして去っていく都市の圧縮装置である。そして、それがオリンピックなどの国際大会という文脈に置かれれば、国の威信や繁栄を示すシンボルとしての意味を担わされることになる。また、私たちが、武道館へ行くのはロックのためであって柔道の試合(ましてや呉服即売会)のためではないように、この都市の中の大空間は実に多目的に利用される。

我々の幼稚なシミュレーションだけでもこんなに複雑な事情があるのだから、現実はずっと凄いはずなのに、スタジアムやドームの建築的な表現は、たいてい大架構の形式に集中している。たしかに、大空間をいかに覆うかということは永遠の建築的課題のひとつかもしれないが、建築的な表現がそれに集中してしまうことは、先に述べた「情報を引き付け送り返す」やり方としては単純かつ経験的な方法で、何か漠然とした物足りなさを感じるのである。「大架構の技巧だけに走るのとは違う方法がないのか?」これが各論に対する巻頭からの問題提起である。スポーツ建築が成立する環境と建築の表現の関係が粘り強く論じられることを期待している。

アトリエ・ワン

ビルディングタイプについての議論も今回で5回目である。回を重ねるうちに他の論点との差異化が自然と行われ、我々としてもなぜこだわってきたのか、大分整理されてきたとともに、それが何につながるかということが見えてきたように思う。それは、これまでの議論でも努めてきた、建築を成立させる不透明な因子を浮上させることが「曖昧さを定義する」という建築の表現の可能性につながるのではないかとということである。

コア・スタッフ'96
岩下暢男
今井公太郎
アトリエ・ワン
曾我部昌史
山本想太郎

AA: L'architecture d'aujourd'hui
EC: El Croquis
PA: Progressive Architecture

近頃、東京ドームに野球なんかを見に行っても、どこかシラけて、トイレに行こうと思って降りた通路のモニターに映し出されている見慣れたテレビのアンクルの方が興奮の仕方を知っていて、なかなか席に戻れなくなったりする。昔、まだそこが後楽園だった頃、駅から見えるスタジアムに浮き上がる光と歓声の塊が好きでチームの帽子を被った僕を興奮させた。あの興奮が失われつつあるのは、自分が年齢を重ねたことだけが原因ではないはずだ。

都市に挿入されるスタジアムのビルディングタイプの本質はその内と外の間にある。スタジアムを分解すれば、内側にあるのは容積の決まった意識を投影する興奮の場である。そして外側にある、不定形・無尽蔵の場とのコンフリクトこそがスタジアムのビルディングタイプの本質である。この内／外の間を眺めることで、現在のスタジアムの、都市とのコンフリクトに対する処理の仕方が見えてくる。スタジアムの巨大なスケールが生む集客力が作り出すポテンシャルは、それ自体で一時的な都市として存在する。が、しかし最近の日本でのコンペでもほとんどの案がそうであったように、巨大な建築をテクノロジーでゴロゴロと可変させ、多目的な需要に応じて「イベントのデパート」にしてしまうことが、スタジアムの都市的あるいは建築的な解答と言えるのだろうか。それはあくまでもスタジアムの都市に対しての従属にすぎず、扉を閉ざしてしまえば外との関係を断絶するという連続性のない近代都市の空間概念を超えるものではない。

近年、オリンピックやワールドカップの規模が拡大し、国内外で国家規模のスタジアムの建設・改修を増加させている。そんな中で取り上げてみるのは、1998年にフランスで行われるワールドカップに向けて行われた、パリ近郊の8万人収容のサン・ドニのスタジアムコンペである。当初の18案の中から、当

時のフランス首相バラデュールによる最終審査に残ったのは、最終的な1等案になった「エレガントで、古典的で、安いコスト（これが当選の第一の理由でもあるらしい）」のZublena・Marcary・Regembal・Costantini案と、「やりすぎテクノロジー（フランス『Architecture interieure Cree』誌より）」のJean Nouvel案の2案であった。

Zublena案は、高速道路と、鉄道と運河に囲まれた敷地の中に、運河のラインを型取ったテフロンと鉄でできた楕円の円盤屋根を20本のマストで支え、20本のモニュメンタルな階段とコンクリート造の観客席を掘り下げたフィールド部分に浮かせている。そして都市との境界を作り出すためのガラスのシリンダーと広大なナニもない前庭をおくことで、都市とのスケールにおいてバランスをとり、スタジアム自体を開放している。広大なスペースを歩くことで、観客自身の肉体的経験の上で日常的な都市の興奮をスポーツの興奮へと移行させる。

現在、元来スポーツの内に潜むショーの要素を肥大させることが、巨大な体を持つスタジアムを都市の一施設とするための免罪符になっている。そうした状況を現代社会におけるスポーツのアイデンティティの危機として、Zublenaはこの作品のなかでスポーツのショービジネス化に貢献することを拒んでいる。これは同時に都市に対する単なる部品としての建築の従属を拒み、都市の閉鎖的な関係性の中で、スポーツの普遍性がこの開いた楕円体のように都市に開放された連続性を得るという古典的な方法を選んでいる。

Nouvel案は、彼の唱える「現代性」(?)を達成するために、ひたすらその道のエキスパートたちに聞き込むことで、必要のないときはサブのグラウンドにかかる可動式テーブル屋根や、移動して内部のイベントと観客との距離を常に保つスタンドなどを可能にする技術を統合して見せた。周辺には駐車場・

ショッピングモールを設けて都市のアクティビティとの連続感をつくり出している。しかし、実際の都市とはその駐車場やモールで断絶させ、刹那的な都市の密度を濃縮しようとしている。これは徹底的に観客にとっての効率化を図ることで、都市の興奮とスタジアムの興奮を限りなく近づける。そこには複雑な手順を省いたコンピニエントな興奮を求めることができる。

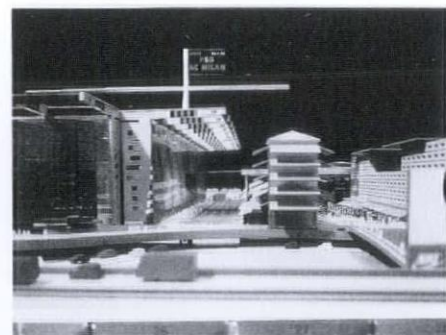
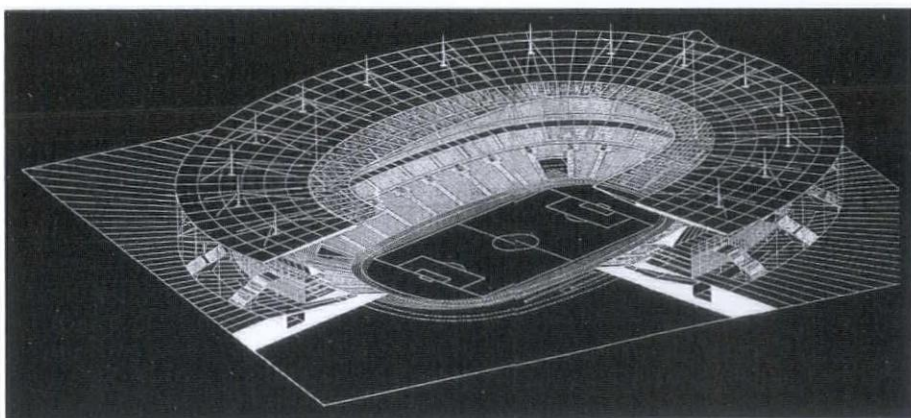
そしてもうひとつ、ここではPaul Andreuの案を取り上げてみる。彼は、あらゆる都市の構成要素は他から孤立してはならず、つまりは、都市風景の中でその断片でなくてはならないと言い、スタジアムであろうとも都市との関係性においてのルールを持たなくてはならないことを断言している。そこで、スタジアムと既存の都市の文脈の間に排除と衝突を避け、音響ダンパーとして機能する、たくさんの映画館やホール、ブティック、レストランなどの都市機能をガラスの中に閉じ込めた仮想的な都市を挿入している。閉じ込められたスタジアム内の観客に、スタジアムという客観的な空間からガラスを通してその都市生活を観戦させることで、都市の中での自分の位置を確認させるのである。そこに交換されるものが、スタジアムの都市性としている。彼はスタジアム内のフィールドを都市の外部と捉えることでその空間の機能を定義したのである。

前出の2案は、興奮という心理的状態をつくり出す過程、つまり都市とスタジアムとの距離というパラダイムにおいてスポーツのアイデンティティを解釈できるのだが、Andreu案は都市を観戦する観客席としてそれを検討しているのではないか。スタジアム建築は「チョー使エテいろいろある」方に向かうばかりではないのである。

サン・ドニのスタジアム・コンペ 都市とフィールドと興奮

米川 淳

Le Grand Stade
architect: Zublena, Marcary, Regembal and Costantini—1
Architecture Interieure CREE9410
architect: Jean Nouvel—2
AA9412
architect: Paul Andreu—3
SD9505



その表題に顕著にみられるようにル・コルビュジエの〈10万人のスタジアム計画〉(1936-1937)とは、スタジアムとして究極の規模であり、なかなか破天荒な計画だと思っていたら、どうやらそれだけではないらしい。確かにスタンドの部分だけで10万人の観覧者を収容できるのだが、その馬蹄形に開かれた平面は、なんと10万人の競技者をも想定している。戦争へと急速に突入しつつある中で、経済的不況により疲弊していた議会主義を否定し、労働者階級による直接的な革命を目的とするサンディカリズムが、その背景にあることは想像に難くない。それは言うなれば、権力なき資本主義、独裁なき全体主義、アナキーな社会主義といった、互いに矛盾するイデオロギーを抱えつつ疾走する、非政治的空想である。

このスタジアムは、観覧・競技者双方において、その究極の規模を対象とすることで、いわば一時的に圧縮された都市として計画されており、スタジアムがはらむ問題の究極の本質を不可避的に暴露している。ル・コルビュジエがそこに見出した、設計上の主題とその解法の探求は、次の2点である。

ひとつは、大規模の観覧者と競技者の関係をどのように配置するかである。ここではスタンドの配置を、北東方向を解放した馬蹄形に配することで、大量の競技者を同時に参加させる方法を模索している。さらにこの方位設定によって、観覧者に直接日が射すのを防ぐばかりでなく、太陽光が北東方向に広がる舞台を照らし出すことになる。すなわち、その太陽光の射す向きは観覧者の視線の方向と一致し、自ずと観覧者の視線と興味は競技者が位置する舞台上へと集中するよう仕組まれている。しかし、その舞台は後方へと抜け去り、背後には屋根の天幕を支え

る強大な1本の支柱が控えるのだが、その大柱も視線のベクトルを受け流す形で前方に傾いている。通常グラウンドの全周を囲んで円形に閉じた形態をとるスタジアムという機関は、ここでは、馬蹄形に開放されることによって、集中する「視線=権力」を反故にしつつ、前のめりの形で静止している。前者が加速し続ける資本主義を標榜するものだとなれば、後者のそれは、各々が主体的自由を獲得しつつも調和的に前進する理想社会を標榜しているのだ。

もうひとつの主題は、それだけの規模の人間をどのようにスタジアムに「圧縮/解放」するかである。ル・コルビュジエは、メインとなる動線を、すべて斜路によって構成することで、これへの解答としている。その断面とパースから読み取れるように、特にそのアプローチに、ほとんど戯画的ともいえるべき巨大な斜路が使用されていることが特徴である。ここで、多少乱暴ながらも、「平面=静止」、「斜面=移動」と言う図式をお立ち台に挙げることで、この巨大斜路の意味を探ってみよう。

観客席は通常、オブティマム・ヴィジョンと呼ばれる観覧者と競技者との視線の関係によって規定される。緩やかなカーブを描く斜面として計算される。だが、前述の巨大な斜路が、アプローチとしてスタジアムの内部たる「観覧席=斜面」に接続されたとき、そこに新たな意味が生産される。つまり、「内部=床」は水平である」という先験的な前提がはなっからくずれており、いうなれば、そこには斜面しかないのだ。

そのことは次のような解釈を可能にするだろう。斜面しかないこのスタジアムにおいては、アプローチから観覧席に至り、またその逆の経路を経て外部に出るまでを、一連の連続した動線として捉えるこ

とができる。ならば、ここでは本来動線ではないはずの観覧席たる斜面が、動線の一部として存在しているといえる。否、観覧席とは、斜面というよりは階段状の平面なのではないか、と言うかもしれない。その通り！そこは元々、視線の関係によって規定された斜面であったのだが、人間に「一時止まれ！」を強いるために構築された、微妙にずらされつつ積層された平面なのだ。そう、まさにスタジアムが、一時的に圧縮された都市であるという認識を、平面と斜面の操作によって建築上で表明しているのが、このスタジアムなのだ。

これらの論点は彼自身の生涯を通奏するふたつの主題としても解釈できそうだ。すなわち、光と影の相克としての視覚的効果の追求と、運動する主体を対象とした平面と斜面の相克としてである。とすると、サンディカリズムの建築的表明とも言えるこのスタジアムは、ほとんど個人的強迫観念によるル・コルビュジエ自身の個人的探求として行われたともいえる。そこにおいては、通常ビルディングタイプ論の考察の対象である「外部=社会」は記述され得ない。そこに見られる欲望は、実は「社会」のそれではなく、単純に「彼」の欲動なのである。そこでは、彼自身のうちに内面化された「外部=社会」を通して、個人的探求が(太陽と重力という)普遍性へと直結することが目論まれているともいえるだろう。

このような政治的両義性こそ、30年代の彼の境遇を如実に表しているのだが、ともかくこのスタジアムの主体とされるのは、彼の理想とする、躍動する健康な肉体と知性をあわせもつ「聖なる蛮人」であり、それ故、このようなスタジアムにこそ「スポーツ建築」という命名がふさわしいのかもしれない。

10万人のスタジアム計画

プレス リリース
圧縮/解放

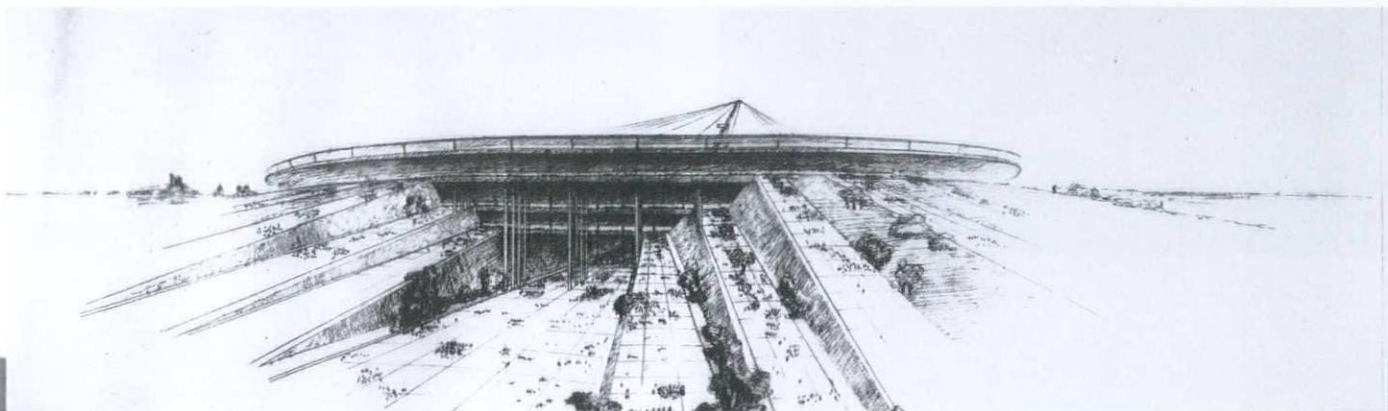
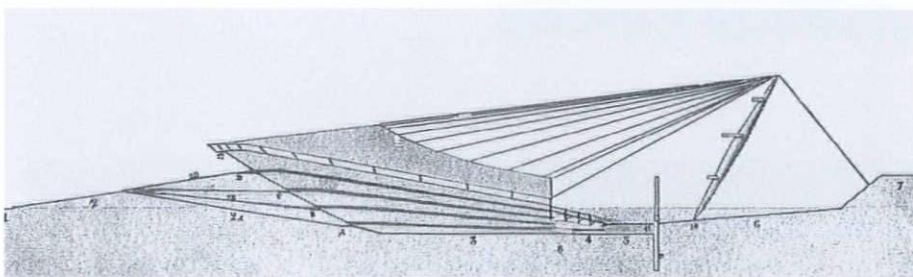
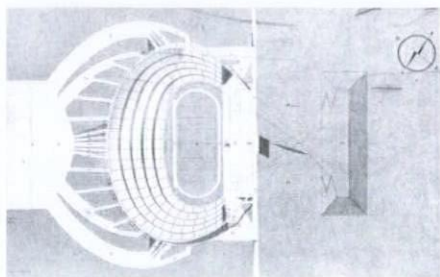
奥田真也

Stade de 100,000 places, Paris France, 1936

architect : Le Corbusier

"The Le Corbusier Archive 13", H.Allen Brooks, Gatland publishing, 1984

"Le Corbusier & P. Jeanneret 1934-1938",
Les Editions d' Architecture Zurich



ナントの体育館

グループ・テトラルクは、ナントを本拠地とする若手のグループ建築家である。このナントの体育館は、火災で焼けた高校の体育館を再建した極めて地元な計画であり、実際のところ、彼らの母校だったなんていう話もあり得ない話ではあるまい。しかし、AA誌で見る限り作品が背負う地域性、固有性といったものは全て排除するかのように、日没時の外観写真以外は内観とクローズアップのみ、プランにも周辺の状況は全く示されていない。そこで明らかなのは、素材への信奉とディテール、自然光の採り込み方といった形式性の追求こそ彼らの中心的な建築観であるということだ。R.ディーナーやヘルツォーク等に備わるバーゼルの気質——すなわちドイツ観念論的（唯物論的）な意味での、物質そのものが見せる表情（＝力）を重視し、それらを知的なブリコラージュによって構成するといういわば「知の折衷主義」的な気質——に通ずるものを彼らに感じる。それは大西洋からノルマン文化の影響を受け、19世紀からロアール川流域の中心的な重工業都市であったナントの地理的固有性と無縁ではないだろう（南側に貫入するダンス室の内装はいみじくもヘルツォーク設計のヘーベル通りのアパートの階段室とかなり似ている）。ともかく、この作品の中心は紛れもなく南北ファサードに水平に走る窓である。ブリーズ・ソレイユのエレガントなシルエットを残しつつ、上下反転することによって日除と採光の機能を反転しているあたりはデザイン上成功を納めているといえる。

ウエスカ・スポーツホール

一方、スペイン建築界とEl Croquisの尽力によって本コーナーでも常連となったミラーレスのスポーツホールは、同じ体育館でもウエスカの町の中心的施設である。カタロニアの柔らかな丘陵地の頂部を掘り、

古代ローマ劇場の遺跡あるいはコロニア・グエル教会の要領にない、矩形のアリーナを囲む形でU字型のスタンドが谷側である南方向に開いている。オフィスや選手控室など周辺施設を下に納めたグラウンド・スタンドが谷側から貫入し、巨大なトラスの梁をわたして両者を覆う屋根を架けているというのが概観である。しかし、以上のような構成的なエレメントが判別できなくなるまで（彼自身の論理はあるにせよ）好き勝手に分節したり傾けたりというデザインの作業が行われている。グラウンド・スタンドを支える柱が、ガウディへのオマージュであったり、地下の控室がラ・トゥーレットの礼拝堂を意識的に引用しているところに、ミラーレスの明朗さが表れているとも解釈できるが、彼の他の作品に比べて大きな構成（平面上テトラルクの例と相似な）が残されている分、歯切れの悪い作品といえるだろう。

GYMnasium

建築がスポーツに関わるのは、その管理・運営的な側面に限られる。企画展示を行う美術館と同様、スポーツそのものが行われる場に建築が介入することはほとんどできない。なぜなら、特に競技を前提とし、国際的に運営されるスポーツは何時何処で、また誰によって行われようとも、それらが等しくあるための厳密な規格があるからである。ルールやメートル法は、スポーツがスポーツとして価値を持つためには侵してはならない「系」であり、「系」の逸脱はスポーツを見せ物に変えてしまう。この意味でスポーツは建築よりもはるかに堅牢な構築性を備えたバ（ー）ベルの塔なのである。風向やフィールドの状態が競技の結果に但し書きとして注記されることに明らかなように、スポーツは建築を揺るがすことができるのは自然条件の偶然性だけなのである。ましてや孔を空け壁を立てる「建築」的行為とこの聖域

の存在とはパラドックスによって両立しない。数学における公理系が完全建築であるように、建築家の有無に関わらずスポーツは建築もまた完全であり、僕らが言うところの「建築」とは全く別の次元に聳え建つ神殿なのである。建築家に残された配役はゲリラかあるいはドン・キホーテ。

本来は、競技スポーツよりもむしろフィットネスの場であったはずのジムナジウムも、近代以降スポーツの参加機会均等化に伴って聖域を包むシェッドとなり、居住性は排除される傾向にある。同時に建築に対する議論の多くはスポーツから撤退し、架構（ヴォールティング・プロブレム）という自らの庭に閉じこもるようになっていっている。上述の2題も架構のデザインには対照的な方向で注意を払っている。隅部をシャープに納めて矩形のヴォリュームを強調し、架構を覆い隠そうとしているテトラルクに対し、ミラーレスはヴォリュームを巨大なトラスの下敷きにしてダイナミックな表現を目論んでいる（当初、架構は吊り構造であったが、施工中のアクシデントによって鋼構造に変更されたそう）。自然光の引き込み方をデザインすることによって、テトラルクは空間の様相レベルからこの完全建築への侵入を企てたといえる。ゲリラ戦術の定石ではあるが、ディテールのクオリティによって支持されるだろう。期待のミラーレスはといえば、正面切って果敢に進んでいるようでありながら、その実、肝心の城内へは入りそうで入らない、歯切れの悪いドン・キホーテを演じて、ブーイングは避けられまい。

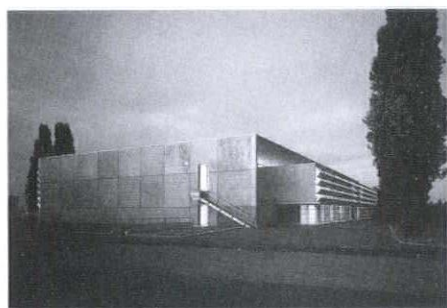
スポーツと建築はどうも食べ合わせが良くないようだ。しかし、若きゲーデルが数学の世界を瞬時に転覆してしまったように、スポーツよりも楽しい（スポーツ）建築なるものが突然出現しないとも限らない。しかし、そのとき転覆するのはスポーツ？？建築？？

ナントの体育館とウエスカ・スポーツ GYM:ゲーでるとイエどもムザかしい？

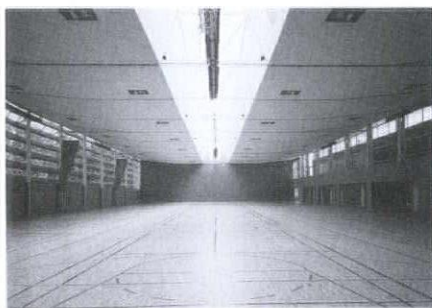
機橋 修

Gymnase à Nantes — 1
architect: Groupe Terarc
AA293

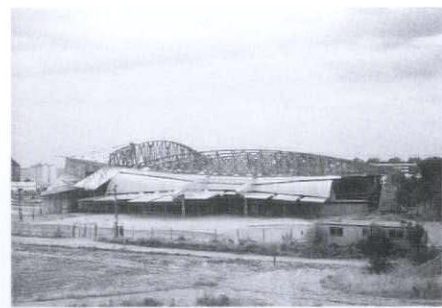
Palacio de Deportes de Huesca — 2
architect: Enric Miralles, Carme Pinos
EC49/50



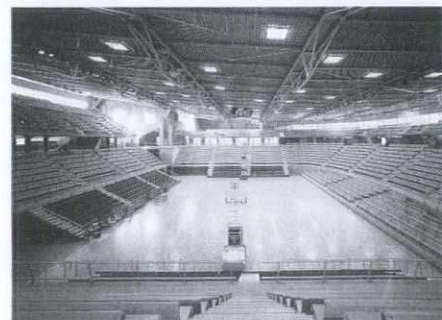
1



1



2



2

PA誌1995年7月号は、「No Frills, No Thrills (装飾も無ければスリルも無し)」と題し、やや皮肉を込めてアトランタ・オリンピックの関連施設を特集している。「アトランタの現実的な (pragmatic) オリンピック」というサブタイトルが示す通り、ここには確かに著名な建築家の名前や、際立った表現上の成果は見出せないものの、ページをめくるにつれて現代のビルディング・タイプ (以下B.T.) という概念を取り巻く抜き差しならない状況が伝わってくる。本文中でしばしば目にする「practical」あるいは「pragmatic」を字義通り使い勝手に捉え、建築家のデザイン優先の価値観の再考を促す視点は、編集長が巻頭において「実用的であることは退屈か? (Must Practical Mean Dull?)」として提起しており、低成長時代における建築のテーマとしてアメリカでは議論されているようである。建築が社会的産物 (施設) としての側面を強く持つ以上、当然「practical」あるいは「pragmatic」であることが要請される。特にオリンピック施設のような国家的規模にまで肥大化した公共建築においては、単なるコスト・マネージメントなどに表れるプラグマティズムに加えて、複雑な政治の介入の調停が要請されることも予想できよう。例えばアトランタでは、大会の経営母体はあくまで独立した営利団体であり、原則として中央政府から予算はほとんど与えられない。このため、選手村が将来ジョージア工科大学の寄宿舎となるのを始め、大部分の施設が大会終了後に別の所有者のもとで、あるいは別の施設として転用されることを前提として、民間企業との積極的なタイアップが図られている (pragmatic であること)。それと同時に、

地元の企業や建築家、あるいは女性の経営する設計事務所といった社会的少数派を積極的に起用することが行政によって義務付けられている (politically sensitive であること)。アトランタでは、こうした政治的圧力が計画の基盤を形成するとともに、さらに人々の嗜好や記憶といった曖昧で微妙な契機が、現実的な圧力として建築の構成——特にオリンピックの顔とも言うべきメイン・スタジアムにおいて——にドラスティックな影響を及ぼしている。

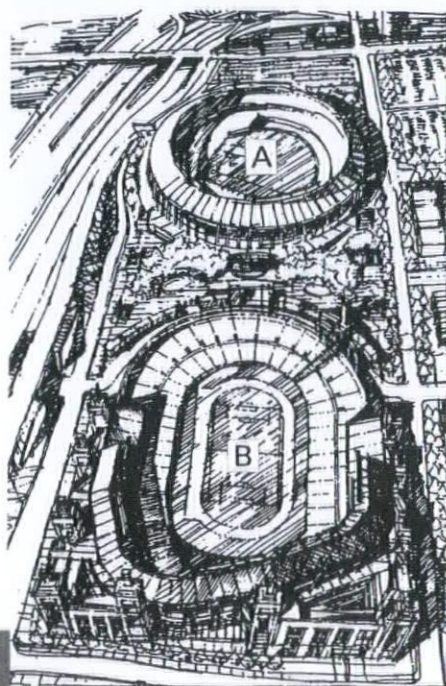
メイン・スタジアムに設定されたプログラムは以下の通り、なかなか手の込んだものである。既存の多目的スタジアム (ブレイブス/地元のプロ野球チームのホーム球場: 図1-A) は大会中は野球場として使用される予定で、その駐車場であった場所にはオリンピックの開会式が行われるメイン・スタジアム (図1-B) が現在建設中である。大会終了後は、メイン・スタジアムの観客席の大部分が撤去され、駐車場に改修されることで、ブレイブスの新たな専用野球場となる (図2-C)。このことを見越して、メイン・スタジアムの外壁には煉瓦が、観客席にはスチール製のフレームワークが使用され、アメリカの伝統的なダウントウンの野球場を彷彿させること (nostalgic であること) が意図されている。さらに、完成予想図のバースや施工中の写真を見る限りでは、これらの表現は列柱からなる擬古典的なファサード (こちらはオリンピック、あるいはギリシアに対する nostalgia か?) と相まって分裂的な雰囲気を出している。つまり、遠い将来のプログラム (図2-C) のために、近い将来の計画 (図1-B) が変形を被っている訳である。スポーツ施設は、元来機能上の充足が一義

的な命題として捉えられてきたことから、しばしば直交軸などの幾何学性によって表象される合理的なプランニングを誘発するし、またこうした新規の大規模開発においては、特にアメリカでは70年代におけるコンテクスチュアリズムの隆盛以降、既存の都市との連続性が重要視されてきた。しかし、ここでは先に述べたスタジアムに纏わる一連のシナリオが優先された結果、スタジアムの軸線は強引にねじ曲げられ、敷地があたかも群島の一部であるかの様な、周辺からの極端な不連続性が生じているのである。また同時に、こうした構成上の不連続性に加え、スタジアムの外装の場当たりのな処置に見られる文化的な不連続性は、全体の一貫性、整合性といった価値に代表される古典的な意味での建築の審美的役割という枠組み自体が、人々の気分といった曖昧なファクターによって審査され、相対化されていると読み換えることもできる。このように現代のスタジアム建築は、その巨大さ自体が都市における存在感を否応なく主張してしまうが故に、人々の多様で重層的な思惑——それはまさしく不透明な主体と言ってもよい——の投影であるB.T.とならざるを得ないことを、このメイン・スタジアムは示している。スタジアム建築がもつこうした重層的な性格は、アトランタでは単なる拡張されたプロブレム・ソルヴィングの対象として設計者の職能によって経験的に処理されているが、これを不透明な主体という概念によるビルディング・タイプの論理として再構築することは出来ないだろうか?

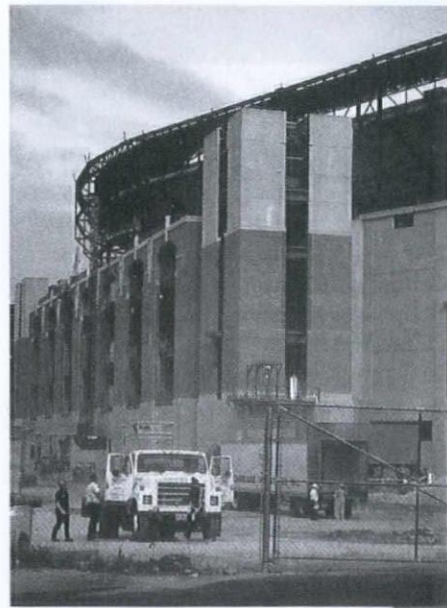
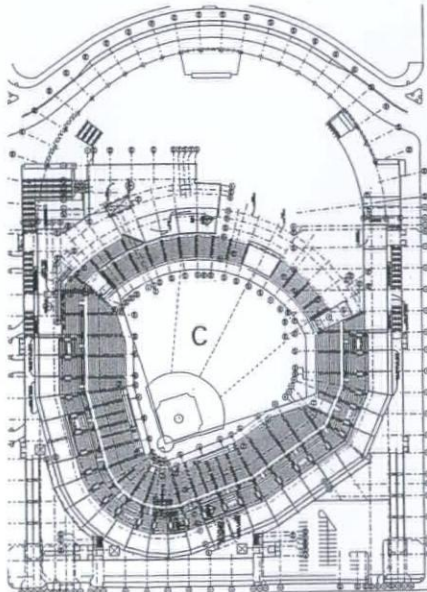
アトランタ・オリンピック施設 軸がねじ曲げられるまで

小川次郎

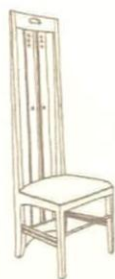
The Atlanta Olympic Building
architect: Heery International, Rosser Fabrap, and Williams-Russell and Johnson
PA9507



SD9605
124



3



C. R. Mackintosh, 1900



Gerrit Rietveld, 1917



Marcel Breuer, 1928



Le Corbusier, 1929



Mies van der Rohe, 1929



Hans Coray, 1939



Eero Saarinen, 1948-55



Gio Ponti, 1950



Arne Jacobsen, 1955

9606

特集

建築家の椅子111脚

19世紀後半から現在にいたるまで、多くの建築家たちが建築の設計と同時に、家具や照明器具などのデザインを手掛けてきた。なかでも椅子は数々のスタンダードが生み出され、今でも広く親しまれている。本特集では、アールヌーボー、バウハウスのプレモダンからモダン、そしてポストモダンと現代までにわたる、海外の建築家達のデザインによる椅子を一挙に紹介する。

〔作品〕

カサ・カルヴェの椅子/A.ガウディ、ムゼウムチェア/A.ロース、パイミオ41/A.アアルト、エッグチェア/A.ヤコブセン、レストラン椅子/B.タウト、ラダーバックチェア/C.R.マッキントッシュ、セナ/G.アスプルンド、チューリップチェア/E.サーリネン、六角形の背を持つ椅子/F.L.ライト、レッドアンドブルー/G.リートフェルト、スーパーレジェーラ/G.ポンティ、サンテリア/G.テラーニ、フレードーマウス/J.ホフマン、カウボーイチェア/L.コルビュジェ、バルセロナチェア/M.v.d.ローエ、ワシリーチェア/M.ブロイヤー、三脚の椅子/M.ビル、セコンダ/M.ボッタ、他全111脚予定

〔対談〕 光藤俊夫+宮脇 檀

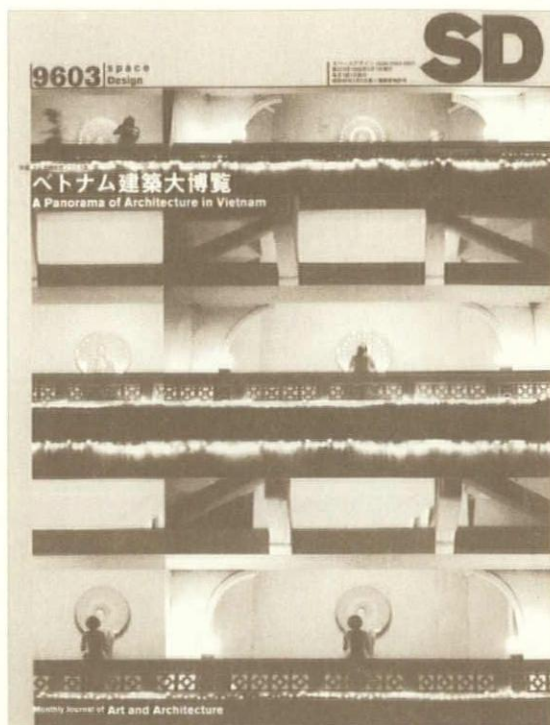
〔解説〕 織田憲嗣、羽原肅郎、大廣保行、光藤俊夫

〔エッセイ〕 林昌二、池田武邦、藤門弘、村井修、山口昌男、山口勝弘、羽原肅郎、織田憲嗣

〔年表〕 島崎 信

SD

バックナンバー



9603

特集

アジア同時代シリーズ2

ベトナム建築大博覧

近年めざましい経済成長を見せるベトナムでは、その都市と建築に対する学術的、実業的な関心の眼を世界中から集め始めている。もちろん日本からも各時代の建築、都市の調査研究、保存・修復、または、都市開発、起業投機と各分野でのアプローチは盛んである。本特集では、ベトナムの都市と建築の現在を紹介するにあたり、最も話題に上っている事項を、都市別、テーマ別に整理した。ベトナム主要地区の建築ガイドマップ収録（写真、解説付き、全221件）。

ベトナムの都市と建築

1. ハノイ／東京大学生産技術研究所藤森研究室＋東京大学都市工学科西村研究室
2. フエ／中川武十早稲田大学アジア建築研究室
3. ホイアン／千葉大学・福川裕一、昭和女子大学・友田博通、他
4. チャンパ遺跡／日大片桐研究室・重枝豊
5. ホーチミン／東大生産技術研究所藤森研究室

ベトナム少数民族の住まい／ベトナム南部のオクエオ文化と前アンコール期の建築遺跡／ベトナムの木造架構／フエ・グエン朝王宮の修復保存／ベトナムの都市住宅／「建築家なし」のミニ・ホテル／ベトナムの工業団地／発熱・ベトナム現代建築事情

〔ベトナム建築史論文〕 重枝豊＋中沢信一郎＋村松伸

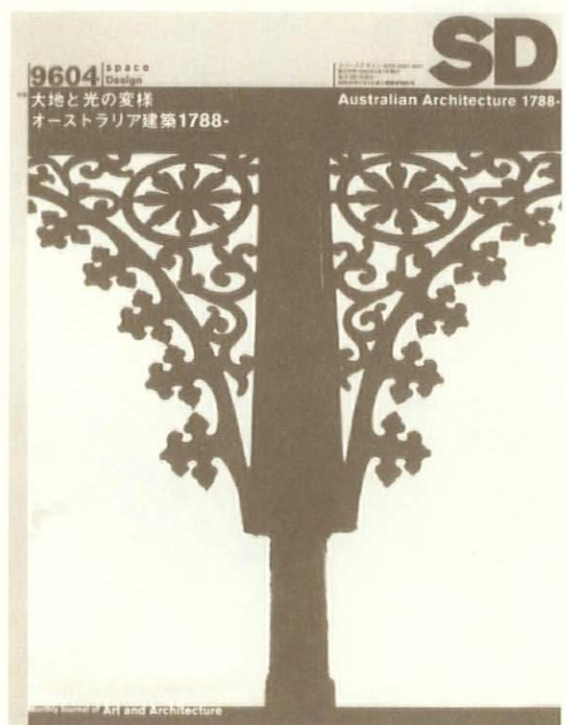
〔写真〕 鈴木豊

連載：apple tomology トムの時空形象学6 〔文〕 戸村 浩

連載：ヤマトホテル巡礼2 〔文〕 ホテル文化研究会、永井良和

照明探偵団：連続実践講座レポート1

特別定価＝2,500円／本体2,427円



9604

特集

大地と光の変様

オーストラリア建築1788-

イギリスの建築様式を出発点としつつも、新しい環境に適応させようとする建築家達の積極的な意志が見える。1788年流刑地として入植して以来のオーストラリア建築の変遷を追う。

1. オーストラリア植民の始まり
2. シドニーのコロニアル建築
3. タスマニアの教会建築
4. オーストラリアン・ハウス
5. メルボルンのヴィクトリアン建築
6. 都市住居テラスハウス
7. キャンベラの新首都計画
8. 現代建築の可能性

〔文＋写真〕

東京都立大学建築学科 小林研究室

ネクストジェネレーション in New York

スミス＝ミラー＋ホーキンソンと
ジョエル・サンダース

与えられたプログラムに独自の思考を加えながら、プロジェクトに終わらず、エレガントな実作を生み出しつつある、ニューヨークの建築家の新作を紹介。

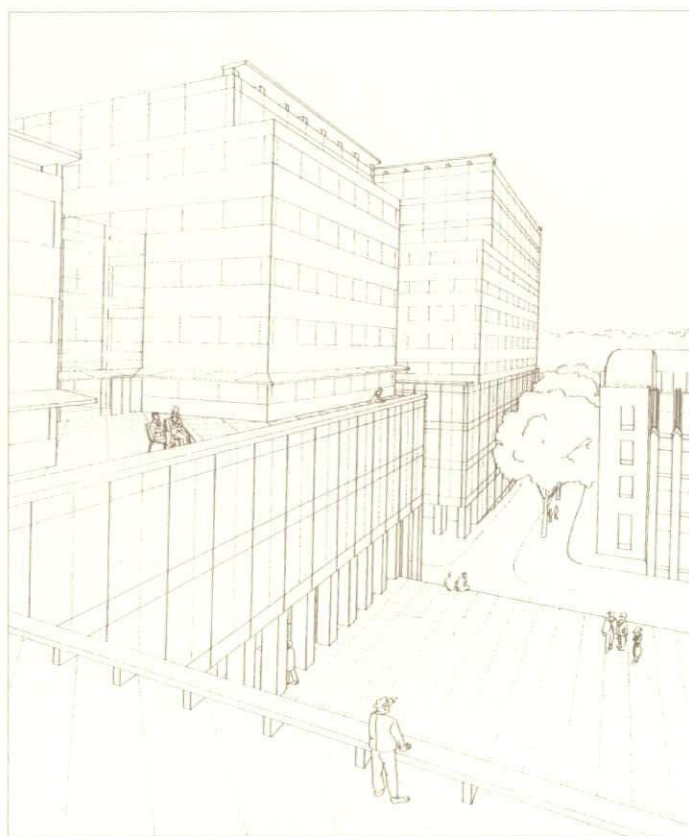
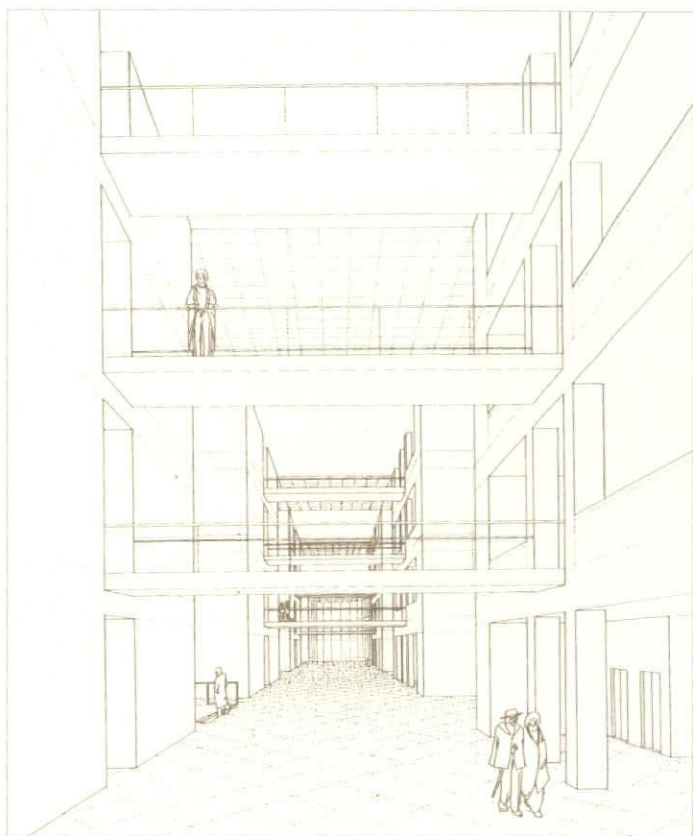
〔文〕 松畑 強

連載：apple tomology トムの時空形象学5 文＝戸村 浩

連載：ヤマトホテル巡礼3. 文＝橋爪紳也

照明探偵団：連続実践レポート2 葛西玲子/LPA

定価＝1,950円／本体1,893円



SD別冊28 好評発売中

大学の空間

ヨーロッパとアメリカの大学23例と東京大学本郷キャンパス再開発

判形：A4判変形

総頁：176頁

定価：3900円

教育と研究の最高学府としての大学を取りまく環境は、大きく変わりつつある。それに対応した改革の必要性は高く、現実に様々な策が講じられている。キャンパスを構成する物理的な環境も例外ではない。本別冊では、東京大学本郷キャンパスの再生計画の一端を担っているグループが、次世代のキャンパスのあり方を探るべく、欧米の諸大学を実地に調査した記録をベースとして、様々な角度からキャンパスの発展のかたちをスタディしたものである。

それらは多くの問題を抱えながら再生を図ろうとしている日本のキャンパス計画だけでなく、より一般的に、既存街区の保存、再生、増設などについての多様な方法の実例としても興味深く、役立つものである。

論文：

香山壽夫（東京大学建築学科教授）、岸田省吾（同助教授）、他

実例：

フランスの最新プロジェクト——リヨン大学、ストラスブール大学、アミアン大学、他

中世都市にたつ大学——ハイデルベルク大学、ケンブリッジ大学、サラマンカ大学、他

アメリカのキャンパス——ハーバード大学、プリンストン大学、ワシントン州立大学、他

モダンキャンパス——サッセックス大学、イーストアングリア大学、ベルリン自由大学、他

東京大学本郷キャンパス——外構、食堂、工学部14号館、1号館、2・3号館、将来計画

'95年 刊行図書一覧

シリーズ

SDライブラリー⑪

デザイン・ドリームス 映画に見る近代建築

D.アルブレヒト著 萩 正勝訳 A5判・272頁 定価4,017円

SDライブラリー⑫

アダムの家 建築の原型とその展開

ジョセフ・リクワート著 黒石いづみ訳 A5判・296頁 定価4,120円

SDライブラリー⑬

圏外からの建築 映画・写真・鏡・身体

ダイアナ・アグレスト著 大島哲蔵訳 A5判・240頁 定価3,708円

SDライブラリー⑭

建築と非建築のはざままで

ロバート・ハービン著 浜田邦裕訳 A5判・208頁 定価3,193円

ハイテック・コンストラクション1

ビルディング・エンベロプ 建物の外装のデザインと技術

アラン・J.ブルックス クリス・グレッグ共著 難波和彦、佐々木睦朗監訳

B5判・148頁 定価4,635円

ハイテック・コンストラクション3

スーパーシェッズ 大空間のデザインと構法

クリス・ウィルキンソン著 難波和彦、佐々木睦朗監訳 B5判・144頁 定価4,635円

[現代の建築家]

原 広司

SD編集部編 A4変判・174頁 定価4,429円

[インテリアデザイナーのための]

住宅設備設計の知識

石崎清士著 四六判・192頁 定価2,266円

[物語 ものの建築史]

門のはなし

山田幸一監修 佐藤 理著 四六判・128頁 定価1,339円

[すぐに役立つ]

建築基準法の知識(新訂版)

建築基準法実務研究会編著 B6判・212頁 定価2,266円

建築

インテリア・デザインの美学

スタンリ・アバークロンビー著 芦川 智、紀子訳 A5判・192頁 定価2,781円

桂離宮 ブルーノ・タウトは証言する

宮元健次著 四六判・184頁 定価2,369円

中空スラブ設計要覧

松井源吾、O.R.S.事務所著 A5判・152頁 定価3,605円

建築語源考 技術はコトバなり

飯塚五郎蔵著 四六判・164頁 定価2,163円

都市と建築のパブリックスペース

ヘルツベルハーの建築講義録

ヘルマン・ヘルツベルハー著 森島清太著 B5判・272頁 定価6,901円

[新版]もめごとなしに住宅を建てる法

はじめて家をつくる人のために

島田良一、藤森正男共著 四六判・184頁 定価1,854円

超級アジア・モダン 同時代としてのアジア建築

村松 伸著 四六判・272頁 定価2,575円

今話題の建築技術を見る

近畿建築士会協議会編集 大阪府建築士会編集委員会技術小委員会執筆 四六判・194頁 定価2,060円

演劇のための空間

伊東正示、シアターワークショップ編 A4変判・178頁 定価5,871円

都市と建築の解剖学 形態分析によって(設計戦略)を読む

J・ペイカー著 富岡義人訳 B5判・296頁 定価5,974円

かたちに見る造形の構成 イメージ・ジェネレーターの展開

島田良一編著 B5判・146頁 定価3,502円

サントリーミュージアム天保山

安藤忠雄、三宅理一共著 A5判・80頁 定価1,950円

住み続けるための新まちづくり手法

佐藤 滋、新まちづくり研究会編著 A5判・256頁 定価3,296円

都市・景観

ランドスケープデザイン

野生のコスモロジーと共生する風景の創造

吉村元男著 A5判・176頁 定価2,884円

子どものための遊び環境

ロビン・ムーア他編著 吉田鐵也、中瀬勲共訳 A5判・300頁 定価4,532円

テクノスケープ 都市基盤の技術とデザイン

片本 篤著 四六判・224頁 定価2,987円

庭園の詩学

C.W.ムーア、W.J.ミッチェル、W.ターンプル・ジュニア共著 有岡 孝訳

A5判・304頁 定価4,841円

城下町の近代都市づくり

佐藤 滋著 A5判・232頁 定価4,326円

一般書・他

架空旅行記

池内 紀著 四六判・200頁 定価2,575円

生きている経済の知識

踏み迷う経済原則、ミラクル経済原理を論評

細野耕以知著 四六判・256頁 定価2,884円

スウェーデンの 住環境計画

スヴェン・ティーベイ編著 外山義訳
A5判・296頁 定価 4,635円

スウェーデンにおける住宅史、近年の家族形態の急激な変化に対応する政策、とりわけユーザニーズの必要性を説き、新しい住宅形態の計画理念と設計手法を詳細な図面とデータにより紹介。

劇 場

舞台芸術のための建築計画と設計

ロデリック・ハム著 劇場技術研究会訳
B5判・256頁 定価 6,386円

英国舞台技術者協会との協力のもとに書かれた劇場の計画と設計のための入門書。劇場の一般技術解説にとどまらず、劇場にかかわる全ての事象を明確に説く。

高齢者住宅の企画と設計

M. ヴァリンス著 湯川利和訳
B5判・160頁 定価 5,768円

コーポラティブ・ハウジング

神谷宏治、池沢 喬、延藤安弘、中林由行共著
四六判・226頁 定価 2,884円

ハウジング・デザイン

理論と実践

I. コフーン、P. フォーセット共著 湯川利和監訳
B5判・376頁 定価 12,051円

音楽のための建築

17世紀から現代にいたる建築家と音楽家と聴衆

M. フォーサイス著 長友宗重、別宮貞徳共訳
B5判・328頁 定価 12,360円

ホールの計画と運営

伝統芸能劇場から新多目的ホールまで

山崎泰孝著 四六判・248頁 定価 2,987円

SD選書195 劇場の構図

清水裕之著 四六判・268頁 定価 1,854円

建築と断絶

ベルナール・チュミ著 山形浩生訳 四六判・256頁 定価2,987円

B.チュミが1975年から91年にかけて書いた空間・イベント・断絶の三部からなる建築論集。一見混沌として見える東京やニューヨークこそ、新しく意外な形態と機能の関係を生み出し続けるこれからの建築のあるべき姿と述べる。

【SDライブラリー】②①

空間を生きる

リカルド・ボフィール著 太田泰人訳 A5判・192頁 定価2,987円

バルセロナの現代建築家R.ボフィールが語る建築論。全体は権力、創造、建設の三部構成となっておりバルセロナ、パリ、ニューヨーク、モスクワと駆け巡る建築家の活動スタイルとその過程での様々な条件についての思索を通して建築理念を語る。

【SD選書223】

ディスプレイデザイン

魚成祥一郎監修 清家清序文 四六判・200頁 定価1,854円

現代生活のさまざまなシーンを彩るディスプレイデザイン。都市・建築・インテリア・グラフィックなど、あらゆるデザイン領域を横断・統合するスーパーデザインとしての「ディスプレイデザイン」の入門書！

始源のもどき

ジャパネスキゼーション

磯崎 新著

A5判・336頁 定価3,914円

伊勢の式年遷宮に秘められた謎を説き明かすイセ論をはじめ、日本の建築文化の近代化の過程にくりかえし現われる和様化を論じる、グローヴァルな日本文化論！

造物主義論

デミウルゴモルフィスム

磯崎 新著

A5判・336頁 定価3,914円

『建築』とは何か？という根源的な問を自ずから投げかけ、ティマイオスからニーチェにいたるさまざまなテーマで織りなす『建築論』の一大ページェント。『建築』の現在を問い、未来を展望する磯崎新の話題作！！

人気急上昇

予約申込殺到!!

年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません



月刊

ダルトンレポート

DALTON REPORT

「建設業のいま」を満載したニューリトルマガジン

9604号 目次

●特集●震災に備えた事前対策と緊急対応

- わいどあんぐる●落とし穴—2000年にコンピュータが突然狂う?／なごむ?—このところ動物園でのデートが増えています
- 震が関ホッライン●インターネットで海外資材情報／四国、九州、沖縄の景気回復鮮明化
- 列島を拓く●都下水道局、97年度から責任技術者制度導入／震災関連に2,288億円—兵庫県96年度予算案
- 学会・協会・業界●米国建設業協会が継続的な公共投資の必要性強調
- こんなモノつくりました●配管加工時間を4割短縮／記号をカウント—積算ペン発売
- 新戦略・新戦術●財務体質改善—佐藤工業が経営統括室／東急建設がチームで受注活動展開
- ビッグ・プロジェクト進行中●東京湾口道路構想案、96年度内に決定／経済波及効果は8兆円—臨海副都心開発
- 海外建設事情●アルプス鉄道トンネル(54%)に鉄道公団が技術協力／メキシコ・メリタIII複合火力、事業権入札再び1年延期
- こんな方法考えました●8分で外部足場取付け／布団乾燥機方式でコンクリ冬期養生
- ▶ 今月の「拾出し」◀ 国内外でISO9000s取得加速
- 用語・語録●ミニ株投資

建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

- 忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。
- これさえ読んでいれば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

DALTON 定期購読申込書

□新規購読申込

SD

フリガナ お名前									
ご自宅 〒 住所									
お勤め先 (職種)	該当の ものに ○印を	ご専門	建築	土木	機械	電気	事務	ほか	
		ご担当	設計	施工	管理	営業	経理	ほか	
購読期間(☑印をつけてください)		☐ 1年		☐ 3年					

購読のお申し込みは今すぐに!
大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申込みを受付けています。
申込書用紙をきりとり、もれなくご記入のうえ、ハガキに
全面のり付け貼付し、下記までお送りください。
※お申込みは個人名でおねがいします。

購読申込書の送り先

〒107 東京都港区赤坂6-5-13

(株)鹿島出版会 情報システム事業部

ダルトンレポート読者係 ☎(03)5561-2553

●定期購読料 1年購読(12冊) 4,900円(税込)
(送料共) 3年購読(36冊) 9,800円(税込)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の
郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。



9501 Riken Yamamoto: Introducing his works for last 5 years. Ryokuentoshi=Inter-Junction City, Takashimacho Gate of the Yokohama Expo'89, Day Care Center for the Geriatric Patients, Junior High School in Iwadeyama, House in Kamakura, House in Okayama, etc. Text by Riken Yamamoto, tom Heneghan, Motomu Uno. ¥3,000



9509 Kenzo Tange: Kenzo Tange Associates: Focus on UOB (United Overseas Bank) PlazaTange's last skyscraper, and on the Shinjuku Park Tower which transforms the Shinjuku skyline. Introduces Makuhari Prince Hotel, Bay Square Yokosuka, Hiroshima Peace Center Complex, FCG (Fuji-Sankei Communications) Building, Gran Ecran (Place d'Italie), etc. ¥3,800



9502 Baroque Architecture in Sicily and Lecce: Features the distinctive Baroque style resulting from the mingling of Roman Baroque and the indigenous ancient Grecian and Hellenistic cultures. Introduces Palazzo Spadaro, etc. Photos: Ichiro Ono. Text: Hirohide Yakeyama, Masanobu Hasegawa, Satoshi Okada. ¥1,950



9510 Architecture of Response: Recent Works of Cesar Pelli: Introduces recent works by Pelli built around the world, especially in Asia: NTT Shinjuku Headquarters Building, Sea Hawk Hotel & Resort, Kuala Lumpur City Center, etc. **Tower Art in Tsutenkaku:** Introduces an art and architecture exhibition held at the Tsutenkaku Tower in Osaka. ¥1,950



9503 Multi-unit Housing Today: Introduce architects who have made many multi-unit housing recently and their works. Masahiko Araki: Living Alley, Takao Endo: Higashi-Osaka Yoshita Public Housing Complex, Hidetoshi Ohno: YKK Namerikawa Dormitory, Yuzuru Tominaga: Shinchi Housing-C, Yasumitsu Matsunaga: Project 951, Makoto Motokura: Seikousou. ¥1,950



9511 Itsuko Hasegawa: 1985-1995: Introduces 30 works by Hasegawa for 10 years. Works: Museum of Fruit, Yamanashi, Sumida Culture Factory, Ohshima-Machi Picture Book Museum, Footwork Computer Center, House in Kumamoto, Leaf House, Niigata-City Performing Arts Center, etc. Text: Peter Cook, etc. Conversation: Koji Taki and Itsuko Hasegawa ¥3,000



9504 Senes from the Technoscape: Focus some scenes or landscape constructed by industrial facilities, civil engineering structures, etc. Introduce Wind Firm, The Thames Barrier, The Arecibo Observatory, The Kurobe Dam, Shiobara Hydro-Electric Power Station, Kasai Sewage Processing Plant, Trans-Tokyo Bay Highway, Drilling Platform, Japan Microgravity Center, Circular Farm, etc. ¥3,000



9512 SD Review 1995: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Toru Yoshida and Miki Okamoto, Ti-Nan Chi, tom Heneghan and The Architecture Factory **Villa Romana:** introduce the villa and the gardens in Rome. **Transportation Design by Elji Mito'oka:** Design of express train and ship ¥1,950



9505 Mega Architecture: Recent Works of Paul Andreu: Introduces some of Andreu's many monumentalscale buildings, railway stations, sports stadiums, and other works. Feature on **The Creation of the Foreign Settlement in Kobe and Its Development.** ¥1,950



9601 The Architects' Record in the Pursuit of Urban Design: Introduces government's urban projects which are coordinated by architects in Japan: Kumamoto Artpolis by Arata Isozaki, Creative Town Okayama by Shin'ichi Ogawa, Nagasaki Urban Renaissance and Shiroishi Media Polis by Hideto Horike. Text: Riichi Miyake, Naoyuki Kuniyoshi, etc. ¥2,800



9506 The Potential for Using Computers in Architecture: Examines how architecture is being influenced by the use of computers. Architects: Neil Denari, Peter Eisenman, Keiichi Irie, Toyo Ito, Hani Rashid, ARX, Kengo Kuma, Makoto Sei Watanabe, etc.. **Mysterious Design Drawing Exhibition:** T.Ara, F.Enomoto, S.Hisada, N. Iijima, E. Sottsass, S.uchida, etc.. ¥1,950



9602 Italian Rationalism: The contemporary meaning of Italian Rationalism. Introduce six Italian architects: Franco Stella, Uberto Siola, Antonio Monestiroli, Arduino Cantafora, Marino Narpozzi, Nicola Di Battista. Works: House in Thiene, Hotel in Via S.Allende, Design for Spreinsel, Polyptych of Ravenna, The New Cemetery in Fiesse D'Artico, etc.. ¥1,950



9507 Takahiko Yanagisawa: Art Museum Space and Detail: Features five museums by Takahiko Yanagisawa, who won the competition for the Second National Theater in 1986. Museums introduced: Utsubo Kubota Memorial Museum; Museum of Contemporary Art, Tokyo; Kazumasa Nakagawa Art Museum, Manazuru; Kiriya City Museum of Art; etc.. ¥2,700



9603 Contemporary Asia Series 2: A Panorama of Architecture in Vietnam: Architecture and Vietnamese City: Hanoi, Hue, Hoi An, The Champa Ruins in South-Central Vietnam, Ho Chi Minh. Themes: Dwellings of Vietnam's Minority Peoples, Vietnam's Industrial Parks, Contemporary Architecture Today. Text: Y.Shigeeda, S.Nakazawa, S.Muramatsu, etc.. ¥2,500



9508 Urban Public Spaces: Features small public facilities designed by architects. Architects: Atsushi Kitagawara, Naoko Hirakura, Shuichi Kitamura, Toyo Ito, Waro Kishi, Kazuko Fujie, Atelier Zo, Koichi Nagashima, Mitsuru Senda, etc. **Digital Urban Design: The New Language for Design Cities:** Introduces new methods by Yanagida Ishizuka & Associates. ¥1,950



9604 Transformation of Ground and Light: Australian Architecture 1788-: Shows how Australian architecture has changed since the arrival of first settlers in 1788. Texts and photos: Tokyo Metropolitan University, Kobayashi Lab. **Next Generation in New York: Smith-Miller + Howkinson and Joel Sanders:** Latest works by New York architects. ¥1,950



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in _____, 1994

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building, Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

● ロールブラインド

木陰くん

● オフィス・クリエイト株式会社



オフィス・クリエイト㈱では、米国サンガード社製のシェードフィルム・ロールブラインド、木陰くんを新発売した。同製品は、オートストップ装置内蔵のロールスクリーンで、スクリーンを止めたい位置に自由にストップさせることができる。ブレーキ機構内蔵のセット品である。

特長

- ①眩しさを和らげる。
- ②室内よりの眺めを妨げず、目隠し効果がある。
- ③太陽熱エネルギーをカットし、暑さを防止する。
- ④紫外線を95%以上カットし、日焼け防止、家具、書類などの色あせを防止する。
- ⑤住居性を高め、飲食店・店舗・事務所など、快適な空間を演出する。
- ⑥用途や雰囲気に合わせ、シルバー・ブロンズ・グレーの3カラーより選べる。
- ⑦制作可能最大寸法は、W1,500mm×H3,000mm、W2,000mm×H1,500mm。

価格

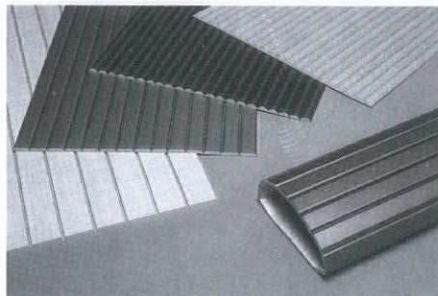
18,000円 (W750mm×H1,800mm)

オフィス・クリエイト株式会社
東京都新宿区愛住町8番12号
〒160 Tel 03-3357-9711

● 壁装材

ダイノックTM リブウォール

● 住友スリーエム株式会社



住友スリーエム㈱では、300色以上の豊富なバリエーションがあり、曲面に追従性が優れ、内R・外Rも容易に施工ができる壁装材、ダイノックTM リブウォールを新発売した。

特長

- ①不燃認定品である。
- ②下地に接着剤を塗布して貼るだけで、簡単に施工ができる。
- ③軽量(約3kg/㎡)のため、施工が容易である。
- ④平面は、ダイノックフィルムを貼り、曲面はリブウォールを使うなど、コンビネーションで利用が可能である。

住友スリーエム株式会社 内装材販売部
東京都世田谷区玉川台2丁目33番1号
〒158 Tel 03-3709-8426

● 塗料

Auto SWIFT 2Kシステム

● 大日本塗料株式会社



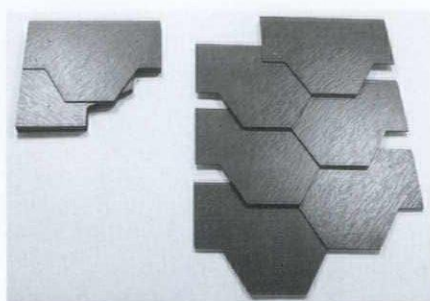
大日本塗料㈱は、自動車補修用塗料市場への新たな布石として開発した2Kベースコート・クリアーコートシステム「Auto SWIFT 2Kシステム」を新発売し、昨年12月のクリアー発売を皮切りに商品ラインナップを完成させた。同社は、既にハーバーツ社(ドイツ)と業務提携し、最高級2K塗料「スタンドックス」を輸入販売して自動車補修用塗料市場での実績を積重ね注目を集めているが、今回は国産高級品の需要に応えるべく、特に作業性に重点をおいて開発した。現在、自動車補修用塗料市場では高度な塗装技術が必要とするメタリック、パール系色が主流となっているが、「Auto SWIFT 2Kシステム」のベースコートは、塗り易いうえに、吹きムラや戻りムラがほとんどなく、また硬化剤比率(主剤と硬化剤の混合比率)が10:1としては、乾燥性を若干抑えた設計となっているため、ムラ消しなどの作業性が格段に向上する。ベースコートに先駆けて発売された「Auto SWIFT 2Kクリアー」(写真)は、硬化剤比率4:1の高外観仕様で、良好な仕上がりに、高い鮮映性を有するタイプと、これに優れた乾燥性を加えたタイプが品揃えされ、同システムのベースコートに限らず既存の同社ウレタン塗料のベースカラーの上にも使用できる。

大日本塗料株式会社
大阪市此花区西九条6丁目1番124号
〒554 Tel 06-466-6661

●
屋根材

ヘキサユニット瓦

●
アーキヤマデ株式会社



アーキヤマデ(株) (旧社名 陶ヤマデ) では、折りたたみができる (また折りたたんだものが広げられる) しかもユニットになった瓦、ヘキサユニット瓦を新発売した。四枚、もしくは六枚の化粧平板スレート瓦を重ねるように折り畳んでユニット化したもので、施工時に広げて使う。通常の瓦の1/3の重さのため、軽量で、重厚感、高級感のある屋根デザインが実現する。また、ユニットごとの連結部分を固定しないため、屋根下地の揺れなどに追従し地震にも強い。一枚の瓦は逆「凸」形で、厚みは、5.5mm特定の点でつないであり、交互にずらすように重ねる。連結部分は隣のユニットに差し込むようにするだけでよい。スレート瓦を1枚ずつ張る場合に比べて施工スピードが速い。また、業界で初めて屋根をふく作業が工場内のできる。戸建て住宅の施工が用意になる。施工が難しいとされている亀甲柄が簡単に作れる。

価格

9,800/㎡ (設計価格)

アーキヤマデ株式会社

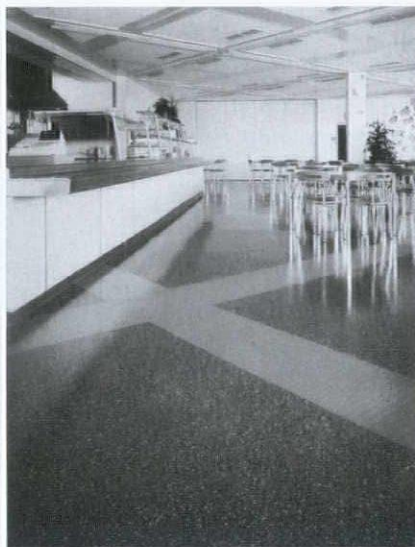
大阪府吹田市江の木町24番10号

〒564 Tel 06-385-1268

●
張床

ノラメント986/256deco

●
株式会社タジマ



タジマでは、ノラメント986/256decoを新発売した。同製品は、耐摩耗性にすぐれ、汚れにくく、メンテナンスが容易なゴム床タイルである。建物のエントランスゾーン (ホテル・ロビー) など歩行量の多い場所に最適である。寸法は、3.5mm (厚さ) × 503.0mm × 503.0mm四辺糸面取り加工。色数は、12色 (全色受注生産 納期3カ月/1ケース以上) である。梱包は、12枚/ケース (≒3.0㎡分) である。また、併せて好評のノラメント825/1901の増色をした。

価格

13,500円/㎡

株式会社タジマ

東京都千代田区岩本町3丁目11番13号

〒101 Tel 03-5821-7731

●
景観エクステリア

ペタル パーク ペタル ベンチ

●
四国化成工業株式会社



四国化成工業(株)では、'96年春のエクステリア新商品として、数々の景観エクステリアを発売した。公園施設向景観材は、都市近郊の住宅地を形成するマンションなどの集合住宅、住区基幹公園、各種の公共空間をテーマとした商品群である。特にパラソル形屋根のシステム東屋、「ペタル パーク」「ペタル ベンチ」は、公園の機能や役割を補佐し、近隣住民の憩いや潤いの場となる小空間を演出する。屋根は、アルミ材にアルミ板をはめ込んだ六角形状でステンカラー色ともあいまって都市公園には、ピッタリである。屋根部のカラー特注にも対応。また、屋根形状に合わせた六角形で木製 (レッド シダー) の「ペタル ベンチ」 (オプション) をセットし、簡易な休憩施設となる。連続使用を前提に設計された連棟ユニットで、六角屋根のどの辺りにも連続展開できるので、設置する場所の規模や予算に応じ、様々なプランが立案できる。

四国化成工業株式会社 営業統括部 販売促進課

千葉市美浜区中瀬1番3号 B16

〒261-01 Tel 043-296-1666

技術と伝統の...

■ 内線工事 ■ 外線工事



 **東光電気工事株式会社**

取締役社長 江 原 景

東京都千代田区西神田 1 - 4 - 5 〒101 電話／東京 3292-2111

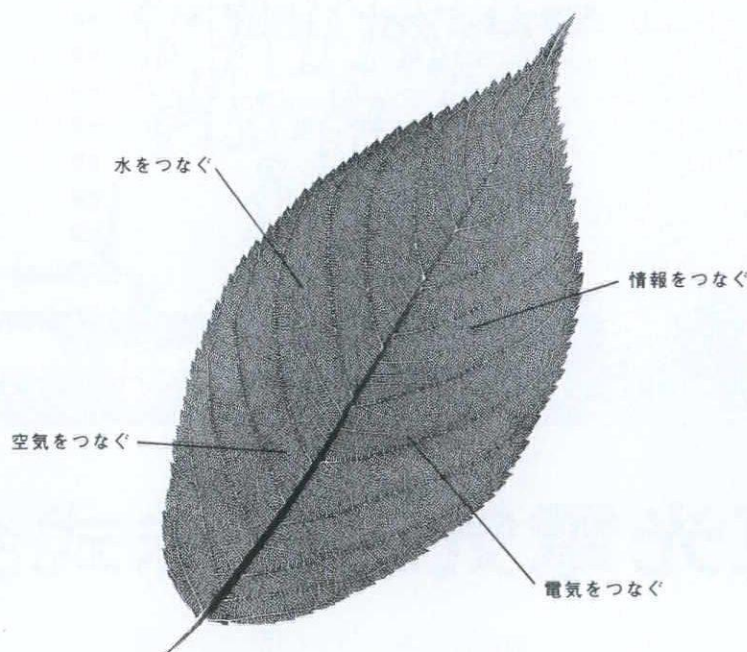
支社所在地／札幌・仙台・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の
リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



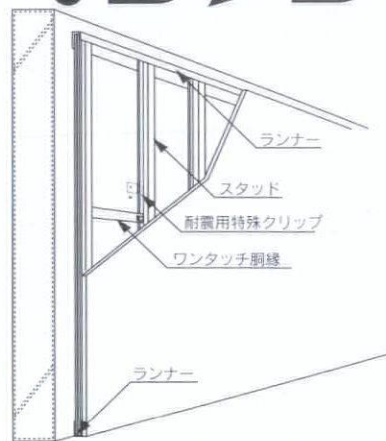
住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(537)3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

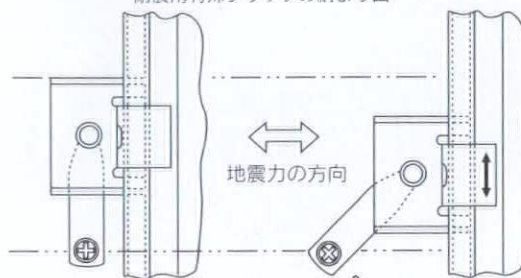
地震に強い!! 層間変位1/60に対応 マンテン® ジシンサク30 地震策 PAT.P

耐震用鋼製仕上材



耐震用特殊クリップを採用

耐震用特殊クリップの納まり図



通常の状態

地震力が加わった状態

耐震用特殊クリップはスタッドを(レール代わりにして)上下運動する

避難通路(階段室、エレベーターホール、廊下)には耐震壁が必要です。

【特長】

1. 壁厚の仕上り寸法が小さいので(30mm)、室内空間を有効に活用できます。
2. 外壁からの振動に左右されない「耐震用特殊クリップ」採用により、地震の振動による内壁面の損傷を防ぎます。
3. 壁の高さは3,500mmまで可能です。

考®

誠意・熱意・創意で生きる

株式会社 マンテン®

鋼製天井地下材 ネールロック システム
鋼製間仕切り材 エコニースタッド パーティション システム

本社 〒556 大阪市浪速区日本橋東1-10-6 TEL(06) 644-2151
東京支店 〒136 東京都江東区亀戸2-3-17 TEL(03) 3683-6151
札幌 TEL(011) 783-8661 横浜 TEL(045) 451-6245
名古屋 TEL(052) 661-9511 高岡 TEL(0766) 24-5506
福岡 TEL(092) 611-2180 台湾 TEL(001886) 2-719-9526

N 日章工業株式会社

- 本社 〒101 東京都千代田区内神田3-11-7(日立神田別館) ☎03-3254-3000
- 大阪支店 〒541 大阪市中央区高麗橋2-4-6(大正不動産ビル6階) ☎06-201-5704
- 仙台営業所 〒980 仙台市青葉区中央3-2-27(日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所OAシステム特約店
日立金属フリーアクセス・ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施設商品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備

自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
ワードプロセッサ
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建材商品

AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア

ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建設商品

クローラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅



日本アス仕様

カスタムEE

ベストロン

NS防水

防水仕様をすべて濃縮!!

それぞれの味を生かし

メルタン21

NPシート

カナート



総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京	☎03(5644)7221 (代表)	福札	☎092(451)1095 (代表)
千葉	☎043(245)0201 (代表)	同機	☎011(281)6328 (代表)
横浜	☎045(316)7885 (代表)	仙台	☎022(263)0315 (代表)
大阪	☎048(642)5811 (代表)	台島	☎082(294)6006 (代表)
名古屋	☎06 (533)3191 (代表)	高松	☎0878(34)0336 (代表)
	☎052(933)4761 (代表)	金沢	☎0762(22)3321 (代表)

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命ください。(五十音順)

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX06 (365) 6052

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX03 (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX06 (227) 0268

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247(代)

FAX (3552) 8249

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区岩本町2-5-12

神田ポンピアンビル (3863) 6011(代)

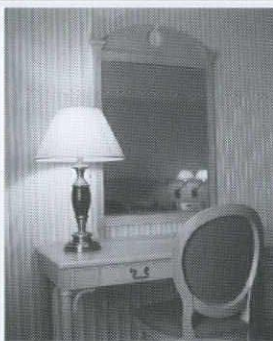
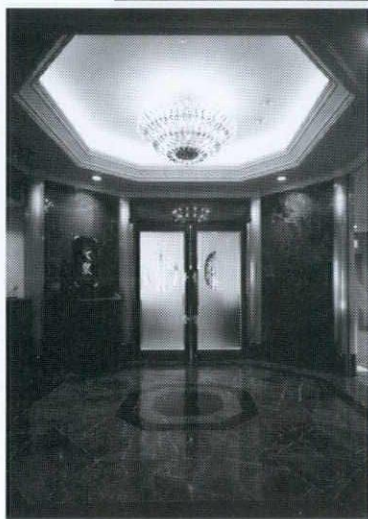
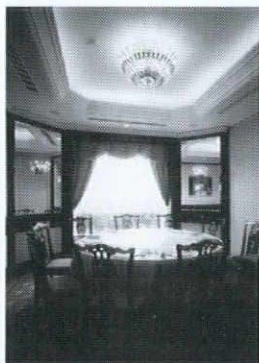
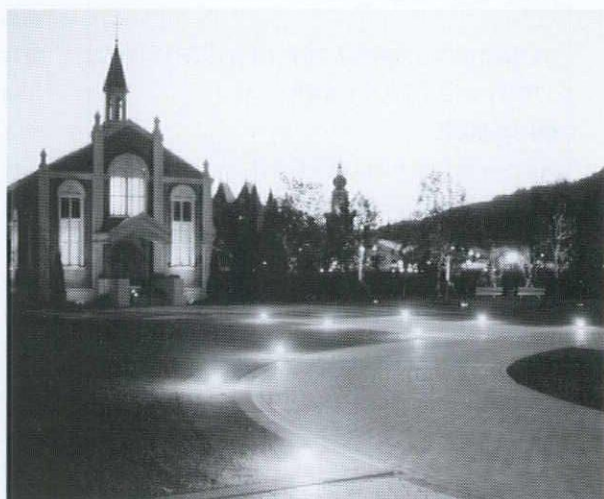
名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

オ	大崎電気工業株	A 1
カ	株関電工	A 3
	鹿島	A 4・A 5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A 6
	川崎電気株	113
キ	株きんでん	A 9
サ	三機工業株	80
	三建設備工業株	113
シ	新日軽株	表2
	新菱冷熱工業株	118
ス	住友電設株	A 16
タ	高砂熱学工業株	表3
	大興物産株	A 8
	ダイゲン株	A 10
	大栄電気株	A 11
チ	株中電工	A 10
ト	東洋熱工業株	117
	東光電気工事株	A 15
ニ	日本バルカー工業株	A 11
	日章工業株	A 17
	日新工業株	A 18
ヒ	株日立製作所	表4
	日立電線株	116
ホ	ホテルイースト21	A 7
	株本の友社	A 12
マ	松下電器産業株	A 2
	株マンテン	A 17
ヤ	山田照明株	A 20
ロ	ロンシール工業株	73

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



ハウステンボス JR 全日空ホテル (長崎)



山田照明株式会社

本社/ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL.03-3253-5161 横浜支社/ショールーム 〒220 横浜西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731
仙台支社/ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町 11-11 (ANDOUビル) TEL.022-267-1630 大阪支社/ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23 TEL.06-643-3421
福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL.092-282-7635 名古屋支社 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新栄ビル) TEL.052-252-5161 札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水三條 4-2-3 TEL.011-811-2215
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL.0273-63-1442 千葉営業所 〒260 千葉市稲毛区緑町 1-25-14 TEL.043-244-2540 静岡営業所 〒422 静岡市福川 3-12-4 (山中ビル) TEL.054-283-9788
広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119 鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (美和ビル) TEL.0992-58-0031 秋田出張所 〒010 秋田市山王 6-8-6 (ナカムビル) TEL.0188-65-2550
宇都宮出張所 〒818 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL.0286-60-1381 長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27 TEL.0262-43-8420